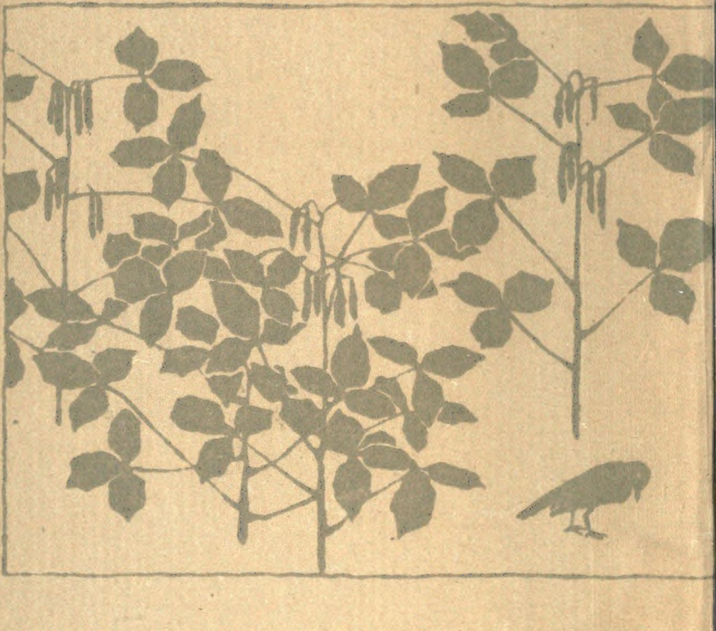
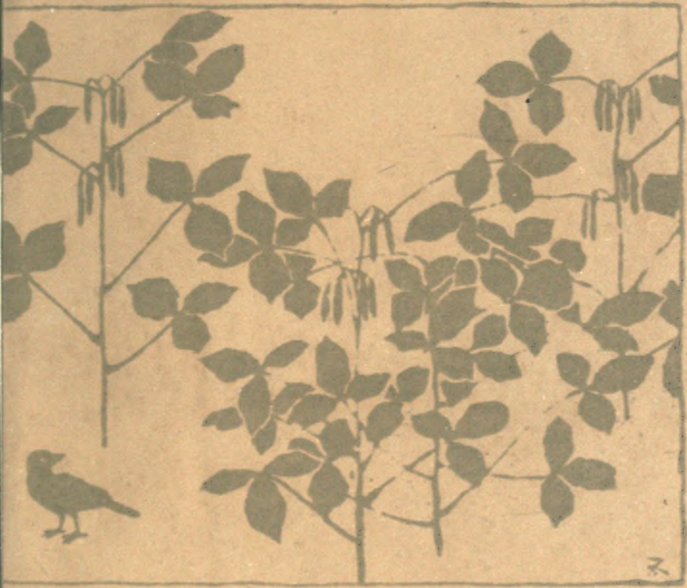




（岡山製本）

大正四年一月廿四日印刷
大正四年一月廿七日發行

有朋堂文庫
雅文小說集（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　出版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

手枕　終

此ふみは、源氏の物語に、六條御息所の御事のはじめの見えざなるを、わが鈴屋大人の、かのものがたりのふりをまねびて、はやくものし給へりしを、おのれこたみこひもとめ出でて、同じこゝろの友だちのために、板にゑりつるなり。かくいふは、

寛政の四とせといふ年の春

尾張國海部郡 大館高門

尾張國書肆
大館高門藏板
片野東四郎

わりなく—是非なく

明けゆく空云々—面見らるゝ恥しさにも構はず明けゆく空の無遠慮なるが憎き心地すとなり

わが御爲にもかたはならん—體面にも障るべし

三のひら—三枚目、以下も之に倣ふ、凡て木版原本の枚數にてこゝに關係なけれど、姑く原本のまゝに保存せり

わざになん」とて、切に端ぢかく誘ひ聞え給ふもいとわりなく、はづかしけれど、すこしゐざり出で給ふに、明けゆく空あやしくはしたなくて、とかく紛はし給へる御もてなしなど、あくまで用意有り、あてに勞たげなり。心にくき程のあけがたの月影に、御髪のこぼれかゝりたる傍目など、いはん方なく、あなめでたと見ゆるにも、いとゞ御心留りて、なほ出でがてに休らひ給ふほど、御供の人々聲づくり、立ちさわぎて、「明けはて侍りぬ」とそゝのかし立つるも心あわたゞしく、憎くさへおぼさるれど、强につゝましくおぼししみにし御心の程もいとほしく、且はわが御爲にもかたはならんとおぼしかへして、あらはならぬほどの明ぐれの空の、霞のまぎれに立ち隱れて出で給ふとぞ。

三のひら　中々の忍草なめり　むすびおきしかたみのこだになかりせば何にしのぶの草をつまゝし

八のひら　春たつ風にも云々　袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

同　ひら　春のものとて　おきもせずねもせでよるをあかしては春のものとてながめくらしつ

十のひら　長くや人を　あはずしてこよひ明けなば春の日のながくや人をつらしとおもはん

在り〳〵て—今日まで猥なる事もなくながらへ來て
あはつけく—浮浮したる
いとゞしき春の夜のならひ—愈短くなりゆく春夜の常として
「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたゝん名こそをしけれ」
かはすまも—草紙の題名此歌によれり

いとかく遁れがたき宿世のほどを、女君はいみじう心うく、くちをしうおぼし沁みて、在り〳〵て今さらに、若々しく似氣なきことを、さぶらふ人々の思ふらんほども死ぬばかりわりなく恥かしう、且は人の物いひも隱なき世に、淡つけく輕々しき名や漏りいでんと、とかくおぼし亂れつゝ、たゞ健き事とは、御涙にくれ惑ひて、うちとけぬ御氣色を、心ぐるしう見給ひて、疎ならず契り慰め給ふこと多かるべし。いとゞしき春の夜のならひいとはかなくて、明方ちかくなりぬるに、入かたの月いと心細く霞みたり。

かはすまもはかなき夢のたまくらになごりかすめる春の夜の月

「いかゞ御覽ずる」と聞え給へば、

おぼろけの身のうさならば春の夜の霞める月もともに見ましを

とて、御衣引きかづきて見もやり給はぬを、濃やかになつかしう語らひ置きて、出で給ふとて、猶御貌もゆかしければ、「あはれなるほどの空の氣色も、同じ心に御覽ぜばなん、いみじき心惑も、すこしは思ひのどむるやうも侍らましを、あまり埋もれいたき

から笑止にて
やをらづつ―少しづつ
おのづから聞しめし合するやうも侍りなん―自然我が身の程は噂にも聞き知り給はん
是より負氣なき心は―是以上謹慎の心遣をなして侍し奉らんとなり
こゝら思ふ心―數々の思ひ
あやにくなる御氣色―退引ならぬ風情

くて、やをらづつ引き入り給ふけはひなれば、障子をやをら押しあけて、ゐざり寄りつつ、御衣の裾を引きとゞめて、「かたじけなけれど、御耳なれぬる年月も累りぬらんを、などかう疎々しく、よそにはもて離れ給はん。おのづから聞しめし合はするやうも侍りなん。よの常の、うちつけに心淺く、好々しきすぢは、さらに思ひかけ侍らず。御許され無からん程は、是より負氣なき心は、さらに〳〵遣ひ侍らじ。たゞ斯くながら徒らに朽ちはてなん歎きのほどを、片端聞えさせんとばかりになん」とて、いとのどやかに、樣好くもて沈めて、こゝら思ふ心の忍びがたくなりぬるさまを、いと能う聞え知らせ給ふ御けはひの、いひ知らずなつかしう、あてになまめかしきに、女もあはれとおぼし知るふし〴〵無きにしもはた有らぬを、かうあやにくなる御氣色に、え心強うももてなし給はず。風冷やかにうち吹きて、夜いたう更けゆく程、御格子もさながらにて、晴れゆく月影もはしたなきやうなれば、御傍なる短き几帳をさし隔てて、かりそめなるやうにて添ひ臥し給へり。人々は、斯うなりけりと氣色どりて、皆さし退きて遠う臥しぬ。

心苦しく承る云云―今心配しつつ承りたる御病氣の御見舞も自ら申出でんとなり

げに簀子は―高貴の人を端近き縁側に立たしむるも氣の毒とて取りなし内に入るゝなり

御格子もまゐらで―格子も下さずして

とかうかゝづらひ入り―何とかかとかこぢつけて内に入り

長くや人を―本歌卷末に出づ

すゞろはし―頻りに厭はしき心地

あやななかけそ―わりなくも我に命を懸けたまふな

假言がましや―もてつけたるやうにて恥しとなり

いかに言ひつるぞ―どうして言ひつるかと我な

心地の御とぶらひも、人づてならず聞えさせんを」とて、簾引き著て半ら入り給ふ。人人、げに簀子は傍いたうもと思ひあつかひて、入れ奉りぬ。女君は端近う、まだ御格子もまゐらで、雨雲の晴間の月の、あはれにうち霞みて艶なる空を、眺め出しておはするほどなりけり。とかうかゝづらひ入りつゝ、障子のもとに忍びより給ひて、いと斯うしめやかなる夜の樣に、思ふ事もうち出でば、人もよもあはれと思しぬべき折かなとおぼすに、立ち歸らん心地もし給はず、

今宵だにあはれはかけよ明日はよもながらふべくもあらぬ玉の緒

「戀ひ死なば、長くや人を」と、獨言のやうに宣ふけはひの、いと氣近きに、女君はむくつけうなりぬれど、さすがによそながらも年ごろ聞え馴れ給ひぬれば、むげに知らぬ人の入り來たらんやうに、氣うとくすゞろはしくなどは有らねばにや、

我にしもあやななかけそ絶えぬべきみだれやよそのあだの玉の緒

「假言がましや」と、忍びやかに、宣ふとも無きも、いかに言ひつるごとかたはらいた

うき人云々—源氏の本書葵上をいふ
春の夜とて—本歌巻末に出づ
引き過ぎて—其の門前を牛車引きすぐすなり
御前—前駆の人數
いとかう云々—同上の解
畏り—詫
たいめ—對面
心憂くも—殘念にも有るかな
年頃といふばかりにて—數ならぬ身の志なれども既に幾年の久しきに及びたれば上も見知り給はぬ事あらじ

うき人に見せばや袖のなみだ川けふのながめにまさるふかさを

こよひも大殿には待ち聞え給ふを、引き過ぎて、彼處にぞ渡り給ふ。いたく忍び給へば、御前などもことに無く、うちやつしてぞおはしける。例の中將いでて、御消息聞え傳ふ。「いとかう度々かたじけなく渡らせ給ふこと、年ごろ有りがたき御心ざしのほどは、あさましきまで思給へ知りぬれど、今宵は亂りごこちの堪へがたうて、端ちかうもえ身じろき侍らねば、自らはえ聞えさせぬを、すこしよろしき折も侍らば、年頃の畏りも、のどかに聞えさせ侍らん」と聞え出し給ひて、たいめし給はんことは、いと有るまじうおほしたり。「心憂くも」と聞え給ひて、「此の簾の前にのみかくて侍ふこそ、いと辛きわざなりけれ。數ならねど、淺からぬ志も、年頃といふばかりになりにて侍れば、さりとも御覽じ知るらんを、其の程の勞數へさせ給はゞ、かう物遠うのみもてなさせ給ふべき事にやは。人づてならで、たゞ哀とばかり宣はせばなん、深き憂も慰み侍りねべきを、はしたなくかゝることはまだ習はずこそ侍れ。心苦しく承る御

をりふしのあはればかりは—四季折々につけての消息のみは時を過さず贈り給ふ

懐しからんなさけ—嬉しく思ふべき程の人の情も

人傳の御いらへ云々—消息の返事はなるべく直接を避け、人傳に任せて、さりながら不興ならぬ程にて止めたしとなり

春立つ風にも—本歌巻末に出づ

人の御心—御息所のなり

御程—身分

赴け給はず—我意に向け從はしめ給はず

心にも、さこそいへ、やう〳〵よろづ思ひ知られ給ひつゝ、いと氣疎げにはあらず、をりふしのあはればかりは、過ぐさずなつかしう聞え通ひ給ふ。無けの御筆づかひ言の葉も、いひ知らず艶めかしう、御手などあてに氣高く、見所ありて書き流し給へるを、稀稀見給ふにも、有りがたく、うち置きがたく思されつゝ、はかなき木草につけても、あはれと御心留りぬべき折を過ぐさず、心深きさまを見え聞え給へど、女君は、懐しからんなさけも、いとゞ愛なくおぼされて、人傳の御いらへ、はしたなからぬ程にて止みなんと、おぼし執りつる御心は、更に動ぐべうも有らざりけり。年かへりて春立つ風にも、人の御心はうち解けがたく、つれなさのみ勝りゆく。人の御程をおぼすにも、いとかたじけなく、いとほしくて、え強ひても聞え赴け給はず、とざまかうざまにおもほし亂れつゝ、いとど此頃は、大殿には夜離のみ置きつゝ騒がれ給ふ。内わたりののどやかなる春のつれ〳〵に、雨さへ降りくらして、日もいと長きに、いとゞ思ひわび給ひては、春の物とてなどうち呻かれて、

又のどかにを—又緩々參り訪はん
すくよかに—淡白に
ふりはへ—わざわざ
聞えて過ぎぬる事—音づれもせで過ぎたる事
なほざり言—戯言
氣色ばましき事—思をほのめかしがほにいふ事
物から—なれども
うちしきり—頻繁となる

み、明暮忘れさせ給はず、この御有樣の心苦しうあはれなること、と宣ひ出でつゝ、姫宮のいかに美しう生ひ出で給ひぬらんなど、御心ざし淺からぬ」樣など、大かたの御とぶらひ、いと濃かにて、「かく參り初め侍りぬれば、又のどかにを」とて、その夜はすくよかにて出で給ひぬ。かくふりはへ渡らせ給ふ御志を、いかゞは淺くおぼしめされん。かくて後は、をり〳〵の御消息絶えず、又御自らもまうで給ひなどする程に、よろづ見勝のみせられて、あくまで故々しく、重りかに由ある御氣はひに、いとゞ御心のみ留りて、年頃よそに思ひやりつゝ、聞えで過ぎぬることさへ、くやしくぞおぼされける。折々はをかしきなほざり言などうち出でざればみ、御文にも氣色ばましき事もうち交りゆくに、あはれなる御心ざしの程は嬉しくおほさるゝ物から、かううるさき御心のうち添ひぬることを、いと心づきなく、疎ましうおぼされて、御返りもをさ〳〵無きに、いよ〳〵御心いられて、御消息うちしきり、惟光など下り立ちまゐり通ひつゝ、まめやかなる樣にも心寄つかうまつり給ふこと、二年ばかりにもなりぬれば、女君の御

すこしさし出て―源氏車の内より顔さし出せるなり
そゝやーざはざはと
おはさうずー在します
思給へ懸けぬほどー思ひがけ奉らぬ時分
よろづ思給へ包みて云々ー萬事遠慮して今迄も好意を表し奉りかねたり

その事とも聞きわかれぬほどの物の音、松風に響きあひて、絶え〴〵聞えくるも、あはれに艶めかしく、並々ならぬ爪音と聞きなし給ふにも、御心ときめきして、何事も世に名高く物し給へば、違ふべくもあらぬ御息所の御琴の音と、御耳とゞめて聞きおはします。内には、俄なる程の御とぶらひに、人々そゝやとあわてつゝ、さゞめき騒ぐほどに、御琴は彈きさし給ひつ。中々なるほどをと、君は口惜しうおぼす。隨身出でぬれば、御車よりおり給ひて、いたう心化粧しつゝ、引き繕ひうちふるまひて歩み入り給ふ御樣、似るものなくめでたく、貴に艶めかしう、匂ひみちたるに、いと赫かしう恥かしくて、頓に出でくる人もなければ、階のもとに佇みて、うち眺めおはさうず。いと久しくして、中將の君といふ出できて、「思給へ懸けぬほどの御訪ひにて、何事もいと傍いたく、忝なきわざになん」とて、御茵さし出づるさまなど、いたう慣れたり。「いでやさき〴〵も參り侍りて、御有樣も承らまほしうは思給へ立ちながら、よろづ思給へ包みてなん、心ざしのほどをも、今までえ御覽ぜさせ侍らざりし。上もつねに、故宮の御事をの

色をも香をも—「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をもしる人ぞ知る」紀友則
なのめに—容色の十分なるをいふ
いふかひなからず—不束ならず
内—主上
眺め給ふらん—物思ひつゞけ給ふらん
宣ひつけし—主上の源氏に命ぜられしなり
さき〴〵も聞き置き給ひしあたり—御息所の容色ある事を源氏のかねてより聞き置けるなり
夕つけて—夕べになりて御息所の方に行きしなり

けても、色をも香をも同じ心に見はやし給ひしむかしの事のみ、盡きせずおぼし出でらるゝにも、姫宮の御樣かたちの、なのめに飽かぬことなく美しう有らまほしう成りまさり給ふを、憂き世の御慰めにて、あかし暮らさせ給ふ。御心に入れて御手習せさせ奉り、御琴教へ聞え給ひなどしつゝ、いかで何事もいふかひなからず生ほし立ててんと、心ことにおもほし掟て給へれば、侍ふ人にも心遣甚くして、よろづ心にくき宮の内なりけり。内にも、故宮の御事をわすれさせ給はず、哀におぼしめし出でつゝ、をり〳〵の御とぶらひ絶えずぞ有りける。源氏君君にも、前坊の御息所のあはれに眺め給ふらんを、折々はとぶらひ物せよかし」など宣ひつけしかば、げに心にくゝ由ある人と、さきざきも聞きおき給ひしあたりの事なれば、且はゆかしくおぼされて、一日内よりまかンで給ふとて、夕つけておはしけり。ほど遠ければ、暮れはててぞおはしつきぬる。御門のもとに御車立てさせて、御隨身入れて案内せさせ給ふ程、少しさし出でて見入れ給へば、木立いと物ふりて、小暗く見えわたり、氣はひしめやかに、心にくゝ思ひやられ給ふに、

幼兒
中々の忍草—かへりて思の種なるべしと也、本歌卷末に出づ
およずけもて在する月日—成長しつゝ行く月日
うしろめたう—氣にかゝる
はかゞ〳〵しき後見—賴もしき後見人
すが〳〵しくもえおぼしたゝれず—きつぱりと思ひ立つ譯にも行かぬ
見讓る人—後見を讓り託すべき人
をさ〳〵—ほとんど

けなき人は何心もなくざれ歩き給ふを見給ふも、いとゞしき御心の催しにて、中々の忍草なめり。およずけもて在する月日に添へても、晝夜なくおぼし歎くほどに、うち續き父大臣さへ失せ給ひぬれば、いとゞ便なく、物心細くのみおぼすにも、我が御身ひとつは、今はとてもかくても有りなん、惜しげなき貌を窶して、世離れたる山里に行き隱れても、おのづから在り經んとおぼしとるにも、たゞ此の若宮の御行末うしろめたう、かく賴もしき人々におくれ聞えさせ給ひて、はかゞ〳〵しき御後見なども無かンなるに、我さへ見奉り捨てなば、いかにしてかは人並々にも生ひ出で給はんとすらんと、いみじう心苦しき御絆にて、すが〳〵しくもえおぼしたゝれず。見讓る人なくて殘し留め奉らん事をのみ、いみじうおもほしたゆたひつゝ、年月も累りゆくに、有るかぎりの女房たちなども、この御心ばへの有りがたく哀なるに懸け留められ奉りて、をさ〳〵罷んで散るもなく、大かたの有樣は昔にかはることもなけれど、おのづから事にふれては、心細く寄るべなき心地し給ひて、あはれなる事も多かりけり。をりふしの花紅葉を見給ふにつ

心にくゝ云々―すべて奥ゆかしく、風雅の方に趣あり
むかひ腹―嫡妻の所生
本意ありて参り給へる―宿望叶ひて東宮妃になり給ひけるが
あたらしう―惜み悼むなり
かたみに―互に
いはけなき人―

の心廣く、水潔く遣りなしなど、よろづ心にくゝ、さる方にをかしく、今めかしき宮の有樣になん有りける。坊に在しまいし時、その頃の大臣のむかひ腹に、いと二無くかしづきたて給ひし御女、本意ありて参り給ひける、御心ざし淺からず、あはれなる御中らひにて、一筋にまめやかなる御契深かりしほどに、いと清らに美しげなる女宮をなん生み奉り給ひける。二所かぎりなくあはれなる物に思ひ聞えさせ給ひつゝ、明暮の御かしづきぐさにて、月日を過し給ひけるほどに、この宮の四つになり給ひし年の秋、はかなき御心地のやうにて、父宮俄にかくれさせ給ひぬ。まだ盛の御齡にて、かう遽にあへなき御事を、おほやけにもいみじうあたらしう思召し歎き、世の中の人も惜み聞えさせぬなし。まいて御息所の御心惑ひ、たゞ何事もおもほしめされず、來し方ゆく先かき暮れて、あさましう思し惑ふも理なり。年頃二つなき御契を、かたみに又なく頼みかはし給ひつゝ、片時にてもおくれ奉りては、世に在らんものともおぼさゞりしかど、限ある道は御心にも叶はぬわざにて、え慕ひきこえさせ給はぬぞ口惜しういふかひなきや。いは

上―主上
坊―東宮坊、皇太子なりしをいふ
さるものにて―いふに及ばず
處せき―窮屈
心ゆく業―思ふまゝの樂しき事
池の心―池の面

手枕

前坊と聞えしは、上の御同胞におはしましゝを、御世のはじめより坊に居給ひて、大方の御おぼえはさる物にて、内々の御有樣はた、いとあはれに、やむ事なくおもほしかはし給ひ、世の人も、いと賢き儲の君と、たのみ所に仰ぎきこえさせつゝ、行末めでたく飽かぬことなき御身を、いかなる御心にか物し給ひけん、世をあぢきなき物におもほし取りて、常は、いかでかう苦しく處せき身ならで、生ける世の限、心安くのどやかに、思ふ事のこさず、心のゆく業して、明し暮すわざもがなとのみ、おぼしわたりける程に、遂に御本意のごと、東宮をも辭し聞えさせ給ひて、六條京極わたりになん住み給ひける。

大かた宮の造ざまはさらにもいはず、前栽など心ばへ有る樣に、木深く植ゑわたし、池

題辭

錦翁元是錦爲腸。寫出悲歡夢一場。誰續遺篇洗遺恨。
親仇未報此翁亡。白石灘頭夜色妍。醉中好伴月明眠。
何圖一陣狂風起。倒卷波瀾來打船。酒能爲病衆生事。
此翁此篇眞酒箴。不爲女兒雙淚下。從來我亦醉沈々。

文化甲戌初夏。詩佛老人大窪行書於玉池精舍。

あるは腹黒なる人どちの情なきさへつばらに書きとられにたる詞は、にひ學びのわらべの物かゝんはじだてともしつべく、心は大かたの人の世のさま知らん敎にもなりぬべくて、いとよき物語にこそありけれ。しかるを書きさゝれて次の卷のあらぬなん、いとも〳〵あかず口惜しう思はるれど、さりとて誰にかは筆さしつがるべき。いかでかくあはれには書きうべき。さるは聞きつぎ言ひ傳へて、世に見まほしう思ふ人多かり。よりて我友松のやのあるじの、にひ學びの人に見やすからしめん爲に、かたはらに漢文字をしるして板にゑりなんとするに、おく書してよとあるまゝ、もだしがたくてなん。文化といふとし始りて十とせあまり一とせの春のすゑなる月のしものとをかに、今いつかおきての日、まさきの千幹しるす。

つくしぶねのおくがき

昔もろこしに楯と矛とをひさぐものの、我楯はかたく我矛はとしとてうけばりほこらしきに、あるひとの、なれが矛もてなれが楯をとほさんはいかにといへる時、かの人こたへあへざりきとか。抑中國まなびする人の、もろこしのことにはくはしからで、かれをも知り顔つくり、唐學びする輩の、皇國のことにはうとくて、猶心えつるさまにほこれるよ、これ矛盾の說にひとしからざらめや。さるを獨にしごりのやの翁は、こゝの事に心をとかし、かしこのことに思をかためて、ふたつながら全く兼ねられたりともいふべくこそ。かゝれば、めでたき歌どもをはじめ、くさ〴〵の妙なる詞、もろ〳〵の新しきかうがへなど、年月になんつもりにたる。さて古き物語書はいとも多かめれど、巻々ながくて、かきのぞけるばかりにては、すべての心言葉もわきがたきを、このつくし舟よ、かり初のすさみ書にて、かりそめに見つべきにあらず。そはこの露ばかりの巻に、こゝのこともてかしこの一ふしをうつされ、あるは親を思ふ子のせちなるを顯はし、あるはをみな心のさがなさを知らせ、

文化のとをまり一とせきさらぎ

むら田のたせ子

つれ〴〵なる窓のうちの手ならひに、書きさし給ひしほうごどもの、づし一よろひにつみおき給ひしも、父のいませし世こそは、塵うちはらひなどもし給ひつれ、今は手ふるゝ人だになければ、むつかしげなる蟲のすみかとのみなりもてゆくを、かくてのみはいかにとて、とりしたゝむるにつけて、この一卷をぞ見出でたる。さるをりしも、高田與淸ぬし詣で來まして、こは大人の御筆ずさみにこそあなれ、かくさるがうがましき跡なし事も、またさるかたに御こゝろこめたまひけんものを、いかでか物の底にしもくだしはて給はん、板にゑりて人々にも見せまほしきを、さもおぼさば、おのれよきにはからひなんと、せちにいはれけり。うれしとはおもふものから、かゝるすさみごとをさへことぐ〵しげにもてなさんは、人わろくやなど、とかくやすらはれしかど、このぬしはしも、そのかみ父のもとにうるはしうなれむつばれつゝ、心のへだてなうおはせしかば、今はたさりともあしうやはとて、かの蟲にそこなはれて、筆のたゞずまひさへおぼつかなきを、そがまゝにまゐらせたれば、とかう考へかき清めて、かくはものせられしになん。

つくし船終

桛桐—船繫ぎの杖

強ひて助けまゐらすとも、人々いかでかたゞに在らせ奉らん。他人の手に憂きめ見給はんよりは、われこそ御魂の行方見はて奉らめ。あな阿彌陀佛念じ給へ」とて、御袴の片端を引ききりて、御頸を經ぎてつよく引けば、すなはち絕え入り給ひぬ。今は心にかゝる事なしとて、几帳おしひらきて出で來て見るに、舟人一人だにあらで、帳引きはなち、蓋打ち毀ちたるものども、亂がはしくうちちらしたり。千引あきれて、こはわれをいふかひなしと思ひて見すてけるなりけり、されどいかゞはせん、猶とりのこしたる寶もぞあるとて、索り見れど、さらに物一つだになし。たゞ錦に裹めるもののみぞ、櫃の底に殘しおけるがあるを、とりて見れば帶なり。こは累代の寶とすなるもあんなりとかいふめる、もし世の常の品ならずば、思ひがけぬ價をこそうべけれとおもひて、懷におしくくみて、やがて桛桐ふりたちたる邊の纜切り放ちて、さしも大きやかなる舟を、力の限沖のかたにおし遣れば、舟は波に漂ひいづるを、顧だにせで、足疾く步みて、島傳ひしつゝ逃げさりぬ。かくてこの浮舟の行方いかゞありけん、そはつぎの卷にこそ。

をば立てず指にて人を衝き動かして注意するなり

きじろひいふやう、「雨を慕ひ雲に迷ふらん舟長が心のはれゆかんをりを待たば、皆人いかなる荒汐におひて、千尋の底に沈みはてんもはかりがたし。舟長こそ思ふやうなる夢を見つれば、さしも悔なくやおもふらん。わが輩なにの棄てがたき縁にてか、諸共に辛きめをば見ん。いざおのがじし寶どもわかちとりて、跡をこそかくさめ」とて、許多とりならべたる唐櫃、長櫃、なにくれの調度ども皆ひこづりいでて、手ごとに選りうばひて、行方も知れずうせぬ。千引は鳥の音にふと驚かされて、かくいひしらぬ夢心地の覺めがたきにかゝづらひて、かく時うつりぬる事を、舟人どもいかに思ふらんとおもへど、強に荒らかにとりなし奉らんことはえもおもひかけず、しばし思ひ煩ひけるが、さはいへ、人々の諫めしごとく、姫君の御心の底はいかでか知るべき、また身の禍ひ引き出でんことはたゞ目前にあれば、よしこれまでの縁にこそありけれ、今は、およばぬ本意叶ひぬるを思ひでにして、後のおそれあらせじと強くおもひなりて、「われをな怨み給ひそ。我はかくて長く君に事へまつらんと思ひ侍れど、舟人どもさらにうけひき侍らず。さるを

勞たさ―いとほしさ

つきしろひ―聲

の諺にも、草をはらはんには、種な殘いそといふにはあらずや」といへば、皆、「さもあることよ」とて、几帳のもとにより來て一人が聲づくるを、千引こゝろ得ていで來ぬ。「しか〳〵なんおもふ」と人々さゝやきいへば、千引うなづきて、「われ過てり。今ただいま人々の御心やすからしめん」とて、太刀拔き持ちてまた几帳のうちに入り來。姫君は千引が形勢を見給ひて、さは妾を殺すなりけり、命死なん事はつゆ惜しからねど、父母の爲に報をもせで、身をいたづらになし果つることよと、口惜しうも、悲しうも、御心せきあへ給はず、さくりもよゝと泣い給ふ。涙に濡ち給へる御顔の匂の、消え殘る火影にもてはやされて、いとゞ艶に媚かしきが、いみじき虎狼の心もたりとも、えも荒だつまじきさまのし給へるを、千引見るまゝに、たゞ勞たさのみまさりて、慮りし事も忘れ、猛き心もなよびゆきて、「な恐れ給ひそ、君をばいかでか」とて、太刀うちおきて、またかき抱きて寢ぬ。舟人どもは、姫君をうしなひまゐらするにこそとて待つに、千引さらに出で來ず。磯家の鳥の音遙に聞えて、夜もはやあけなんとすれば、皆つ

おぼしなりて―心の變るなり

うたてぞおぼゆるや―歎かはしくおぼゆるとなり

きかたならずや、命しなんこと遲からずとおぼしなりて、涙おし拭ひ給ひて、「さらばわれ死ぬまじ。なぞやわれを殺さじとはおもふぞ」と宣へば、千引喜びて、「皆人は、寶貪らんとてこそひたぶる心をばおこし侍れ。われは、君を得たてまつらんためにしも心をくだき侍るなり」とて、やがてかき抱きて几帳のうちに入るを、御聲をだにたて給はず、強ひて御心をおさへ給ひて、わりなく御身をまかせ給ふ。御心のうちいかばかりかありけん。さるは薪にくだく花の枝よりもうたてぞおぼゆるや。鼬鼠麿人々にむかひて、「かれ見給へ。今宵は舟長の妻呼ばひ給ふはじめなるを、いかでか祝ひ事もせで、たゞにあらん」といへば、皆うち笑ひて、「げにさる事なり」とて、舟のうちの穢しき物どもかき拂ひて、あまたの酒壺どもとりいでて、おの〳〵醉ひのゝしる。鉢頭聲うちひそめて、「人々ふかくな醉ひ給ひそ、猶心置くべきことあり。姫君今は舟長が心に從ひ給ふやうなるも、いかでか眞の心ならん。夜もあけゆきて、人め見えなんには、必ず聲たて給ひぬべし。もしさもあらん時、聞き繼ぐ人おほくいり來て、問ひ勘へなば、のがるべき辭なからん。世

千引はやくかき抱きてとゞめまゐらすれば、「無禮なり。手なふれそ。とくわれを殺せ」とて泣い給ふ。千引御背をかい撫でつゝ、「御心靜め給へ。君をばいかで失ひたてまつらん。心ありてかくはとゞめまゐらするなり」といへば、「うたて、心無の盗人よ。かくて暫しもかけとゞむべき命かは」とて、舌くひ給はんとするを、更におしとゞめまゐらせて、「あなかしこ、はやまらせ給ふまじ。とざまにも、かくざまにも、御心のまゝにこそ仕うまつらめ」とて、御口に指さしあてて守り居れば、せんかたなし。露の間だにながらへ給はんは煩はしきものから、命きえ給はんこと將た難しや。たゞ御心のうちに、いかにたばかりてか、彼が目を竊まひてとく死なんと、思ひつゞけ給ふにつけて、またおほしめぐらすことは、われさへ世になからんには、かく横ざまなる事に、家擧りてうせぬとは誰かは知らん、荒ましき海神の怒にあひて溺れにけりとのみ、世の人のいひてややみなん、かくいみじきあだがたきを措きて、怨はたさゞらんことあるべからず、父母の爲に報せざらん事は罪いと重し。操を穢し、身に恥負はんも、時にとりては猶咎輕

來ん世には―萬葉太宰帥大伴卿讃酒歌十三首の一に「この世にて樂しくあらば來ん世には蟲に鳥にも吾はなりなむ」

へば、鉾頭うち笑ひて、「御寶はいふもさらなり、御命もたまはらでやは」とて、太刀うち振ふと見えしが、あなやと宣ふ聲とともに、御軀はふたつになれり。帥の君涙を浮けて、姫君を見おこせ給ひて、「さきに父君の夢の御告ありしは、かゝる事の御さとしなりしを、余さらにおもひもよらず、又吾兒が諫にも從はずして、かくよこざまなる波風に、家のうち擧りて命を窮むること、皆わが怠なり。またいつの世にか、諸共に嵯峨野の花をば見ん」とて、嘆息給へるさまいといみじ。千引はしりよりて、「あな益なき繰言よ。とく海神の宮にまうでよ」とて、艦より引きはなちて、御衣の領いたくつかみて、沖のかたに遠くなげやれば、波ごほと鳴りて、御姿はすなはち見えず。あはれ常の御言ぐさに、「來ん世には、蟲に、鳥にも」と宣ひわたりしを、それにはあらで、いまの世ながら水底の鱗とこそなり給ひにけれ。姫君はこのありさまを見給ひて、はしたなきめ見ざらんさきに、とく死なんとおぼして、しひて御身をふり放ち給へば、御袖ほころびて御手くつろぎぬ。やがて御衣をすべし出でて、御袴のみにて身を投げ給はんとするを、

くやつ―此奴

かたぐ―帥夫婦姫君をさす

すまひたまへど―抵抗し給へど

きたるは」とてたち出づるを、千引見て、「くやつ、音なたてさせそ」といふ。酸醤目こころ得て、太刀ぬきはなちて斬れば、仰ざまた倒れぬ。此おとに皆目覺して、「海賊こそ來たなれ」とて、寢おびれながら立ちさわぎて、矢はなたんとすれば、弓弦皆中絶えたり。太刀はかんとてもとむるに、さらにひとつだに無ければ、せんかたなくて、栧をつたひて逃げんとするを、皆斬りにければ海におつ。御達泣き惑ひて、「海賊入り來て御隨身ども皆斬られ侍りぬ。上いかにし給はん」とて走り來。かたぐ驚きておき出で給へば、舟人すでに亂れ入りて、御達も皆きられにけり。帥の君太刀ぬき給はんとすれば、烏脛御手を強くとりて、かたへに押しよせまゐらするを、ふり放たんとすまひたまへど、えやは身じろかせたてまつらん、やがて檻だつものに背手に縛りつけまゐらせて、姫君をもかたへにつなぎぬ。若君はおぢおそれ給ひて、北方の御袖にかくれ給ふを、鳩胸引きかなぐり寄せて、御頸を強く握れば、はやく息は絶え給ふ。北方聲わなゝかし給ひて、「わがもたる寶は皆御心に任すべし。命ひとつは我に得させ給へ。吾佛々々」と宣

水引—舷に引きわたす綱

かたみに—互に

寢ざとき—目覺の敏き人

過し給へり。一日ひねもす飲みくらし給ひて、侍ふ人々も、皆いたく醉ひて宵よりうち臥したる夜ありければ、舟人ども今宵こそといへば、千引くびうち傾けて、「彼等醉ひ伏したれども、兵仗おほく具したれば、おきいでん人あらん時、いと危し。忍びいりてものせんには、戸口彼方よりさし固めたればいかゞせん」とてわづらふを、鼬鼠聞きて、「われするやうあり」とて、水引のきはにほそき窓あきたるを見おきたれば、はひ入りて、舍人隨身等が寢たるかたに行きて、よせたてたる弓の弦皆きりはなち、太刀ども奪ひとりて、つま戸おしひらきていで來ぬ。「かくては心やすし。岸近ければ人もこそ知れ」とて、夜の更くるをまちて、錨とりはなちて、かたへの島陰にこぎよするを、舟擧りて知る人なかりけり。千引人々にむかひて、「ありとあらん人は皆殺しつべし。さらずば後のおそれあらん。さて寶は、わかちとらん事かたみに優劣はあらすまじ。たゞ姫君をばわれに得させよ。な失ひまゐらせそ」といへば、「そは御心まゝなり」とて皆諾きぬ。汐風さと吹きいれば、年老いたる舍人の寢ざときが、ふと驚きて、「怪しや、つま戸の明

酒てふ友、白樂天詩酒琴を三友といへる故事による

ひたぶる心—ひたすら物を得んとする盗人の本心

物してんや—盗みせんとなり

なし給ふ。まことや、筑紫の舟人どもは、もと純友が朝廷傾けんとしけるに心をあはせて、桴のうへの棲所に年ごろ隨ひありけるが、純友搦められて後は、氏をかへ名をあらためて匿れ忍びたるを、更に知る人もなかりければ、舟人となりて世にありふるなりけり。さるはみな盗人のひたぶる心持たれど、御勢嚴しくいひのゝしりたる帥の御舟出なれば、はじめには世を輕めたるふるまひなどは思ひかけざりしを、あまたの御伴人はさきだたせ給ひて、今は御舟に侍ふ人も數おほからず。君は常に泥のやうにのみおはすれば、おのづから侮はしう思ひなりて、忍び〳〵にあひ語らひけるは、「純友志とげて、關白などいはん世にもあらましかば、わが輩たとへ品ひくゝとも、受領よりは下らざらましを、あへなく時うしなへればとて、かく艣櫂とる業に身を沈め果てんこそ口惜しけれ。かゝらんよりは、盗人とて人に目を側めらるとも、寶だに得ましかば、また心ゆくわざもなどかなからん。皆醉ひ伏したらん時をまちて、物してんや」などいひあへり。帥の君は此舟人どもの、かくむくつけき心ありとは思しもよらぬ事なれば、御心打ちとけてのみ

―足の入りちがひ亂れたるが十文字の形したるよしなり。

なずらひならぬ身の程―比べものにもならぬ賤しき身分

たゞ今ひとつの友―只今一つな

てかへり給ひぬ。舟人ども皆歸り臥したるに、千引は御車にたち寄りたるまぎれに、をりしも隈なく月さし入りたれば、姫君を幽見奉りて、心のうちに、かゝる貌人も世には在しけるよと、身にしむばかり思ひければ、たゞ俤にたち添ふ心地して、ひとり寢ねもやられず、またも見まほしうのみ覺えて、もしかゝる人を得ましかば、命をも惜まじなど思ひつゞけたるは、なずらひならぬ身の程をも知らぬ惡き心なりや。日頃氣色だちたる雲風も靜まり果てて、波の立居も穩しければ、今はとてくだり給ふ。守は舟路の御設なるべきもの、なにくれと心して、大きやかなる壺十あまりに、よき酒ども盈ててまゐらせたり。海の面平にて、風さらに出來ねば、御舟いと遲し。六日ばかり經て、漸く牛窓にいたれり。追風吹き出でん日を待ちてこそ御舟はいださめとて、舟人ども碇とりおろしてこゝに休らへり。げに海山の眺望も、昨日に今日は變りもて行きてこそ、心も慰み、おのづから紛るべきふしもあるを、あけくれたゞおなじ所なれば、君は御心屈し給ひて、琴と歌とはとりも出で給はず、たゞ今ひとつの友をのみかたらひ人とぞ

蛭の子—伊邪那岐尊の御子にて、三年まで足立たざりしといふ神

おほとのごもらんはいと便なし—御寢なりては困る

御足は十文字にさしもどろかし

とて笑ひ給ふ。皆いみじき酒飲にて、唯飲みに飲めば、君もまけじと競ひ給へど、宵より御杯の數つもりたる後なれば、えやは堪へ給はん。いつしかと御聲遣のあやめもわかれず、起ち居さへ、御心にまかせずなりて、たゞ蛭の子のやうにぞ見え給ふ。夜もいたく更けて、濱風冷やかに吹いきでたり。君は居ながらよりふし給へるを、かゝる所におほとのごもらんはいと便なしとて、守は心ぐるしう見奉る。かく醉ひ伏し給ひぬときゝ給ひて、御車よりも、「此方へ」と宣へば、侍ふ人々も起きいでて、いざとて、抱きてかき起し參らするに、とすればかくざまに轉び給ひ、かくすればとざまに斃れ給ふ。守も手惑をして、いかになし奉らんとおもへり。かゝる御有樣を、千引側より見奉りて、「御身に近う馴れ仕うまつらんは、いと畏かれど、我等移し奉らんや」といふ。守きゝて、「かゝる刻に何か憚りあらん」といへば、千引手さしのべて、御茵ながら輕らかに捧げて御車に奉る。君はさらに思しもさとらず、やがて北方の御膝を枕にて、御足は十文字にさしもどろかし給ひて、御鼾の聲は、御車の音と共に、高う轟かし

いと好かんなり―いとあく好るなり

ふつゝかに―不格好に

でて、御杯賜はらばいかに」といへば、「いと好かんなり」とて召し給ふ。舟人ども遥なる沙子の末に蹲るを、守待ちとりて、「この舟人どもはいと珍かなる字の侍るを、その名附きたる事の由聞し召して、御杯たまはらば、興ある事にこそ侍らめ」といふ。「あやしのことや。いかなる名ぞ」と宣へば、守、「千引」とよべば、畏りて御前に出でく。丈だち高くてふつゝかに肥えたり。君は「雄々しのさまよ」とて見給ふ。「これなん力ある事人にすぐれ侍る。千引の岩をも、石投取の石とるばかりにとりなし侍れば、然なん人のよび侍る」といへば、「めざましき力かな」とて、御杯たまはる。つぎに出で來たるは、痩細りて貌小やかなり。こはたゞ小やかなるのみにはあらず、身の骨いと柔かにて、いさゝかなる物の間よりも出で入る事心のまゝなれば、鼬鼠とよべり。酸漿目は眼赤く、烏脛は脛黒し。胸のさしいでたれば、鳩胸といひ、頭の尖りたるを鋒頭といふ。皆次々に御前にいづ。君名つきたるよしを聞き給ひて、「いと珍かなるものどもかな。余さきに汝等を見つれども、かく興あるものどもともおもひかけざりし」

御等―女官達

家園忘却して―朗詠にある白樂天の句「生計地來詩是業、家園忘却酒爲鄕」

今宵しも浦回の月もこゝろして光をなみにみがくとぞ見る

所がらとのみは、えこそおぼえ侍らね」といふ。御車よりも、童していはせ給ふ。

沖つ舟とるやまかぢの數さへもさやかに見ゆる秋の夜の月

もしほ燒く煙もたてずなりゆくは浦回の蜑も月やめづらん

御車の後なる御等などのもありつらんを、聞きもらしたればいはず。更け行くまゝに月はいよ／＼すみて、杯たび／＼めぐれば、君いと興じ給ひて、「家園忘却して」とうち誦して、例のはかりなう飲みたまふ。侍ふ人々は、君の御敵なるばかり飲み得ん人もなければ、皆醉ひ困じて、松陰岩がくれなどに寄り伏せるを、君見給ひて、「いふかひなき者どもかな。誰ぞやある、此杯たまはらん」と宣へど、御答聞ゆる人もなければ、うち笑ひ給ひて「山賤海士なりとも、今宵はなにかへだてあらん。酒に健からんものあらば、疾くまうで來よ」と宣へば、守も醉ひ伏したるが、かく宣ふをきゝて、いかで御心をとらんとて、頭もたげながら御前にいでて、「こゝに筑紫の舟人どもの侍るを、召し出

の浦にもしほたれつゝ侘ぶとこたへよ」
島がくれゆく—「ほの〴〵とあかしのうらの朝なぎに島がくれゆく船をしぞおもふ」この歌の作者古來數說ありて、篁といふもその一也
一度は榮え—菅公の詩に「驛長驚くなかれ時の變改、一榮一落は是れ春秋」とあり

だ詢ひ渡るばかり近きほどなり。また篁の宰相の島がくれゆくと詠みたまへるは、やがて此浦に舟とゞめ給へるをりの事になん。今にこの主達の名殘忘れず、海士が囀りにも、その言の葉をばいひ傳へて侍るなり。されど公のかしこまりありて、時失へる人人なれば、世にさすらへて哀なるためしにこそいひいで侍れ。それにはひきかへて、世にいで時にあひ給ひて、御身の光添ひ給へるたよりに、かくやすらひ給へば、今よりしては、海士の子も君をこそこの浦の面目にはいひ傳へ侍らめ」といへば、「いかでその名高き人々の列には准へ侍らん。一度は榮え一度は衰ふるもこれ春秋なりと聞けば、世のうきしづみはいふべくもあらず。たゞその朽ちやらぬ人々の名こそ猶慕はしけれ。今宵かく眞人と我と、この渚の月にあこがれ侍るも、時去り世移りなば、同じ昔語とこそなり侍らめ。

あかしがた月を昔のかゞみとてわが世に今を忍びいづらん」

と宣へば、「げに御名殘とゞめん浦回の月をば、たが世にかわすれ侍らん。

藻鹽垂れつゝ——「わくらはに問ふ人あらば須磨

渡らせ給ふとも、我等御供仕うまつらんには、何事か侍らん」とて、いと我は顔なれば、「君の御爲に疎ならじとて、かくは申すなり。心臆したるにはあらず」とて、浪華のものどものはらたつを、帥の君制し給ひて、「な爭ひそ。いふことおの〳〵理あり。いづれをおろかなりともいひがたし。われ汝らが心に背かじ」とのたまひて、筑紫の舟をばみづから乘り給はん料に留め給ひて、ことに親しう仕うまつれる限りをのみ殘して、おほくの御伴人は、皆浪華の舟にてまづ下らしめ給ふ。かくやすらひ給ふを、守喜ぶ事かぎりなし。月は夜ごとに淸みまされば、濱邊にいでて、四方の景色見やり給ふ。空は塵ばかりの雲もゐねば、淡路島はたゞ手にとるがやうにて、海の面は、千里の波遙に晴れて、金の衾敷きたらんやうなり。北方の御車は、小松ども多かる中に立てゝ、下簾ほのかに揭げ給ひ、君は磯間に御馬とゞめ給ひて、軟障引きわたして、假の御座しつらひて居給ふ。守設の物ども荷ひいでて、瓶子とりながら、古りにし事ども語りいづ。「昔行平の中納言の、藻鹽垂れつゝとわび給ひける住家は、かの關の彼方にて、こゝよりは、た

海の心―海上の日和の模様

うけばりたる氣色―威張りて調合ひたる如き樣子

し給はんは理なるやうには侍れど、そは一日二日の舟路にも侍らばこそ、さも急がせ給はめ。筑紫までは、數多の日數をも過さでは、到りがたう侍れば、今より豫め海の心を定めいふべき事にも侍らず。御舟出のときおそきは、たゞ御心に任させ給ふべし。たとへ雨風常なくとも、楫取の心だに賢う侍らば、なにの御心置き給ふ事か侍らん」とて、うけばりたる氣色なれば、守喜びて、「筑紫の舟人はしか〳〵なん申す」といへば、帥の君聞き給ひて、さらばその舟人どものまうす事、まのあたり聞かんとて、皆御前に召して、檻のもとにゐざり出でて、事の樣問ひ給ふ。浪華の舟人等眉うち顰めて、「あなかしこ、よく舟乘するものは、日選をして時失はざらんやうにするをこそ、長けたる舟乘とはいひ侍るなれ。たとへ舟人の心賢う侍りとも、艪櫂の力は限りあり、海の心ははかりがたし。いかでか浪風をば侮り侍らん」とて、いと危しと思へり。筑紫の舟人うち笑ひて、「心臆したる人たちかな。波山を搖し、風巖を飛ばすばかりに侍りとも、楫取の心ひとつにて、御舟は平かに在らすべし。いで高麗唐土はさらなり、天の河まで

監―大監少監とて太宰府の官なり

あからしま風―暴風

ど、監がもとよりことさらに御迎の舟まゐらす。楫取舟人ども、物に心得たる限を選みて、船館など廣うしなし、几帳屏風などまで、淸らかに調じて奉れり。浪華より御送にまゐれる舟どもも、同じ渚に繫ぎて御舟出をぞ待ちける。「雨やう〳〵晴間あれば、此間にこそ御舟疾く出ださせ給はめ。此月は海の心さだめなう侍れば、たゆたひ給はゞ、あからしま風など吹き出で侍らんもはかりがたし」とて、難波の舟人ども切にまうせば、帥の君きゝ給ひて、「かくていつまで長居し侍るとも、御離別の惜しき事は限りも侍らじ。舟人らも急ぎ侍ると聞けば、今は罷りくだり侍らまし」と宣へば、「秋も今盛なるを、しばしやすらひ給ひて、さやけき浦回の月をも御覽ぜられんこそ興あるわざに侍らめ。船出急ぎ侍るは、舟人のつねにて侍れば、さのみ御心な置かせ給ひそ。かの筑紫の舟人こそ、遠く異國にも行きかひし侍れば、雨風の心をもよく候ひなれて侍るべし。彼等がおもふ心をも問ひ試み侍らん」とて、守、筑紫の舟人を呼びて、「いかゞおもふ」と問へば、「げに浪華の浦人のいひ侍るごとく、此月は雨風さだめなう侍るめれば、晴間に舟出

みじ。雨日頃ふりて、舟いだすべくもあらねば、「此月はこゝにやすらひ給ひて、御心靜にこそ下り給はめ。晴間待ちつけ給ひて、名だたる浦の月をも見給はでや過させ給はん」とて、日々になにくれと、海山の物どもとりつどへて御酒すゝめまゐらす。帥の君は姫君の御諫を忘れ給はず。又「昔に引きかへて、今は醉の過し給ふべくもあらず」とて、右の大臣の喜びのたまひける事をも洩りきゝ給へれば、かた〴〵に御心つゝましうて、一日二日のほどは醉しれ給ふばかりは飲み給はぬを、つれ〴〵と降り暮して、眺めがちにのみ日を重ね給へば、おのづから御心懈りざまなるに、「かしこに下り給ひてこそ、萬の公事もはべらめ。旅路のほどには、さのみつゝましうし給ふべき事かは。しばし御心慰め給ふばかりは、なにの妨か侍るべき」とて、北方のまづ醉ひ給へば、いつしかと御心弛びはてて、今は日々に泥のやうにのみぞおはしける。筑紫には、新に帥のくだり給ふと聞きて、誰も〳〵畏まりて待ち聞ゆるに、まして右の大臣の光さへそひ給ひぬれば、人々の思へること大方ならず。こたびは舟路よりと聞きて、例なき事なれ

眺めがちにのみ―物思ひがちになり

かりそめのゆきかひぢ―一寸行きてやがて歸りて來る路

幣代―神に手向くる幣の料

「御心安かれ」とのたまはんとすれば、後夜の鐘うちならす音にふと御目さめぬ。北方にもかくと告げ給ひて、諸共に御佛をねんじ給ふ。あけぬれば法師等に物などかづけ給ひて、誦經懇にせさせ給へり。八月ついたちの日、山崎まで出でたち給ふ。車十ばかりにて、御裝いと嚴し。送りの人々には、皆物かづけ給ひてなん歸し給ひける。右の大臣よりも御使あり。「かりそめのゆきかひぢとは思ふものから、過ぎ往なん四とせ五とせは、今より待遠くこそおもひ給へらるれ。これはわたつみの神に」とて、銀の船に、さま〴〵の錦をつみたるは、幣代にとの御心ばへなるべし。

はりまがた島こぎ離れ行かん日は八重の汐路にたむけよくせよ

「とまる心も」とあり。

つくしの海舟泊しなば先告げんやへの汐路ははるかなりとも

「惜しきものこそ」とて、猶行末のことども頼み聞え給ふこと細やかなり。御使に酒など賜ひて、衣かづけ給へり。播磨守は帥の御くだり待ちうけて、饗しのよしることいとい

の歌、「日暮しに見れどもあかぬ女郎花のべにやこよひ旅寝しなまし」

やさしや―恥かしや

またも來ん秋は契らじ今年だに袂にほはせ萩が花づま

尾花の風に靡けるを見給ひて、北の方、

初尾花なに招くらん秋の野にとまりはつべき我身ならめや

女郎花のたゞ一本咲けるを、姫君、

秋の野の千草が中の女郎花やさしやいかで一人たつらん

此處彼處蟲の音など尋ね給ひて、くれ過ぐるまでおはす。年頃北方の願立て給ひぬれば、御佛にも別つけ奉らんとて、今宵は法輪に詣でて御堂に籠り給ふ。夜なか過ぐるころ、しばし諸共にうちまどろみ給へば、師の君の御夢に、父大納言の物憂しげなるさまにて見え給へば、「などてさはおはするぞ」と聞え給へど、なにの御答もなし。御手にもたまへる筆して、御堂の柱にもの書き給ふを、何ならんとて見給へば、

荒汐にこゝろゆるすな大舟はま楫ありともなにたのむべき

とあり。こたび船路に赴きなんとするを、御心そへ給はんとて宣ふならんとおほして、

うたてあるさま—見苦しき樣子

野邊にや今宵—拾遺集藤原長能

ひしことを御心に忘れず。ましてかしこまり置き給ふ御心さへあれば、例のやうにも醉ひ給はず。大臣はかねて御心まうけありて、帥の君に名高き帶と、かしこき御馬ふたつ、北方にとて綾百疋、姫君の御料にとていと淸らなる御衣一領、わか君の御料をさへに、細かに心して奉り給ひて、童、下人などまでに、祿どもあまたかづけ給ふ。曉に歸り給ひぬ。大臣年比の本意かなへりとて喜び給ひて、「昨夜は試みに强ひたりしが、醉ひての後も、うたてあるさまにもあらぬを、酒鬼とかいひて、世の人のあさましうとりなすこそ、物いひさがなきわざなれ。昔はさもこそうたてありつらめ、今はあらため給ひぬめれば、われ心安し」とぞ宣ひける。年ごとに、秋は嵯峨野の花見に出立ちたまへど、今年は下り給はんの御急ぎにまぎれておぼしもたゝぬを、「またかへり來んほども遙かなれば、この秋だに」とて、北方のそゞのかし給へば、姫君をも連ねて、ひとつ御車にていで給へり。夕かげをかしきほどにて、さま〴〵の花どもの、露にうち亂れたる中を「野邊にや今宵」とて分けいりたまふ。御隨身召して、萩の花一枝折らせ給ひて、帥の君、

御すさみ止めたまはゞこそあらめ—飲酒を禁じ給はゞ就任し給ふとも苦しからじとなり

かたへのすさみ—一方の樂、酒

まかりまうし—暇乞

かきくづしおぼしいでて—かき盡しの誤なるべし、殘らず思ひ出すといふ事

く従ひ奉るべき。しか侍らんには、ゆくりなく御身の咎負ひ給ふべきふしも出でまうでこずやは侍るべき。又この年頃は、西の海波風靜ならずとかいふなるを、事ともあらん時に、例の泥のやうにもおはさばいかゞし給はん。今より堅く此御すさみ止めたまはゞこそあらめ。もしとゞめたまはざらんには、此職辭し給ふぞ後安きわざに侍るべき。畏き波路を凌ぎ給ひて、御心暇なき世を過し給はんよりは、春は西山の雲を帳とし、秋は嵯峨野の錦を茵にて、露を汲み霜に醉ひ給はんこそ、御心ゆくかたなれ」とて、押立ちて宣ふを、父君きゝたまひて、「いとかしこうも宣ひけりな。されど大臣の御心をも今はそむきがたくなん。又かたへのすさみは、我心にこそあれ、さのみ深くな心置き給ひそ」とて、思ひとゞまり給ふべくもあらず。秋になりて、「とくまかれ」との宣旨下りぬれば、先まかりまうしにとて、右の大臣の御許に參り給ふ。大臣待ち受けたまひて、下り給ひての御心掟など懇に聞え給ひて、又昔の事どもかきくづしおぼしいでて、かたみに泣きみ笑ひみ、よもすがら酒酌みかはしつゝ御物語あり。帥の君は姫君の聞え給

嬉しきものから—嬉しけれども

かゝる事—下の諫言をさしていふ

まねび出でんは—口にいひ出さんは

うへ—表面　した—心中

御心設などあるを、姫君は一人御心ゆかぬやうにぞおはすめる。さるは、住みなれし都をふりすてて、千里の空にあくがれんことを心細く思すにやとて、さま〴〵いひ慰め給へば、「心づくしの海は遙なりとも、御邊離れず伴はれたてまつらんに、何か憂事の侍らん。また時いたりて、御身の世に出で給はんは、誰も〳〵願はしきすぢにて、いと嬉しきものから、たゞひとつ安からず思ひ給へらるゝことの侍るを、聞えではえあるまじけれど、いひいでんもさすがにて、心のうちにのみなん思ひつゞけ侍る」とて涙ぐみたまふ。「さは如何なるふしなりとも、なにか包み給ふべき。かゝる事のはじめに、物思はしげにしたまふこそ忌々しけれ」とのたまへば、「女の身にて、かゝる事の片端にてもまねび出でんは、傍いたきわざに侍れど、一わたり聞えまゐらすべし。そも〳〵このたびの御職は、大方の受領の、品卑く事狹きたぐひとは異にて、つかさ〴〵の上に立ち給ひて、萬の事執り總ね給はんには、おほくの人々、たゞ一所にこそ靡き奉るべきを、酒にのみ御心よせ給はゞ、誰もうへにはそむきまゐらせずとも、したには將いかでかよ

頼め聞え給ふ—深切に音問するなり

こしらへ聞えたまふ—種々道理をつけて說き勸むるなり

世に埋れてのみおはするを、いといとほしうおほし嘆きて、事にふれては常に頼め聞え給ふをりもあれど、「年頃かく身を世になきものになし侍れば、なかなかに心安きかたに思ひなり侍りて、今は鳥を羨む心も侍らず」など答へ給ひて、清々しうも、御心に随ひたまはぬを、今年筑紫の帥闕けたれば、いかで此の君をとおほして、「帝には我よきに奏し侍らん。御年も今盛なるを、ひたぶるに世を思ひ捨てたまふらんことは、ゆめゆめあるまじきことなり」とて、たびたびこしらへ聞えたまふ。「一たび二たびこそあらめ、昔を忘れぬ御心より、かく切にのたまひわたるを、人の御心をも知らず顔に、我思ふ心をのみ立てんは、かへりて心淺きわざなり。まして、男子世にあらんに、己を知る人あらざらん折こそ、蓬が下に空しく朽ちも果てめ、志をも立てて、身をも起しつべき時至れるを、いかで徒に過すべき事かは。今は大臣の御心にそむかじ」と宣へば、「かく世離れたる窓のうちに、寂々しく明し暮さんよりは、花やかなる世を經て、賑しき月日を送り迎へんこそ、いふかひあるわざに侍らめ」とて、北方も喜びたまひて、内々に其

> 致仕の表―辭任の願書

ふたがりし　胸もはるけぬ　うちとけて　土つき七つき
かずしらず　なり行く時は　天つちも　われから廣く
月も日も　のどかなりけり　昨日といひ　今日といひつゝ
晝夜なく　醉ひに醉ひては　みな月の　土さへ裂けて
照る日にも　あつさ思はず　霜こほり　霰みだるゝ
冬の夜も　寒さわすれつ　かくばかり　いとも貴し
ひじりとも　ひじりといひて　仰がざらめや

其ころ左の大臣は、年老いたまひぬれば、致仕の表奉らんの御心にて、萬の政をもをさ〳〵申したまはず、たゞ病にことよせて引き籠りてのみおはすれば、今は世の中の事、たゞ右の大臣の御心まゝなり。此大臣いと若うおはしける時には、三位の君と同じ師をとり給ひて、書などよみ給ふことも、諸共に隔なうものし給ひぬれば、いとうるはしき御なからひなるを、今は御身の榮ならぶ人なくおはするにつけても、この君のかく

心に違はじとおほすめれば、強にうち返しては戻き聞え給ふべくもあらず。かくて年月のゆくまゝに、たゞ糟の丘つくらんことをのみ營み給ふ。寢殿の障子には、和漢の酒に名きこえたる人々を畫かせ給ひて、常に言立て給ふには、「此人々とともに居れば、我は友に乏しからず。甕の酒竭くる時あらずば、わが世はかくて足れり」と宣ひて、古人のなかにも、大伴の大納言を殊に慕ひたまへば、その酒を讃むる歌をめでたまふあまりに、その心をひろめて、長歌ひとつをぞ作りいでたまふ。

いにしへの　かしこき人の　酌みしりて　此のきよみきを
ひじりとは　むべもいひけり　これをしも　友としなせば
花をめで　月をとふにも　あはれさの　そはるのみかは
うきふしの　しげき時すら　一つきを　手にとり持てば
おのづから　心ゆたけし　またさらに　二つき三つき
よどみなく　のみての後は　むすほるゝ　思もとけぬ

大伴の大納言―旅人卿とて萬葉の作者、酒を好みて其歌多し

此のきよみきをひじりとは―古言にて清酒の異名を聖人といふ

一つき―一杯

こゝろしらひ―心の用ひ様
押立ちたる所ある御本性―物事押通して爲しとげんとする性質
命のぶる藥―漢書食貨志に「酒百藥長」

かたち世にすぐれてあかぬ所なし。よろづに敏うおはして、はかなくし出でたまふことも、すべてこゝろしらひ人には異なり。又常の御こゝろおきてまめやかに、押立ちたる所ある御本性なれど、うはべはたゞ女しく、おほどかにのみもてつけたまひて、さし過いたるかたなどはつゆ見えたまはず。父君の、あけくれたゞ酒の淵に沈み入りて、泥のごとくにのみおはするを、あさましう嘆しきことに思ひつゞけたまひて、「かくまで好ませ給ふものを、切にやめたまへとには侍らねど、あまりに打ちつゞきて、絶ゆる間無うおはさば、思はぬ御病をも引きいでさせ給ひぬべし。終日にうちおき給はんことこそかたからめ、せめて時の間だに醒め給はんをりあらましかば」など、時々諫め給ふをりもあれど、「あな、さはなのたまひそ。古人も命のぶる藥なりとこそいひつれ。今は世の中の交も懶くおぼしなりて、たゞつれ〴〵にのみ籠りおはするを、此友だに無からましかば、御心ゆく方もあらで、いとゞ寂々しからまし」など、北方の、側より言消ちたまへば、父君えやは聞き給はん。さるは朝夕何くれのことにつけても、いさゝか御

つけて―諢名を

殿上の淵酔―十一月中の丑の日宮中に五節の舞あり、其翌日殿上にて行はるゝ宴會なり

職とりはなたれ―免職し

あたひなき寶といふとも―「酒のみて心をやるにあにしかめやも」といふ大伴旅人の歌

ろや。わかき殿上人などは、世に疎しきことのかたらひぐさにしつゝ、酒鬼とさへつけていひはやしぬ。またこゝろある人は、「此人にしもこの失なからましかば」とてをしみあへり。一とせ殿上の淵酔にいたく強ひられて、例の現心もなく酔ひしれ給ひて、ありとある上達部の冠打ちおとし、裾引きかなぐりなどし給ひければ、上にきこしめして、無禮もさのみ咎めたまふまじきをりなれど、「酔に乗りたるわざとはいへど、わが身の階をも忘れて、かくまで物狂しきふるまひやはある。いとやすからぬことなり」とて、やがて職とりはなたれたまひぬ。それよりのちは、世の中あぢきなう思しなりて、故大納言の時より傳はりたる御莊の大井にあるに、もとよりかりそめの殿などあるを、造りそへさせ給ひて籠りおはすれば、世のまじはりもはか〴〵しうはし給はず、今はたゞあたひなき寶といふともとのみ思すべし。北方は王家どほりにて、やごとなき胤におはすれど、いかなる宿世にか有りけん、同じさまに酒をしも深く好み給ひけり。御子はたゞ二人のみおはす。男兒はまだいと稚なる程にて、女兒は今年十五になり給へり。此姫君

世のおぼえやごとなく―世上の尊敬も

つくし船

氏は藤原にて、大井の三位といふ人いまそかりけり。身の才いと賢う、よろづに劣れたるかたなう物したまひければ、年まだ三十に足らぬほどなるに、兵衛の督にて、宰相にさへおはすれば、世のおぼえやごとなく、ゆくすゑいとたのもしう、人も心よせまゐらせしを、たゞひとつ怪しの病ありて、酒をだに見たまへれば、公私の事をも、やがて忘れたまひ、たゞ飲みに飲みて、興じ給ふをりは、現心もあらずなりて、もの荒かに、起居はしたなう、心にもあらぬ由なき事をも、おほくのたまひ出でけり。さめ給ひて後に、「しかなん正なき御ふるまひなりけるよ」など、聞えしらする人もあれど、さばかりかしこうおはしながら、わが過ともおもほさで、あらためたまふべき御心もなきぞうたてあ

書中んとはぬる字を、くはへもし、刪もせしは、世人のいぶかしみおもふふし〴〵あるべし。たとへばあんなりよかんなりといふ語は、あるなりよかるなりの音便なれば、るもじにかへて、かならずんもじを添へたり。やごとなしといふ語は無止事とも、また無悩ともいへる舊説うけがたければ、余が考もて無上事の義とさだめつ。さてはいやごとなしの略なれば、んもじえうなきをもてはぶきたり。清水氏は不得已の義なりともいひたれど、しばらくまろが説もて書きたり。またおもしろき事にをかしといへる語は、面向の心なれば、奥のおもじ書くべき由、本居氏はいひしかど、いま端のをもじ用ひしは、蜻蛉日記の、

みちのくのちかのしまにて見ましかばいかにつゝじのをかしからまし

といふ歌に、丘によみかけたるをもて證とせられし師説によれるなり。

源　與清　識

は、作者の名をうづみはてんこと、いとほいなしといふべし。もししかふるきさまによらんには、序跋などくはふるはいふもさらなり、ゑりまきにすめるもえうなかれば、さながら、うつしまきのまゝにてつたふべきをや。また東都といへるをこれかれとがめつる人あり。げに一わたりはいぶかしみ思ふもうべなれど、こは物部某などが書きたる例を引けるにはあらず、いにしへ、太宰府を西都といひ、鎌倉を東都といひし例あるがうへに、國府の事をひなの都ともいふめれば、これかれの證に据れりしなり。京都を西都とは書くまじけれど、江戸を東都と書かんに、くるしき事かはある。其くはしきよしは、まろが著せし俳諧歌論十の巻に論じたれば、こゝにはいはず。

余が旁註せし後に、なほ事たらぬさまなれば、標註をもくはへてんやなど、いひそゝのかせし人ありしかど、いとふるき世の書にもあらず、まのあたり師のふでずさびなるものを、いとこと〴〵しげに、標註までやはとてやみぬ。旁註だにもえうなきわざに似たれど、そはうひまなびのともがらなど、よみひがめてんもはかりがたければ、ものせしな

凡例

此書はもと大井の三位物語と名づけられしにて、つくし舟といへるは一の巻のみの名なれど、はつかにひと巻書きさして捨てられしものなれば、やがて其巻の名もて、うはぶみにはとりなせしなり。巻のすゑに、そは次の巻にこそと書かれしは、からくにの傳奇小說の書例に、且聽下回分解とあるによられしになんありける。

はじめ巻の端に、竺志船物語、東都平春海士観遺稿、源與清文儒旁註と書きつるを、いにしへより、竹取、宇津保、伊勢、源氏など、すべての物語書に例なき事なれば、世人の議論もいとかしがましかりなん。さては、與清がひがわざのみかは、師の名をもけがすに似たりとて、いひきしらふ人ありければ、せんすべなくてはぶきたり。されど書つくり出づるは、もと西蕃にならへるわざなれば、今かれにまなびたりとも、なでふことかあらん。からくにのむかしも、巻首に作者の名しるせし例なき事なれど、やゝ後の世になりて、名をかくせしはまたたえてなし。中國にも、いとはやき世はさもこそあらめ、今になりて

びと競ひおこれるも、大人の朝日影によれりしなれば、此道にては、往昔のひじりにも、むしろをゆづりたまふまじうなんありける。大人ひと世の文こゝらありける中に、このつくしぶねの物語は、すゞろなる筆のすさびに、竹とり、源氏のすがたにより、かの演義小説のさまにものせられしにて、はつかに一の巻書さして捨てられしかど、さすがに、こがねに、玉に、あたひなき寶を塵にうづみはてなんは、いとしも本意なかれば、余ひろひとりて讀みかうがへつゝ、かたへにことわりの詞をさへ加へて、ゑり巻にはせしなりけり。

文化十一年二月　　高田與淸序

しこの詔、勅、璽書、制、誥、冊、御札、赦文、盟祭文、國書、令、教、符、檄、露布、公移、判、祭文、祝文などにかなへるもこもりたり。上書、表、牋、奏疏、書記、論、説、原、議、辨、解、釋、問對、序、小序、題、跋、書、讀、雜著、規、戒、評、碑文、記志、記事、題名、行狀、墓誌銘、墓碑文、墓碣文、傳、誄、弔文などはいふもさらなり、古事記、世繼物語などは、左氏、史、漢のさまによれりしなり。竹取、うつほ、伊勢、源氏、狹衣などは、けだしや莊周にもとづきけん。後の演義小説はたひとしかりけり。今昔、宇治拾遺などは、戰國策、説苑のたぐひともいふべし。その外、何くれと書き出づる文體、からくににもとづかざるはたえてぞなかりける。されば文書かんには、すがたを漢國にかり、こゝろを今にまうけ、詞をいにしへに探りて、ものすべきなるを、おのれおもひしり顏にかまへたる人たちも、此境をば、えさとらでありへしに、ひとりそのむねを得て、にしごりの、めでたくあやなし織り出でられしは、世にたぐひこそなかりけれ。かゝれば、をしへ子たちはいふべくもあらず、門ふみならしてきたりしたしめるともだちさへに、その光そひて、今は武藏野のをばなさかりに、向が岡の草しげく、ふ

歌と文とのふたつの道、巧なるとつたなかるとは、よみかく人のざえによるわざなめれど、そが中に、うたのみちにすぐれし人は、呉竹の世々に絶せず、濱のまさごの數あまたなんきこえたる。しかはあれど、とりがなく吾妻のくにに旗立ちそめて、雲かすみなすをしへ子あともひつゝ、いとたかき名を得られたるわが織錦の大人と、芳宜園の翁の歌ざまには、をさ〳〵あたなふ人もあらざりしに、なほみそぢあまり六人の仙のみかは、六家の君さへかみにおはすれば、その左に出でたまへりとしもいふべきやは。たゞ文かく道に、くしびに、たへに、世人のえも企て及ぶまじきふしを書き出られしは、いにしへ今に、大人ひとりなるかも。そも〳〵文のことばは、千早振神代よりつたはれるにもあらず、ことさへぐ漢文にまねびて、こゝのことばにつくりなせしものなるを、近世になりて、ふること學などいひのゝしる輩も、なほおもひわかずして、てにをはかなもじづかひのさだにおもひをこらし、あるはことばづかひにこゝろをくだきぬれど、すがたのわいだめをしもさとらざるは、あさましきわざならずや。先いにしへの宣命、祝詞には、あまたの體そなはりて、か

とをさへしのび出でつゝ、そゞろにさしぐまれぬるもかひなしや。さはれ、これを機ものになずらへ見んに、はつかに織り出でしあやめもて、その一むらのあらましは、おしても知らるゝわざなれば、いさゝめなるさいでといふとも、にしごりのやのうまごりの、世にもたへなる手わざをば、見もしつべく、めでもしつべきものにやはあらぬ。

文化十あまりひととせ三月　　源　光　彪

ひとゝせ、にしごりのやにつどひて、伊勢物語の講說きゝけるをりに、なにくれのふみどものおちちりたるが中に、このつくし舟の名の有りけるを見て、いかなるものにかと問ひたりしに、師の翁ほゝゑみてのたまへらく、こはかりそめの心やりになんものしたりしを、かならず人の目よろこばせんとのすさびならねば、しかこそことえりもせざりしか、さはいへ、こもまた物がたりの數にはもれじをとて、やをらとりかくさんとし給ひしを、ひたぶるにこひ得て見しに、人のくにのふることを、やがてこゝに有りつるさまにとりなされしは、彼のものがたりのおやといふなる竹取の翁のたぐひともいふべきを、たゞ詞のあやにうるはしきは、かぐや姬にもにほひまされりとやいはまし。さるを、なからにして筆さしおかれたるこそ、あかぬわざなれ。花の山路にて日くれたらんは、翁にはいかにおぼすにかなど聞えしを思へば、十とせあまりのむかしのことになん有りける。こたび、松のやのあるじたせ子のとじにはかりて、板にゑりなんとす。あはれ師の翁よにいまそかりせば、しひごとしてだに、いま一まきをも終へさせましをとおもほゆるあまりに、くさぐ〳〵のこ

意。其行文之妙至於如斯也。翁龍鍾一禿。對客如怯。而胸中所貯。奇々怪々。殆不可端倪。人之可畏。果然如此。初謂源氏以後我邦無奇書者。余之固執也。使余之固執立解者。文儒之賜也。今已拜賜。謹以奉還。

甲戌暮春之初。五山池桐孫題。

天下有瓌奇之才。能收瓌奇之事。著爲瓌奇之文。讀之可駭可哭可快可笑可恨。至使人扼腕噴飯咄々不止。作者之心非有七竅。目則橫而鼻則竪矣。忽出此神通力。抑亦可畏也。史記以跌宕之筆。簸弄今古。自是絕世伎倆。但因事生文。事猶在彼。至水滸則一片腔子揑出無限瓌奇之事來。文之與事。併兩屬我。縱橫變幻。鞭馳造化。雖正稗不同。工夫將倍古之人矣。

我邦古不乏麗藻。而構虛之文別出新裁。才實足抗衡水滸者。唯源氏物語一書爲然。其文波瀾蕩漾。雲騰山崩。筆底無復毫髮遺恨也。水滸以後稗史小說殆將充棟。吾讀深厭之。源氏以後物語草紙不下數家。吾亦不肯觀。近與高田文儒通交。文儒持竺志船物語者來示曰。是平春海翁之遺文也。請一覽見序。余破格讀之。悅然自失。敷藻之絢。此豈在源氏之下乎。翁之在世。里居相接。然翁蒲柳善病。余亦衣走食奔。相見太罕矣。翁之於國學和歌。一時推爲翹楚。吾亦不

謂之正議。然則予之稱士觀。謂之公正。亦可矣。若夫惡人之所好。好人之所惡。咈人禍身者。古人所戒。予亦不敢也。士觀沒數年。其門人高田文儒刻其師所著竺志船物語者。問序於予。予閱之。是世所謂物語者。而彼傳奇小說之類耳。是豈足稱士觀之蘊乎。雖然。古人有言。嘗鼎一臠。全鼎可知也。此編雖區々。亦足以窺文豪之錦心繡腸。發爲粲花嚼辯之談矣。天下之人。自有眼識。又何假予之贅乎。文儒敏俊好學。務尙該博。瀏覽不倦。能奉其師說。又一時之才人也。嗚呼士觀逝矣。人琴俱亡。韓公有言。思李元賓而不見。見元賓之所與者。則猶如元賓焉。予之於文儒亦然。

文化甲戌仲春甲子友人吉田儒員加賀大田元貞才佐父撰

竺志船物語序

予少與平士觀友善。士觀長於予二十歲矣。因稱忘年交焉。每相會。講論經史。育量詩文。時或及治道得失。人物臧否。未曾知其精國學也。後聞論者之言。言其於國學。傳賀茂眞淵之說。博洽精確。有青藍之譽焉。予悅吾友有此博雅之人矣。既而又聞之。其於和歌。豐艶高妙。不愧古之作者。與橘千蔭唱大雅於關東。風靡一時。聲名藉甚。後進之士。仰如山斗。予又悅吾友有此俊逸之人矣。既而又聞之。其於和文。爾雅巧麗。獨步于詞林之間。先無古人。後無來者。蓋今古一人也。予又大悅吾友有此一代之偉人矣。唯恨予於國學。毫無知解。則予稱士觀。同于矮人觀場。隨人喝采耳。雖然。毛嬙西施。天下知其爲姣麗之人矣。蘇秦張儀。天下知其爲雄辯之士矣。莊周左史。天下知其爲能文之人矣。顏淵曾子。天下知其爲德行之士矣。與天下之人。同其見。同其言。謂之公論。又

妻は內親王をたすけまゐらせ、勝行に御先をはらはせて、葛飾の方をさして出でぬ。さて子の時を過ぐるに、神田部の解部守部、所の刀禰等を先にたてて、續松をふり、列を調へ、此家を五百重に圍み、門を開き戸をこじて、立入りて見れども、人とてはあらねば、「こは如何にぞ」とて、弓屋、人置の二人を招きて、物のくまびをもとめさするに、人は更にもあらねば、「心得もなき事を申して、訴所を騷し奉るよ。まづおのれらを縛りて事の分別を申開かせん」など、解部のともがらいひこらして、彼二人をいたく縛り、神田部の館をさして歸りぬ。

本朝水滸傳 終

ん。今唯今いづこへも立忍ばせ奉り、明けなば陸奥をさして下り給へ。みちのくの方には我友三田奇麻呂參り、又蝦夷の國にはすなはち我主惠美押勝參りて候に、尋ねあひて御上を頼み聞えよ。あなかしこ。

二月五日　　　　　高橋乃手力

内舍人秦忌寸勝虎主

同　　勝行主

と書止めたり。犬神その文をおし戴き、「さてもよく知れたりな。いと頼もしき人に逢ひつるかな。いで忍ばせ奉らん」と、まづ我妹を呼出で、「しか〴〵なり、今一時ばかりの間に立忍ばせ奉らん。いざ旅の御粧を如何樣にもかい繕ひ參らせよ。我ものせん」とて、かねて隱しおける草苞のうちより、太刀二振を取出でてわきばさみ、たすきをうながけ、脚結をゆひ、弟の勝行をも呼出でて、彼伯母がたばかりとれる三百枚の金を、袋に入れ、懐に收め、君だちには下部の簑笠をうち著せ參らせ、我はおほきみの御手をとり、

やさしみ―はづかしがり

枕方を通りて、奥床に入れまゐらせ、「一日二日の御隔りを千年の如くも思ひ過ぎぬ」とて、まづうちならびて臥させ給ふ。犬神は寝たる樣にして、心には、御道理なり、我起出でばやさしみたまはん、弟もせんすべなからんと思ひ、わざと鼾をうちならしてあるに、何にかあらん、丸矢なす鳴りひゞきて、我寝つる上四尺ばかりを鳴りとほりて、柱にあたりて枕方に落ちたり。犬神あはやと起合ひて見れば、白鳥の羽にてはぎたる矢を、表の方より射入れたるなり。いで事こそあれと、燈を明くして見れば、矢には書簡をさしくゝりて侍るに、とりて見れば、表には、「藤原惠美押勝が家臣、高橋手力これを贈る」と書いしるしたり。いと怪しと思ひて頓に開き見るに、その文に曰く、

事迫りぬれば何事もしるさず。此家には、鹽燒王ならびに不破内親王立忍ばせ給ふならん。今朝なん、弓屋の俊雄、人麿の眞鮪が訟の場にかくと告け來りぬ。やつがれ思ふ旨ありて、此神田部の訟所に、解部となりてあるが故に、早く御有樣を知れるなり。今夜子の時を過ぎば、神田部の守部等に此家を圍ませ、君達を捕へ奉ら





なごし—やはらげ

悲しく打うらぶれて、心もやましくて臥居たり。伯母の刀自近く寄りて慰めつゝ、「今夜は雪も降るに、弓屋の亭主もおはさじ。人靜まるころにならば、物がたき我夫の心をいひなごして、御上を竊かに迎へ入れ奉らん」といへば、いと嬉しく物頼もしく思ほして、火などもともしたるに、漸起出でて湯漬など參れり。雪はいと白く降りかさなりて、風寒く吹くに、門邊は人も通らず、戌の三つばかりになれども、弓屋のぬしも見えず、人置はまして來ねば、今夜こそあれと思ひて、犬神が寢て侍りしを、打起さんとて立つに、門邊に面白く笛を吹鳴して、行過ぎもせず吹入るゝ聲の聞きも違はざれば、「御上こそ忍びましつれ、出でて見ん」とて、犬神が目を覺してさしとゞめんとおぼすに、やをら戸を引きあけ、伯母と二人して門の金戸をもこじ明けなどして見れば、犬神が弟を唯一人伴ひ給ひ、御笠はいと深くして、笛を吹きて佇みたまへり。「是はいとほし」とて、御手をとりて引入れ奉るに、いと冷えておはしますを、懷にかい入れて暖めまゐらすれば、伯母は眞袖もて御衣の雪をかきはらひなどして、門をばさしよせ、靜かに犬神が寢たる

はだれ―まだら

下の掟あれば、さる兵具を私に贈りやらふべきや。此者等如何なる人ぞ。其許には人置にて、よくかゝる事には觸れ給ふべければ、とかく見定めて給へ」といふ。人置聞きて、「さは今夜參れるはそれ等の事にぞ。さきの日御隱家をもとめて、女達を移し侍らんとしけるとき、おのれは居らざりしが、下部どもの見定めて侍りけるは、笠深く著て世を忍ぶ樣の人來りて、何にかあらん、花木とうちさゝやきなどし、深くいひ契らふさまなどのはし〴〵聞えて、たがひに涙を拭ひて別れつと申す。そのことは漸々さいつがた下部どもの申聞かせて候により、是は心得ずと思ひ、女どもの有樣どもをためし、又犬神が勇みたる有樣を考ふるに、その弓など金などいひかけてさむらふ始終の樣もいぶかしく侍るに、何にもあれ、明日にもならば、御心を定めて訟の御場に出でて、頓に委細を聞えあげ給へ。おのれも立添ひて、よく聞取り給はん樣に訟へ奉らん」といふにぞ、俊雄もさる事ぞと打うなづき、「さらば明日なん」といひて別れぬ。又の日の夕つがたになれば、春の泡雪はだれに降りて、いと淋しげなるに、花木は御上の事のみを思ひつゞけて、いと

宮碏姫—古事記には美夜受比賣に作る、尾張の名家の女、同書におすひのすそに著きたる月經を見て日本武尊歌を詠じ、姫之に答ふること見ゆ

といふに、俊雄聞きて、「如何にも其方の御便よからん樣にすべし。さて今夜は」といへば、伯母うち笑みて、「宮碏姫にてさむらへ」といふに、俊雄うち驚きて、「宮碏姫とは何れの事ぞ」といふに、「おすひの裾に」といへども〱、俊雄さらに聞得ず、「おすひの裾に〱」とて、いくたびも考ふるに、「月經つきにけり」といへば、俊雄頭を掻きて、「こは忌むべき事なり。されど弓の事は違へじ、明日なん大神を濱に遣し置きて、否か然を見定め給へ」とて出でて歸るに、道にて人置が來たるに逢ひて、「いづこへ」と問へば、人置は、「彼御隱家に参るなり」と申す。俊雄人置を近く招き、「心ひとつに定め難き事の出來ぬ。是聞給へ、伯母も花木もよく見るに直人ならず、おのれ一昨日の夜よりいと愚かなるものになりて、つら〱形狀を考へみるに、天下を騷動したつべき人の徒に侍ると見き。まづその夜は金三百枚を乞ひしまゝに、いと易く承引きて、又の夜持て参りてやりつ。今夜なほ思咎めて侍る旨は、いとこの弓屋に贈りやらんなど、樣よくいひとりて、我に千張の弓を贈りたらば、花木は心に任すべし、といふ。たとへ誠にまれ、天

に、いとほしくは見奉れど、心強くもてなしきこえ奉るに、その夜も明けて又の夜になれば、弓屋はいとよく化粧して、今夜はと思ひつるに、人をも召連れず、手づから松燈して入來りぬ。伯母出迎ひて、「今夜はよくやはしおきてさむらふ。花木も待ちに待ちまゐらせしが、又ひとつ伯母が望の」といふに、「何にまれいへ、直に任せ參らせん」と聞ゆるに、「我々が從弟の都に候が、これも御主と同じ弓屋にては侍れど、是はいと貧しく候。弓削者も抱へかねて、手づから削り候に、さいつ頃眞鉋もて手の指を三つ四つ切落し、今は業の事かなはず、そが上に西國の守に、千張の弓を作りて奉るべき御契約を仕り、その弓代は先に賜はりて侍るを、その金を盜人に取られ、手はかなはず、弓は削らず、守の御咎にあひていと苦しくして侍るときなり。御亭主此花木を思し給はゞ、千張の弓を船に積ませて給へ。さらば此證文をも妾と書改め、よろづ御心に隨はせ奉らん」といふに、「是は又金よりもいと易し、されど今夜とては成難し。明日なん申しつけて、千張の弓を贈るべきが、さは又浪花の浦に送らんや、何處へ」といへば、「伊勢の大淀の濱まで」

やさしーはづかし

どいひて、今夜は金やりつと思ふ誇にや、少し亭主めきてさのみも恐れず。花木近くまゐれど、さながらに逃げもせであるに、いたく地震りてひし〳〵と鳴り、どよとどよめくに、「我山の神はいたく怖がり給ふに、定めて尋ねもとめん。あな醜の地震や、我戀の敵よ」などいひて、うちよろめきながら、「明日の夜又」といひて歸るに、「まづ一方の望は得つ」とて落居ぬ。さる騒に人置も歸りたれば人もあらず。今夜は君の殊に戀しがりたまふに、妹が犬神にむかひて、「今の騒などに殊更に思出でたまふ御事にさむらへば、竊かに迎入れ奉らばや」といふに、犬神聞きて、「御ことわりには侍れど、天下の民を思されて、皇太子の御後見も聞えおはさんと侍る君の、かゝる筋に輕々しくおはしましては、俊雄は早や參るまじきが、いと近ければ人置きゆくりなく立入らば、君を如何に立忍ばせ奉らん。昨夜も聞え奉る如く、君のかゝるあさましき御姿に窶させ給ふも、唯天の民種を思す故なり。さらば暫しの御慕心をや」といへば、君よく聞しめしとりて、「犬神如何にかひなくくちをしき女と思すらんがやさしくこそ」とて、眞袖を御顔に押しあて給ふ

る世の中に人の心を見出で、志を合せ、徒を結び候はんには、彼なん乏しくては如何にせん。又弓の事は大君御軍あらんとき、弓なくては如何にせん。かゝる序にと、かねて我妹と申合せさむらふ。やつがれ伊勢の大淀の濱に、志を合せたる者の侍るに、弓屋をよくたばからせて、此濱まで船にて送らせ侍らんと思ふなり。君かくて如何で長くおはしまさん。今夜より十日ばかりは、かく御姿を窶されて、暫くの御隔りを思したび給へ。やがてよき時を見て此處を出し奉り、よき所を設けて忍ばせ奉らん」と、來し方行末を聞え奉るに、君は、「唯夫婦の人を頼み聞ゆるなり」と宣ふに、夜も更けぬれば靜まらせ奉り、妹はさし添ひ奉りて臥しぬ。犬神は外の方を守りて寢ねつ。夜明けもてゆくに、人置も早く出來て、「いかに昨夜は鼠どもの騷ぎつらんな、皿杯など破りつや」などいひて、唯妾と書認めざるを今日も亦うしろめたくいふを、犬神聞きて、「伯母が如何樣にも計らふべし」と、いひ消して居りつ。その日の夕暮になれば、此度は衣などいと新しくて、金はいひし數を袋に入れて持て來。「これ伯母君よ、それ參らす、能く頼み奉る」な

こぢたき—こちたきか、何れにしても意味明かならず

うしろやすく—何の氣がかりもなく

につけても世のこぢたきのみなり。今夜は先づかくて歸らせよ。明日は夜おはしまさば、金三百枚ばかりを袋に入れて持て來たまへ」と云へば、俊雄は打頷きて、「いと易し」と云ふ。さてあるに、「主は何處へかおはしたる」とて、松燈させて、「内君のいたく尋ねさせ給ふ」と、人屋の下女が來りて告るに、「いでや痛きめにあはん。明日の夕暮に待たせよ」と、沓をば逆さまに踏みて、「これは他沓ならん、脚も入らず、はかで往かん」などいひて走り歸りぬ。人置は跡とり繕ひて、「かく大やかなる家に、女のみをいかでおはさせん、犬神守りておはせよ。火はよく埋らせよ、門はよく締めてよ」などいひて出でぬ。犬神打見送りて、門をば鎖固め立歸りて、「妹よ、我妹よ」と呼ぶに、「君はいとをかしかりつる」と宣はすれば、犬神夫婦のもの立退き、君を上座に据ゑ奉り、「いと／＼畏くも侍るかな。今夜は大君の如何に打侘びておはしますらん。我弟なるものにはよく聞えおきて候へば、御うしろやすく思さるべし。我妹よくたぶらかして候へば、明日の夜は必ず金持て參るべし。さこそはかなき財寶を貪るなど思すべきが、かゝ

とて盛渡せども、俊雄は手を顫はせて幾度か打覆し、漸々口にさしよすれども、口ごめに顫ひあがりて、歯はごち〳〵と鳴合ふに、酒は頤に飲覆してあるを、花木は懐紙を出してのごはんとすれば、「おかしませ〳〵」といひつゝ、我著たる袖などにてかきはらひ、唯「水をもて來、湯を持て來、いと〳〵咽のかわくに」などいひ居れり。「さ夜更くる風のいと寒く、春の霜や置渡らん、端居はよからず」とて、戸など差込めて、人置も韓臼も次に立てば、「やよ何處へ行くぞ、爰に居れ〳〵」といひて放たず。さるにても、目をくはせて二人ながら次に行きて居れば、鬼住む島に我一人捨てられたる思にて、唯俯向きてあるを、伯母の刀自近く寄りて、背をかいなでなどし、「花木は御心に止り侍らば、此伯母がともかくも計らひ參らせん。そがかはりには此方の望をも」といへば、俊雄恐ろしげにふりあげて、「伯母君いとかたじけなし、此翁がかゝる樣をも許し給はゞ、如何ばかりの御望をも」といふに、「世の財寶は樣々に侍れど、金に越えたる財寶は侍らじ。我々かく遠き國に下りて、御見扱つかうまつらんと申すも、貧しければ望かなはず。何事

枯れて、白髪生ひまじり、丈は四尺あまりなるに、耳のみいと長く押したれて、唯狛の犬なせり。さは如何に化粧するとも、花木何に艶ひそめんや。犬神奥に行きてうちさゝやくに、伯母も花木も出來て、「殿のおはしたるに思知らで、御迎にも出でず、禮なき事」などいへば、俊雄は頭を席にひしと突きてうなづき、「先づ彼方へおはせよ、是はいと畏し、先づ彼方へ〳〵」といふを、人置をかしがりて、「是は何故ぞ。御仕人にて候。唯今證文も書定めてさむらふに」といへども、唯ほと〳〵として、いと黒き顔の上を丹塗にうちはきたるばかりに打赧め、あるは光出でなどするに、汗はひたなぎに搔なぎ、二人が手をとり誘ふをば、命の極と苦しくしたり。さて正目には向ひ居難ければ、ゐざり出で、地の上に造りかけたる簀子の侍る上に、庭なる山に向ひ居て、「梅こそ盛なれ、いとよき花」とぞ稱へ居りける。伯母近くよりて、「今參りのものは年まだ若く、何事もうひうひしく侍るに、東國の風俗も知らざれば、御心隔てず打懲して使ひ給はれかし」といふに、「をいな〳〵」と應へて、少しも見向かず。人置は頭を搔きありきて、「酒ひとつ」

る事とて、手の大指に墨をぬりて押させ、さてその事もはつるに、まづ食の設せんとて、眞魚屋には魚をもとめ、菜屋には菜をもとめ、酒屋には酒をもとめ、宍人を呼びたてゝ、夕食いと淸らにとり調へて、まづ少女だちに參らせつゝ、おのれらは酒うち飲みて、日の暮るゝを待つに、人置の下女に案内させて、俊雄入來るに、「長君々々、いと遲し」といひ立つれば、「けさう人は夜に紛れて」などいひにほやぎて、「はや參りてか」といふに、「先より參り給ひて、待侘びたまへり」と聞ゆるに、「少し覗かんや」とて、物の隱によりてつく〳〵と見居りて、ひそ〳〵と歩み歸り、二人を招きて、「是は人にはあらじ、唯物の化けたるなりとぞ思ふ。かゝりと知らば我よく化粧し、衣なども薫こめて參らんに、彼山の神の何處へとていたくあれ給ふに、拔足をして内を出でつれば、唯かゝる樣なり。櫛やもたらぬか、元結の亂れたる。洗頭槽や無き、顏のいと黑みたるを」とて、俄かにかい繕へど、元より此男の樣は面いと短く、頭打ひらき、眼のしりうちたれたるに、鼻の上はいとひきく、二つの穴は空ざまにあきて、口は髭にうち埋れ、髮は古草の如く打

二ッに、御家の風は、承る如く何事も背き奉らじ。
三ッに、天が下の御掟にたがひ侍らず、よく守らせ奉るべし。
四ッに、たとへ如何さまの横事出來ぬとも、我々出でて主を苦め奉らじ。
五ッに、一年に賜ふ料とて金三枚を賜はるうちを、此度金二角受取り奉る。此年のさきも御緣はべりて召使はれば、すなはち此定を以て賜ふべきなり。此後の事あらん時のために、此證文條のごとし。

天平勝寶二年二月二日

韓臼の犬神
人置の眞䱇

弓屋俊雄どのへ

と少しも女びず、男手を墨黑く書いつけて出せば、人置讀終り、「是は男の物書などいふは、いかばかりか劣れる。此手もて女子集めて、手習の大人を業とし給へ」などいひ稱へ、懐の袋より印ひとつ取出でて押せば、犬神は、「さる物も持たず」といふに、こはあ

て立つに、眞鯆呆れて、「さは我計足らず、是なる犬神も御怒を受けて、重ねては米も踏ませ給ふまじきに、よき業の門を失ひたらん苦しかるべし。犬神何故にものいはぬぞ、おのれが俊雄を唆し奉りたるにあらずや。今となりてなど默止るぞ」といへば、犬神聞きて、「我は唯都少女の色好き事をこそ申したれ、妾などの事は契り申さず。又此家等の事につきては、汝多くの金を致したるならずや。さるよき事したれば、其方こそはいかばかりにも計らひ給ふべき事なれ」とて、更にも立合はずあるに、人置頭を掻き、眉を集めて、「さるにても今夜俊雄の來んとのたまひこしつるに、さる事終てではことわりも聞え難し、いかにせん／＼。よし／＼まづ證文の上は御仕人と書かせたまへ。その上の事はいかばかりにも計らひ侍らんに」といふに、伯母の刀自、「さらばそこより申したまへ」とて、いふがまに／＼書いつけたる證文に曰く、

一ッに、此仕人花木の事は、大和國添下郡奈良の都のものなり。此度御家に仕人となりて、御身扱仕うまつりぬ。

落居る云々—きめる事はきめて置かん

にこそとは—「にとこそは」とあるべき所なり

その上に印を加へん」といふ。犬神聞きて「いと易き事には侍れど、我は文字を知らず、唯今とて書認めん事はえせじ。よし〳〵此伯母子はよく男手書きたまふに、爰に頼みて書認めて、先づ落居る事は落居ん。人置の先生硯おこし給へ」といへば、「をい」と應へて玉を磨出したる箱の、墨いと薫りて細やかなるを、荒けく磨延べて、「伯母子爰へ」と招きて、「奉公人の證文を書いたまへ、是は世の常あるべき樣の事にて侍れば、文言は我より申さん、夫にて書きたまへ」とて、陸奥紙のいと白きを持て出でて、「さて申すべし」とて、何々一條一つに此妾の事といひ出せば、伯母筆をとゞめて、「彼子は御仕人にこそとは申したれ妾と申す御契約は仕らず」といふに、「さは」とて、「かゝる家を求め多くの道具を調へしは、隱妻とあるによりての設けなり。妾にあらでは我々事の行たらはざるにて、俊雄の怒に逢ひはべる事なり。なにゝもあれ妾と書きたまへ」といふ。伯母の刀自聞きて、「さらば、彼子もさる心にも侍らず、自らも亦さる事にてはさし添ひ難し。その上にも妾とあらば、かくては差置きがたし。さらば花木よ、爰を退出ん」と申し

ていればは云々ーと云へばさうもいはれさうなる事かな

そ」とて、石立てくはへたる荒磯に造り出せる殿の侍るに据ゑおきて見れば、先に我家の怪しきに据ゑて逢ひつるよりは、いや優りに優りて、面ざしのいと貴く、あてなるものいひ、立振舞へるまでも、いかなる大宮の皇女と申さんにも、又此上はおはさじと見るに、彼伯母といへるも、なみ〳〵の人にあらず、貴く生れ出でたる樣の侍るに、さるかたにはよく馴れたる人置なれば、犬神を一間に招きて、「此少女平人にはあらず、そこには都より知りつる人ぞ、しかも從弟のはしなりといひしが、そこも確踏みてあらん人とも覺えねど、今此御人ざまの位をもていはゞ、彼少女は神の御末なり、腹惡しくなし給ひそ。伯母子と其方はその御仕人の類ならん、ていればさいふべくもあるかな。さて此所の神は神田部止伎與と申給ふが、物がたくおはするにより、我々が業の上にても、人の身の程、又生れし所、聞きに聞きつくして、さて奉公人のために我も印を押し、事あらば承らんといふ事を認むるなり。彼少女は今日なんすゞろにおはしたるに、誰をか頼み所とせん。其方も都の人にて、少女が家も知り給ふとあるに、證文一通認めて出し給へ。おのれ又

まぐはせ―目くばせして

ど、と見かう見てさすがにえいはず、「今暫しのほど、御徒然に堪へさせ給へ。何事も申聞え奉り置きぬる通なり。さてみづから參る所は、何處なるかは知らねど、此あたりと承りぬるに、伯母の刀自もて竊かに聞え奉らん。さは歸らせたまへ。今まで暫しの御隔も仕うまつらざりしに、今夜いかに淋しくおはさん」といひつゝ泣く樣を見て、頭は笠ながら打傾きて、鼻などうちかみ、「何事もよく心得てあるぞ」と聞えをはり、伯母をば其處に置きて、しほ〳〵に泣亂れて歸り給ふ樣を、花木はつら〳〵と見送り參らせて、伯母がまぐはせ袖引きなどするに、是も鼻うちかみて、「さて待居し人にも逢ひぬ。申す事も果てたれば、今はその家に參らん」と聞ゆるに、下女は先に立ちてしるべしける。

第二十條　弓屋の俊雄人置の眞鮪訟す并高橋手力二王を救ふ

人置の眞鮪韓臼犬神、先に參りて侍るに、案内の下女花木伴ひて參りつるに、「よくこ

あともひて―引連れて

侍り。又伯母の刀自も、その人と伴ひて、爰を敎置きて侍るに來り給はん。まづ先に參り給へ」といふに、「さらば、その人に逢ひて事はてば、下女どもに案内させて、伯母子も共にその家へ移り給へ。物荷はする事などのあらば、下男もそこにさむらふに」などいひちらし、「さて忘れつ、弓屋の内君は今參りをや待給はん。それ先に來給ひし鳩が谷の鳩女と毛の國の駒女と、此二人は内君の思人なり、はや〳〵參り給へ。飯代は錢二百置きて行かせ。そこにおはす頰赤腰白もつきて御目見申させ」など、落なくいひおきて、犬神をあともひて立出でぬ。暫しあるに、笠深く著たる若人の、いと高貴なるが、袴もきず、面ざしより始めて品樣のいとたかきに、裝束は立ちおくれたるのみか、世の中いと馴れぬ人の、彼伯母刀自が、年のほど四十歲ばかりにて、是もいと高貴なるが伴ひて、「人置の眞鮹とふ人はこれにて侍るか」といひて、太刀も拔きおかずつと入れば、花木走出でて、「待參らせしに」といらへて、手を取りてしるべし、上座に誘ひ、伯母の刀自にも打答へなどして、彼今參りどもが立ちみちたるに、云ひたけなる事もあるめれ

あとらへ—誂へ、委託し

か調ひたり。今ゆ其方と其家に行きて、塵かき拂ひ、疊どもも敷きかまへん」といへば、眞餔うち笑ひて、「その家はな、掻拂はんにも塵ひとつだも侍らず、漸々昨日か一昨日か、富人の立退きたる家なり。その住める人は、文石の何蜘とかいひつるやうに覺えし。いと忌々しく賑ひて、人などもあまた召使ひ、此わたりの守も及び給はぬ住居なりしが、俄に事もなく立退き給ひ、家は我にあとらへおきて、いかなる人をも住ませと、申置きて出でたまひし。双六にがないたく打負けたまひつらん。さるほどに家のいみじき、道具のきら〳〵しき、疊の新しき、庭の樣の面白き、たとしへなき家の樣なり。さて此金はさる家求めたり、さる道具もとめたり　さる庭の木草もとめて植ゑつ、石など求めて据ゑつと欺き、家は我家なれば、まづ此金は百枚を我いたさん、のこれる十枚あまりは、汝が使したる褒美にやらん」といひつゝ取分けつ。犬神なま〳〵に聞取りて、十枚の金はとりつ。さて花木に對ひ、「かゝる幸侍り、伯母子も爰へといはんに、所は何方ぞ、人を遣らん」といへば、花木聞きて、「さは願へるまゝにて侍る、今暫し爰にて待つ人の

うちはれて—見晴しよく

侍らず、又處の掟などはゆめも知らず。眞舗よくものしたまへ」とて、うち蹈み居たり。眞舗これを聞きてうち喜び、「是はいとよし、近からぬ所といはゞ何方かよけん、葛飾の眞間のあたりはいと遠し、玉河の邊も亦遠し、さるは此わたりにせん。いかにとなれば、よき家の侍り、かゝる事は近きもよからず、遠きも亦よからぬものを、よきほどのあたりなるに、庭は水せき入れて、高樓めく所などもうちはれて侍るに、爰に定め侍らん間、其方には今一度弓屋におはせ」さて、「家は求めつ、何くれと調へたつべき物も侍るに、金をまづ百枚ばかり、此犬神に越したまへ」といふよしを、短く書附けて出せば、犬神懐にして弓屋に行き、小娘の、事辨へぬがあるに、「竊に」とて、俊雄が許へつかはし、我は碓屋に入りて待てば、俊雄は園のべの花など見る樣にしなして、庭の荒石を遶りて碓屋に來り、「いとよし〳〵、その家に定めよ。その少女をも据ゑおき、伯母をも附置け。おのれは今宵參らん」とて、金百枚まりを取出でて、「是もて參れ、その外にも調へ立てん器物どもは、何にまれ密にいへ」とて入る。さて人置のもとに歸りて、「しかじ

けはひ―様子、すがた

まはで、犬神々々とのたまひ喚ひて、我をばうるはしき友と思せり。今朝なん臼屋に米蹈みて侍るを、俊雄おはして、「我妹が嫉妬には爲方なし、かく富みて侍るに、物の足らはぬ事はあらねど、唯是ひとつの禍にかゝりて、朝夕醜女どもに立ちふるまはれ、穢き色を見、臭き香をふるゝは、貧しき人の、よき少女をほしきまゝに得給ふには、はるかに劣りたり」と詫び給ふを聞きて、おのれいと易く承引きぬ。「さる内君の嫉みたまふに、いかで御家のうちには仕うまつらん。近からぬわたりに家を求め、此花木に伯母をつけて、隱妻としたまひおかんに、誰か知らん、その御計ひは人置の眞餔と申合せて聞え參らせん。さるにても少女をかいま見たまはでは」といへば、俊雄聞かして、「たとへその女のけはひは、百いふ事を唯一つにして聞き得んも、我あたり立ちふるまふ女には優りぬべし。ことに都の少女と聞けば、かいま見もせじ窺ひもせじ。はやさる筋を眞餔と計らへ。金はいかばかりをも取出でて、此事頓にはたすべし。けふは碓屋に居な、早く行け」などのたまふに參れり。おのれも近きころ京より下りてあれば、さる家もとめん術も

米をふめば—踏臼にて米をつく也

く、人に問ひて侍れば、さる望ならば、人置の眞鍋と尋ねて賴み給へと申すに參れり」といふに、亭主頭をかきて、「俊雄たゞ一目見たまはゞ、いかばかりの祿なりともかゝる新參りはとのたまふべけれど、これ見たまへ、爰の頰赤の腰臼さへ、すこし顏色の白きに、調ひかねしと思ひて侍るに、そこをまゐらせば、唯一時に內君の手にかけて、髮をひき拗られ、顏はかき裂かれ、手脚はうちなやされ給はん。されど、さる都の人の思ひかけ給ふ事なり、又俊雄をも垣間見に見させて、千年の命を引延べて參らせんとも思ふに、先づ爰に入りおはせ」といへば、「いかばかりにも賴み參らする」とて、奧の方に入居たり。さてあるに韓臼の犬神つと入來て、「亭主おはせるか」といひてさし覗き、「是は花木もこゝにか」といへば、「さいつ頃より參りて」といふに、犬神亭主にむかひて、「此少女は、おのれ都に侍りし時より、よく知れる人なり。いひもて行けば從弟のはしにもさむらふが、これの伯母子と連れて、此程下りて侍るに、何方へも御奉公にと申す、おのれ知り給ふごとく、日ごとに弓屋に入居て多くの米をふめば、折々は主のおはして、都の物語など申す程に、韓臼とものた

岩長姫—大山祇神の女にて木花開耶姫の姉

皮艶やかにうち重なりて、鼻のかゝり清く、脣の紅なる、髪のいと黒く長き、面の白くきら〳〵しきより、手脚の細やぎて艶深きに、姿の前後とゝのひたるを、白き赤き下重して、上には藤の花色に染めたるから衣、唐織の錦の帯をふさに結びたれて、歩入るに、唯あたりなる女どもは、雪のうへの山鴉よりもいと黒く、初花にならべる枳殼のはりよりもいと怖ろし。主人打見て、「かほどの今參多き中に、かばかり調はざる女もあらじ。髪のめでたき、顔の美しき、姿の細やかなる、詞の艶かなる、世の中にしては下照姫なり、弓屋にしては岩長姫なり。さて又そこの物宣ふを聞くに、都の人な。かゝる東國へは何しに下り給へる。さるさまの人は、何處の守だちもほしがり給ふに、何方へも參らせん。さて名は何とか」と問へば、「花木と申しさむらふ」「さて歳は」と問へば、「今年十八にて」といふ。「京はいづこの人ぞ」「都は狙澤の池の南に、年久しく住みてさむらふが、さる事の侍りて、わなみの伯母なる人に連れて、遙けき道をくれ〴〵と下りさむらふ。承及びつる長のおはすに、弓屋の何とやらん承りたる方へ、今參にまるりた

へ文字—八の字眉が生え延びて兩方より相接したる也

尻のかたにさし出でたれば、後は腰の上に棚をひき渡したる姿なり。裙も亦短くて、脚はいと赤きが、先をば内のかたに踏曲げて、沓などぬぎおきたるは、八文字を見るばかりなるに、眞鮪打見て、「よき女こそあれ、よく調ひて侍るは、何處よりはひ出でたるぞ」と問へば、口をばいとちひさくあきて、聲は唯咽の底より響出で、「我なみは此國にて、鳩が谷と申す里より參りつ」といふ。あるじ聞きて、「よし〳〵新參に參り給ふ所あり、人添へて參らせん」といふ。又次に來るは、眉はへ文字にはえ埋れて、額の隈いとすくなく、鼻はおしたれてうち平み、頤はいと長く尖りたるに、姿はあまりなればいはず。あるじうち見て、「是も亦調ひつ、弓屋の内君はいかに愛でたまはん。何處の人ぞ」と問へば、「毛野の國駒田にて侍る」と申す。さてその次に來つるは、色のいと白きに、鼻の右左は紅粉引きたらんさまなるに、腰は立臼の圍あるを、さすがに見せじとて、帶いと廣くうち廣げて結ひ居りたり。あるじ見て、「是は少し調はざる所あり、色の白きが白珠の疵なり」とて受けず。又次に來るは、歳のほど十七八と見えて、眉いと細く、眼

とふ―といふ

き妻のしわざなりと、人みないひながしけるほどに、奉公人肝煎るものども、俊雄が家に仕はすほどの新參は、世の中の男に打飽かれたる女のみを選立てて、さる時となれば、その家にのみ押立ててつかはしける。正月も過ぎて二月の二日といふには、是等の國は召仕どもをさしかへ侍るに、さる醜女どもも、とかくに妻の嫉妬に怖ぢて、是等さへ差替らんといふに、そのわたりに奉公人肝煎る屋の侍るが、その名を人置の眞鮪といふ。よく肥えたる人なるが、家の表には札をかけて、「給仕人承引所人置の眞鮪」としるしたり。時にもなり侍るに、彼方を此方へ差替るも侍り、又奉公の年季終て、親里に歸るも侍り、新參とてまうで來るも侍りて、二月二日三日になれば、眞鮪が家はたゞ女島とふ島のさまに、女ども入込みて、おのがじしいひさわぎ、あるじが妻子は所狭く侍るに、竈のまへに下り居て、彼方此方へと物し騷ぐに、彼弓屋へつかはさん醜女どもを擇りたつるに、いと可笑しくも騷がしくもあるかな。さて今參とて來りし一人は、かしらいと細く、髮は短く、咽はふくらかにて、胸のいと高くさしはりたるに、腹はうちこけて、

本朝水滸傳

卷之十

第十九條　人置の眞鮪韓臼の犬神金を分つ幷弓屋の俊雄隱妻を迎ふ

武藏の國豐島郡、大江戶なる神田のあたりに、弓を削りて業とするものあり、名を弓屋の俊雄といふ。さるは、その削る弓工どもをいと多く召抱へて、大なる長屋に住ませ、年には千萬の弓を造りて、國々の守に賣りあがなふほどに、家は富榮えて、類なき長なりける。さるほどに、おのれは業の事はしらず、唯人とまじらひて、酒のみし歌をうたひ、月花を愛でて、遊び居る事のみを事としけり。妻はいと嫉妬深くて、妾さまのものと見れば、いたく罰懲すほどに、顏よき女は、此家に參りて使はるべしと思ふはなし。さるより邊をたち振舞する女どもは、唯醜女のみを選集めてけり。かゝる事は彼嫉妬深

るに、祁王もうちにぎびて思しめしける。

そこばく―數多き意

思ひ戀ひし娘の、さながら老いなみたれど、白猪が妻はそれなりけるに、「こはそゞろなり、ゆくりなし」などいひて、物語まづ他事なし。白猪もいと怪しきまで、その緣を思ひつゞけて、事おほく言出づべく思へど、まづ清麻呂のおはしますに、とりなし、禮厚く聞え奉り、人々をも迎入れぬ。これらの物語はいふさへもあまり、書付けんはなほそこばくならんに事そぎぬ。祖王清麻呂に御目を賜はり、彼が忠誠なる志を感愛給ひ、なほ金麻呂親子が志を稱へたまひ、并に大太刀武雄武荒も大まへに召出させて、その志の直なるをめでおぼし、又勳功の武きを稱へたまふに、巨勢獵野とも知らず過りて殺したるを、武雄兄弟悔いて申す。祖王つら／＼に聞終らせ給ひ、まづ暫しの休息を許したまひ、白猪の老夫計らひきこえ、「清麻呂妻子并に金麻呂は爰にあらして、大君の御慰を申させたまへ。武雄兄弟金石大太刀の輩は、尾張三河遠江駿河甲斐伊豆のわたりにさむらはせて、人の志を合せたまへ」とて、その月十まり七日、各印を賜はりて山を下りぬ。さても冬枯れし奥山に、さむらはす人は姫のみなりしを、今はかく都人の入り集ひませ

かへりまうし 報賽

さがし 險し

人々の手向の歌、又道行ぶりによみ云づるもおほかめれど、爰にのせず。さて夜にもなれば、むかし御墓づかへとて此處に殿造りて侍りし、波多の金森の子孫の、今は祝部にて、此處にさだかに住居しけるがもとに、宿を乞ひてその夜を明し、曉またかへりまうしして菰野をすぎ、それより美濃の國玉倉部にいたり、此尊御脚ひたしたまひつる淸水の、今も猶いと淸くてあるを、殊更思出づる事のあるに、

蘆芽のあしなへし我ぞむかししぬばゆ

と詠みて、涙を拭ひ、遙かに宇佐の御方をさへ伏拜みつゝ、日も高くさしのぼるに、口足さきに立ちて、「近き方はいとさがしけれど、早く伴ひ參らせたくおもふ」とて、しもと押分くる道を行きて、伊吹山に登るに、此所もぞ雪寒く降りしけり。武雄兄弟君達を負ひ、大太刀淸麻呂を助け奉り、金石父を負ひまゐらせ、口足はこの山道の御案內して、霜降月の中の一日、白猪老夫の大城に著く。口足先に參りてかくと申せば、祖王も聞しめして、いと〳〵めでたくおぼしめされ、白猪も妻も出迎ひたるに、金麻呂日比

命完けん人は云云ー古事記に「命の完けん人はたたみこも平群の山の熊がしはをうずにさせその子」

とき、此處にて御病の烈しくおはしますに、天下の民くさをおぼし、命完けん人は平群の山の熊檮が葉を髻華にさせと詠ませ給へり。此平群の山といふは、大和の國なれども、此御歌によりてや、此尊崩御の後、おのづから陵のへに熊檮にはかに生ひ出でて、百枝忽ちにさし廣ごりしと昔よりいひ傳へし。さればぞその檮の葉は、彼の平群の山なるにかはらず」と聞くに、人々小枝の杪を折取り髻髪にさす。清麻呂の卿又いはく、「此尊は明の宮の天皇の祖父の御神にておはしませば、是といひ彼といひ、直に御前をわたらんや。我此陵に手向して、願ひ思ふ事を、祈り奉らん、人々も祈りたまへ」とて、おのおの陵にまうで、旅の事なれば、大野の原の松が枝を折りて、とりあへぬ幣奉りて、

手にまける珠松が枝の手向ぐさ幾代までにか年の經ぬらん

また妻の刀自は、「はしきやし我家の方ゆ雲ゐ立來も」と、國しぬびませる御歌を思出でて、

此處にして家やもいづこ白雲の棚引く山を越えて來にけり

き虚言を申させ給へる」とて呆れ居たり。さて手節の崎なる宿をさして、人々伴ひつゝ行くに、金石がいはく、「巨勢長谷は道より御暇を乞ひて荒坂に參り、巨勢獵野がなきあとをかくし、さる事を妻子にも告げて祭の事どもいたしはてなば、追ひて伊吹山に參り來んと申す。さて眞熊野の道にかゝりて、山道をしのばせ奉らんと思へるに、その日雪いと寒く降來、雲いと深くさへぎりたるに、山道の行くさき物憂くし給はんと覺えしにより、又荒坂の津のあたりに漁する浦方に行きて、此浦船を賴み、かく渡りつきて侍ることも、まさに皇大神の御祥なりけり」とて、語りもて行くに、旅の宿近くなれば、清麻呂金麻呂迎へ出でて、泣きみ笑ひみうちきほひて、その夜はその宿に來し方を語り明し、夜明けもて行くに、「かく憂世を忍ぶ旅行には、誠に船こそよかめれ」とて、直に手節の崎を乘り出し、船を阿漕が浦に追ふに、風進み汐叶ひて、唯一時に追ひつけば、人々岸にのぼり輿に忍ばせ、馬に乘りなどして、五里ばかりの道をとく行き、さて能保野の原に至れば、清麿呂人々に告りて曰く、「此野はむかし倭建尊、東の國より歸りのぼらせ給ふ

いひざまーいふなり、いふや否や

の外は船もあらぬに、いと嬉しく奇しく思ひて、とみに馳せより、楫取の翁に對ひて、「此船に人やおはす」と問へば、老父聞きて、「人は一人もおはさず、荒坂の津より乾魚を積みて遠江の海に下るなるが、汐風心に任せず、爰によりて侍る」といふ。口足近くよりて、「老夫な隱し給ひそ、我敵すべきものにあらず。老夫の乘せまゐらせし人々を救ひ奉るものなり」といひざま、つとよりて篷をあけて船のうちを見れば、まづ金石ぞ乘りゐたる。大太刀も乘居たるに、「これは口足にておはすか」とて、先づ船よりあがり、唯「よき夢を見つる」とのみなり。金石大太刀あらましを語り、武雄武荒の兄弟を呼び出でて、「彼方は押勝君の御家人にて、假に梟彦とは名告り給へど、御名は道首口足にて在せり。」「さは淸麻呂の卿、親なる金麻呂も將て在さん」などいふに、口足昨日の夜の神祥を語り、さて、「淸麻呂卿の御妻子は」と問へば、船の中にてとく聞給ふに、いと嬉しみと這出でたまひ、「はや〳〵逢ひ奉らん」とあるに、口足唯神祥のあやしきを恐み、人々も濱邊にうちたふれて、神宮の方を拜み奉るに、楫取の老夫はことを知らねば、「此老夫によ

伊勢道にかゝり、鈴鹿の川を右に渡り、能保野を過ぎ薦野を過ぎ、玉倉部を越え行かんと、方に立ち、大道を往けば人知るべしと思ひ、道を眞熊野の奥にさし、志摩に出でて、口足旅行をはかりけるにより、先づ眞熊野をも事なく過ぎて、志摩國英虞の郡手節の崎に行きたらはしぬ。「爰は人しるまじき邊なれば、暫し息らはせ參らせん」とて、一日二日と泊り居るに、清麻呂が夢のうちに、天照皇大神あらはれたまひて、「汝達今一日此處に息らはゞ、二人ながら妻子に逢ふべし」と聞えたまひ、又口足が夢には、「汝此南の濱邊に出でて待つべし、明日の夕汐に泊てんずる船をよくもとめ得てよし」と、神告に告りつき給ふと思ひて覺めぬ。三人は一時に頭をあげて、天に仰ぎ地に伏して御祥をたふとみ奉り、日既に今日と明けゆくに、三人身を淨くし心を淸くし、御宮の方を立拜み伏拜みて、口足とく南の濱邊に出でて、さるべき船や泊てんと待つに、時つ風吹起りて、唯此陸をさして浪の來よるに、神祥爰に靈驗ありと思ひ、南の海邊に向ひて立つに、帆はいと小くて篷深く葺きたる船の、釣船ともあらぬが、直に追ひ來りて磯面による。そ

二王も隱れ給ひ、押勝も首を佐保川に梟けられたりと聞きて、いとかひなく口惜しかりし」といひて、覺えず淚を拭ひ給ふに、眞太刀近く寄りて、「暫し聞え奉りたき旨あり、御側の人を退け給へ」と申すに、守きこし得て、目を以て示し給へば、侍る人々みな退きぬ。守ときに眞太刀を寄せて久しくさゝやき聞え給ふことあり。その事は側に聞居ねば、何事にか知らず。さて、御饗終るに、眞太刀退出んとすれば、守、「暫し」と留め、金三百枚を取出させ、「此度の御祈に具へ奉る」とあるに、眞太刀少しもいなまで、その金を箱に收めさせ、供人をつどはせ、あるじぶりの禮を聞え終り、廣間をはひくだり、家人に禮をきこえ、馬に打乘りて白山をさして退出ぬ。

第十八條　淸麻呂金麻呂手節の崎にて妻子に逢ひて共に將て伊吹山に登る

紀伊の溫泉には、淸麻呂金麻呂をあやしき輿に乘せ參らせて、道首口足をよしくその後

聞きたまはんが、世の中いと騒がし。守はまづ道鏡の法皇をば如何にか思せる」守暫しして答へたまはく、「我にしてはいひ難し」眞太刀又問ひて曰く、「太宰府の阿曾麻呂は守如何に思せる」守頓に答へて曰く、「いと諂へり」眞太刀又問ひて曰く、「左大臣橘諸兄公は如何に」守こたへていはく、「是はたゞ時と老を知れり」眞太刀又問ひて曰く、「和氣眞人清麻呂はいかに」守こたへていはく、「いと忠誠なり」眞太刀聞きをはり、「いと畏けれど、鹽燒王は不破内親王を伴ひ給ひ、祖王は内舍人を將て、何處ともなく隱れたまふ。此二王はいかにと申さん」守聞きてこたへたまはく、「いと深くして思ひがたし、思ひ得るも亦云ひがたし」眞太刀又問ひて曰く、「藤原惠美押勝は如何なる人ぞ」家持うちうなづきていはく、「押勝は天下を思へる人なり、惜むべし〳〵。此朝臣天皇に奏しきこえ給ふ歌に、

　兒輩らよたわわざなせそ天地のかためし國ぞやまと島根は

ときこえあげ奉りて後、近江の高島に退きしとは聞きしが、天地の時いたらず侍るに、

なげ―無げ、おろそか

酒みづき―酒びたりになる、大に醉ふ

べき糧を多に贈り給ふ、難有きまでかたじけなき。下官御祈に仕うまつる役の者なれば、頓に參りてその禮を聞え奉る」と申すに、守きこして、「是は御禮に過ぎたり。天下の事と侍るを承りては、かく官にさむらふ我々、いかでなげには仕うまつらん。殊更我愛でし鷹を秦澄の敎によりて、容易く得て候へば、その禮又なからざらんや。いと遠き所をかく參り給ふに、御あるじつかうまつらん」と聞えて、杯は酒杯より始めて、八百杯にいたり、物は飯より始めて千盛に及びぬ。さて互に裝束をやつし、くさ〴〵の物語ども聞ゆるに及びて、眞太刀硯を乞ひて此守を稱へる歌をよむ。その歌に曰く、

　橘の下照る庭に殿たてて酒みづきます是れの君はも

「いとおろかに侍り」と出す。守いと嬉しがり聞えて、「おのれ生れながら歌を好み、政務の暇は是にかよれり、いで御答へ奉らん」とて、

　酒みづく君によりてぞ橘の下照る庭にけふはなりぬる

と詠ひあひて、互に心を和しあひけるときに、眞太刀守にいひて曰く、「つきなき事には

泰忌寸八千島主へ

と書いとゞめて出すに、八千島讀み終りて禮をなし、文を懐に入るゝにいたりて、藤見八千島にいつて曰く、「今度の御禮使を立てて酬い奉らんと、守大伴卿へ聞え上げさせ給へ」と申すに、八千島承りをはりて、役の民に馬牛を曳かせて歸りぬ。さて今般は四日ばかりを經て御館に歸り、守へしかぐ〵のよしを申しぬ。さて二日三日過ぐるに、何方ゆともなく、馬に乘り鉾を持たせ、先を拂へる供人、後をおさへたる供人、五十人ばかりを將て、身には裝束し、冠したる武士の、守の御館の門邊に詣で來て、馬より下り、案內を請ひて、禮正しく謂ひて曰く、「我白山の岩屋より來れり、此程の禮を聞え奉らん。守御目を賜はるべし」とあるに、御館の家人承りを申し、「先づ此方へ」と聞えて、廣間の上座にとり迎へ、供人らは長屋に息はせて、さて入りて守に申すに、守又裝束し冠し、出居に迎へて相見ゆ。武士禮正しくくし座をはひ下り、うなづきて申して曰く、「下官は白山の岩屋に侍る、和爾部眞太刀と申すものにて侍る。此度泰澄の御祈につきて、供養す

たりは、里人に問ひ聞えて、八千島まづ馬を馳せ登せて行けば、山半ばかり行き至らざるに、多くの民ども迎へ來り、そが中には二人三人袴に布肩衣をうちかけて、太刀佩けるも迎へ出でて、「岩屋の道はいと險しく、雪深く降積みて侍るに、御送の人を煩はし侍らんが無禮ことに候へば、我々爰にて承りたし。御贈の品を受取り奉り、是の民どもに負はせかへ侍らん」といひて、千人ばかりの民を出し、米を負はせかへ、豆を負はせかへ、鹽を負はせかへて、釜を具へ湯を沸し、酒を暖めてもりをはり、かの太刀佩けるが、懐より筆を取出て、一枚の證文を認む。その文に曰く、

泰澄法師天下の御祈仕うまつるにつきて、千人を供養すべき糧とし侍る、米の俵二千丸、豆の俵二百丸、鹽の俵十丸、白山の下にして是を負ひかへて受取り奉る。ていれば御祈の事足りぬ。卽ち泰澄が家人小松藤見、松任足日、承引き奉る旨ゆめ〲違はず。よつて印をしるしてしかいふ。

天平勝寶元年十月廿日　　白山泰澄

の葉を衣とし、草をあぢはへ、雲を道とし、山を家とす。さて我に別れ給はんとする時、天下の事は我はいはじと宣ひ聞え、みそらを渡りて去り給ひぬ。さはこの一言ぞ心あらん。又泰澄が諸兄の翁をもて頼み聞えつる旨は、百人の人に豆を負はせ、千疋の馬に米を負はせ、十頭の牛に鹽を負はせ、白山の窟に贈りやらへ、そをもて千人の人に供養へて民種の上を祈らんとなり。我是をうけひかずば、放てる鷹を返さじとのたまふ。我爰にして思へらく、鷹はよし思捨つべき物なり。しひては是を得まくせねど、民くさの御祈とあれば、我承引かざらんやと誓約ひて、その所をまかんでしなり。此事公に似て私なり、私にして默止もならず。汝達の御旨は如何に」とあるに、池主八千島共に聞きていへるは、「こはいかで默止もあらん。たとへ重ねて公の御咎ありとも、下官ら承引き奉らん」といひて、御藏をひらかせ、米を出し、豆を出し、鹽を出し、すなはち泰忌寸八千島に察させ、人に負はせ、馬に負はせ、牛に負はせて贈りやらふに、日に行き夜にいきたらはして、二日二夜の曉にいたりて、白山の麓に著きぬ。岩屋とおぼしきあ

本朝水滸傳

卷之九

第十七條　守大伴宿禰家持糧を白山に贈る并和爾部眞太刀家持の館に來る

泰澄法師の教に任せて、諸兄の翁に鷹を得給ひ、御館に歸りて思ひめぐらすに、怪しき人の有樣なりける、何にもあれ誓約ひつる旨は違へじと思し、俄に使を立てて召すに、掾大伴宿禰池主、大目秦忌寸八十島、裝束を整へて頓に來たるに、守大伴宿禰家持出居に迎へて告りて曰く、「今日なんしか〴〵の旨あり、白山の泰澄はこれ太子の御祈の師なりしが、京師を退きて白山に籠るといへども、天下の民のためには御祈仕つる旨あれど、狹き袖をば天下の蒼生に覆ひがたしと聞え、それ〴〵の事を我に賴みつるよしを、不意諸兄の翁に逢ひて、法師の望を詳しく聞きぬ。さて諸兄の翁は今は仙人となりおはし、木

し、此國の守必ず此亭に在さん、さるとき守に頼み參らすべきは、天下の民の上なり、米を千疋の馬に負はせ、鹽を十頭の牛に負はせ、豆を百人の人に負はせ、早く白山の岩屋に送り給へ、如何にとなれば、天下の祈のために、千人の法師を集はせたり、そはこれその供養する糧なりと申しきこえ、守もし承引給はずば、鷹をな返しそ、そのまゝに放ちやれ、と聞えおきて、何處ともなく罷出られしが、我泰澄が詞を忘れず、守に此事を傳へ參らす。此處ゆ御館に歸らせば、必ずしかしたまへ」と聞ゆるに、守はいと易く諾ひて、鷹を左にすゑかへしたれば、雲霧高く立登るに、翁いと輕げにうち乘りつゝ、「天下の事は我いはじ、翁は橘諸兄にてあるぞ、忌、人にな漏し給ひそ」と告りて、彌百重の尾上を踏みわたり、南をさして行くと見しに、家持くしき思をなして、馬を打早めて歸り給へり。

たくり—古へ絲を卷くに用ゐし具

さはに—多く

さとし—知り

たるに、髮は白金を打延べて、たくりにかけて組垂れたる如く、眉髯は面を隱し、眼の光は眉を照りわきて、金の如く輝ひたるに、守おもほえず頓首、「翁のすゑおはせるは下官が鷹なり、尾は八形にて、名は大黑と呼べり。此鷹巢よりもりおろして手馴らしぬ。今まで政務の暇あるときは、朝獵にすゑ、夕獵にすゑ、暫しも手より放たざりしに、けふなん不意比美の浦に鳥獵して、是なる太波禮麻呂が手よりあやまてるなり。さて如何にせんと思侘びて侍る所に、白山なる泰澄來りたまひ、かう／＼尋ね參れと敎へけるままに、供をも召連れず參れるにて候へ。翁その鷹を我に賜へ」と申すに、翁うなづき給ひて、「如何にも守の參りおはさんを待てり。さて易く此鷹を返し參らすべきが、翁が賴みきこえまゐらする事を、守承引きたまふべきや。まづ一言の御契約をうけたまはり、さてその上に如何にも返し參らすべし」とあれば、守は言さはに告らず、「かく參りたるが直々に誓約なり」と申せば、「しかあらば申すべし。翁かく深く隱れ居れるをさとし、白山の泰澄この曉此處に來り、我に告りていはく、今日なんかまへてかゝる事の出來べ

かづら—葛

こたれ—木垂れ

程遠し、此比美の江の淺瀬を渡り、岸に上りて田道を傳ひ、山にかゝらば、小道のあらんに、馬を馳せ登せて參り給へ。さてその仙人に逢ひ給はゞ、仙人必ず賴みまゐらする旨あらん、守必ずな默し給ひそ。畏けれど天下の蒼生の上なり、我袖はいとせまし、守の御袖におほひたまはゞ、必ず蒼生は安からん。何にまれ急ぎ給へ」と敎へて、鈴を西ざまに振鳴して過ぎぬ。守いと嬉しく思して、泥障を卷き、手綱をゆるめ、比美の入江をうち渡し、岸に上り田道を過ぎ、山にかゝりて小道を登るに、遶り登る道のくまを行きつくして、峰のへを越ゆれば、彼いひ敎へつる向峰の侍るに、雲の浮橋もがなと思ひなれど、谷深ければせんすべなく、又下り又登れば、岩垣うち重なる道のあるに、今は馬より下りて、枯れたる蔦のかづらをとり、伏したる小笹の枝にすがりて、太波禮麻呂に後方をおさせて、辛うじて這ひ登り給へば、かの泰澄の敎へたるにやあらん、一株の松のこたれたる陰に、一つの亭の侍るうちに、身には木の葉をうち重ね著て、さすがに鷹は右手にすゑて、左の手には朮の花を持てり。さて近くよりて見れば、頭はうち顯し

たじろかず—後退もせず

かゝり—斯くあり

ふに、御供仕うまつりける人とりぐ\に出でて、「守御氣色あしき時なり、怪し樣にて立來り給はゞ、必ず御怒を蒙り給はん。いかなる世捨人ぞ、名を告れ」と聞ゆるに、法師たじろかず近くゐよりて、「守は今大鷹を放ち給ひ、さこそ口惜しく思せるならめ。我その鷹の止まりて侍る處を知れり。守もしそを得まく思さば、我詞につきて尋ね行かせ、必ずその鷹に逢ひ給はん。かく申すは白山の道をひらける泰澄法師にてあるなり」と聞ゆるに、守馬より下りて禮儀正しくして、「是は大德にてますか、かくまのあたりに逢ひ奉りて、大德なる事を知らざりしは、是正に眼ありて白山を見ざるといはんに均し。彼鷹は我命にて候へ、とめ得ば何の幸か是に過ぎなん。大德早くその在所を教へ給へ」と聞ゆるに、「然らば申すべし、その鷹は二上山を越え、うしろの山方の松枝に止りしを、その山の仙人手にすゑて鷹の主を待つにてさむらへ。是を得て歸らんと思さば、御供は此わたりに止めたまひ、守一人鷹飼の太波禮麻呂を伴ひて、御馬を馳せて參り給へ。我能く知る旨ありてかゝりとは申せ。さておはす道は、松並植ゑし木陰の道は平かに侍れど.

さはに―數多く

とふ―といふ

たどき―てだて、方便

けるに、國の政務に暇あるときは、布施の海邊に立ちあさり、あるは立山の方に獸を獵り、あるは麻都太要の濱に鷹を放ち、又その暇は歌にかゝりて風流に心をなごし給へり。比美の入江も水草枯れて、濱風寒くなるまゝに、水鴨いとさはに集けりと聞きたまひて、守ますらをの伴を誘ひ、今日の比美の江に鳥狩せばやと、手放れよく馴れて遠もやすき、八形尾の大黑とふ鷹に、尾鈴とりつけてかいつくろひ、鷹飼の太波禮麻呂ぞ、馬に立添ひてとりすゑたり。さて多古の島邊にかゝりて、蘆鴨集きて侍るを見つゝ、太波禮麻呂蘆陰に立ちしぬびて、尾鈴も玲瓏に放ちやれば、水鴨は羽きりて飛び上るに、群れたる羽風にうち驚きてや、鷹は横ざまに飄り、風に向ひて空にあがり、二上山を飛越ゆると見しが、雲がくりつゝ翔り失せぬ。守馬を馳せて呼返したまへども歸らず。太波禮麻呂は天にあふぎて打招きても、爲ん術なければ、守は御心に火さへ燃えて、思ひ戀祈み給ひけれども、たどきを知らねば息つきあまり、今は物をさへ宣はで、馬を引返し給ふはしに、麻都太要の濱方ゆ、此方に向ひて、あやしき法師の立ち來つゝ、「暫し待たせ給へ」とい

なぞの―如何なる

風の音の―「ほのか」と云はんための序詞、風聞に聞きたりとの意

越と云々―越中守に任ぜられたるを云ふ

と難くしたまふべきに、おのれ唯今より越中國に參り、國の守大伴家持に逢ひて、その糧の事を物せんと思ふなり。早からば五日ばかり、久ならば十日ばかりのうちに、必ずその糧は送り參らん」と聞えて、靜かに山を下りておはしけるを、今參りの徒見おこしつゝ軍兵にむかひ、「彼はなぞの老人ぞ」といへば、「彼は卽ち此岩屋をひらける泰澄法師にて在せり」といふ。「さては泰澄なりける、此法師ぞ太子の御祈の師と承りて侍るが、天下の氣を考へ、必ずよからぬ人いで來なん事をさとし、暫く此白山の岩屋をひらきて、籠り在すとあるは、風の音の仄かにぞ聞きつる。いと貴き異人や」などいひあへり。さて岩屋の中は、弓を削り、箭を作り、太刀を磨ぎ、鉾を磨きて、さるべき時をぞ待居ける。

第十六條　大伴家持泰澄に逢ふ　幷家持が放てる鷹を諸兄するもちて返したまひ糧を白山に贈らしむ

守大伴宿彌家持卿は、大君の御言畏み、み雪降る越と名におへる中つ國をなん任けられ

くま―隅、餘地

髭雪なすおしたれ―雪のやうに白く垂れ

うけ沓―やぶれ沓

もとなや―心もとなきかな

息は朝霧の如くて、漸々と登りいたるに、洞を家としたるを、巖もて閉せる門方に著く。軍兵多く出でて禮儀をなして、大將を迎へ奉るに、かくばかりの人の居るべきくまもあらじと思ひて、追ひていたるものは門方に立てば、「皆此方へ」とあるにつきて入りぬ。さるは今此上に百千人を加ふるとも、こぞり居べしとも覺えざる洞の中なり。又洞の外の方には、大なる釜百口を備へて、粥を煮て人々にむかへたり。夜明けもて行くに、此上なる岩屋の中より、としは七十歳ばかりに見えて、髭髪雪なすおしたれ、面は節木なす枯びたるが、身には佛の衣を著、手には銅の鈴をふり、脚には黒きうけ沓をはきて、下り來りて二人の大將に告りて曰く、「軍兵すでに千人に越えぬ。軍はそれ天を賴まず地を賴まず、人を賴まず我を賴まずといへり。汝達千萬の軍兵を集むるは何ぞや。千人もし一人の心ならばよけん、千人もし千人の心ならばもとなや」と聞ゆるに、二人の大將聞得て、「よく試みてさむらへば、此上の勢は唯加はるに任すべし、しひて覓むべからず、と申合せて侍り」と申さす。老人聞きて、「かゝる山籠りにおはすれば、糧のことをしもい

いはひ―這ひ、いは發語

なして―如くにて

しもと―枝のしげき若き木立

本朝水滸傳

巻之八

第十五條　二人の大將軍軍兵と徒を將て白山の窟に籠る
井泰澄法師兵粮の事を謀る

神無月十日ばかりなりける、山の麓すらあるに、半あまり遶り登れば、林の木の葉のこりなく降落ちて、谷の八十隈はいたく氷こり、岡の彌千峰は雪高く敷きて、夜嵐寒く吹きおろすに、梢は枯れて鳥やどらず、松はたれて猪いはひ臥しぬ。行く〱岩根を踏みて、馬つまづけば、大將橘奈良麻呂馬より下り給ふに、和爾部眞太刀も同じく下りて、高坂に息つきなづみ、横山に佇み息ひて、後方を遙かに見下せば、軍兵五百人あまりに、又さる勢を加へたれば、唯大空にはひ登る龍の、雲の彌重むらにうごめくなして、左にめぐり右につらなり、山道の雪を踏みさけつゝ、捧ぐる鉾はしもと原の如く、うちあへぐ

麓ゆ—麓より

くの軍兵をなつけ得て侍り。さて汝達はかく召捕りたれば、命はこれなきものにあらずや。さらば今ゆ身を無きものとして、我願を助くべきや。我願私にあらず、唯天下の民を思ふなり。又さらずば眼前に首をとりて、此君の御軍を祝ひ奉らん。我徒答せよ」と、勢に乗りていへば、徒唯涙を落して、「おのれ等いと賤しといへど、天下の百姓なり。民を思さゞるは君としも思はず、民を撫で給ふは我君なり。道鏡政をとりて民をありとせず、その恨いづこにか酬いん。今日より君の軍兵なり」といひ終るに、奈良麻呂大に欣びたまひ眞太刀も、「恥み知りたる者共なり」と稱へ、「かゝる上は軍兵を將て此君籠り在す所あり、直に參れ」とて、奈良麻呂眞太刀馬に乗りて先に歩み、軍兵等後に立ち、ともがら又あひ加はり、白山の麓ゆ遶り登る。

かくろひ―隱れ

麻呂卿にておはせり。父君思す旨ありて一首の歌を殘し、此北國の山陰に隱れ在しまし、今の御名は井出諸兄、又の御名は枳殼麻呂と稱へ奉る。父君は君臣の禮を思し、君道鏡を愛でたまふは、是君の御心なり、臣老いずあらば、いかさまにも時を待ちて奏し聞え奉る旨も侍れど、現身の息のうちには、大御心を窺ひ奉りがたし、さはとて官位に侍りて、かゝる橫ざまごとを默止しあらんやと、唯何となく山に隱れ、今はたゞ雲霞にまじりて、藥を採食ひ水を飮みて、人の世の中を背向にして、庵にだにもおはしまさず。是はこれ御父の御心なり。又是なる奈良麻呂卿は、我は是正男なり、如何樣にも道鏡を退けて、天下の民を撫でんとのたまひ、御身をいたく窶し、此白山の山の邊にかくろはし、唯よき正男を得てんことを思す。我さる御人ともしらず、不意行合ひ奉りて、互に深き心を明し、卽ち此劍の里に栖を定め、月比心を碎きて千人に及ぶ徒を得たり。さて我名は、海邊堅は苟且に呼べる名なり、誠は惠美押勝が家人和爾部眞太刀なるぞ。晝は徒に劍術を教へ、夜は此山の邊にかくろひて、姿をかへ面をやつし、此卿と心を合せ奉り、多

も、志いたり心猛きものは、かの軍兵に縛りとらせん。いざ」とて、先生太刀を提げて行くに、物の陰より、「小松藤見候ふ」と名乘りて、一番に進みて打ちかゝるを、「心得つ」といひて、暫し打合ひつるが、太刀をすり落されて立惑ふ所を、伏せたる軍兵二人三人馳せ來り、捕縛り、口をふさぎて連れ行きぬ。次に足日と名乘りて驅向ふも、またさの如くして連れ行きぬ。さて、驅向ふものは一人も疵つけず捕縛りとり繫ぎ、先生疲れたる時は、後の男たちかはりてしかするほどに、三百餘人は捕へ得つると思ふに、纔に切殺したるは三人四人に過ぎず。さて殘れる徒はさすがに退かず、皆太刀を投捨て頭をうなだれ、手をつき尻を高くして、「我先生々々、大に誤を聞え奉る」と呼ぶ。時に後の軍兵を呼出でて、皆その太刀を乞取らせ、捕縛りたる人を引出させ、まづ左にあぐらをかゝせ、後の男を据ゑまゐらせ、我は側にさむらひて徒にいつて曰く、「各志はいたしたり、いと頼しきかな。さて左のあぐらに据ゑまゐらせつる人を、誰とかも知らじ。我徒に告分きて申すべし。これは左大臣橘諸兄公の御嫡子にておはす、御名は橘朝臣奈良

をやみて—小止みて

らん。いで此夜その所に立出でん」といひて、各退出けるに、その夜酉ばかり、薄雪ふりをやみて、月のいと寒くさし出でたるに、先生身には鐵衣を著、頭に甲の鉢を皮もて包める頭巾を著、手に手纏を隱したる布の手結し、脚絆をもしかして、皮の沓をはき、太刀を懸佩き、短き太刀をば帶に插し加へて、いひつる大野に立出でつゝ、山風吹當る大葉櫟の森の東の陰に立添ひつゝ居れば、藤見足日の二人を始めて、心々に裝ひ、おもひおもひの太刀を佩きて、此方ざまに立向ひ來。さて先生は何處にか立出で在すらんと思ひ窺ひて、とみにも進まず、しばし躊躇みて歩み來るに、後の山の邊より小道を下り來る人の、面を塗り黑き裝束して、長き太刀を懸佩きたる男の出來、聲を低くして、「我先生、さこそ待給はめ」といふ。先生顧みて、「今宵は如何にして遲く侍りし。今日なん我徒かゝる願を申立てしを、時こそ來たれと思ひて、豫て思ふ樣に申聞かせつ。かの軍兵どもは參り集へるか」といへば、今來つる男答へて、「後の森の陰に皆參り居れり」といふ。「よしさらば打合はん。志弱きものは眼前に斬殺すべし。又その術はいたらずと

たれたらば、いとかひなき先生なり、果敢なき先生なり、何ぞ先生といはん。これまで年月を上座に居て、人々の敬禮に遇ひつるは、是又欺けるなり。徒また五百人にもあれ、殘りなく我に斬殺されなば望足りなん。如何にとなれば、ともかくも彼盜人に奉れる命なれば、我手に死なんは足りなんといふなり。いで今夜白山の麓に出でて大野の原に我待つべし、人々來りて立合ひ給へ。もしさらずば此願は本心ならず、みだりに申出せるなり。又さるみだりなる事にあらば、何ぞ徒とせん。かく申放ちて候ふ上は、思返して何ぞ許べん。今より人々まかん出て、私によく馴して出合ひ給へ。我行きて彼處に待たん」といひて、つと立ち、長き太刀を拔き、「人々にも太刀を拔きはなち給へ」といひて、一人々々に向ひ、その鎬をうちあて、打鳴し終りて、いつて曰く、「是はこれ誓約なり、昔天照皇大神武須左能雄尊に逢ひ給ひて、劒と珠とをもて誓約給ふは、我御國の例なり。心得給へるや」といひ終りて入りぬ。徒大に思ふに違へど、「かゝるからは我々も武士なり、習ひ得たる先生の恩を仇をもて酬ひ奉らんは、かへりてこれ我先生の御心な

ひ、面を赤くし眉も眦もなほ高く昂げて、聲を張り出し、臂を張り起し、手は膝の上に置きならべ、身をそばだて、一座に打見やり、いたく訇りて曰く、「徒多くの月日を此場にあり通ひ、我教を受け、習を傳へ、術を習はし、氣を練り、手を馴し、我はと思ひ上り給ふべきが、徒の頭たる小松藤見、松任足日といへども、未だ我に勝つこと能はず。その次なるは猶此二人に勝つ事あたはず。さて愚者の事は我先づ早く聞けり。彼が人を切殺したる、その數我が耳に入るだも三百ばかりの人なり。かく數ふる我といへども、未だ生ける人は一人もはなち打たず。しかは愚者はよく生ける人を斬りて、その危き境を馴したり。我は今徒に申すごとく、唯木太刀を持ちて、さる心を馴したるのみなれば、いかで彼に勝たん。いはんや徒の人々におけるをや。かゝる願は、自ら手脚を縛りて猛虎を打殺さんといへるに等しく、石を抱きて深き淵の薄氷を渡り行かんといへるに同じ。危きかな、危きかも。さるにても思ひ得ずば、彼愚物に立抗ひて、二つなき命を失はんより、今夜我大野に行きて此願申出づる徒を集め、眞劍をもて太刀撃せん。我もし徒に打

山ゆ、海ゆ—山より海よりの義に用ひたる也

ば徒の頭たるにより、まづ藤見が文を讀みて、その次も皆その故を知るべし」とて、その文を開く。その文にいはく、

やつがれ藤見小松恐惶謹みて申す。先生の恩の山ゆ高く海ゆ深き、今爰にあらためて申さんや。やつがれ承らく、「白山の西の山邊に、醜の盜人さはに住み居て、往來の人を切殺し、財寶を奪ひ、衣裳を剝ぎ、又然らざれば連行きて、おのれが徒黨に加へて召仕ふ」といへり。又「その盜人の張本ありて、劍術人に優れ、是に逢ひて立會ふもの、勝つ事更に叶はず」といへり。やつがれ等先生の敎を蒙りてより、身に鐵の楯を竝べ、心を堅磐の窟に置き、夜行くも晝行くがごとく、晝行くは猶虎に乘れるが如く、かゝる心を備へ、かゝる身の術をもて、さるえせものが擅にするを、耳に聞流してんや。先生許し給はゞ、僕參りて打殺し、往來の人を安くし、その邊の村里を穩めまくほりす。其御許を願ひ奉る旨は是なり。

と書きとゞむ。先生讀終り、又其次なる松任足日が願文を讀むも又同じ。先生徒弟に對

ひゞらき―得々と身振ひして、源氏物語に「居の頭ものさだめの博士になりてひゞらき居たり」とある例也、原本ひゝらぎとあれど、そは噪る義にてこゝろに當らず

に打振り、電光の如く閃かし、綱の如くに振かへし、雨の如くに打掛け、雲の如くに遮らし、風の如くに打鳴して曰く、「是は又守を破り敵を追ひ、備を崩し前後を防ぎ、左右を防ぐ、天下獨往といふ術の上の極なり。是等を習はし得て、始めて、太刀は斬るべきものにあらず、身を守るべきものなり、といふ事を覺す」といひ終り、汗をうち拭ひ、扇を飄かし、袴の前を撮み出し、上座に著きてひゞらき居たり。徒聞終り習はしをはりて、禮を正し列を整へ、わが先生に謂ひていはく、「やつがれ等、先生に對ひていと畏けれど、願ひ奉る旨ありて、一條の願文を書認め、各懐に仕りて參れり」と先づ小松藤見、松任足日などが恭しくもて出づるにつきて、その徒五百人ばかり、各懐に願文を差入れて、出でては先生の前に差置き、出でては又差竝ぶる程に、その文眼前に堆くなりぬ。先生眉を揚げ眸を揚げ、面を靜に回らして徒に對ひていはく、「これは何事とも覺えず。されどかく一時に物したまふからは、事は同じ旨ならん」などいへば、徒一時に蹲りて、「先生の宣ふごとく、願の旨別異にあらず、各申しあはせて候」といふ。先生聞き得て、「さら

身を守り敵を防ぐべき物なり。たとへ默止しがたく人を斬るも、唯其本を切つて末を切らず。本を切るときはその人を生捕へて、事を正し命を助けて、我死を免る、是その身を守るに當るなり。さる心を得るが教なり、その業を得るは習はしなり、その本末を辨ふるが傳なり。爰をよく學び得たまへ」とて、先生自ら木太刀をとり、頭より高く振上げていはく、「是太刀は人を斬る太刀なり、身を守る太刀にあらず。徒よく習ひ得よ」といひ終り、又太刀を直にさしのべ、身をひとへにし、脚を集めて立ちていはく、「是はこれ身を守る太刀なり。かくさし延べたる太刀の名を青岩といふ。たとへば青岩の堅きを前に支へて立つが如し。人これを窺ひ難く、又碎きがたし、爰を以てしか名付けたり。扨又その本を切りてその末を切らざれとは、本は何ぞ、凡そ太刀を握りての上は、唯是五つの指ぞ本なる、仍てその指を切落す、これをその本を切るといふ。」又その指を切落すも、一度に五つの指を切落すとな覺しそ。五度太刀を振りて、五度にその五つの指を切落すなり。又十太刀振らば十の指をなん切落すと思せ」といひ終り、又長き太刀を左右

まさきく―壯健に
あともひ―伴ひ

て人々の御物語は、山道に休らひてうけたまはらん、先づ急ぎて熊野道へ」といへば、宿禰柄知き筆をとり出で、懐紙に書きつけて、金石に與へていはく、「かく確なる御後見の侍るに、今は心安し。おのれは天下の御爲に、公役をうけたまはり居れば、これより直に土佐の國へ罷り下らん。兄弟二人に金石を加へて、君達の御供を申さすよしを、此文に書認めぬ。これを懐にして伊吹山を指して急ぎ給へ。まさきくあらば逢ひ奉らん」と、互に袖を振りあひて別れんとする時、明日香大太刀巨勢長谷、山の小道をたどり來るに、金石行逢ひて、「事はよしゆくゆく語らん、いざ山道に」と、あともひ入りぬ。

第十四條　海邊鰹劍術を敎ふ幷奈良麻呂を立てて大將とし徒を集へて白山に登る

越の國白山の麓劍の里に、劍術を敎へて海邊鰹と稱へらるゝ先生あり。其徒學せんと入集ひてあるに、先生その場に立ちて敎へていはく、「太刀はそれ人を伐る物にあらず、

おこたり—癒え

のり—告げ

深き病氣にもあらず、忽ちおこたりて、脚は元の如くなりしに、今は姫君の御跡を覓め奉らんと思ひて、先の夜一人寝ねて候ひしに、何人にかあらん、表裏を圍み、繼松いと明くして、先づ案内せる男と覺えて、我家の軒に立ちそひ、此山にて脚なへの男を搜し給ふことあらば、唯此男一人にて候、如何にも都方の男にて侍るが、いと脚なへて候へば、脚の筋がな抜かれたる人ならん、など申し、まづこれまでは御案内申したり、といふ聲するに、又守部が聲と聞えて、さる上は清麻呂に極まりぬ、何にもあれ、家を打ち破り、込み入りて捕らんと聞ゆるに、下官思ひ繞らして候は、卿山道にかゝりて落ちさせ給ふに、追人參らんは後めたし、さは我此所にて彼等に捕られば、さる騒に時移らん、しかは御道おはし給ふにも障なけんと、いよ〳〵衾深く引被き、頭をも物に包みて蹲り居りしに、守部ども戸を打放ち、壁をうがちて入り込み、清麻呂を召捕れ、とのりて、我を引立てしを、脚も躄へ腰も立たざる樣に振舞ひしかば、いよゝ清麻呂なり、などいひ騒ぎて、そのまゝ輿に打入れ、きびしく守りする樣に見えて、爰までは連來りぬ。さ

なる武荒脚とくして彼處の家に馳行き、兄弟思ふ儘に仕りおほせ、清麻呂卿をいと安く奪ひ返し、卽ち其處に置奉る。又「守部どもをば、皆殺しに殺して候に、今は追ひ來る人も侍らず、靜かに眞熊野の方に御供仕らん」といふに、宿禰も兄弟が勢を稱へ、君達の御手を取り、急ぎて在しまさせ、さて輿の鍵どもを押切り、清麻呂を出し奉れば、「君達在しましぬるか」といひて、巨勢金石が踊り出でたるに、君達も呆れ在して、物も得宣はず。金石二人の荒男を見て、「汝は荒坂の盜人よ、よき時に出あひぬ」とて、かひ〳〵しく裾を卷きあげ、君達を後に在させ、眼をいからし、まくり手にして立てば、君達、「彼等は鬼と思ひけるに、自には故あるものにて、その後はそこばくの心を加へて給はりぬ。又これなるは押勝の君の御家人にて、是又他人には在さず。さて御身のかゝる樣は如何なる故ぞ。夫の御君は如何に」「父君は何處へぞ」と問はせ給ふに、金石しか〳〵のよしを語り、「卿いと平けく道首口足御供仕り、伊吹山に在しまさす。さて、やつがれ一人溫泉に殘りて、見しる人もあらねば、うち膝行りて二度三度溫泉に漬ぢて候に、もとより

あともひ―伴ひ

眞熊野―「まくまの」「みくまの」兩樣の傍訓原本のまゝ

かけて踏みたゞらかし、淸麻呂の卿をばいと安く奪ひ返し奉らん。後安く思してよ。唯今逢はせ奉らんを、待たせ給へ」といひをはり、兄弟立ちありきて罪人宿らせたる家を見置き、夜の更くるを待つほどに、君達心許ながらせ給ふに、宿禰一人は御見扱ひに聞え置き、兄弟身を堅くしめて太刀をわきばさみ、八角の杖を横たへ持ちて、その家の裏方に至り、高垣を跨がり越え、不擧言戸を押破り、板敷をとゞと踏むに、守部ども目を覺して、「盜人ぞあれ、いで起きよ、罪人を顧みよ」などいひて、太刀を取りて立合ふをば、柄だにも取らせず、手を打折り脚を打折り、腰をくじかし、肩を歪ませ、頭を裂き、胸を打破りて、見るがうちに三十人ばかりを殺せば、主どもは皆逃出で、守部ども生殘りたるは垣を破り溝を潛りて、罪人の輿は捨ておき、暗に紛れて走失せぬ。兄弟靜かによりて、「今は誰をかは憚らん、彼處は人集ひて喧しきに、汝行きて君達と宿禰をあともひ奉りて爰に來れ。さて參り給はゞ、君達はいと小く在しますに、此御輿へこぞり乘せ奉り、我々して舁き參らせて、まづ眞熊野の山道に入らん。急げ、しかせよ」といへば、弟

うらぶれ—歎きしをれ

にてはあらざりし。思ひがけぬ事ぞ。此上は卿の在します方へ、負ひて參れ」とのたまはするに、宿禰も久しく絶えたりしを語り出で、「かゝる上は御仕の忠誠を盡したまへ。我も外ならぬ君達に在せば、如何ばかりも御仕の事は承らん。さは夜の紛れにも御輿をものし、溫泉におはしつけ奉らん。山の案内は賴み參らせん」など、いと賴もしく聞ゆるに、いよゝ君達の落居たまふに、三人の者も勇みたちて、先づ食物など勸め奉り、御輿の事物し歩くに、「何にかあらん、只今公の罪人參り來」とて、人立ちさわぎ、先には鐵杖を引鳴らし、松續立てて大道を照らし、多くの守部左右を圍みて、「今夜は此津に罪人を臥させ、明けなば山道を指して都の方へ」と聞ゆるに、「誰にか」と聞けば、「和氣淸麻呂を紀伊の溫泉に捕へて、都には將て參るなり」といふに、君達は、たま／＼朝露にさほひ出でし初花の、忽ち照れる日に萎るゝ如く、「こは如何に」とうらぶれ給ふに、跡見の兄弟諫め奉りて、「君此處に宿らせ給ふぞ御緣の盡きざる祥なり。我々兄弟に宿禰を加へてあらば、たとへ敵は岩にて候はゞ手握り持ちて打碎き、敵また鐵にて候はゞ、脚に





あからさまに―かりそめに

人ながら打倒して候に、一人はいたく振舞ひたるに、御命も侍らじ、一人は脚を打折りたるまゝに捨置きて候ひしが、如何になり給ひけん。さて君達の深く歎き給ふを、いたく懲し奉り、此處まで負ひ參らせて侍るに、先つ方、迯出でたまはんなど立騒ぎ給ふとて、御懐中より落ちたる文の侍るに、讀みて見しかば、清麻呂卿の御手にて、細かに書付け給へるを、始終を讀み果てて、兄弟共に大に驚きては候へど、今更かゝる御身の上なりと申詫びんも、此姿にてはよも誠とは承引きたまはじ、梳らん家に行きて先づ髪を結ひ、衣裳などもかい改め、容姿を正しくし、言をあらため、よく聞きとりおはしまさん樣に聞え奉るべしと思ひて、彼處に行きて兄弟申合せて侍りける時、そこの人來たまひつるを、よく見知りて候ほどに躊躇ひしが、そこには顧みず過ぎたまひ、先刻この一間に立忍び、姫君達とひそめき給ふを、あからさまに立聞きぬれば、いよゝ我も落居て、いな〳〵今は此姿にて見え奉るとも、宿禰かくておはせば、御執成し聞えたまはらんと、かく出でて身の上を聞え奉るなり。君達罪許させ給へ」とて詫ぶれば、「さは鬼

あやまち―殺害し

「身の上語り奉らんには時も移りて人怪しむべし。かく逢ひ奉りける上は御後安かれ、御夫の君にも逢はせ奉らん」など諫め聞え奉りて、「さて、その鬼と宣ふものどもは、何處へ參りて」といふが後に、疊をひし〳〵と踏鳴らして入來。親子の君は此宿禰をも喰ひ殺さんと思して消入り給ふに、二人の荒雄等禮儀正しくして、忌部宿禰に向ひて曰く、「かゝる髮、かゝる衣、かゝる姿を見給はゞ、俄には思出で給はじ。おのれは粟田朝臣眞人が家人跡見人成が二人の子になん。やつがれは兄にてすなはち跡見武雄なり。これは又弟にて跡見武荒にて候が、天性剛力にて候まゝに、武士の道を忘れ、唯山に入りて熊をうち、里に出でて人をあやまち、年頃恣に仕るを、父の人成思捨てて、上に訴へ我我を逐ひやらひけるに、かへりてそれをよき事と思ひ、世の業も侍らねば、あらぬ名にかへて熊野の山に隱れ住み、往來の旅人を驚かし、財寶を奪ひ、衣裳を剝ぎて、其を酒にかへ米にかへて、道なき命を繼ぎ侍るに、不意荒坂にて、過ぎし夜此君達の通り給ふを、我故主の御君達とはゆめ思ひかけず、いたく驚かし奉り、又御供の若人も二

氣の御家に入り給ひて後も、我主の殿にはおはしましける。やつがれは恵美押勝が家人にて、忌部宿禰海道にて候へ。御有様委しく語らせたまへ。隨分々々御仕へ奉らん」と竊やかに申せば、泣きそぼち給ひて、「如何にもよく其方の面は見おぼえて侍り。さこそ聞給はめ、我夫の君宇佐の御使の後は、種々善からぬ事に苦しみたまひて、剰へ御行方知れず侍るに、不意金石獵野が情にて、御跡を覓めて參りしに、荒きみ坂を越ゆるとき、おどろ〳〵しき人に逢ひて、我を案内せし若人二人はその鬼に殺されし、賴む方なくて隱れ居しを、これなる姫と我を、その鬼等が肩に負ひて、山を行き谷を下ると覺えしが、此家に連來り、此一間に入れおきて、おのれらは何處へか行きつるに、如何にあさましくてはふれ侍らんより、此所は海邊なれば、我は海に入りて死なん、此姫は生先も侍れば、世に堪へ忍びて長らへ給へ、天には神ませり、地には又父ませり、命だにあらば逢ひ給はん、又父君に逢ひ給はゞ、母は荒磯の巖を枕にと聞え奉れと、申聞かせて候ときなり。其方は又如何にして怪しき卜者の姿となりて、此所には如何にして」と問ひ給ふに、

あぐみ—胡坐をかき

いよゝゆかしく—いよ／＼事の一伍一什を知りたく

見おこし—此方を見

ろに、さしむかひてうちあぐみ、「いと寒き夜ぞ、温飩たまへ、たゞ暖かに盛りて出せ」といひて居るに、打並びたる一間の、怪しく圍みたる中に、旅人にやあらん入り居たり。さて靜めて聞けば、女の聲にていと哀げにひそめき泣くを、何にかと思ひて聞きをるに、端々打聞えなどす。都の女なめり。遠き旅寢を苦しくして泣くならんと思へば、いと高く泣出でて、娘などの聲にや、「自ら一人おくれ奉らんや、いかなる海の底にも、母君の御供仕うまつらん」といふなども聞ゆるに、いよゝゆかしくなりて、和らさし寄りつゝ、耳を直向に向けて聞けば、清麻呂の卿の御上など聞えたるに、さてこそと思ひ、小便に立つさまにしなし、火をともしてつと行きかゝり見れば、よく見覺え奉る御方なり。此方をも怪しとばかり見おこし給ふに、なほ正目に見れば御主押勝の御いとこにて、粟田朝臣の御娘にておはすと思ふに、其後清麻呂の卿の御妻となり給へるよしを思ひ出でしかば、近く參りて、「こは如何にしてかゝる御有樣なりける。君まだ若くおはしましける頃、田村の館押勝の邸宅なりにもおはし給ひしが、やつがれ御まのあたりに見奉りき。その後和

燈のおほひ―軒燈の外蔽ひなる紙

に、はなれたる家の侍るは、さる物を旅人に賣る家なり、其處に往きて物喰ひて待たせよ。風直らば迎ひまゐらせん」といふに、「さはそこに行きて待つべし、よき時にならば告げおこし給へ」とて、包などうちかたげ、南をさしてゆけば、いひしあたりに家の侍る。家はいと大きくして、門には馬など繋ぎて、旅人めくものいと多く入り居たる樣なり。扨、軒には燈をかけ、燈のおほひには「一膳飯あり、溫飩蕎麥あり、酒あり、種々の魚あり」と書き、又ひとつには、「熊野屋」とふ三の文字を太く書きたるを、これも火を燈して軒に懸けたり。宿禰笠を提げ包を負ひ、物喰はんとて入れば、竈の煙立ちみちて、誰ありとも見分かず。馬奴にやあらん、水子どもにやあらん、いと多くおり居て物食ふに、「許し給へ〳〵」とて通れば、主人めく男、「旅人か、此方へおはせ。そこは烟籠めていぶせからん。便船を待ちたまはゞ程も侍らんに、こなたの一間へ入りて暫し休みたまへ」といふに、草鞋を脱ぎて簀子の下に押入れ、裳をすこし下して行くを、つら〳〵打瞻りて見る人あり。宿禰は心なければ顧みもせず、一間に入りて火桶に炭火などもて來

見ゆる—占の表にあらはる

本朝水滸傳

巻之七

第十三條　忌部宿禰海道跡見武雄同じく武荒の兄弟に逢ひて清麻呂の妻子を救ふ 幷三人ともに清麻呂の捕はれを救ふ

忌部宿禰海路は、押勝に別れ、伊吹山を下り、姿を卜者に窶し、和泉の國まで參りつきて、船を乞ひて渡らんとしけるに、汐占を考へたれば、「爰ゆ渡らば事あらん」と見ゆるに、何處より渡らんと、又汐占をみれば、「紀伊の國に行きて、荒坂の津より渡らば幸あらん」とあらはれたるを、只占に任せて、荒坂の津に向ひて行くに、その日も暮れしかば、船屋を問ひ、「土佐の國に渡らん船やある、我も乘りて下らん」といへば、船屋の主人どもが、「この風暫しあらば下りにや吹くらん。今は橫樣にて追ひがたし、しばし爰に待たせよ。又飯など參るべくば、此處にはさる物はあらず、是より一丁ばかり南の海邊

しか―そのやうに

山路を訪ひ、豊成がかくれ家にのぼり給へ。かく申すはしにも時移りぬ。はや御伴申さん」といふに、人々はたゞ夢の心地に、「いざや」とて出行くを、金石兩の膝を摑みて、かひなく口惜しく思へど、せんすべなければ、大太刀にむかひ、「我少しも脚立たんずるときにもならば、如何樣にもして追ひつかん。汝まづ加太の浦をさして行くべし。彼荒坂にて騒のどき山賊どもが詞のはしには、加太の浦邊ときこえつる事あり。しか心得たまへ」といふに、飛鳥の大太刀、巨勢の長谷ともに、「何事も心得つ」といひて出でぬ。こなたはあやしき旅人の姿に窶し、よろづ金石にはいひおきて出でぬ。

ひぢ―浸り

現にはあらじ。三尾が崎の騷に、押勝もろとも火の中に紛れたまひしを、燒けたゞれたる首とて佐保の川邊に梟けたりといひき。かくては如何に長らへ給ふ」と問へば、「されば候、三尾が崎の戰は、押勝思ふ旨ありてたやすく退き、太子祖王の御供仕り、伊吹山の麓まで參りしに、即ち押勝が兄の豐成は、過ぎしころ浪花の海に入りて死にぬと承りしが、今は白猪老人と呼ばれて、伊吹山に隱れて候に、不意めぐりあひ、是によりて祖王もそこに忍ばせ奉り、押勝始めおのれ等は、かく太政官の印を懷にし、同志の人を語らひ、唯道鏡を討たんことを思ひかけて候。かゝる上は御身の上も金麻呂の上も、いと迫りて侍るに、我御供申して共に伊吹山に隱し參らせん。又金石は面知りたる人もあらぬに、おのれが弟にて候といひふらし、我暫し旅ゆきの間、家を守らせ置きさむらふと聞えおかば、此處の人何か怪しみ侍らん。さる間に湯にひぢて、脚だに立たば御妻子の御跡求め給へ。さて大太刀は刀自君娘君の御行方を求め、行逢ひ參らせしその上には、ひそかに近江路に御伴ありて、伊吹山の麓に胡丸といふものの家あり、其處に至りて

にはほと〳〵出でまどひて、まづ灯など明くして、「いかに」と問ふに、金石は痛みたる上を馬に乗りて山坂を越えたるに、今は氣上りて物をもいひ得ず、大太刀は又清麻呂の御有様を見るより、涙を止めかねてあるに、清麻呂早くそれと見給ひて、「こは如何に」と宣ふ。さて金石には薬などいふ間に、大太刀行きかゝりて計らひたる始終、又聞きつる其夜の騒の有様、君達奪はれ行給へること、委しく語り、「我直に追ひゆきて、君達取返し奉らん」といふに、清麻呂たゞ世の中の任せざるを歎き、又人の縁の變異しきを思ひ遶らし、まづ金石が痛を看病るに、漸う息つき出でて、「まづ申さん、都の追手の事迫れり、いかでか此處に隱れまさん、此夜何方へも忍ばせ奉らん。事はしか〴〵に迫れり、此般は父が猶の精力も及びがたし」と申す。「さて、おのれはかゝる足痿にて御供仕うまつりがたし。大太刀又是に候へども、これは君達の御跡を求めん。父は老いぬ、母は老いぬ。如何にせん〳〵」とて立騒ぐ音の漏れ聞えてや、「その御案内こそ」といふ聲して、壁を蹈破りて入來る人は道首口足なり。清麻呂よく面知りてあるに、「夢の中の人にか、

いと高くなるに、我は粟を荷ひ、馬には金石を乗せて、足掻を打早めて、行く〳〵金石に語りて曰く、「おのれ今は紀伊の山邊に住めども、明日香をもて家の名を呼ぶは、和氣の御家の恩を忘れ奉らじとするなり。委しくは知り給ふまじ。我壯年の血氣に乘り、劍術を好み、馬に乘り弓を執り、鎗を遣ひ、相撲を好むによりて、農業を忘れたるを懲して、我父飛鳥川老我を追放ちて候に、世に似げなき國罪を犯し、公に捕へうたれて、獄屋に繋がれて侍りしを、淸麻呂の卿我領所の民なり、いかで命を召させんやとて、御なだめ聞え上げ給ふによりて、去々年獄屋を出され、大和の國を追放たれて候。されど一度は御赦免を乞ひ奉りて本國に歸り、卿へ御恩謝仕うまつらんと思ひ候ときなり。我久しく此山に住めば、鷲熊山烏など罵り侍るものはよく見覺えて候に、此道を一時に通り、温泉におはさん人々をば生き忍ばせ奉らん。夫より君達の御ゆくへ求め奉らん」と語る語る行くに、夜と暮れ日と明けて温泉に著く時は夜半ばかりにあらん、金麻呂がかくれ家に至り、大太刀金石を舁下し、戸を靜かに打叩きて、「金石歸り給ひぬ」といへば、内





踏みならし、石を踏渡る音などして近くなれば、いと嬉しと思ふに、何にかあらん、馬に負はせて此方ざまに登りく。是たゞ神なりと思ひて待居るに、

　荒坂の坂の岩波高ければ重荷をなづみ馬ぞつまづく

と鄙風俗に謠ひて、まのあたりに引きかけ、「猪も醒しや。これは魚の臭にもあらず、此山の獵夫が猪射たるならん。血も多く流れてこそ」など獨言ちて行過ぐるを、「暫し」と呼べば顧みして、「人こそあれ」とてつら〳〵打見、「此二人は蹇よな、獵夫が痛矢串にや中りたるが、此馬借らんといふなるべし。さあらば粟重く負せたれば、任せ參せず」とて又行くを、「しか宣ふ聲は我聞きしによく似て候人あり。そこは明日香の大太刀ならずや」「をいな、さ宣ふは巨勢のか」といひもはてず、馬をば引放ち、「此有樣は」とて驚くに、云云の由を語れば、「しか承りては己が上にも捨て難き旨あり、急ぎ將て參りなん。又獵野が死骸は今とて葬せん樣も侍らねば、梢の雲と靉靆くぞよき」とて、石など打圍ひ、死骸を收めて、利鎌もて楚押切り草刈添へて、灯を燧出して火つけて燒くに、山風吹上りて煙の

犬じもの―犬の如く

はふれ―こぼれ

ありのこと〳〵―有りつたけ

よく蹈みて踏殺せ」とて、石ごめに蹈みたゝらして殺しぬ。さて、「かの貢は彼方の岩間に收め置きつるを見つ」とて、立遶りて、「さてこそ爰になん、味食まゐらせん。泣きいざち給ふな」とて、唯兎など打被くさまに、肩に二君を打掛けて、小柴高萱蹈分けつゝ山深く上りぬ。金石眼をいからせ齒を噛鳴せども起ちえず、このまゝに死なんと思ひて太刀を拔きながら思へらく、我親金麻呂また清麻呂の卿をも、上よりいたく追ひ止め給はんと聞くに、是又早く告げまゐらせでは、犬じもの道に果敢なく死にたるならん、甦り行きても我知己の人に逢ひ、牛にもあれ馬にもあれ乘りて、温泉におはする人々に告終り、その上に如何にもならんと心を定め、手をもて我脚を引寄せ、我腰を引延して、一尺二尺づつ登り行くに、蝸牛のごとき歩みなれば、息絶え氣たゆみて行きえず、唯口惜しく甲斐なく腹立しく、神をさへ祈り得ず、涙のみはふれ落つるに、坂を登りくる人の音の、遙かに下方に聞えたるに、「いでや人ならん、登來よかし。言を告聞え、懷中の金はありのこと〳〵如何ばかりにも賴聞えん、人なれや〳〵」と祈りて待つに、木の根を

さいなむ—責め苦しむ

す事は、我々が家業なり。さるを我々へ訟もせず、ことわりもなく、汝等が致さんとするか、又我々が名を聞かんといふや。そも我は昔磐余彦に魂ぎらせし大熊の神の子孫にて、熊野山の鷲熊、又の名は長爪とのる。この男は八咫烏の神の子孫にて、八鬼山の山烏、又の名は嘴太ともいふ。さはよく摑みよく喰ひさいなむゆゑなり。小童等、その兒等を我々に貢し、命を體に收め歸れ、さらずば命をば體より追出さん。此熊樫の杖を見よ、平群の山より選出して、飛驒の木工が首を押へながら削りとらせたる八角の杖なり。いで小童ども此杖の下に死なんや、又今いひし貢をするや。いで云へ、いで答へよ」といひて立ちよるに、君たちをば岩群の間に隱し參らせ、金石獵野太刀を拔きて、不興言切りかゝるに、鷲熊八角の杖を延べて打拂へば、金石いたく兩膝をうたれて、地に伏して起つことも叶はず。獵野是を見て口惜しく思ひて、すこし躊躇ふ所を、太刀を打落され、肩を打たれなどして、眼のくら〳〵なるを、又打倒して、「一人の小童は脚を打折りたれば、此處に捨ておきて狼の牙にかけて喰殺させん。此奴はなま〳〵死にかゝりつるに

さのたまふは—そのやうに言はるゝ個方は

第十二條　山賊淸麻呂の妻子を盜み去る明日香大太刀金石に逢ふ幷紀伊なる人々伊吹山へ行く

君達いと怖しくおぼして打戰き給ふに、金石獵野は丈夫なれども、かゝる御伴の侍るに心おくれて、後めたく覺えけれど、後方にも下りがたく、横樣にも隱れがたくて、暫し佇めば、荒男等杖を岩が根につき鳴らし、脚は濶く歩み、肩は首より高く差張り、下り曲りて道を遮り、山彦高く吼轟きていはく、「小童よ、汝等かゝる山道を、いと闇きに、女を將て何處へか行く、さこそ物憂からめ。色好き少女ぞ、手をとりて往かん」といふ。金石獵野はやくさとし、弱きより強きを討たんと心にはかり、「是はいと忝けなき。我我は都のいとこが脚を病ひて候に、溫泉にまゐらん、といふを、伴ひて侍る。此坂の彼方に知己のあるが、早程も近し、その故に急ぎても參らず。さのたまふは何らの人ぞ」と問へば、「さここそあらめ、都の少女等を惑はし、加太の浦の遊女につき出して、錢を致

いと輕らかにおはせば―御身甚く輕くおはしませば

とふ―と云ふ

乞ひて息はせ奉らん。かく雲霧ひては候へども、日はまだ暮るまじきに、我々負ひ奉りても、さる人里へは行きたらはし侍らん」とて、いと輕らかにおはせば、二人が二君を負ひ參らせて、いと細き道を芒雀麥蹈分けて、「右よ」「左よ」などいひつゝ行くに、秋の末なれば、山越の風のいと寒きに、猿近く梢に叫び、蟲の音などは鳴きよわりて、行先とも覺えず、夕霧立隱したるに、いと〳〵心細くおぼしたり。荒坂とふ山方に掛りて、岩立ちさかえたる道の邊に暫し下し奉りて、むしたる苔などかき拂ひ、息はせ參せけるに、少女の胸痛くし給ひぬるに、看病り參らするとて、時の移るも知らず、水など汲みてあやしき藥など參らするに、すこし怠り給ふ樣なれば、「日も暮れんずるに、此坂越えれば御宿は近かるべし、いで急がん」とて、又負ひ奉らんとするに、坂の半ばかりに臣の木のいと大きやかにて、小闇く打垂れたるもとより、丈は七尺ばかりなる荒男の、八束の劍を差し佩き、手に長き杖をつきて、唯獨り立てると見しが、又後にいや優りたる荒男の、是もさる樣にて立ち居れり。

壺折姿—壺装束ともいふ、中古身分ある婦人の徒歩外出になせる所也

旅にしあれば—萬葉「家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる」

乗せ参らするより外はあらぬ山里なれば、如何にせん」と詫ぶるに、「さる怖しきものには如何で」と宣ふに、「さらば山のそぎ岩が根の道は、負ひても仕うまつらん」といひて、杖突かせ参らせ、笠などもいと深くして、壺折姿にかい繕ひ紛し、金石獵野は長き太刀を佩き、樫の杖のいと太きを突き、御前方後方に立ちて、「此道は先つ頃夫の御君も通らせ給ひつる」など聞えければ、母君、

我夫子をいで巨勢の山高々に思ひてひとりけふ越えんかも

小松のをとめ、

あさもよし紀方にありてふ夫の山を我柞葉の母と戀ひつゝ

といひ慰みておはするに、日も西山に遶れば、御徒然を慰め参らせんとて、椎の葉に飯をもり、蕗の葉には谷水を汲みもち上りて、「旅にしあれば」など吟ひ出でつゝ奉るに、いと珍らかにおほしたり。「いとゞ疲れ給へど、いかで草刈りふきて、かゝる荒山中には宿らせ奉らん。今二里ばかりを歩み給はゞ、金石よく知りて候ものの侍るに、宿を

そぼち—濡れとほり

親屬をも離れたれば、寄るべき所もなく、明日香の渡に聊かの知方あるを心ざして行くに、唯泣きそぼちて眼も見えぬに、道をば歩みかねて、かゆきかく行き佇み給ふを、金石獵野不意行きかゝりて、いかさま常ならぬ君と思ひしかば、金石近くよりて、「見奉る御有樣は、世にさすらひ給ひつる人ならん。もしは淸麻呂卿の御由緣にかは」と問ふに、暫し答へかねておはすを、「さな包み給ひそ、卿の御文これにはべり」とて出せば、親子の君欣ばせ給ひ、讀果てて、或は嬉しみ或は打泣きて、「月日は我ためには照し給はぬと思ひ侘びて侍るに、神亦捨て給はざりき。さは在さん所に今の間にも」と聞え給ふを、「さることにこそ。ことに父の金麻呂が給をもて欺きしことあらはれて、是さへ甚く追ひ止め給ふと、街の言に承りぬ、これは又俄の事なり、紀伊の山に入りては御轎駕もあらじ、夫が間は御轎まうけて乘せ奉らん」とて、かひ〴〵しく走せめぐりて、怪しながら轎駕二つを借り得て、二人の君を乘せ參らせて、日に夜をつぎて歩み行くに、巨勢獵野が宿にも著けば、「爰に夜の明くるまでは息はせ參らせ、次の日になりてば、馬牛など借り得て、

れも金麻呂が筆に欺かれたるなりし。よし／＼金麻呂を捕へ來れ、清麻呂を縛り來れ、憎き奴かな」と怒りに怒りていへば、天皇聞召して、「清麻呂は掟を犯して逃げ去りたるなり、金麻呂は眼盲ひぬべしとて官を返し、私に給かきすさび、剩へ罪人とともに、公を欺きたるその罪咎、國つ罪に超えたり。草を刈拂ひてもその隱處を求めよ、山を枯してもその住處を知れ」など、天の御氣色いと荒きに、百官これを畏み、御道理を聞え上げ奉りて、卽ち官人に勅下し、「守部が聾の罪を許さん、さる上は命にかけて、金麿呂清麻呂を召捕り來れ」とて、訟の場を退出させける。守部等畏を申し退出けるを、「今暫し」と呼返して、「もし金麻呂を捕へたらば、先づその體に水を灌掛けよ。しか檢したらば、紙給の人か、眞の人なるか、その分別は立所に侍らん。急げ守部、心得て侍るか」などいひ聞かせて遣す。守部等辛き目に遇ひて、「金麻呂を追求めんには、桶と柄杓を持歩かん、兵具これに過ぎず」と、口々にいひ別れぬ。さて、清麻呂が妻は、娘なる少女が十まり七になりて侍る、小松の少女と申しけるが手をとり、西の大路を彷徨ひ出でて、

地ゆ―地より

あまりして地ゆ烟を踏み起し、騎り返して申さく、「直に金麻呂が家に參りたるに、門は鎖もさゝで、戸は引きよせて候に、入りて見れば、家には一人もなく、もとより死骸もあらず、血などのこぼれたる跡もなく、いといぶかしく思ひて、家の隅々かい探し候に、引破りたる紙繪の、風に吹散りてあるを、一枚二枚拾ひ得てかへりぬ。その外何も侍らず」と申すに、訟の官人眉を集め、「怪しの事や」とて、その紙繪を開きて見るに、腹斷破りて俯伏しに伏したる姿もあり、又老婆を刺殺したる所を畫けるもあり、これを見るに、おの〳〵首はあらず。さてこそとて首をかきたる紙に引合せて見れば、人の形連なりぬるに、人々手を打鳴し、「是は正に巨勢金麻呂が畫きたるならん、金麻呂圖書寮にさむらひしとき、御壁のめぐりに放駒を畫かせ給ひけるに、その後此駒夜ごとに出でて、御園の萩を嚙ひあらしてさむらひける事あり。是必ず彼が筆の神にいたれる所なり。此度又斯の如き事あれば、これ私に承りおくべきにあらず、奏したてて見ん」とて奏し奉りけるに、道鏡御傍に頭をかきて、「我早ぶりて牛養大井戸の二人を伐殺したるは、こ

覺えずー知らず

つがれらは欺き奉らず」と申す。「欺かざるものがしかすべきや」「さるはさる事なり、さあるも一人二人の落にも候はず、何れも大刀は佩けり、火はともしたり。中々に狐ならばとく見あらはし侍らん。是は唯さる迷にも侍らず、多くの人の眼にかけて侍る上に、血もいたく薫り、腸なども汚穢げに引きちらし、是を見るものは嘔すべく侍りしには違はず。此上は御使を金麻呂が家に遣され、察させ給はゞ、時の間に人來りてさる汚穢げなるあとをかき拂はんとも覺えず、又從弟なども疎かるべきに、彼等が死骸をとり隱しも仕るまじ。さるは察させたるうへに、死骸もし殘りてはべらば、首の紙縒に化けたりしは覺えず、彼等正に腹斷破りて死にたるにはたがはず。もしまたあらぬ事に侍らば、我我どもは狐に惑はされて侍るなり。さる上は御刑罰のことは如何樣に蒙りたてまつるとも、一言も申す旨は侍らじ」と申すに、「誠にさる事なり」とて、一時に千里をも往復るべき馬に、騎部眞龍といふものを乘らせ、「只一時にいきかへり、金麻呂が家の有樣を明白に申せ」と聞ゆるに、眞龍うけたまはりを申し、鞭を打鳴して走せ參りしが、一時

本朝水滸傳

卷之六

第十一條　守部が輩罪を許されて清麻呂金麻呂が跡を追ふ
清麻呂が妻子金石獵野に逢ひて紀伊の國に行く

清麻呂跡をくらまして逃去りしより罪いと重くなり、その家を壞たれ、妻子をば追放たれぬ。又刑部省には、彼獄屋に繫ぎおきし守部どもを、訟の場にひき出させて、猶責問ひて曰く、「汝等縮ける首の形を持て歸りて、訟の官人を盲にしたる、類なき罪人ぞや。かへりて金麻呂に賄賂せられ、清麻呂を救ひたるか、事を明白に申せ。さなくば獄屋の棟にさかさまに繫ぎ、爪を拔き髮を拔き、刑罪は列木の宮の御時にたぐへん」（武烈天皇は長谷の列木の宮）にいますと懲せば、守部等色は草よりも青くし、身は飛立つばかりに顫ひ上り、咽をつまらして暫くえいはず。「早く申せ」とて責むれば、唾を呑込み、鼻を吹鳴らし、漸々に、「や

あからさまに―かりそめに

民の歎きさまよふを、如何にして助け侍らん。又道鏡を討つべき段などにつけては、清麻呂の名を呼び、恵美押勝など、祖王の御上など物語り出づるに、鼻彦壁に耳をよせ、あからさまに聞き居て、隣なるはいとゆかしき人々なり、殊に清麻呂と聞えつる名の侍りしぞ怪しと思ひて、夜すがらその有様を窺ひ居れり。鼻彦はこれ何等の人ぞ、後の物語を待ち得て知るべし。

袋―財布

蒸衾―暖かなる夜具

利口かな―物言の達者なるかな

故にてさむらふ。かゝる賤しきものの射ける箭、御身に立つべき様はあらねど、これは正に西の方に御軍をたて、東に向ひて挑ませ給ふにより、日に向ひたまふ御罪なりと覺し。しばらく軍兵をひかせて、備かへたまはん謀慮をしたまふ。さて是に次ぎて申す所は、五瀬命終に崩れ給ふ條なり。いとあはれにて面白く候へば、此間に先づ世業仕らん」といひて、小き籠を人の鼻の方にさし出すに、人皆袋をときて、錢一ツ二ツ三ツ四ツと差入るゝに、からくと振鳴して、「其處へは手の伸べがたきに、投げおこし給へ」などいふ。さてある間に、向ひの家うち騷ぎて人叫び立てり。「何ぞ」と聞けば、蒸衾に火つきて壁に移り、軒の端に燃上るとて騷ぐなり。集まる人あわて惑ひて、袋も締めあへず、錢のこほれ落つるもかへりみず、沓もはかで逃去りぬ。さてあるに、火は事にもならで消えぬ。かく騷ぎたるまゝに、表に燈せる火も吹消し、内に入りて物食べなどし、落覆れたる錢ども搔集めなどして寢つ。さて隣にはうち靜まりて、「隣の大人はいと利口かな、都の人なめり」といひて、昔の軍の例どもを聞くによりて、世の中いと騷がしく、

にはたゝくと音たてて

しぞかせ―退き給ひ

白肩津に御船泊て給ふ。さても此津はうちよする浪の速きに、浪速のやを略きて、今はなにはとは申すにてさむらふ。そも那賀須泥彦は五百萬の軍を引き、前は堺の海邊、後は河内の大野にかけて、雲の如く霞の如く、旗指物をはためかして、官軍を今か〳〵と待つときに、寄人の大將は、伊波禮彦の御兄五瀨命なり。その日の御裝束は、唐金の御甲に鹿の皮の御下著に、上の御冑は牛の皮をなめしになめし、鐵よりも堅くしたるに銅を延べて三所四所ひきしめ、白珠青玉を黄土染の緒にくゝり垂れて御飾としたり。御手纏には韓珠を飾り、御脚結には鈴をかけ、御執の梓の弓に、鵄の羽たかくかりて作りたる征箭を持添へ給へり。此方は旅ながらの御戰なれば、吉備の軍兵未だ御船に追ひつかず、軍兵僅かに萬にすぎず。されど御勢強くおはすに、那賀須泥彦が五百萬の軍を、後ざまに追ひかへしたまふ。ときに登美彦といふもの、槻弓のいと強きに、雁の羽を作ぎたる矢をはげて、掻投りたりけるが、その矢流れ行きて、五瀨命の御臂に中る。御血のいたく流れたるに、しばし立ちしぞかせて洗はせ給ふ。さてぞ血沼の海といふはその

おはさん―御出て下さる、來り給ふ。

畏く覺え、此上はしば〳〵も出でず、深くその家に隱れ居りて、金石獵野が都より歸り來ん便を待ちける。さてその家の隣に引移る人の侍るを、いかなるものと思へば、夜ごとに人を集め軍書を講きて、錢をとりて、世の渡らひとする人なり。「是はいと淋しきときに壁の此方に聞き居らんは、よき慰なり」などいひをるに、その夜になれば表に燈を出し、その燈の覆に張りたる紙には、「鼻彦」と書付け、又傍に、「伊波禮毗古命白肩津の軍の條、ならびに五瀬命痛矢串を負ひ給ふ條」と記したり。入來る人そのしるしを見て、「是は面白き所ぞ」など言ひては入る。又來る人も然言ひては入る。又その鼻彦なるや聲をかしう打揚げて、「いづれも召させたる沓をよくとり入れ給へ、外の方にな脱置き給ひそ。昨夜も小盜人の取り行きし。さて僕も先つ比まで居りつる所は、溝河など渡りて、通ひ來給ふに便惡しく候へば、此處は少し奥まりては候へど、おはさん道平に侍れば、此所に移りて候。變らで御在し集ひぬるぞかたじけなき。さて今夜申す條は、伊波禮彦命、これは知召すごとく、神武天皇にておはします、浪速の渡りを經て、青雲の

あるじ—寒屋

りて、清麻呂を上座にかき据ゑさせ、さて獵野を呼びて、「此男は昨夜物語らひ參らせし、我給の學仕る徒なり、名をば巨勢獵野と申す心深き男なり。これに御消息を賜ひ、金石を添へて、御妻子の有樣を問ひ參らせ、逢ひ奉らば、直に紀伊の溫泉に伴はせ奉らん。又此家の隣は、これも徒にて志又厚し、彼が名は巨勢長勢と申す。彼をば我々將て溫泉に伴はん。金石參りて申せ」といへば、金石行きて將て參るに、二人をひきあはせて、二人にはしか／＼のよし始終を聞え、さて朝食などは粟の飯をたきてあるじす。清麻呂文を委しく書きて獵野に與へ、金麻呂は袋より金を取出でて金石に授け、さて牛三つを借りて、三人は乘りて紀伊の溫泉に急ぐに、道を山間にとりて眞熊野をさして行く。此處の夜に臥し日に步みて行きと行くほどに、遙かに思ひつる溫泉に著く。さて長瀨よく案內したるに、奧まりたる家の靜かなる所を借りて宿りと定む。曉夕暮の程、夜はしば／＼にしければ、清麻呂溫泉にうち漬るに隨ひ、大神の御惠や加はりけん、三日ばかり過ぐるに、筋は延らかにいきめぐりて、脚よく步み出でたり。いとかたじけなく





よみ―數へ

戸の鍵ひき開けなどするに、人みな立入れば、「是は思ひかけね、門邊にだも立出で給はぬ我大人の、刀自君さへ將て在したるは何ぞや」と問ふに、金麻呂聞きて、「是は脚毀ひ給へる人の、昔の友なるが、紀伊の溫泉に在したくおぼすに、一人にてかひなくおぼせば、おのれら伴ひ參らせし。物語どもは靜かに聞えん。さて此處の牛をかり得て乘せ參らせんに、馬をばかへすべし」とて、馬の借代よみてければ、馬飼が見て、「今朝は荒き山を越え、又寒き朝川渡りたるに、酒代取掛け給へ」といふに、金石袋より取出でてやりければ、馬飼掌に振鳴らして、「いと微かなりや、此邊の酒屋はよき酒もたらぬ上に、錢多く欲す、賜はりし酒代にては、一杯にも滿たず、老父その袋の重げに侍るに、今一杯の代を賜へ」とて笑みかけたるに、金麻呂、「その錢をやりてはやいなせ」といへば、金石、「これはいと過ぎたり、巨勢方の酒屋ならば十杯も呑めんに」とてやる。馬飼頭にあげて押戴き、「よき我子なり、老父眞幸くて歸らせ、刀自子無恙く歸らせ、旅人よく牛に召させよ」などいひて、謠うたひかけて行く。老父馬飼が歸り行くを見いでて、内に入

星はきら〳〵と照りて、山の端を見れば月いと細く落ちかゝりて、鶉いと高く鳴く。芒花雀麥を分行く道あり、谷水にそひて行く道あり、木むらを左右にとりて立ちまとふ道あり、岡を過ぎ尾の上を越ゆるに、巨勢の高山を遶りいきて、家の十ばかり往並みたる所の侍るに、金丸清麻呂に語りて曰く、「むかし大寶の頃太上天皇紀伊の國に行幸のとき、御供せる坂門人足が、

巨勢山の列々椿つら〳〵にみつゝ思ふな巨勢の春野を

と詠めりけるより、此處をば椿原と呼びつゝ、終に所の名とはなせり。彼方にさしならびて、黒木もて葺ける家の、山近くて二つ侍るは、即ち我給の學つかうまつる男なり。先づ此處に休息はせ參らせて、此事彼事しおかん」とて、馬をばその門に繋がぜ、清麻呂と老刀自をかき下させ、我ははひ下りて、まだ曉なれば主人は睡入りてあるに、門うちたゝく間に、金石も追ひつきぬ。金石荷ひを下し聲を高くして、「獵野やおはする、金石親を將て參りぬ」とて起せば、「をい」と答へて、帶など引結びながら、蔀を差上げ、

さしあたる―目前にさし迫りたる

金麻呂繪の妙術をもつて多くの守部を欺き、さしあたる危さを遁れて、隨居たる所を這出で、「さてもかくては隱しまゐらせ難し。又御脚かなはではいかでおはしはてなん。紀伊の温泉に將てまゐりて、夜など人見まじきときは、をり〳〵湯に漬けて養ひたまはゞ、大神の御惠もいよ〳〵加はりはべらん。又温泉のさむらふ所は賑ひてあれば、かへりて人に紛れては隱れ得べき所なり。此夜のうちにもとりまかなひて、巨勢山を越えて山道をさして行くべし。又道の序なれば、巨勢山の彼方に日頃此老夫に繪を習ひて、これもかすかにてさむらふもの二人まではべり。志いと雄しければ、此うち一人を伴ひ、又ひとりをば我子金石に添へて、朝臣の御消息をもたせ、金をも蓄へさせて都に遣し、御家の有樣、御妻子の御上を伺はせ侍らん。いざや」とて急がしたて、金石問屋にいきて、「脚弱き旅人の馬借らんと申すなり」といはせ、肥馬の脚疾きを引かせ、清麻呂を中に乘せ、老父と二人は左右に乘り、金石は筆硯やうの物かい捨てがたき具どもをば、荷の緒に堅く縮めて、うち荷ひて跡につきて出行く。夜は丑三つばかりにて、秋の風うちさやぐに、

たり。さて見るに、血のかをり庵にたち滿ち、腸こぼれ出でて、臭きかをり鼻にとほり眼にしみ口にむせびけるに、守部ども頭を痛くし、嘔すべく胸さわぐに、「さもあれ斯く死にたれば、これが首をとりてまかり歸り、かくと聞え奉るに何かあらん、おのれらが役は終りたり」といひて、四の首を四の桶にをさめ、ひとつ〳〵札を立添へて、夜通に都路に赴き、明日の日の夕方漸に歸りつき、訴所に出でてしか〴〵のよしを申せば、即ち「首ども見ん」とあるに、それ〴〵の司立添ひて、桶を開き見るに、首にはあらず、只給きなしたる首の形ぞ入れたれ。司ども大に怒り、「汝等は上を欺く罪人なり、かゝる曲事類あらじ、罪は追つて御定あるべし。一人々々徽纆に括り、彼等のこりなく獄屋に繋けよ。嚴しく守り仕れ、いと辛く責れ」となん罵りあへり。

第十條　金麻呂親子清麻呂を將て紀伊の温泉に忍ぶ鼻彦軍書を講く

金石ごめに―金石をも一緒に

ひざまに、太刀を拔きて、二人を眼前に斬殺し、「人參れ、此穢物を舁出せ」とて、睨みわたして奥深く入りぬ。是は何事の行にかとおもへど、恐諂ひてとりかたづけぬ。さて守部どもは、多くの人を彼方此方にわけて、蹇男遠くは行くまじとて、大和の山の隈邊かいもとめ、巨勢路をさして行くに、日も暮れぬ。續松打ふらせて猶行くに、人ありて語るを聞けば、「巨勢金石ぞ蹇を負ひて家に歸りつる、いかなる人にか」などいふに、守部ども、「さてこそあれ。何にまれ、金石が隱家を圍みて、金石ごめに召縛れ」などいひさわぎて、守部解部三十人あまり、仕丁どもに續松ともさせて、巨勢金麻呂が庵を圍み、「金石蹇を負ひて歸りしといふ、其蹇ぞ罪人なり、今只今見あらはさん」とて、柴垣を踏みさき、門をうちはなして立入るに、人氣更になし。戸をこぢはなちて續松を照して内を見れば、今はかなひ難く思ひて、淸麻呂は上座に居りて、腹かき破り、うつむけに臥居たり。金麻呂は妻を刺殺して、おなじく腹斷破りて、その妻の死骸にうちかさなりて死に居たり。金石又下座に居りて、腹を十文字如す斷破り、咽をいたく突破りて死居

いひて、二人は馬に打乘りて歸るに、守部ども思疑ひて、又立歸りて清麻呂が臥したる跡を見れども、跡かたもなければ力及ばず、さは尋ね覓めんより外なしとて、道を彼方彼方にさして行別れぬ。さて、牛養大井戸の二人は、清麻呂が首を抱きもちて、道鏡に申入れければ、「側にてあはん」と、人を避けて昨夜の有樣を聞き、「よくしたり」など稱め、衣裳の袖より金多に取出でてあたふ。牛養大井戸いたく恭ひ、「如斯仕終せたる證なければ、穢麻呂が首はかく持ちてさむらふ。穢の恐あれど、我々が心やりに候を」といへば、「穢何かあらん、いで見ん」といふに、包を解きほどきたるに、首はなし。「是は如何に、只今これまで携へて參りつるに、大井戸いかにしたまひし」といへば、大井戸怒りて、「汝一人の譽にせんとて、穢麻呂が首は討ちたるならずや。さてこそ汝が物に包みて持て來たれ、我は手もふれず」といへば、彼包める帛を打返して見るに、人の面畫きたる紙のうち皺びて出でたるに、「是は何事ぞ」とてさわげば、道鏡大にいかり、「汝等我を欺きて、穢麻呂を助け、かゝる紙箱を貯へもて來て、祿を貪り收めつるはいかに」とい

はるけん―はらさん

て死骸を此下に埋み、守部どもには彼蹇へたりと人に見せて、風雨のまぎれに逃走りたりと云はせん。さて首は竊に包みて、討つたる證を道鏡へ見せ奉らん」と謀りて、しづかに立寄るに、淸麻呂は唯鼾も鳴さずして臥居たり。牛養太刀をあげて討つに、首は飛び離れて、胴體はうごめき騷ぐを、大井戸しかと押へたるに、血は瀧の如くながれ出でて、見るがうちに面がはりぬれば、まづ簀子を切破り、衣などを押巻きて、血を拭ひをさめ、脚もて骸を蹈落して土を取りかけ、石を打重ねなどし、破れたる簀子を繕ひ、首をものに包みて、さて我寢たる一間にかへりて、夜の明くるを待つに、風雨も小止みて明け白むに、牛養大井戸早く起きて、「守部ども穢麻呂を輿にかいのせよ」と云ふに、守部どもいきて見るに、淸麻呂はあらず。驚き騷ぎてかくといへば、牛養大井戸ともに呆れたる顔して立ちゆき、彼あらざるを疑はしくし、「蹇め、人を欺きて逃げたるならん、さなくば守部等心をあはせて落したるならん。我々二人はすぐに都に歸りて、此旨法皇に聞え奉らん。汝等は我疑をはるけんと思はゞ、いかなる隈よりも穢麻呂を探し出せ」と

に、是唯大神のしたまふなりと思ひ、かゝる御たすけ私ならずと思ふに、「御はからひにまかすべし」とて、金石に負はるべうしけるが、「さもあれ牛養大井戸の二人ぞはべる、彼かならず道鏡が詞を承引きて、今夜我を殺すべき氣見えたり。此儘に立退きたらば、罪人にして掟を犯し逃げたりとあらば、却りて罪を設くるに似たり。殊に我を負ひて走りたまふとも、追ひ來ん守部をいかに防ぎたまはん。咎なきそこをも我類に落し奉らんはいと苦し。さは此儘にて彼等に殺されたらんは、かへりて罪なかるべし」といふに、「お道理は承りぬれど、守部のもの追ひ來らんかまへは、父の金麻呂よく心得つかうまつりおこしたり」とて、何にかあらん立ちふるまひて、清麻呂を肩に負ひかけ、戸をやをら引寄せつゝ、裏のかたなる柴垣を押破りて、巨勢道にかゝりて逃去りにけり。かゝる騒も雨風のつのりにまぎれて、守部どもも聞かざりけるに、牛養大大戸しづかに起出でて、脚をぬき息をとめ、燈をほのかにして、清麻呂が臥居たる形狀を見れば、薄衣をうちかけて心よげに熟睡せり。さて打囁きて、「牛養まづ彼が首をうつべし、さて後簀子を破り

やをら ─しづかに

後方をまもりて、大隅をさして下るに、その日龍田山越えんとしけるとき、山風うちさわぎ、雷鳴りはためきて、日も闇くなりしかば、山のふもとに、驛にはあらで、家群のはべるに走せつき、「今夜はまづこゝに」とて宿所を定む。清麻呂をば輿より舁出し、いとちひさげなる一間の、人居をはなれてはべる所にやすませ、牛養大井戸の二人は、中の一間の離家に入り、守部どもは、下屋の方につかはして伏させける。雨いたく降りつのりて、神鳴りやまず、夜も漸々更渡るに、清麻呂は只心をひとつにして、宇佐の大神を祈り奉り居たり。さてすこし寢付きたりとおもふに、簀子を切破る音し、やをら立入る者のはべるに、これは道鏡が言付けて、我をひそかに殺すなめり、さるにても、脚は蹇へたり、太刀は佩かず、此まゝに命を失ふより外はなしとおもひて、動きもせであるを、枕をかきさぐりなどし、さて耳にさしよりて、「我は巨勢の金石なり、父の金麻呂申付けて、直に御跡を追ひて都に出でて候に、かゝる御ありさまを見奉り、かく忍びよりて候。なほ盜み出し奉らん、御脚かなふべからず、我負ひまゐらせて立退かん」といふ

りて候、神の御教如此々々のよしなり」と奏せば、天皇も御心の外にておぼしわび給ふ樣なり。道鏡は、身を震はし、眼を赤くし、面を青くし、齒を嚊鳴らし、大音に罵りていはく、「しか奏すは神の御教にあらじ、阿曾丸おに僞を奏さんや、汝が心をもて巧構へて神の御心を穢すなり、唯今より汝が名を穢麻呂と變へん」と罵りくだして、刑部省なる乙熊を招き、「此奴が脚の筋を切斷りて、大隅に流しつかはすべし。此まゝに冠を落しひこずり出せ」など、氣色あしくいひ懲し、又刑部省にさむらふ坂戸牛養石部大井戸二人をもさしまねき、耳に告げて差遣しける事あり。さて牛養大井戸淸麻呂が冠を落し、裝束を脫がせ、穢麻呂と呼びくだして、解部ざまの者立ふるまひ、袴をぬがせ、裔をまきて、ふたつの脚を引きはり、脚の屈める筋をきりはなてば、皮はつき破られて血いたくながれ、脚は蹇へて立つことあたはず。淸麻呂はもとより思ひ定めて、命をありとせざりしかば、只なすがまゝに任せてすこしも動かず。さて、淸麻呂をばあやしき輿に昇乘せて、守部の官人うちかこみて、穢麻呂と札に書いあらはし、坂戸牛養石部大井戸前方

本朝水滸傳

卷之五

第九條　淸麻呂神の敎を奏すによりて道鏡に罪せらる巨勢金石淸麻呂をたすく幷金麻呂親子淸麻呂も共に死す

「和氣淸麻呂、宇佐の御使はてて歸りまうづ」と奏するにより、天皇高御座を下りさせたまひ、神の御敎を聞しめさる。道鏡なほ法皇の牀にありて、ともに聞居たり。淸麻呂奏して曰く、「御使もて宇佐の大神に詣で、八月十五日の辰のとき、大神に告奉りてはべるに、その夜巳ばかり、風雨あらく、雲霧立ちまどひて、いと闇き中より、神の御形二十丈ばかりの龍と現まして、神告にのりてのたまはく、阿曾丸、あらぬ事を奏せり、天津日嗣は神代より神胤なほうけつがせ給ふ、私の事にあらず、いかにいはんや筋なき者をや、汝此告のまに〳〵奏しあげよと、告げ終りたまふと覺えはべりしに、雲霧はれ渡

に、給二三枚仕りて、住吉の方に賣りに參りて候が、俵一つに致し、負ひて歸りにき」とて含笑む。清麻呂懷中より金五十枚を出し、又さばかりの金を包みたるをも出し、「御物がたくおはしますはよく知りて候へども、金は世の寶にて候へば、人を助け、事を謀き、志を遂らさんも是なり、此五十枚は米の代りに奉る。又包みたるはおのれが妻子惑ひ歩き侍らんとき、助け給はるべき用意になん誂へ奉る」といへば、老父聞きて、「おのれ見たまふ如く、親子の筆はすなはちこれ我所領なり、住居こそかく詫びて候へ、命を保たんばかりの事は、いと易く覺えてさむらふに、まさかの御備と侍らんは承引くべし、外に五十枚の金を賜ひおかん筋は侍らず」とて返せば、「さる事には侍れど、世の中いと騒し、おのれは金を天地にさゝへて貯ふとも、命きはまりたればよしなし。唯ひたすらに承引き給ひおかば、いかなる世の御爲にも」といひて、わりなく參らせおきつゝ、夜もいたく更けたるに、ねもごろに賴みおきて、清麻呂は歸りにけり。

彷徨ひなんは、人として悲しまざらんや。おのれ勅を受けて、直に内裏を退出しかば、かくいみじき御使なりといふことは、妻子夢にも知らで侍る。是より又罪に下らんも、かる故といふ事を知る人なければ、如何なる筋とも辨めず、いと果敢なく思詑ぶらん。かかること世の諂ある人には洩しがたし。よて、宇佐よりまかり歸らんとしける時、神々を祈り、船を紀伊の浦に著けしほどに、巨勢の邑を宿にせよと申付けて、かく訪ひ參りけるは、今さしあたりて思へるにあらず、神を祈り得て候事にぞ」と語れば、老夫涙を落し、「承る如く世の降にこそ候へ。さては畏き御使を蒙り給ふものかな。定めて歸り奏させ給はゞ、道鏡いかりて、御命に及ぶべき筋のなきにしも侍らず、何もあれかく老いかゞまりては侍れど、我子金石は丈夫にてさむらへば、如何ばかりも計らひて、御心安からん樣には仕らん、是は御湯も奉らず」など語らふはしに、金石米を負ひて立歸るに、「よき時にこそ」とて先ひきあはせたれば、清麻呂禮儀正しくきこえて、なほくに賴み奉るよしを申す。老父清麻呂に向ひ、「彼見たまへ、よき正男にて候。糧盡きたる

はふらかして—遊女となりたりと也

やつがれ—自ら卑下していふ語

はふらかして候に、折々心ばかりの物をも贈りさむらひしが、その後何地ともなく人に附きて、參り失せぬるよしなり。又やつがれも遠近に所を移して候まゝに、たとへ問ひかへりぬとも、尋ねわびぬべし。今又この里に住めば、人皆巨勢の老夫と呼びてさむらふ。さて眞人は宇佐の御使とありて、只今下り給ふにや、宇佐へは、紀伊の道を通りたまふべきにもあらず、又かく窶し給へるは如何に」と問ふに、淸麻呂答へて、「誠にかく隱れおはして、人と交らひ給はぬには、何事もしろしめさじ。道鏡が騷、押勝が亂は聞給ひつらん」といへば、「さることは天下に隱れなし。されど、委しきよしは洩れきこゆべき節にもあらねど、人みな流言をこそ申せ、確にかくとは聞き渡らず、審に語らせ給へ」といふに、淸麻呂淚を拭ひて、「誠に世の降にこそ候へ、始めより語ればかくの如し、終より聞ゆればさる樣なり」とて、落もなく語り聞かせ、「さて頼み參らせたき旨は、やつがれこれより內裏に歸り登り、神の御告を明白に聞え奉るべきなり。さるときは道鏡正に我を落さん。命は民草のために奉れば、更に悔い思ふ所なし。唯家亡びて妻子の惑ひ

植ゑおけば憂を忘ると言傳へたるによりていふ しみゝに—繁く こちたき—煩はしき

萱草垣もしみゝに生ふときぞ世のこちたきは忘らへぬめり

となん思ひ居りたり。老父さしむかひて、「これは夢のごともあるかな。妹もかく老婆になりて候ふ。やつがれ圖書寮に候ひける頃は、眞人もいと若くおはしけるに、四十年の歳月には、互に雪霜の置渡りてさむらふなり。さてやつがれ眼瞽ひぬべしと奏したて、官位を返し奉りてよりこのかた、硯を見ず筆を執らず、元より世の渡らひも侍らぬ上に、心ざし又時の人に遇はず、微に殘りて侍るものなどは、人に讓り米にかへなどして、かかる八重葎の露けき中に、朝の鳥夕の蟲を友として、たづきなく住み詫びさむらふに、一人の子まうけて、名をば金石と呼びさむらふ、ことし二十まりにて、荒けたる男にて候が、繪の事は自らさとし得て、よくつかまつりさむらへども、我家より世に繪出すなど聞えありては、上の御恐れ侍るまゝ、米など盡きていと悲しく侍るときは、我家ならぬ繪などを、それとなくして他國に持出でて、微かに賣り候。今日なん賣りにいきて候が、しばし御在さん間に歸るべし。又彼が姉の侍りしは、親を思ふあまりに身を住吉に

なべに―に付て

驚かせ―目をさまさせ

何をか忘れんとて―萱草を庭に

かきわけ、草葉の露打拂ひなどして、門はひらくともなく、高垣の崩れたりしを踏分けて入れば、老婆の聲にて、「誰そや、盗人にやあらん、住みわびたる家には古き毛氈だもなし、心やりには入りても見よかし」といふに、「こはさる怪しきものならず、宇佐の大御使にまかりくだりてはべるなべに、竊かに訪ひ奉るなる。かく聞え奉るは、和氣清麻呂なり」と申せば、老婆聞きて「こはおもひかけね、我老父起きたまへ」とて、打驚かして、かくといへば、「いと〳〵珍らかなり、此方へ」といふさへ奥床もあらず、人二人ともならび居るべき席もなければ、清麻呂家人に對ひて、「道の案内よくしりぬ。この翁と物語らひはべらんには時も移りぬべし。汝は旅館に歸りて裏の門を開きおきて、待つべし、我一人歸去なん」とて歸しぬ。さて外床にうちあがりて、臥具どもうち疊むあひだ、とばかり庭の邊を見出でたるに、門邊より見入れたるは、中々にうちまさりたり。松のあるはいと高くなり、荻の生ひたるは軒をかくし、黒木の庇の落ちかゝりたるには、何をか忘れはてんとて、その草のみ生亂れたれば、清麻呂、心に、

とおもふに、雲霧吹き拂ひ、神鳴やみて、月又廣前の上に照りしきぬ。清麻呂神勅をうけて賽し、直に十六日の曉、「此度は海路を歸らん」といひて、豐前の海を渡り、石見の海をすぎ、阿波の海路をとほらんとするとき、浪風いと高くなるに、横さまにおひとほりて、辛苦じて紀伊の浦につく。日はたゞ七日を經たり。さて紀伊の山を越えて、巨勢の里に旅の御館を設けさせて宿る。清麻呂我家人を招きて竊かに申しけるは、「此さとに巨勢の金麻呂微かにして隱住むべし、我直に逢ひて語らふべきむねあり、汝行きてまづ宿を訪ひ得て歸るべし」といふに、私用あるさまに他にはいひて、その御館を出でて訪ひもとむるに、巨勢金麻呂が住所を訪ひあてぬれば、門のさまなどよく見おきて、御館に歸りて竊かに斯くと申すに、清麻呂打喜びて、人知るまじき裏の門邊より出でて、その家人一人を伴ひ、金麻呂が宿を訪ひつゝ、まづその門方をみれば、幾年かき掃はせざりけん、門邊とも見えず秋の草高く生ひてはべるに、蟲いろ〳〵に鳴きつくして、露深くおきみだれたるに、月の影のみぞ訪ひよる心あり。家人先に立ちて、標ゆひつる地錦葎を

かしこまず―おそれず

り、たゞ心を明くし身を淸くし、妻を思はず子を懐はず、家をおもひ國民をおもひ、偏に御神の大御心に任せたてまつりて、海をば船よりゆき、川をば橋よりゆき、山をば馬よりゆき、野をば車よりゆき、往きと行くに、十九日といふを經て、八月十五日の曉、宇佐に著く。淸麻呂身灌をつかうまつり終り、冠をあらため、裝束をあらため、辰のときに御宮居にのぼりて、御使のむねを大神宮に告り奉り、みづから太詔辭を告奉り、神祭はじめてより、更に太神の御まへを退かず、一心に靈驗を祈り奉りけるに、その夜丑ばかりに、風雨さわぎ出でて、神鳴とよめき、雲霧たち亂ひて、御燈はひとつもあらず吹消され、只常闇の夜となりてはべるに、奥つ神殿鳴ひゞきて、黒き雲のうちに光を放ち、いかれる龍のかたち廿丈あまり、五百箇岩のごとく、渦巻きあがり、栲繩のごとく巻きほごれて、口よりかをり滿てる狹霧を吐出して、神告りにのりてのたまはく、「阿曾麻呂あらぬ事を奏せり。それ天つ日嗣は神實猶うけつがせたまふ、私の事にあらず、いかに況や筋なきものをや。汝道鏡をかしこまず、告のまに／＼告りきこえ申せ」とのたまふ

に、天皇かしこみ聞しめして、「道鏡はすでに法皇なり、天下の政は任せまゐらすといへども、天位のことは私ならず。されど、大神の敎へ給ふことを、いかで承引奉らざらん。とにもかくにも使を奉りて、直に神の御敎をかうぶり奉らん。然るうへは何ぞ私のはからひを加へん」と告りなめて、即ち和氣眞人清麻呂を召され、宇佐の御使仕うまつるべきよしを詔ひくだす。清麻呂勅をかしこまり奉り、退出でんとするを、道鏡側に差招き、人を退けて申しけるは、「御使の旨はかしこまりたりな。さて御使つかうまつりはてて歸りのぼりて奏さんときは、汝が心をもて奏し奉るべし。ときに我天位を受け嗣ぎなば、汝をば大臣となして國の政をとらせん、さなくばいと重き罪に落すべし。清麻呂よく聞得たりや」とて、いきざしあらくうち白眼みけるに、清麻呂たゞうづくまりて退く。御使とあるに、それつかうまつる諸司うけ給はりつきて、前を拂ひ後を守り、直に南の御門より出でて、日沒國をさしてまかん出ける。そのことその粧どもに至りては、品殊におほからめど、爰に書付んはくだ〲しかるべし。清麻呂いと畏き御使をかうぶ

とつかうまつり終り、七人の兵をも大まへに召し出でて、懇懃に御目を給はらせ、さて押勝ふところの印を紙一枚におして、一人々々に與へ、掟よくいひ敎へ、用意すべき金などは、老父いと多く取出でて與へけるに、押勝老父にも刀自にも娘にも、懇懃にきこえおきて、十人餘りの人うちつれて罷り出づるに、「麓までは」と、人々送りす。そのかへたる名、窶したる姿は後の物語に聞えわかん。

第八條　和氣眞人清麻呂勅をうけて宇佐八幡大神宮に詣づ詣でをはりて歸るさに巨勢の金麻呂を問ふ

太宰府の阿曾麻呂奏していはく、「此程宇佐の御宮居鳴りとよめき、風雨つねならずはべるまゝに、神祭させて神の御心を伺ひ奉りけるに、忌部の千騎に神懸りて示敎へたまはく、太子大炊王は、おひたゝせ給ふときに及びて、天皇に背かせたまふ御氣なん出來べし。御位は唯弓削道鏡に讓りおはしまさんは、正に此神の御意なり」と奏し奉りをはる





岩木なす—岩木のやうに荒くれたる
ことむけ—征服せしめ

のあたり打靡かせなどするに、さる術もて人をいれんは、常陸陸奥總の國ぞよからん。又布勢臣古丸は、心はなやがず、打沈めて始終をしめ知るべき者なり、これは筑紫の國に忍ばせん。又神麻舍人は神言よく辨へて、人の愼みを敎ふべきものなり、是は吉備出雲の方に遣さん。又忌部宿禰海道は、よく汐合の事をしり、天地の氣をも考へ馴れたり、彼は阿波土佐の濱邊に居らせん。さて我は三人の兵を伴ひ、容を深くやつし、胡丸を將て、あすなん東國に下るべし」と定めて、とり〴〵に云ひ計らひける。曉方になりて、夜霧未だ梢に殘り、月も入りがたにはべる頃、押勝を始め兵ども、かのやつしたる旅裝束するに、王押勝に御土器をたまひて、

「岩木なす夷なりとも言とひてことむけすべき男とぞおもふ

早く歸りこね」と宣はし、御衣たまはり竝に御冠をたばひ、「夷もし叛かば、汝我に代りて神御代の敎せよ」と宣はするに、押勝かしこみ奉りて、答へ奉る歌にいはく、

さしのぼるひつぎの皇子の御衣にしもふれん民草なびかざらめや

かへりみせずー敵に背を向けて逃げんとはせず

我と思ひあがりー我に如くものなしと誇り

なり」と申す。老父聞きて、「古より東壯士はかへりみせずと歌にも謡ひつれ、胡よく敵へて侍らば、軍の先鋒　らせんは此夷等に過ぎず。老父かくて仕うまつれば、御背安からんに、これは押勝兵一人二人を將ゐて、胡丸を案内とし、みづからまゐり給はんや」と聞ゆるに、押勝承引きて、「己さらば、自ら向はんと定め、又軍兵の中より七人の兵を召して、七所に遣すべき評議す。先づ書直知德は日本異國の學に富みて、歌は詩も作出ではべるに、面を變へ才を祕して、都わたりに忍ばせ置きて、都の有樣を窺ひとらせん。道首口足は物よく云ひとりて、言は漢語をさへ辨へたり、もとより人心の薄き厚き、直なる曲れる、只一度見て曉ししるものなり、彼は伊勢紀伊の國に忍ばせん。又高橋朝臣手力は威勢他に勝りて欺を入れず、彼は武藏毛の國にさむらはせん。又和示部眞太刀は太刀撃の術にすぐれ、我と思ひあがらんをば打斬り、又その氣いと早くて、心の裏を直に見取る物なれば、北國にさむらはせん、必ず高ぶる人をば押へ、巧み攜へん人をも知るべし。三田首奇丸は種々の術を知りて、燃ゆる火を取りて袋に入れ、山をもま

だみ―獨り

といへば、老父聞きて「彼は東國の夷なり、よて直に胡をもて名とし、即ち胡丸とよびて候。彼日頃物語する事あり、召出して問はん」とて、「胡丸やまゐりてある」と呼べば、いとだみたる大音にて、「これにねまりて候」とて出づ。さて日頃聞えつる胡の棟梁カムイボンデントビカラはいかに」と問ふに、胡丸答へて曰く、「さればそのトビカラは、夷の王なり、印たまはりてめさば、喜びて御軍に仕うまつらん」押勝聞きて、「夷の常の形勢は何なるものぞや」胡丸かたりて曰く、「そも胡と申すは、男女交り居て父母の分別なく、冬となれば穴に住み、夏となれば木末に住み、寒ければ、毛をしき皮衣を著、暑ければ肌に著けず、山に登る事は飛ぶ鳥の如く、草に隱るゝ事は走る獸の如し。恩を受けては能く報ひ、怨を蒙りては惡しく報ふ。矢は頭髻に納め、刀は衣の内に佩き、あるは同族を集めて堺を侵し、或は從弟を將ゐて業を掠め、打てば草に隱れ、追へば山に入る。さるは、古へ倭建尊、陸奥に天降ませしとき、御德には平伏ひ奉れど、時代經て候に、今は貢仕る民にはべらず。然れども良き大將を向けられてはべらば、倭建尊の御例も候

あまさへ—あまつさへ

御土器取らせてつかうまつらせける。さて御夕食など奉り終り、兵どももたうべをはりければ、今朝より老父が觸れきこえて侍るにぞ、山をはひ登りて集り來る兵ども五百人ばかり、庭にも木間にもむれゐける。押勝いと賴もしく思ひて、王にも斯くと申す。老父押勝相並びて左右に床几をさし並べたるに、老父床几を押勝に讓りて曰く、「汝は弟なれど、既に位は一位をたまはり、官は大師に任ぜられたり。おのれは大納言にも進まで、あまさへ官位を奉り還したれば、兄といへども左に居らんや。今より汝をして大將とし我は副將軍たらん」といひ、禮を厚くし我徒にもかく聞え竝べ、さて入りて押勝と謀りて曰く、「既に斯くの如し、いと心安くおほせ。召し連れたまへる兵のうち九人をば爰に止め、七人の兵を選みて彼印を與へて國々に廻らし給へ。さは明白ならず名を更へ姿をやつして、道鏡を討たんずる心はべらん人をば、誰にもあれかたらひきこえよと、云ひ聞かせ給へ」などさたして、彼是と撰出づるに、押勝がいはく、「獵夫にこそあれ、昨夜御知邊仕まつりたる男は、功の始めある者といはん。彼何處にかはべる、名は何とか」

まくー枕とする
うまいー熟睡

といとめでたく書きつけたり。押勝うち喜びて、「君もかく頼み聞え給ふに、雲霧のよそにかい紛るゝ御憑もおはさねば、これさへ神の引合せたまふならん」と愛でて、御目の覺めおはすに、かい起し奉り、御頭洗など奉り終りて、「今こそは我姪にて候狭霧姫なるが、御側仕うまつらせたく、主人の老人どもが打嘆きて侍るを、委細にうけたまはりはてて候に、兄の老父歌つかうまつりたり、御けしき侍る御答を給はりて候はゞ、主人等も日比思ふ事のかず〳〵かよひ侍らん心持すべく思ひ給へらるゝ」とて、即ち歌奉りければ、「いと珍らかなり」とのたまひて、「何事も緣にこそ、頓に答へて主人の老人等を慰め侍らん」とて、御硯めされて、

岩が根をまくだにあるをぬばたまの黑髮しかば我うまいせん

と、いと貴く書付けて給はるに、押勝二人の老人にいたゞかせければ、「今は思ひあまれる事もはべらず。姫も歌は好みて折々言出でぬれど、聞く人とては己等只二人にて、花にも月にもいひかはして候なり。さる筋ものの御紛れには」など答へて、やがて姫に

な思しそ─思ひ給ふなかれ　命の限り─一生涯

はさずと覺ゆ。姫はかゝる山懐に生ひ立ちて、都の手振は見習ふ可くもあらねど、父母能く敎へて生育てぬるに、よろづふつゝかならず、何心なくてうちいらふ事ども、かへりて馴れたる方にはたち勝りて見ゆるに、押勝、「名は何とかのたまふ」といへば、妻の刀自うちゑまひて、「山の名を伊吹と申すになぞらへて、えにしあらば都にもはひ出でて、神寶うませよなど祝ひはべるにつけて、天津狹霧と呼びて候」といらへば、翁もにこやかにて、「今朝なん假初に聞えし如く、事あらば都へと思ひ立ちて候に、かゝる荒山中には、誰を推頼む人もはべらず、よし斯くて老いくだちね、事に附けては打まぎらして、都にも出し、由緣ある方をも賴み奉らん、かゝる山住を苦しとな思しそ。さる間は、命の限り狹き袖にも養育み立てんと、此母にも申聞かせおきつ。さて不意王おはしまして、かくながら年月をおはすべきに、山川の神もよりて仕へまつるときなり。此老父喜びの餘り歌仕りたり、押勝啓したまへ」とて硯取り出させてしるす。

岩根ふみ來し君なればつぬさはふ岩が根まくらゆるしてんやは

作色のけ―上氣のすること

時めき―今をさかりと榮え

かせて、まぢかき家人とし、又その穿りつる所は他しるまじく跡を隱し、扨その威勢をもて多くの人を召抱へ、城もかく繞らして候。かゝる事を知りつるものは僅に十人あまりの人に過ぎず。その外は唯獵の業をせさせて、是を役に申附けて候に、人皆我を獵の王と稱し候。此上にいかばかりの金も、今にも掘得べき搆へしおけり。元來かゝる山邊に住む山人なれば、心いと直く侍るに、我かく冠裝束して侍るを見て、只何となく恐れて候ほどに、都あたりに走出でてこれを訴へんとするものもなく、元來恩深く加へおきて候へば、かく王の忍まさんにも、山の嵐の吹通ふ外は、何方に洩れ出でん恐も侍らず」と語れば、押勝、「さるにてぞ訝しさは解けぬ」といふ。さて刀自も出でて是彼と都あたりの形樣を問ひ出でて涙落しなどす。娘は、今朝より作色のけなども怠りつるに、湯など浴せ髮など梳きかへし、裝束いとよくして、刀自が押勝に引合せたるに見れば、年の程は二十なりと云ふには幼稚びて、眉の樣より始めて面もち云はん方なく調ひて、髮の長く引きたるまでも、大宮の内に時めける夫人妃など申すにも、かゝる容貌はお

貰ひて家を讓りたるに、罪はすこし輕かるべし。その外は心がかりなきさまに事を取り治めて後、三尾が崎には籠りて候」と申すに老父はひとつ〳〵聞得て、「そは能くしたまひつるかな」とて、安堵ぬ。押勝兄の老父に向ひて、「我兄の老父に言のうはべなく問ひ奉りたき旨あり。老父のかく住ませたまふ御有樣は、郭を遶らし藏町を搆へ、人多く集めおかせ、牛多く飼はせ給ふ。眞に此山の王のみならず、大國を領する王なり。いかに獵夫を召抱へおき給ひて、鳥獸の市に賣らせ給ふとも、夫はいかばかりならん。何の御德にか斯く富榮えましける」と問ふに、老父微笑みて、「其不審よしあるかな。うけたまはる如く山の獵いかばかりの事ならん。此伊吹山は黃金出づる山にて、彼の陸奥山に黃金花咲くと詠める所には勝りたれど、昔より人知らずはべるに、此山に獵をして遠近さまよひありきしとき、不意其金の氣を知りて、一人二人の人を使ひて、彼黃金を掘り出せしに、只泉の湧出づる如く、かき拂ふ草の生ひ出づる如く、取れども穿れども絕えざるによりて、先三年ばかりは黃金を取り貯へ、其掘らせつる人をば、事よく云ひ聞

言のうはべなく—心の底より

よしある—故ある、譯あり

黃金花咲く—萬葉集大伴家持の歌「すべらぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがね花さく」

本朝水滸傳

卷之四

第七條　豊成が娘狹霧姫を道祖王に奉る押勝印を授けて七人の物部を國々に出し自ら東國に下る

いと疲勞れ給ふによく睡ねたまひて、夕ぐれがたに御目覺めたり。軍兵等もいたく疲れて、暮るゝも知らず寢ねつ。押勝は暫し寢ねて只珍しき心地するに、又も寢難にしければ、起出でて兄の翁が閨に入りて、來し方の物語す。白猪翁問ひて曰く、「汝幼稚かりしとき、栗田朝臣眞人が娘を、家の妻に喚ぶべき契約しけるが、いかにありける」押勝答へて、「さればなん婚びて候に、子まで生みてはべりしが、二年以前母も子もなくなりたるに、その後妻をよばず。さるは、この度の軍にも心がかりあらず。舅の家は我騷動によりていかにかはべりつらん。されど、朝臣は亡せ給ひて家の子なかりしかば、他の子

なびき―寢床に傾たはり

の酢にひたしなどし、山桃毛桃覆盆子をも怪き土器にもりて出せり。王をはじめ奉りて、押勝より軍兵等にいたるまで、飲みをはり、食ひをはりて、日も高くさし登るに、「昨夜は夜通にいねまさで、かゝる荒山をのぼりたまふに、いと疲れ給はん。王をば暫し靜まらせ奉らん。押勝も軍兵等も先うちなびきたまへ」とて、とりどり其構をなんしける。

をしき―折敷、食膳

させて、昔の姿をやつし侍らず。さるをかく思ひかけず、太子のおはしましたる、ならびに汝が參りたるも、遠つ神祖の捨て給はぬなり」とて、天に仰ぎ地に伏して悦ぶ事更に止まず。「娘は此ほど煩ひて候に、髮も束ねざれば恐れあり、妻の老女は御目賜はるべし」とて、「是へ」と聞ゆるに、裝束ども禮儀正しく搔繕いて出でぬ。王始終り聞召して、「いと珍らかなり。我舍人豐丸角丸二人は、兄皇子鹽燒王ならびに我道祖の名を告げて、骸を殘して欺きしかば、我又暫し世を匿れすまはん。今より豐成を賴みきこえん」とのたまひければ、豐成畏りを申し、さて、「此老夫が豐成の名は深く隱して候に、是を知りたるは唯妻と娘のみなり。君にも又白猪老夫と呼びくだし給ふべし。さて御饗應仕らんにも、かゝる山棲なり、唯獵夫どもが捕りもて來つる鳥獸のみなり」とて、みづから高架の上にをしきをすゑて王に奉る。さて押勝には足つきたる折敷をすゑ、次なるは皆低くして置竝みたり。御土器のうちには、山鳥山鳩雉子兎猪山羊やうの肉をもり、菜は百合筍葛薯蕷などをもりたり。御酒は淸酒と濁酒にて、酒肴は乾鳥澤蟹防風を虎杖

の昔なり、おのれいと若くて侍りけるとき、公のことにつきて難波に參りてさむらひけるに、公のことはてず、春秋を滯りはべりし間、住吉の少婦といふ遊女に馴れて侍りしに、多くの財寶を失ひ、人を欺き世の掟を背きてさむらひけるにより、ある夜ひそかに其少婦と心を合せ盗み出したるに、この事世に漏れ聞えん事を恐れ、浦人をかたらひ、下部をかたらひ、豐成難波の海に舟を浮けて、酒たうべて侍りけるが、あやまちて海にいりぬと申しながし、さて其少婦を將て、暫しがうちは滋賀の里の領所に匿れ、其後爲方なくなり降りたるによりて、此山の獵夫となりしが、何時となくかくなりあがりて候に、その少婦も相離れず、今は一人の娘をさへ設けて候につきては、天下若し騷がしくならば、再び蘇生りたるおもひにて、君をたすけ奉り、民を惠みつかうまつりて、伏せたる面を世にあげんずとおもひて、さる心得ある人と見れば、野伏山伏のものを召入れて、應分召使ひて候に、今は我を王と稱してかしづき聞ゆる人千人に越えぬ。さてかく山守の老夫にははべれど、兵器は尤も多く貯へ侍り。又麁栲にこそあれ、かく縫ひ仕立て

面伏なる―何となく氣はづかし

おはす」といへば、あるじは禮儀を打忘れ起きあがり、押勝が面を見て、「君はいまだ生れまさゞりしかば、面知り奉らず。汝いまだ總角にてはべるときなれど、冠しつる面ざしもかはらず。是はいかなる事ぞ。都の人の傳とてはなけれど、ほのかに言渡るを聞きつる、藤原仲麿こそ天皇の御寵愛厚く、位は大保（右大臣なり）に任ぜられ、又家は大職冠よりこのかた、國をたすけてあしき人をば捕押へ、軍には打勝つの功ありとて、藤原惠美押勝とたまひ、そのうへ御寵愛にあまり、一位を授け、大師に任じ給ふ（太政大臣なり）となん。さる事の後は聞かざりしに、いかにしてかく太子の御供つかうまつりて、山のかくれには迷ひ來つる。思掛けず」とて打驚くに、押勝如此々々のよしを語りをはり、さて「我兄の翁は難波の海に溺れ失せ給ひぬとうけ給はりしに、いかにしてかゝる御有樣には候なり」といへば、老翁涙を押へて、「汝はかく寠れたれども、功勳あり、我は功もなく給仕もなくて、かく山籠りの老翁となり降りたるに、弟の汝にも面伏なる。さても往事を語るべし。御前をば畏み奉れども、始よりとりて終まで聞え奉らん。既に三十年ばかり

とはやめてうち鳴したれば、鉾をさゝげ鎗をふりあげたる人の、幾人も出來て、「何れの人々の登りたるにや」と問ふ。聟答へて、「是はおのれが役なり、よき人等を案内して參れり、王にとく申したまへ」といへば、「朝霧のまがひに汝をば見出さゞりし、聟のえみしか〳〵」といひて、其儘門を開きて、「賓客達まづこなたへ」といふ。押勝まづ牛よりおり、王を懐きおろし奉り、皺びたる御衣掻繕ろひ、御冠を召させ、禮正しくしてつかうまつりをるに、鹿の皮を袴にしたる男の禮正しくして、一人二人出迎ひつゝ、「此方へ」と申す。押勝、王に伴ひ奉り、軍兵ども後につきてまゐるに、獵夫の王にやあらん、黑き木の皮もて作れる冠を著、麻もて織りたる袍のいと黑く染めたるを著、袴は狹靑なる麻にて、手には扇を持ちて、板敷の下に這出でたるを、押勝早く見れば、稚くて別れつる兄の豐成に違はず。こはいかにと思へど、豐成は三十年以前に、難波の海に落ちて死にける物をと思ひつゝ、うち目守るに、すこしもたがはざれば、「かくさむらふは惠美の押勝なり、上座におはしますが太子道祖王にておはします。そこは我兄の豐成にてや

くまび—隈邊、奥深きところ

王は御身のいと輕くおはすに、子牛の背に衣を打鋪きなどして乘せ奉り、押勝は、身の重ければ、親牛に乘り、犂は繼松を提げて前に立ち、軍兵は打續きて彼のいひつる山道にかゝるに、聞きつるは最易く、かく行かんにはいと難くもあるかな。六月廿日ばかりの月は、山の端にさしのぼりたるに、短き夜の頃なれば、いといたく更けぬるにや、涼しき風吹渡りて、篠のくまび鳴りさやぎ、谷の水音遥に聞ゆと思へば、めぐりくだりては石橋を渡り、峰の松風は雲井にと思へば、めぐりのぼりては木の根に取縋り、獨梁などの打渡せるをば、牛より掻下し奉りて、御手をひきて、殆げに渡り、岩根這出でたる所をば、軍兵ども負ひ奉りて行くに、曉ちかくなるにやあらん、森の烏飛びわたりて、鳴く聲するに、山の蟬なども起出でて鳴くなり。霧深くこめていづこともわかぬに、犂が繼松うち消ちて、「參りつきぬ」といふ。さて見れば、雲の透影に樓めく家もはべり。石垣うち疊みたる上に高垣しわたし、弩抛ざまの備もしおけり。かく人の登り來けるを告ぐるにやあらん、時守とおぼしき人の樓より見おろして、鼓のいと大きなるを、い

すむねあれば、「よくこそ教へたまへる。さらば御しるべ頼み參らせん」といへば、聟聞きて、「山は麓をめぐりて行く、道は平坂にはべれど、そこを過ぎては林木原いと深く、石群こゞしく立重り、谷をわたり岨を傳ひ、打橋をわたり、石橋を踏みて、雲霧を千わきに別きて、辛苦うじて登る道なれば、月はよく照らして侍れど、木群茂く立榮えたれば、荒雄といへど、いきなづみてさむらふ。武士だちはいかにもし給はんが、女びたる貴人のいかにおはしまさん」といへば、老婆聞きて、「しからば錢を出して、此林の彼方に、よき牛持ちたる獵夫のはべる、その牛を傭ひて、貴人をば乘らせ奉らん。そのうへにも錢惜しみたまはずば、其子牛のはべるをも傭ひてまゐらせん。又續松などもなくてはあらじ」と、懇懃にきこゆるに、「何かさる事を惜しみ侍らん。今夜のうちにその王のもとに參りつかん。さらば牛二つ雇ひて給へ」とて、錢一貫を出せば、これは過ぎたりとて、貝錢三百をとりて、餘れるをば返すを、種々にいひことわりて老婆に遣りたり。さて老婆が行きて牛二つを挽かせ、續松どもいと多く持ちて來て、牛にとりつけなどす。

うしろめたく――うしろぐらくの意に用ひたりと見ゆ

を出して米を買ひ、粥煮させてめすなり。酒は濁酒を賣りて候に、酒肴はと問ひ給ふにつきて、老婆が問はずがたり聞え奉りて居れり」といふ。聟聞きて、「酒肴は此鼯鼠に過ぎたるはあらじ、いでまゐらせん」とて、皮を逆剝にして、乾鳥の如くあぶり立てて、土器に盛りてさし出し、「さて賓客達は軍兵達な、いたく血のつきたるもおはす、さは軍に打負けて、山に隱れんとてぞまぎれきたり給ふならん。今老婆が問はず語り聞えたりとあれば、定めて委細聞き給ふならん。我王は獵夫の王にておはすれど、かゝる人々をばほしがりたまふに、たとへうしろめたく逃來り給ふにもあれ、是ほどのうちには、すこしは武士の心得あらんもおはすべければ、それは王の御眼にためし給ひて、強き人をば武士にし、弱き人をば獵夫にして、分相應使ひ給はん。さいへば、おのれは獵夫なれば弱きものなりと覺さんが、これ見給へ、此腕のふくらかなる、この脚の太きを」など言ひ誇りてやまず。老婆がいはく、「今聟が聞え奉るさまなり。もし山にかくれんとおぼさば、此聟にしるべさせて、王のもとにおはして、御身のうへをなげき給へ」と云ふに、押勝おもひめぐら

目守り―見つめ

ば、國の守もしろしめさず、貢などもせず、又何の役もはべらず、いと豐けき王なり。御名は白猪と申すなり。此老女が聟も卽ち御家人にて候故に、をり〳〵は召されて王の御用は承るなり。此夜もし御もとに參りけるにや、又山の獵に出でてや侍る。又老婆が娘の侍るは、王の姫の此頃煩ひ給ふに、御伽に召されて候へば、今夜此老婆一人ありて何の御饗應も候はず。いかにせん」と申す間に、軒近き山道を下り來る人ありて、

　　鼯鼠は梢もとむとあしびきの山の獵夫にあひにけるかも

と云ふ歌を謠ひ、弭いと短き弓に獵箭握りそへて、栲の衣に栲の脚帶し、枯れたる草の葉を頭巾にして、家の戸をば脚もて押開き、濁みたる聲して「老婆子待給ひつらん。今夜は山風さわぐに、鹿も猪も兎らも、驚き走りて、二三度射違へてはべるに、惜しき征箭を失ひつる。此鼯鼠が捕られたるに、まづ山の神を祝ひて歸りぬ」といひつゝ、武士の多く入居つるを見返し、又上座におはします君を、怪しげに打目守りて、「老婆子、これは何方よりの賓客にや」「是は先つ方此山道を踏違へて來り給ふ人々なり。いと飢ゑ給ふとて、錢

知らざりし—知られざりしの誤か、但原文のまゝにても通ず

えまして不意おはしませり。又豊丸角麻呂ともに明き心をもて御命を惜み奉り、おのれに御身の上を頼みおきて死ねり。今は王を將奉り、此圍を逃れ、時を待居て心を遂ぐべし。汝達我に伴ひ給へ」とて、王を負ひ奉り、さてかゝる時のために用意したる浮橋を出して、いとやすく後なる沼を打越えにけり。さて道をば山陰の八十隅にさして行く。かゝる術は寄人の兵に知らざりしかば、後より追ひ來る人もあらず。王行きなづみ給ひしほどに、軍兵等かはる〴〵負ひ奉りて、その日の夕つかた伊吹山の麓に到る。人皆疲れたれば物食はんとて、怪しき家にいりて、米を買ひ鹽を買ひて、先粥を煮て食ぶるに、「酒やある」と問へば、怪しき老女が「濁酒こそはべれ」といふ。「酒肴は」といへば、「何もあらず。此處は山の獵夫のみ住むあたりにて、大野の原は侍れども、辛菜一房つくり植ゆべしともせず。此老女が聟の候が、これも彼の獵夫にて候。晝は林に交りて鳥を捕り、夜は山に入りて獸を射とり候。又此山の上に久しくおはします、山の獵夫のおほきみのおはすが、數多の獵夫を召抱へ、大なる城を構へ、富榮えておはします。山深き所なれ

川を渡り、奈良山を越えて京に入りぬ。左右の兵衛督立向ひて、ことどもを正し、戰のありさま、始終委細に奏しければ、天皇大御心落居給ひ、「よくことおけせずとりては歸りし。二王の御骸、ならびに不破内親王の御骸は、御位の例をすこし略きて御葬仕れ。又押勝をはじめ以下の首は、佐保の大道に梟けて、札を立て、事をわきまへしらせよ」とのたまはす。又倉丸村主軍帥物部等は、御前に召されて御恩賞を蒙り、軍兵どもは例にまかせて祿厚くたまはり、世の中いと靜穩になりにける。

第六條　惠美押勝道祖王を將奉りて伊吹山に隱る　白猪老翁祖王を預り奉る

官軍いたく攻めて、中の重の忌門に火つきて侍る時、おのれが家人のうちに、年頃思ひ賴める武士十人ばかり侍りけるを招きて申しけるは、「軍いと迫れり、此押勝ばかりならば、官軍千萬の勢ありとも、たやすく伐靡けて追散しはべらんが、祖王かくたのみきこ





挑川―泉川、即ち今の木津川

らふを、十人あまりの首を斬つて大方に燒きたゞらしてもてかへり、大道に梟並みはべらば、今度の大將は譽れ仕給ひけると人申さんに、上の御褒美厚くはべらん。我々も祿蒙り奉らん筋なり」と、よく辨へて申しけるに、倉丸村主これを聞き、「よく思ひ巡らしたり」と讃へ、「いかさまにも押勝等逃出づべき透間もあらぬに、定めて炎のうちに紛れ失せけん。是欺くに似て僞にあらず、さらばしかせん」とて、二王の御骸を箱より搔出して持ちて行き、燃えのこりてはべる柱どもを集めて、彼方此方燒爛らし、又こなたかなたかきさがして、首てふ首を拾集め、すこしも押勝に似つきてはべらんとて見るに、よく似たるぞ一つあるを、似ざる方ばかりを燒きたゞらし、女の裝束どもの端々殘りてはべるを、是もさるべき所をとりて、脚などの燒けたゞれてあるを引出して、不破内親王に似つくべく爲構へ、押勝が以下の首十五、よきさまにつくり立てて、ひとつ〳〵名を記して札を立て、軍兵の行列を正し、旗を立て、鉾を立て、戰に勝てる佳儀を述べ、酒をもり、歌を謠ひ、鼓を打鳴して行列を整へ、瀬田をわたり、石山を越え、宇治を過ぎ、挑

はしに—折しも

し、是は不破内親王なり、是まで將て奉りしかど、心遂げず侍るに、只今伴ひ奉るなり、と宣ひ、太刀を拔きて刺殺したまひ、さて御兄弟の王は、互に御胸さかを刺してかくれ給ふ。さるさまを見奉り居しかど、いたく炎に遮へられてはべるに、參りのぼらん道もはべらず。火少し燒通りてはべるまゝに、軍兵に申付けて槽とふ槽に水を湛はし、只往通るべきばかりの道をひらけとて、手々にそゝぎかけて侍るまゝに、辛苦して中の重へに入りて、さりとも御骸を殘し奉らんと思ふはしに、惠美押勝も樓にのぼり、炎にまぎれて死にけると見えたり。さても水をそゝぎ柱を打かへし壁を破り棟瓦をうがちて、二王の御骸、ならびに押勝が骸を炎の中より引出してははべれど、いたく燒けたゞれて候。又内親王の御骸ははやく火のうちに紛れたまふならん、僅に御裳の燒殘りて候のみなり、とて、いかなる衣の端をも燒焦して見せ奉らん。又二王の御骸は只今城の内に持行き、いたく燒きたゞらし奉らん。さていかなる人の骸にもあれ首をとりて燒焦し、これを押勝なりとて持歸らんに、誰かは正しはべらん。又押勝が家人に名高き武士のさむ

心やりなる―心地よき、氣のせいせいする

き爲行とやおぼしなさん、さはいかにせん、かゝらばとやせんずる」と、心得深き軍師を集めて、種々いひあはせてはべりける中に、物部勝成といふもの思ひめぐらして曰く、「下官思ふに、道祖王鹽燒王は惠美押勝をたのみおぼし、共にこの大城にこもりませしともしらず、城は堅く守りてはべるに、官軍爲力なく、時しも瀟風のはげしかりしに乘りて、只めぐりの圍を燒拂はんと計り、大門高垣に火つけてさむらひしに、思ふに違はず軍兵走出で候ふに、心やりなる戰仕りて、多くの軍兵も討取りぬ。さても山風の吹替りていと荒く侍りしまゝに、中門にも火つきて候ふに、寄人も攻入り難く、籠りたるも出でがたくや侍りけん、戰しばし引しろひてはべりけるとき、中門の櫓に冠装束したる貴人の二人までいでおはし、いと高く御聲をあげて告りてのたまはく、我は是太子道祖王なり、我はこれ兄にて鹽燒王なり、押勝をたのみおもひて此城に籠りてはべるが、天の時いたらず、地のとき又いたらず、只今國津御神に御暇を乞ひ奉りて、黄泉の王に仕へまつるなり、と告りをはらせたまひ、側におはしましける官女とおぼしきを捕へま

雲がくれまし―死に給ひ

本朝水滸傳

巻之三

第五條　豐丸角丸が骸を燒く幷佐保の大道に首を梟くる

倉麿村主の二人は、豐丸角丸に欺かれて、その死骸をいよゝ二王の御骸なりとおもひ、棺ざまの箱に納め奉り、此まゝ都に守り歸し奉らんと思ひ居りしに、又思ひめぐらして相議りて曰く、「我々勅を蒙りしは、只押勝を討つべきのみなり。二人の王を殺し奉れと侍る旨にはあらず。是は不意かく大殯の時にもあらず、横さまに刃に伏して雲がくれましぬるを、御顏いたく疵つきて侍るに、此儘に守かへし奉らば、我々いたく責奉りしと、かへりて御怒を蒙り奉らば、その御ことわりをいかにせん。又戰には勝ちて多くの軍兵は討ちとり、大城は燒きはらひてさむらへども、押勝が首は得ざりしと申さば、甲斐な

野なす亡びにけり。さて見れども押勝もあらず。押勝が家に名高き軍兵十人ばかりは、その行方もなくなりにければ、倉丸村主は爲方もなくて、二人の宮の御骸を守り奉り、空しく京へ歸らんとしける。

いにけん―去りしならん

くみおきたる旨を奏せよ」と告終りたまひ、互に劍を拔合せて、先づ面を突傷りさて互に胸さかを刺連きたまふに、倉丸村主遙かに見て、「御命を損ふべからず」といひつゝ翔來るあひだに、痛く突交したまふによりて死入り給へり。御首をたまはるべきにもあらねば、御骸は其儘にて、御棺ざまのものとりまかなひて、馬に負上せ、軍兵どもつかうまつれり。さて炎は大城の外重をめぐり、すでに中門にも火つきたるに、押勝が軍兵いたく討たれ、或は火に燒失せなどして、今は殘るべき人もあらず。倉丸村主進みに進みて中門も押破りて入るに、押勝はいづこにも居らず。後なる門はとて見れば、少しも開きたるさまなきに、いづこに立匿れん隈もあらず。又めぐりの沼なんいと深く見ゆるに、打越えてゆかん所もあらず、さらば押勝は空從翔りいにけんとて、只惘れて立てる間に、火は中の重外の重に燃え渡りければ、官軍も大城の前に走せ出で、倉丸村主もさぶらひえねば、是も外の方に立出でて見るに、火は風のまに／＼燃えとほりて、隅の樓も殘りなく崩れ落ち、高屛などもなくなりにたるに、さばかりの圍は見るがうちに、只春の燒





押勝が軍兵は多く討たれにければ、押勝冑を著、甲を著、手纏も卷きあへず、四尺ばかりの太刀を拔きて、中門を少し開かせて、おのれ一人躍出で、左右に伐靡け、竪横に薙立てたれば、見るが中に千首を斬落す。官軍押勝が武威に怖れて、表をさして引退くを、押勝更にも追及かず しづかに中門をさして內にいり、二人の內舍人を差招くに、いづこにも居らず。いかにしつらんとて見れば、明石豐丸は、祖　王の御裝束を給はりて、御冠をも著、又小田角丸は同じめしがへにもたせ給ひし御裝束御冠を著て、さて押勝に向ひ、「大臣は是より我君の御供まうして、何處へも御ありかを定め給はれ。我々二人は思ふ旨ありて、只今軍に向ひ、御兄弟の御心を安くし奉るなり」といひをはりて、中門をあらゝかに引明け、「我は太子道祖王なり、我は兄にて鹽燒王なり、天皇を恨み奉るにあらず、道鏡が橫さまなるを憎みて、押勝を賴みおもひて、此處に來れり。さるも押勝心を遂げず、既に官軍をひきうけ奉れば、正に是れ朝敵なり。我々かくてあれば、押勝が黨なるを恐み、只今兄弟刃にかゝりて死ぬべし。首を取歸り道鏡に與へ、天皇にもか

と申す。押勝聞得て、「固より思ひ巡らす所なり」といひて、王に啓して曰く、「君とともに此處に籠りおはしまさば、必ず下官と御心を合せられて、御位を望ませ給ふなりと世に申さん。さるときは天皇の御憤り募りて、下官此戰に打負けたらんときは、御命にも及び給はんと思ひ奉るがいと苦しき。官軍只城の前に集るのみにて、いまだ城の後を遮らず、只今の間に軍兵を添へて、何處へもいでまさせん。かく申すもはや事の急迫になん」と申す。さてある間に門守の軍兵等走參りて申すは、「此城内に鹽燒王なん、押勝を賴みてまゐり給ひつらん、おのれ王を捕へて天皇の御褒美を被り奉らんと申し騷ぎて侍る」と申すに、王聞召して、「鹽燒王はみづからが兄の皇子にておはすが、何とてさは申すなり。是も道鏡が騷をおほして、内裏を出給ふなるべし。よしさらば御ありかをも探し覓め給ふならんに、みづから鹽燒王なりと名告りて、軍兵の目前にて自刃にふして死なん。さありて後、我面をかへ兄皇子の御首なりとて欺かば、長く兄皇子は隱れおほせ給はん、押勝しかはかれ」とのたまふ間に、層樓に火つきて大門も燒けのぼり、官軍は亂入りて、

聞召し、「誠に舍人等が申すに違はざりつる」とて、御馬に召せば、内舍人等左右に添ひ奉り、兵等御前を追ひ、御跡方を守り奉りて、大城の内に入れ奉るに、押勝迎へ奉りて高床の上に据ゑ奉り、「思ひかけず」と申し奉れば、王は只何事も宣はず、「内裏は道鏡が亂に」とのたまひをはりて、御泪の溢れ落つるに、押勝かしこまりきこえて、「下官天皇の御寵愛をうしなひ奉りしを恨み奉りて、かく守りたるにあらず、只道鏡が天が下の民を苦しめん事を思ひはかりてさむらふのみなり。既に太政官の印をもて東の軍兵をさしまねき候に、かれ走集らんずる間はかく籠りてはべらん。さて參り集りて候はゞ、天皇は御過あらしめざるさまに計ひ、唯道鏡が首をとりて、京の巷に梟けんず。また君は太上天皇の勅によりて、寶祚しろしめすべき君なれば、天皇いかばかりに勅ありとも、おして御位にとおもひつきてはべるのみなり」と啓す間に、大城の門守騷ぎ立ちて、「官軍千萬の勢をもて、大將には藤原倉丸、石村村主差向ひたり。東の軍兵未だ走集らず、大城のうちは僅に千にみたざる兵なれば、その勢の競ひがたきを思ふ者も多くはべる」

く、「かく鎖してさむらふに、參り寄らん道もはべらず、夜もいたく更けてさむらへば、程なく曉にやなり侍らん、日のさし昇りてさむらはんとき、隅の層樓より見通すべき所に、君をば据ゑ奉り、下官等は冠を正しくし、衣をかきつくろひて、恭しく仕りをらば、大城の軍兵必ず見咎めてはべらんに、其まゝ押勝に申して候はゞ、押勝又樓に登りて窺ひ奉るべし、さてこそ君をば見出で奉るならめ」と申すに、承引かせ給ひて、松の大木の打垂れたるもとに立寄らせたまふに、御蓆もなければ、清げに花咲きたる草などを刈布きて据ゑ奉り、はや明けなんずと思ふに、夏の夜なれば短くて明けぬ。さて其木のもとを立出でさせ給ふに、層樓より差覗く人ありと見えて、暫しありて南の大門を開き、倭文鞍置ける馬に紅の飾して前に挽かせ、軍兵等百人ばかり走せ參りて啓して曰く、「押勝層樓より御有樣を見とめてさむらふに、かくさすらはせ給ふは故こそ侍らめ、まづすみやかに迎へ奉れと申すによりて參りぬ。御車と申すべきを、かくみだれにさむらふ時なれば、脚利からねど穩しき御馬奉らせたり」と聞えあぐるに、王

まねび―眞似
天の逆手―古へ呪ふ時にせし拍手の方法
抓手―山より伐出して木造りせるまゝの材木

事は、事代主の御まねびをつかうまつるなり。鹽燒王大炊王もおはしませば、太子なきにしもあらず。汝歸りなば、我はその船を蹈傾け、天の逆手をうち鳴らし、青柴垣に隱れたりと申せ」と宣ひをはり、御船靜に搒がせたまふに、矢田部老、つら〳〵御形狀を窺ひ見て、誠に押勝には御心なかりしと思ひしかば、「御返事奏し奉らん」と申して、又大津の方をさして漕ぎ戻りぬ。祖王二人にむかひて、「よくもかく計らひつる、最危かりし」とのたまふに、「日の暮れんずまでは」とて、ある島陰に御船を寄せて、御食など奉りける。さて夜にもなれば、帆を卷きて、只一時に三尾が崎に追ひつきぬるに、押勝が籠居りたる大城を見れば、月の光にはさやかにもあらねど、湖をめぐらし入れて、大城を帶ばせる沼とし、高垣には透間をつけて、征矢負ひたる兵を据ゑ、隅の層樓にも透間をつけて、多くの射部をのぼせ、門をしめ、杙を打ち、石を轉ばし出し、眞木の抓手を切出し、兵容易く寄來まじくしたり。又打仰ぎて見れば、長き旗短き旗は空に靡き雲に亂れて、高く濱風に吹きなされたり。二人の内舍人祖王に啓して申さ

さきつとき―先つ時

部老軍兵を將て、鹽燒王不破内親王の御あとを覓めて、大津の湊に來りけるが、浦人を呼びて、「かゝる樣の貴人ぞ、爰より舟にめされて、高島のあたりをさして漕出で給はずや」と問ふに、浦人ども答へていふ。「さるさまの女を將て、此處從船にめされたるは覺えず。さきつとき都方より、貴人の三人までおはして、釣船にめされて網などうたせ、釣などさしおろして遊び給ふは見き。彼見給へ十丁ばかりかなたの海の上に、いとちひさき舟の見えて、波の上に漂ひたるが夫なり」と云ふを矢田部きゝ得て、三人とあれば祖王にやおはさん、また浦人どもが謀りてや申すならんと思ひ疑ひ、何もあれ行きて見ん、早船漕ぎ出せと告立てて、よき兵十人ばかりをさし添はせ、搔子八人に漕ぎ渡らせたれば、一衡の息の間に、船はたゞ間近くなりぬ。祖王はよくいひ合はせて置きたまふに、追ひてまゐりたるをば恐み給はず、船のへにさしうつむきて釣針をおろし、船は唯漂はせておはしましけるに、矢田部老近く參出、「是はいかなる御有樣にか」と申せば、祖王聞召して、少し打笑ませたまひ、「世の中いと騷がし、かく鮮魚とりて侍る

第四條　道祖王釣舟に召されて遁れ給ふ恵美押勝戰ひ負くる

道祖王は、明石豊丸小田角丸の二人を將て出でたまひ、恵美押勝を頼みおぼして、近江の國をさして下りたまふに、大津の邊にいたりませば、船どもの侍るを、豊丸とりはからひて、「君今よき御船に召されて侍らば、追ひ奉らむ人來りもとむとき、かならず見顯はし奉らん。又篷うちかけて候船に召さば、さる人又疑ひはべらん。唯彼方に繫げる釣舟を乞ひて、釣人と共に簑笠をめされ、我々も網子にやつしてはべらんには、人かならず怪しむまじきに、遠かるまじき海の邊に御船を漂はし、夜に入らば、帆を卷きて三尾が崎にうつし奉らむ」と申すに、角麻呂ともに「しからん」と申して、渚に撈ぎよせたりし釣舟にめさせ、衣袴どもは脫ぎて、太刀などもともに船底にかくし、さるべき簑笠にかい紛れたまうて、船を十丁ばかり撈出して波に漂泛はしおはしますに、矢田

なでふ—何といふ

なりける—原本の通り

なす異人等、なでふ事をかせん。唯捨置きがたきは、近江國の騒にて候」と奏すところへ、刀自が輩大御前にはひ出でて奏しけるは、「太子道祖王春宮におはしまさず、御侍宿につかうまつりさむらひし内舎人、一人は明石豊丸、ひとりは小田角丸、是も二人ながら侍らず」と奏す。又「鹽燒王は、不破内親王をかねて御氣色はべりしが、是はさる御罪のよしを書殘し給ひて、ともに率ておはしてさむらふ」と奏す。天皇聞召しをはりて、大御心を惱まし給ふに、道鏡かしこまり奏して申さく、「臣おもひ得てさむらふは、道祖王は太上天皇の勅によりて、太子に立給ひけれども、我君深く愛でおぼさず、大炊王を太子とし給ふべき御きざしの侍るをしろしめして、宇治の稚郎子の御心をつがせ給ふならん。又鹽燒王は不破内親王の迷ひにかこち、是は押勝を頼みおぼして、近江にくだり給ふならん」と奏するに、天皇諾なはせて、「祖王の御行方は、俄にも求むべからず、只鹽燒王ならびに不破内親王を、急ぎて追ひとめよ、さて倉丸村主には、千萬の軍兵を賜はりて、直に近江の國へさしむけたまはん」となりける。

出居―客を引見する所

殿の高座にのぼりまし、道鏡を御左にすゑさせ、珠垂の小簾をなかば卷かせ、大御前にその二人を召させて、奏す事を聞召す。倉丸村主ともに奏して曰く、「左大臣橘諸兄、その子奈良麿呂、ともに冠を脱ぎ、裝束を脱ぎ、太刀を捨て、笏をすて、家を捨て、財寶を捨て、いづこともなく立去りてさむらふ。判官等まゐり正して候ふに、申殘せる事も侍らず、唯出居の壁に、一首の歌を殘しおきて候のみなり。其歌にいはく、

橘をこじて植ゑなばことさへぐ枳殼の實となり出でんかも

と諸兄が手をもて書付けてさふらふに、いと恐けれど、此歌の心をもて考へ仕るに、北國にしるべありて身を退きて侍るならん」と申す。又、「藤原惠美押勝は、ひそかに太政官の印を盗み、東の兵を集め、近江國高島郡三尾崎の大城にこもりて候。又春日野の烽火の野守が此あかつき訟へ申さく、唐國の天皇色慾に愛で給ふおこたりによりて、臣安錄山兵を集めて、御代を奪はんとす。錄山もし本意遂げずは、船を東に枉げて、此御國をや窺ひ候はん」と申す。「されど、是は遠境の事にて候、たとへ近きにもあれ、小蠅

本朝水滸傳

巻之二

第三條　藤原倉麿石村村主奏するによりて藤原惠美押勝を討たしむべき勅あり

太上天皇崩御。よりて朝政しばらく絶えて、天下いと嚴密なりき。さる間には物語なども多かるべし。御忌どもはてて、今は憚りおぼす方もなければ、道鏡に法皇の位を許し給ひ、太宰府の阿曾麿をば、道鏡奏するによりて、太宰府の定に三島を加へて賜はり、さて道鏡には御側さらず政務をも問はしめ給ふに、世の中騷ぎ出づべき筋もおほからん。ときに藤原倉丸石村村主等、身には胄を著、手には手纏を卷き、脚には鐵の脚帶を結ひ、馬をば西の大御門の前に乘捨て、大庭の廣前にかしこまりて、「頓に奏すべき事あり」と申す。天皇その有樣を問はしめ給ひ、御まのあたり聞召すべきよしにて、大極

御法衣を申したまはりて、すべらせたるなるべし、我はからずも此御衣を著なん、ほい爰に足らはし滿てりと、心中には思ひよろこびける。さて御祈所にのぼり、行ひ始めんとしける時、諸兄勅をもちて、道鏡に告げていはく、「修行一度仕りたらば、天皇御目のあたり召されて、ひそかに御占伺あるべき旨あり、然心得べし」と聞え給ふに、道鏡かしこまりを申し、既にその御行果つるにいたりて、老髮の刀自道鏡を率ゐて大殿ふかくまうのぼりける。

含める—音にてある

氣添—化粧なるべし

どを穴にしたるをさしかさねて持ちたるを、彼括りわきたる簾の編間にさしあて、大御頭の透影にや見ゆらんとて、刀自又大御後に立ちて蓋をさしかけたり。道鏡かくとも知らであるに、固より其性いと端正しく、先づ面よりはじめて手脚にいたるまで、その色雪の如く、眉は最黒くて畫けるごとく、眼は磨ぎ出せる如く、歯は白梅の含めるごとく、髪はいとふさやかなるを渦の如く巻きあげて、銀の插頭をさし、丈は五尺をばはるかに越えて、身は肥え脂づきて骨をかくし、膊などはいとふくらかなり。さるは氣添ふは衣の色香を借らでこそと見えたれ。天皇太の大御手をのべて、うちかさねたる團扇をかい退けさせ給ひ、「小簀の編間を今少し括りあげよ」と勅ありて、大御眼をとゞめてみそなはしける時、道鏡もたる柄杓をさしおきて立てば、天皇大御袖を大御面におほはせ給ひ、大御眸をさしめぐらし、かへり見しつゝ入らせ給ひぬ。道鏡は身潔をはりて高床を見れば、珠の箱にうちかさねたる御衣あり、是をとりて香をうつし、下より上に著重ねたるに、綾の衣のこまやかなる、上の衣のなよやかなる、これ直人の衣にあらず、太上天皇の

できなんとは覺えさむらはず」と申す。此うへはとて左大臣殿に申せば、「上の御祈と侍るに、何かおこたりはべらん。さらば奏して、太上天皇の御衣のさる淸きかたにはべらんを申し給はりて、とり與へ給へ。道鏡は行に馴れてはさむらふべきが、この夜のいと寒く侍るをばいかにせん。そはそもあれ、御祈時うつりなん」と申すに、侍從かくと奏しければ、上聞召して、「御父天皇の御祈にもさるべき事なり」とのたまはせ、則ち法の御衣をも添へて玉の箱に打重ねて賜はりける。さて、道鏡は心を一つにし、身潔仕りてはべりけるに、上老髪の刀自をめしてのたまはく、「道鏡はやも行は仕りそめきや」老髪かしこみ承りて、「只今みそぎつかうまつりて侍るなり」と奏す。上聞召して、「道鏡はこれ生神なり、さるみそぎして侍らんさまも、人の身には類すべからず。朕物の透間に拜まんや」とのたまふ。老髪かしこみ承りて、「いかにあらはにてや叡覽あらん」とて、かの身潔のよく見え通るべき渡殿のこなたの御座をかきはらひ、珠垂の小簾の編間をすこし括りわきて立寄らせたまふ。御面前には刀自二人右左に立ちて、唐めく團扇の中のほ

運びて、盥にたゝへさす。さて身潔所には、釆女ども道鏡がしるべしたり。道鏡いきてみれば、葉薦をしきなみたるうへに、素布を敷き渡し、黒木もて造れる衣桁のうへには白き浴衣手拭ざまの物を懸け、盥には杓を添へて、清き水を湛はしめたり。洗頭槽洗足槽爪磨などすゑて、めぐりには蒲の防壁をかけ、高床には火取を置きて、伽羅の木のよく薫るを打きりて、燒きおけり。その前には短床をすゑて、いづれも塵よく掻はらひて、釆女が裙は襷をかけ裳を卷きあげて、歩板如もののうちへにつかうまつりをりける。道鏡釆女のさむらふを呼びて、「おのれが衣殘りなく穢にふれたり、只今身潔つかうまつる間に、上よりはじめて下なる衣までもあらためてたまはれと申し給へ」といひつゝ、上なるも袴も下なる衣も、犢鼻褌にいたるまで、ひきぬきひとつにおしまろめて、土間のうへに投げ出したり。さて盥の前にかいつくばひて、口にはものを唱へながら、柄杓をとりて頭よりうちかづく。釆女かくと承りて侍從に申せば、縫殿にまゐりて、「唯今の間にかゝる衣どもはとゝのひはつべしや」と聞ゆるに、「いかなる御威光にさむらふとも、い

彼のそなへおける太刀のしのぎ刃に、先なる唐猫の胸を突破りてけり。猫は聲立ててくに、血はいたく流れ出でたり。御祈につかうまつりける官人は、「是は」と打驚きけるに、道鏡少しも騒がず、暫く目をふさぎ、口に唱へをはりて、侍ふ人を招きて申しけるは、「是は吉端なり、上の御祈はつかうまつるにおよばず、たちどころに怠り給ひなん」と申しもはてぬに、妻木の侍従勅をうけもち出で、橘の諸兄を召して申さく、「上の御悩只今怠り果てたまふさまにて、俄に御匣殿を召さる。又内膳司にも御食の御聞え侍り」と申さす。諸兄道鏡にむかひて、「しかれば汝が申すごとし、此上は御祈やすらふべしや」とあれば、道鏡かしこまりて、「猶此上の御祈を、しばしがほどつかうまつらん。しかれども、猫の血いたくこぼれ落ちて、御具を汚したるをいかにせん。御祈所は東の對に祭り替へてはべれば、俄にそれへうつし給ひて、御かざりどももそなへどもを作り替へ給へ。おのれも身潔つかうまつりあらためん」と申す。「さは」とて御祈所を改めかふる間に、采女のともがら承りて、身潔所をかまへ、主水司承りて、清き御井より水を汲み

だつかまへ―の如き支度、準備

かな木―木の枝の小きもの

菅麻―麻の持肌をはらふに用ふる細く裂きたる

つま―端

つれ」とあるに、道鏡石占を考へて、「さる事にはべらば西の對ぞ占のおもてに叶ひてさむらふ。若し事あらば、東の對に祭りかふべし」と聞えあぐるに、「事なし」とて、木工寮より、それつかうまつるべきが參りて、西の對をかきはらひ、祭殿だつかまへす。道鏡參りて中の柱に眞杭をうちて鏡を懸け、左右には竹珠を間なく貫垂れ、めぐりの壁には葉薦を垂れて防壁とし、御前には酒瓶すゑまつり、千座の置座を置き並みたるには、天津かな木を本うちたち末うち斷ちて置足らはし、又あまつ菅麻を本刈りたち末刈りたちて置きたらはし、小治田に生ふる物は和稻荒稻、大野原に生ふる物は甘菜辛菜、荒山中に住むものは毛の和物毛の荒物、青海原に栖むものは鰭の廣物鰭の狹物にいたるまで、横山のごとくうち積置き、さて携へたる山多豆は、右のかたへにさし置き、佩かせる太刀はぬき出して、前なる高机に供へて、行つかうまつり初めんとする時、春の事なれば上の愛で給ふ猫の妻どひすとて、唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きなる猫の追ひつゞきて、俄に珠垂の小簾のつまより走り出でしが、千座の机を踏みわたりて、

せ、先神の具を前なる馬に負はせ、中なる馬に道鏡を打乗せ、その次なるには自身はひ乗りて、「從者どもは、只歩むにまかせて參りつけ」といひて、鞭を打ち立てて足搔をはやめしほどに、此度は平坂なる當麻道を越えて、九里餘の道を一時に追ひ通り、酉の時を申すころほひ、西の大御門の前につきぬ。さて、馬より下りて、中門の御前に道鏡をすゑおき、神具をも荷ひ入らせ、「しばし立待たせたまへ」といらへて、おのれは大宮にのぼりて、左大臣殿へしか〳〵と申上ぐれば、諸兄大に其速なりしを奇しみ、浪風を祈りかへしたりしを貴みおぼして、其まゝに奏したまへば、上かぎりなく愛でたくおぼし、「阿曾麻呂よく御使仕りたり」とて、祿多く賜ひつ、「追つて勳功の御恩賞はおはしまさん」と仰下さる。さて、道鏡には、「一時もはやく御祈仕り始めよ」となん。「又御祈につきては、陰陽寮より、よろづ承り仕れ」と勅あるに、それ〳〵申觸れて、畏み仕うまつりける。道鏡奏して申さく、「上にはおこなひの聲をまぢかく聞しめさるゝなんよろしき」と聞えあけたれば、「御祈所は寢殿の御わたりちかき對屋の中につかうま

わぶれば—思ひ煩へば

上—天皇
刀禰—村長里長郷士などの類。

腰には珠ごめの柄を葛巻にしたる太刀一振を帶き、手に山多豆（廣刃の斧なり）をつき、脚には白樫の高履を蹈鳴らして、阿曾丸にしるべさせて船に乘りうつり、「御祈の修行者にさむらへば」といらへて、阿曾丸が左の上座にをれり。その日も辰の時ばかりなり。さて其船をおひかへらんとするに、風は東より吹下りて、船の上るべき汐合にあらず。搖子も、楫取も、是を嘆き、「いかにつかうまつるとも、此風この汐にさからひては、御船速く參るまじき」と申せば、阿曾丸眉根をかきて、「是はいかにせん、ちから及ばず」とわぶれば、道鏡ほゝゑみつゝ、「かゝる筋はいと安き事なり、御こゝろ安かるべし、只今海龍神に申しつけて、此波風を東ざまにむかはせはべらん」とて、手に持つたる珠數をすり鳴らして、三度ばかり唱言しけるに、波風忽ち打かへして、西南の方より吹きのぼりけるに、船は貝翅の如く、その日の申の時計に、和泉の國なる高師の濱に著く。阿曾丸此驗を見て大に驚き、「かゝる行におはすれば、上の御惱は立どころに怠りおはさん。さて御車など申す旅にあらねば」とて、所の刀禰どもにいひて、脚利く走るべき馬三つを出さ

立迎ひ―正しくは立迎へとあるべき所なり

梶取二人を立て、從者は浪華にとゞめ、只五人を側にさむらはせ、申のとき過ぐるばかりに漕出したり。風よく追ひしうへに、搔子ども、爰をきはみと、力を加へて漕撓みしかば、八十里ばかりの海道を、其夜の間に追ひたらはして、十一日の曉弓削の濱に著きぬ。阿曾丸船を出でて、篷庫の塵の首に落ちたるを搔拂はせ、冠を著、官服を著、袴を著、笏を捧げ、太刀を掛はき、沓を鳴らして、道鏡が室に到る。もとより從者を遣して前にしるべしおきたれば、道鏡道に立迎ひて禮をなす。阿曾丸中の重の上座に、彌重疊をしかまへたる上にのぼりて、勅を告聞ゆるに、道鏡かしこまりきこえ奉り終れば、阿曾丸從者を遠く退かせ、此室に侍る童どもをも立退かせ、道鏡と額を合せ耳を取交して、互にひそめきいふ事あり、いかなることにか侍りけん。さて、しばしもたゆたふべき御使にあらずとて、急がしつるにより、只行ひ仕うまつるべき具どもも僅に略して、皆珠の箱に入れて、錦の袋に納め、その表を新薦に纏き、船の中の上座に積ませ、その身は圭冠を著、襴衣の橡に染めたるを著、長き紐を結び垂れ、括緒の袴の白きを著こめ、

云一といふの約「とふ」によりて其字をだつ

うつし給ひて、御位を清足姫天皇（元正）ぞうけつがせ給ふ。次に豊櫻彦天皇（聖武）は御位を阿倍内親王にゆづり給ふ。即ち是高野天皇（孝謙）にていまそかりける。天皇例ならず御惱おはしますにより、百官思ひわびて侍りけるに、太宰府の阿曾丸、事ありて都に登りてはべりけるが、奏して申さく、「伊豫の國弓削の濱に、弓削道鏡と申す修行者のはべるは、役小角が行をつたへてさむらふものなり。祈るに其驗なきことあらず。是を召して御祈禱仕まつらせ給はんには、たちまち大御心清々しくなりおはさん」と聞えあぐるに、左大臣橘諸兄うけひかせ給ひ、其よしを奏し給へば、うべなはせ給ひて、「即ち阿曾丸早船に乘りて伊豫に下り、その道鏡を召して參れ」となん諸兄のたまひ下し給ふに、阿曾丸かしこまりを申して、從者はいとやつし、只御急の御使なる旨を畏れて出でける。ときは天平勝寳元年二月十日、巳の時に、奈良の都を出でて、午の時に大阪戸を越え、（今の龍田越なり）未の降に浪華の浦に著く。里は八里を越え、ときは三時を過ぎざりければ、阿曾丸心に悦び、浪華の浦より、沖津鳥鴨云船の小さくいと速く侍るに、搔子四人を立て、

人は皆我子なりとおほせ。是がさる證なり」と告終り、その百段の枝を又川の邊に持出でて、「今翁と自として此河に流しやらん。此枝水に從ひて、夜を日をわかず紀伊の海原に流れ出でば、波に隨ひ風に任せて、只一時に國中の浦廻をめぐり、其中には唐國に行きて生れ出づるも有るべし、蝦夷の島に生れ出づるもはべらん。又海なき國は河を溯り來て、今五十年が間には、善き人惡しき人種々生れ出でん」といひ終り、翁の手をとりて「彼方へ」と聞ゆるに、白き雲立渡りて、耳香の嶽にたなびきけるを、地を蹈むなす蹈みしだき、高山のいふりに紛れうせにけりとぞ。

第二條　太宰府の阿曾丸勅をうけて弓削の道鏡を召し參る 幷高野天皇道鏡を愛初めたまふ

飛鳥淸見原天皇、御位を廣野姫天皇持統に讓りたまふにより、卽ち藤原の宮に天下をしろしめし、又御位を豐祖父天皇文武にゆづりたまひ、つぎに豐國成姫天皇元明は皇都を奈良に

いゆき―行き、いは發語

その栢の本つ枝より、一寸ばかりなる美しき兒の這ひ出づると見しが、見るがうちにひた〳〵と長立ちて、丈高く細やぎて、けはひいと貴き未通女と化り、白き赤き打重ねたる衣のうへに、秋津羽の襲とりかけ、紅らかなる袴を著込め、薫滿てる扇をさしかざし、いと艶なる聲して、「我翁の妻となりて此山に隱れ、千年の末を見んと思ふなり」と聞え、さてその栢の枝をとりて翁に與へ、「此枝の本より末にかけて、百段に折りたまへ」といへば、翁承引きて、手に握りて百段に折り、「是をいかにし給ふ」と申せば、「百段の枝は、翁とみづからとして産める百人の子なり」といふ。「其は又いかにして如此のたまふ」と問へば、未通女答へて、「此百段の枝は、只今の間に世にいきわたりて、百人の人と生れ出でん」といふ。翁聞きて、「さるにても、我々が子にてさむらふといふ證や侍りなん」と申せば、未通女答へて、「されば、太き本つ枝は貴人と生れ出で、すこし細きはその次々の官人と生れ出で、末の枝の細きはみな蒼生と生れ出でて、此處にいゆき、彼處にとゞまり、世の有樣の善き惡しきを經て、終には我々が住む山に來り集らん。その集る





本朝水滸傳

巻之一

第一條　味稲の翁仙女と契りて百人の子をまうく

飛鳥清見原に御代しろしめすころ（天武天皇）なりけん、吉野の里に味稲の翁といふものありけり。世の業もなかりしかば、吉野の川に簗をたちて、鮎をとりて飯鮓にし、是を賣りて世をわたらひけり。翁、あるとき川の邊に出でて、鮎や寄りつらんと思ひ、彼簗の邊を見めぐりけるに、鮎はひとつも寄らで、大なる柘の枝（山桑の枝也）の流れかゝりて侍りけるを、「あな醜の柘の枝や、是が懸りて水の鳴響めばこそ、鮎もよらぬならめ」と、是をとりあげて、川の末へ流しやらんとしけるに、柘の枝、人の如く物いひて曰く、「翁な流し給ひそ、家にもてかへり給へ」と聞ゆ。翁怪しと思ひながら、いふが隨意まに持歸りたれば、

明和十癸巳睦月

大神太夫藤原朝臣かねよしるす

序

いでや、むらぎもの心のくまの八十くまを、かぎろひのほのかにしもいひわたるものは歌なり。或は又、うつせみの世の事種の五百ぐさを、うまごりのあやにしもかいつゞくるものは文なりけり。こゝに吾友太氣の綾足は、歌をこのみ、文をこのむ。さはほのかにしもいひわたり、又あやにしもかいつゞくる人ならむ。抑も奈良の大御代の上つかたの言は、秋の月夜の西にくたせるごとく、唯幽かにのみ残りたるさまになむおぼゆるとて、是を望月のたらはし聞えむことを、萬につけておもひめぐらすなべに、よしの物語とふ書を作りて我に見す。こは實に作れる物語にて、事は、漕ぐ舟の跡なき事どもなり。しかはあれど、詞は、いそのかみ古き事どもゆ考へ合せて、かの世にたらはし聞えむものとしつるに、讀得て其古言をとらむとする人には、蓋や此書もよしあるべかめれ。又是を水滸傳と號けし事は、作れるおもむきの、よく其ふみに似かよへばとて、よしのの川邊の事によせて、書屋がわざにしつるといふなる。

西山物語終

たるより見はるるはなしとあり

はれたるはなしと、異國の丈夫ものたまひけるがごと、七郎がかくれしいきほひ四方八表に聞えわたれりける。さて八郎は黄金千枚を出して寺をたて經ををさめ、亡人の奥津城には、萬年石を疊み珠を鏤め、そがうへに飢ゑ凍えたる者には米を與へ布を與へ、例なき御法を盡しける。この故にや、宇須美病おこたりはてゝ清々しくなりにけり。又始終をよく知りたる人の、八郎が心なく聞えけるは云々故のよしある事どもなりしと、七郎親子にも聞えければ、さては定まれる宿世源氏物語なりけるものなりし、さも知らで恨みつることの悔しさとて、交もとのごとくになりにけり。されば七郎が隱れたりし光、つひに昇る日のごとくなりしかば、西東北南の國の守より、我れ家の子にせむ、彼れ侍士人にせむと、馬を走せ牛を上せて迎へたまひしかど、七郎かつてうけひかざりしかば、しからば母を養ひたてまつるべき料にとて、遠近國の守より、黄金白銀太刀卷物まで、よき使をもて送りたうびしほどに、今は竝なき幸の人となりて、その子孫までも豐けく富み榮え侍りしとかや。こは中つ代にありし事よとて人の語らひける。

かくれたるゆ云云ー中庸に隠れ

ほきの巻

總次つら〳〵思ひけるやう、我姉なる刀自の敢なく亡せし事も、全く八郎が心の劒を兄が手に貸してかく計らはせたるなり。兄七郎は親に事ふる心の深きよりおこりて、太刀合にも恥を得、將恨の一太刀をも報いざりしが、我にしては姉が恨を八郎に報いずばあらじと、心ふりおこし（萬葉）思ひけれど、母に聞えたてまつらば、なか〳〵うけひき給ふまじと、密かに兄七郎に向ひてなむ、しか〳〵思ひ立ちぬるあひだ、暫しのうち東へまかり下るべき御暇を賜はれとぞ言ひける。七郎これを聞きて、「そこにしては理あるに似たれど、大いなる道をもて之をいふ時はつゆばかりも當らず。そこの八郎に恨を報いむと聞ゆるは私なり。吾がよろづ八郎に負けて、あまさへ堪へがたき恨も報いずといふは親を重んずるなれば、これ公なり。なぞやそれ私の怒をもて天が下の道を破らむや」と敎へければ、うべ〳〵と答へて思ひとゞまりにけり。さてかくれたる（古語）從あら

なり。たとへ炎の中にさむらふとも、さる度ごとにはあり通ひつゝ、（萬葉つばさなしありがよひつゝ見るらめと人こそしられ松はしるらむ）御心に添ひ奉らむ。返す〴〵われを愛しとおぼさば、御心の悟を開きたまふな。又御心の悟立ち給ふ時は、我が返り來べき便なし。さる時ぞ長き御別と知り給へ。さてかく申すうちに、黄泉の大王の待たせ給ふとて、したべのつかひ（泉下の使なり）の來立ち呼ばふ聲すなり。（萬葉）今は歸りなむ、明日の夜又人をしづまらせて（古語人を寢させてなり）こゝに待ちたまはゞ、迷ひ來て契らひ參らすべし」とすご〳〵と立ちて行くと見れば、煙のやうになむ消えうせけり。「こは何處に行くぞ。恐しき國には何ぞ歸るなる。我跡追ひて（萬葉伴なり）參らせむ。やよや（古今集）待たせ給へ」と呼ばひて、驅けゆかむとするに、みとり居ける老女ども、「こは夢見給ふか、いと物狂はし」と、つとよりて袖袂をとるに、さては夢なりしかと思へど、思へど物の正しかりしに、いとゞ戀しさのたちまさりて、「かき探れども手にも觸れねば」と獨言ちつゝ臥しけるとなり。（萬葉夢のあひはくるしかりけり驚きてかきさぐれども手にもふれねば）

る苦しさもうち忘れ、又その人の御手より水を食べ花を食べ、或は戀しとも床しとも心に思ひ詞に述べてたまはるを、影の如くに付き添ひて承はるときは、彼劍を踏み炎に焦れ、雪に凍り、鬼に食ひさいなまるゝ（催馬樂）苦しさも、此嬉しさにひきかへつゝ思ひたまへらるれ。もし何時までもかくあひ見むと思さば、必ず佛の道に入りて悟心にな返し給ひそ。たとへ御身を墨染になし給ふとも、御心だに晴れやらずば、戀しとも思す御心に付きて、幾たびも幻の中に、ありし姿を見せ奉らむ」といひつゝ寄添ひぬ。男いと嬉しくて「さる事とも知らで、その闇く恐しき國に御伴も申さず、ひとりさすらはせ（祝詞さまよふなり）參らせし事の悔しさよ。かく通ひ來給ふには程も遠かるべし、その時だに知らば御車にても參らせむ。願はくはさる恐しき國には歸りおはさで、何時までも爰に留まり給へ。兄君へは如何やうにもとりなし聞え奉らむ」といふに、又打泣きて「さ現心なく坐するを見るにつけて、いといたう悲しくなむ。今聞え參らせしごとく、日に千たび夜に百たび、たとへ御夢のうちにても戀しとさへ思しめさば、その御心ぞよき迎の御車

仇しめきたる—他人らしき

すげき—隙

古語にある人と思ひ惑ひけるほどに、「こは仇しめきたる御ふるまひかな。まづ此のほどは何處にや行き給ひつる、御文も聞えず」といふに、「さればよ、今往きてはべる國は、穢のみ多くて、人の便とてはなきところなれば、心の外に隔たり參らせしぞ」「さる所へは何しに參り給ひつる」と聞ゆれば、しばし潸々とうち泣きて、「御傍を離れて、何の心をもてか參るべき。兄なりける七郎、我胸をとらへて、何事も願は叫はず、早く退出よと、氷なす劍を拔きて我を追放つほどに、倒になると覺えしが、いと闇き國に出でつる。さてその國の恐しき事限なし。身は消えもやらで、炎のうちにあかしくらす時もあり、又出でもやらで、雪氷に閉ぢられて起き臥す時もあり。或は又けしからぬ鬼獸の集ひきて、身を斷々に食ひ裂かるゝ時もあり。まして刃に古語かゝりて亡せしものは、垂氷を空樣に植ゑ並たる如き劍の林を、牛馬の面なす醜女どもの、日本紀黑鐵の策をあげて追ふに、せんすべなければ走せのぼり走せくだることしば〳〵なり。かゝる苦しさは此國にては見も聞きもせねど、少しのすげきにも立ちかへり來て、戀しき人の顏貌を見る時は、さ

けに——ことさらに

提婆品：法華經の卷の名

夜ばかりはせめて起きあがりつゝ、しめやかなる火かき照して、歌物語など讀むに、我がごと物思ひける人も昔より多かりき。さて寢られぬまゝに、

秋の夜のあくるもしらず啼くむしは我がごとものやかなしかるらむ　古今集

今宵はけにおもひ出でつゝ、たゞ涙の流るゝに、御經一卷よみ奉らむと思ひつゝ、奥床を見れば、蟲などのしけむ、御燈火二處まで消えたり。尼たちも射合せて　源氏物語　臥し給へるに、火を打ち出して　古事記　御あかしを照らし、提婆品といふ御卷を心靜に讀みゐける。さて悟の道には男女の相なしてふ事をわだつみの神のむすめ　萬葉龍女なり　に說きたまひし所にいたりて、燈又二所ながら暗くなるに、御經を讀みさして、立つてかゝげむとすれば、「火は其のまゝに照らさでよ」といふ聲す。さて見れば白き衣を身にひきまとひたるをとめの、頭の髮はいと黑くて、うつぶしに伏しゐたり。「しかのたまふは誰そや、いと闇きに」といふに、「忘草の種をば早くも御心に蒔かせ給へるなり」とて、　古今集今はとてわするゝ草の種をだに人のこゝろに蒔かせずもがな　細やかなる頭をあげたるを見るより、現なく心暗まりて、うつせみの世

根こじて—根を掘るなり

さつきみなづき—五月六月

ば所えがほに廣ごりたり。彼の時雨降り出でし群紅葉の頃をしも、唯今のやうになむ思ひ出でらる。さて庭様の所には、石など疊み上げて、小き山ども築き列べたるは、かの母のいたづきを慰めまゐらせむとて、なき人としてしつらひたりしよ。又栗柿のわか秧、（萬葉）梅桃のみづえ（萬葉わかばえの枝なり）など（萬葉わぎもこが植ゑし梅の木見るごとに心むせつゝ涙しながる）も、根こじて（古事記）植ゑし事も侍りしなど思ふに、心むせつつ涙のとゞまらぬに、

妹としてふたりつくりし我庭はこだかくしげく成りにけるかも（萬葉）

と、懐紙に柄短かき筆して書いつけて、（源氏物語）物の枝につけて過ぎける。こを母見給はゞ、殊に泣き給はむ。深草にかへりても、猶さる心ひとつになむ責められて煩ひける。時鳥の啼きて過ぎければ、

ほとゝぎす啼くこゑきけば別れにし古郷さへぞ戀しかりける（古今集）

その後又いたくわづらひ臥して、さつきみなづき（萬）はたゞ夢の様になむ明し暮すほどに、秋にもなりけり。漸く涼しき風吹きいでて、月の影も清くなるに、少し人心地いできて、

端に書き付けて遣りける、

　深草の野べのさくらし心あらば今年ばかりはすみぞめに咲け（古今集）

彌生にもなれば、三十まり五日の御法、四十餘九日の御法なども、世の人聞なからむ樣に心づかひして、さる山寺を賴み、石の塔、玉垣やうの事までも、しかぐ\〜聞え遣りて、内には親しき尼達二人三人にて、靜に法華經をなむ千卷讀みたてゝ供養し奉らむとぞ誓ひける。さて母人なむ如何におはすらむと、心去らず（眞葛）思へど、世のおきてにあひて、今は離りはてぬれば、みそかに便せむやうもなし。やうやく夏にもなれば、庭の草木いとくらくなりて、日はことさら暮れがたきに、その事となく物悲しくて、（伊勢物語暮れがたき夏の日ぐらしながむればその事となく物ぞかなしき）せんすべなき時は、程も遠からねば、彼の住ひける家に行きて見れど、有りし事どもの、ことさらに思ひいづるまゝに、悲しくて出で行くに、七郎が住むなる門べを、夕暮の人間に紛れて（源氏物語）過ぎこしみれば、人ありとも見えず。うち靜まりたる古家の、門には葎生ひのぼり、軒には忍草うち繁りて、卯月ばかりの若楓のみぞ、折る人なけれ

咲きしなへて—咲き撓むなり

春のひかり—古今集には「日のひかり」

空眺—茫然と物思するなり

によび出て—うめき出すなり

き入れし岸根には、山吹咲きしなへて、妻こひそむる蛙の聲などもいと近し。（萬葉かはづなく神なび河に影みえていまや咲くらむやまぶきのはな）日も夕影に（萬葉）なれば、山々は霞みわたりて、入相の鐘の聲の遠く響きくるも、ありし西山の寺々にやあるらむなど思出づるさへはかなく、いと悲しとばかり、庭に立ち出でて見れば、煙りあへる森のうちに鶯の啼けるを、

春の野に霞棚びくうらがなし此夕ぐれにうぐひす啼くも（うらがなしは心かなしなり　萬葉）

晝はまだいとのどけくて、春の光はやぶし分かずさし渡れど、（古今集春のひかりやぶしわかねば石のかみ古りにしさとも花咲きにけり）何の心もなければ、唯青き雲にうち向ひて、終日（伊勢物語）空眺するに、

うら〳〵と照れる春日にひばりあがりこゝろかなしもひとりしおもへば（うら〳〵は今云ふうららかなり　萬葉）

とも思ひ居りける。友がき（古語）のもとより、初櫻の枝を花瓶（今いふ花いけ）に插して、（古今集）露うちなどして送りけるを、床の前に据置て、つく〴〵と見るにさへ、なきて別れし人ぞ戀しき（後撰集櫻花雨にぬれたる顏みればなきてわかれし人ぞこひしき）とも、によび出でける。さて友だちの許へ返り事するとて、文の

いふの如くになむなるに、遠き國に發旅（日本紀）せむこともうしろめたければ、癒りはてんまでは此家に殘しおくべしと心がまへしけり。されど、「此家に起き臥しては、種々思ひいづる事も多く侍り。いかなる山里にも立ちはなれたる所に、靜にてあらむは此上の願になむ侍る」ときこゆるに、ともかくもとて、さるべき醫（古語）又よく扶け見とるべき老女どもを三人四人つけて、紀伊の郡深草の里に靜なる庵もとめて引きうつしけり。さて彌生にもなれば、八郎は東へ下りにけり。宇須美はたゞ果敢なく敢なかりし別をのみ忘る時なく、奥床に（萬葉）ひとはしら（日本紀一體といふ義）の御佛を据ゑたてまつり、さて亡人の法の名をその佛の御胸に書いつけて、朝夕花を奉り、水を奉り、今は一時も早く天路にまれ、（萬葉）黃泉にまれ、（萬葉）坐さむ所へ參りて、ひとつ蓮の臺とやらむに住まひはてむ願をのみぞ立てける。家は野邊近き（古今集野邊ちかく家居しをれば鶯の啼くなる聲を朝な〳〵きく）ところにて、水の音も淸く、心もすみ渡るに、いさゝ叢竹吹く風も、（萬葉我宿のいさゝむら竹ふく風の音のかそけき此夕かも。いさゝは小也）處がらいとものあはれなり。庭の面かき拂はねば、春の草やゝ生ひいでて、それと知らぬ花どもの綻びいでたるに、水せ

いゆきもとほり—躑むなり

公の御おきてごと—檢死等の事なり

朝かげ—朝日の影

て、事の始終あはやと聞きるしが、七郎が振舞を見るより膽魂を失ひ、御經をば火桶のなかにかい落し、おのれは沓も穿かで、そこはかとなく逃げいでしが、西山のこなたかなたを日の暮るゝきはみ（萬葉）いゆきもとほりて、（萬葉いは發語行戻る也）やうやく心地づきて院に歸りしを見れば、深く楚原（日本紀しもとは木梢林原なり）にやまぎれ入りけむ、裳の裾も衣袖も、唯まよひにまよはし、脚には糞泥（祝詞）などを踏みつけて、目は白目がちになり、（竹取物語）顏はたゞさ青（萬葉）になりて、その後四日五日物も得たうべで病みふしたまひけるとぞいひし。

よみの卷

かくて、公の御おきてごと果てて如月にもなりけり。

さきだたぬくひの八千たびかなしきは流るゝ水のかへり來ぬなり（古今六帖後悔の詞をかけ合せてよめるなり）

これはその頃母の詠みける歌とて、人の物語らひける。さて八郎はやがて守の御供にてまかり下るべくしけるに、宇須美その後は頭も上げでわづらひつゝ、身は朝かげ（萬葉瘦たるをたと

心の外に—心ならず

れば、心の外に、そこの家と我まづ離るべき振舞を見せけるなり。こは心なき業なれど、人として子を思ふは夜の鶴にも劣らめや、まして鹿もの一人子（萬葉卷は子ひとつをうむ物故に冠らすことゝす）にてなむあれば、宇須美が身に報來たらむ事を思ひ恐れて、忘るゝ時なかりしに、かゝる事に成りゆきしは、御身その占の祥に當り給ふとなむ思ひ晴け給ひてよ。又此事をうち明して聞ゆべうも思ひしかど、七郎中々祝部（萬葉神主なり）やうの詞を聞き得べき人にあらず、しかは我が愚者（萬葉）なりと旬り笑はれむも面なしと思ひて、わざと心なくふるまひてし。猶此上にもかゝりしてふ（斯々ありしといふ事也）ことは、我ならで知る人もあらねば、いよゝ（萬葉今云よいよ〳〵なり）母ぎみ兄君とは疎くもなりはてむ。しかして此騷をしづめて後、なき後をば懇に弔ひてまゐらせむ。唯かへす〴〵も今はの際に心なしと思召ししめ給ひつらむが面なく悲しき」とて、聲をはなちて泣きけり。さるあひだに人騷ぎ立ちて入りくる音するに、さらぬふるまひもてなして、なきがらをかい繕ひつゝ、一間にやすらひをりけり。時しもけふは西山の僧都を迎へて、月並の祈を申させてありつるときなるに、此僧都仁王經を讀みさし

わくらはに—幸になり、原本前に播訓せり

空しき屍を抱きて、涙は溢落ちて、（古事記）しばしありていへらく、「さても敢なかりけることよ。此八郎を鬼とな思召しつらむ、獸とな思召しつらめ。魂もし體を離れ給はずば、八郎が申すことを耳に止めて、十が一も恨を霽け給へよ。御身宇須美と氣色ある事は始より知りつゝ、もとより好き間なり、ことさら七郎には一たび物の報すべき事の侍れば、わくらはに迎へ奉り、母君をば親と崇まへ參らせむと思ひ居つるに、不意なく夕占（萬葉ト者なり）の者入り來りしに、そこと宇須美が間占はせさむらふに、つら〳〵陰陽の相を考へみて言へるは、此の間大いに良からず、若し逢ふときは二人ともに命あらず、又離れてすら何れか片々の命は極まりたり。これまで多くの人の間を考へ見つれども、かゝる奇しき惡しき御中は侍らず。早く避け離ち給はずば、禍來るべしといひ敎へ侍るに驚き、さるにても思ひ設けし事なれば、天地に祈り返しても添はせ參らせたく、その後四たびまで占を問ふに、皆初聞きつる詞の如し。さるは力なし、如何に離るべき術あらむと心を苦しめ、夜に日に思ひめぐらせしかど、すきまなきあはひ（源氏物語むつまじき御中をしかかけり）と見つ

のけざま—仰けざま
たかむなさか—高胸先
犬じもの心—犬の如き心
はたゝち捨てむ—又汝を斬り捨てん

（萬葉）も出で來ば、そこの御爲にも良からじ、心を潛めて答へたまへ、承らむ」と聞ゆるに、八郎頭をうち振りて、「おのれ先に何事を聞え置きつるか、事の繁きにうち忘れはべる。あなかしましのことや、いつまでのたまふともうけひくまじ」と言ひ捨てて、其席を起たむとするを見て、かへも今はと思ふけしき見えければ、「いでや八郎よ、其處にありて此の丈夫が振舞事を見給へや」と、男健に健びながら、かへが衣の襟ひしと（萬葉）掴み、引き寄せつゝのけざま（竹取物語）に押へ、太刀を拔きてたかむなさかを刺す。（古事記）八郎驚き起ちて、「さばかりとは思はざりし」とて、その柄を取らむとす。七郎背をかへし、八郎をにらみ（古語）ていへらく、「汝が犬じもの心をもて、かくはかなき目を見するなり。此の太刀の乾かざるひまに、はたゝち捨てむ事はいと易かれど、我母長きいたづきにかゝりし時、汝人の心をもて看取りくれつる禮に、命は汝が物となして、まかり歸らむずるよ」と言ひつゝ、二たび三たび刺すほどに、熱瓜如て（古事記瓜の翼はなれのごとく也）死にいりぬ。骸は轉臥（萬葉）まゝに捨置きて、「此うへは始終訟の御庭に申さむ」とて出でける。八郎起つを遲しと、かへが

のたまふなり」—原本のまゝ

とへばかくいふ—兎言へば角言ふなり

何とか見給ひき—原本のまゝ

心をもて返し給ひつる。先づかへが罪承はらむずるまでは、此文は得こそうけひくまじけれ」とて、袖より取出投げかへしたるに、八郎氣色を變ていへらく、「既に父母の心に背ける妻を離るは丈夫の道なりてふことは知り給はずや」と聞ゆるに、七郎、「たとへさあるも、一日も此の家に住まで、そこには事へまるらせず、何の御つかへを見て心に適はずとはのたまふなり」と應ふに、八郎言はむ言葉なく、「とへばかくいふとはそこの事なり。何にまれ承引くまじ、早く伴ひてかへり給へ」と聞ゆるに、七郎色を變へて、「かく道理に當る事も否みたまふからは、何の耳に何の口をもて辯め聞え申さむ。そこと既に約め參らせし事あり、よも忘れ給はじ。又我太刀のゆくりなく（日本紀不意の義）折れたりし事をば何とか見給ひき。そは言ふべからず、ことさら宇須美ぬしは一子におはせり、かへまた我が一人の妹なり、生きとし生けるもの憐みの心無からむや。此のうへはたとへ理なき事なりとも、愛しと思ふ心ひとつをもて、よろづ承引き給べかし。七郎斯く腰折りて申すからは、この上は一言の御答によりて、かへも生きては返らうまじけれ。さる騷

うしろめたし―不安心

る。さて八郎はおのが心のまに〳〵、さかり文（要には去状をいふ）は書せしかど、かくて置かばうしろめたしとや思ひけむ、東の京（朱雀道より東を云ふ）に從弟のありけるが許へ、人ふたり添へてさきに早や遣しける。七郎はかゝりしとも知らず、日頃に變りたるいでたちして、つと簀子にのぼるに、八郎おほいに驚き、「こはなでふ事か仕構へたまふ、よも此方へまうで給ふにてはあらじ。かゝる姿は娶（古語）の祝事にて侍らむ、いづれの嫡妻となりて坐するや、さても俄の事なり」と、あだしぶりて（よそがましきなり）聞ゆるに、七郎聞きて、「いな、こは是の若子の嫡妻に參らせむとてこそ伴ひ來つれ」といふ。「こは思ひよらね、さきに中だちの人に聞え參らせしを如何にとか聞き取り給ふ。ことさら宇須美も從兄許つかはしたれば、今はこれにあらず。そはさまれ、（夫はさもあれなり）心得もなきに、押してかく物し給ふこそいと憎けれ。此方とあらば、幾度のたまふとも、しか答へまゐらするより外はなし」と聞ゆるに、七郎禮正しくして言ひける樣は、「のたまふこと、理なきにもあらねど、既に妹なるかへ、そこの愛子と、知りたまふごとうけひたり。なでふ事無きに、押して父の御

我がせこ—我夫
のらざりしこと—なのらざりし事

と書きつけて、「老の繰言には侍れど、我がせこのゝたまひしごと、此子が名を松となむのらざりしことの、今にては悔しく思ふなり」とのたまひながら、

名をせめて松としよばば老の身も千歳の蔭にあえなむものを　（あえはあやかるなり出所萬葉）

「かくいふも心細きは唯老の癖なり。さはいふものの、そこの伴ひておはさむからは、八郎も又岩木にはあらじとなむ覺ゆれば、心強くおぼせ。何とてさるかなしきめをば見せ參らせむ。今日はことさら吉日なりとト部（古語）の人も來て申せし。時も移るべきあひだ、早く祝事まうけたまへ」と、せつに（伊勢物語）聞え給ふに、總次設けたる夕飯を禮（日本紀）正しく持ちいでて備へまゐらせける。さて酒は三度（古語）進めまゐらせて、ときにもなれば、七郎いそがしたてゝ車にかき乘せけるに、丁（日本紀爰にはやつこやうの者に用ふ）樣のものまでも、それ〴〵やとひ（古語）置きぬれば、やがて押立て出でむとす。母おくり出で、門べにしばし立居つゝ、時計（源氏物語）ながめ出して、そのまゝ戸の閾にうち伏して泣きいり給ひけるを、「こはかゝるほぎごとに忌々しき（源氏物語）御涙かな」と勵したてゝ、總次が肩にかけてかき入れ參らせけ

はぎごと—祝事

あとひて—作ひて

席二枚、韓竈四具、珠の椀形三くち、（延喜式 桝の類）こは父の惜しみ給へる物よと思ひて、これまでは貯へ持てさむらひしが、妹が一代の際のほぎごとに（日本紀）謀りかねて、此のくさぐさ（古語）を、母にも聞えまゐらせで、この程代となしつるに、三十枚ばかりの黄金を得て候ふまにまに、かゝる祝事に著んずる衣、くはへ持つべき器やうの物までも心構し置けり。さて申の刻ばかりにならば、七郎彼をあとひて、八郎許推して参るべし。さる上にも否まば、ふたゝび此の世にて此子が面見給ふべしとな思ひたまひそ」といふを聞きて、かへも家兄が心深きをおしをろがみ（祝詞）て、無片氣と泣きける。さて、「しかのたまふごと、心も清らに定めてをり候へば、くちをしき振舞は見せ参らすまじ」といひつゝ、唯今よみ置きたりしとみえて、一くさ書いたるを懐よりとうでけるを見れば、（源氏物語 取出す也）

　色かはることとの葉草にたまのをもいづれか露ときえであるべき

とあるを、母つくづくと見て、涙おさへながら側なる筆をとりて、

　もしも世におくれて住まば露の身をいづれの草におきや頼まむ

やさしみ―恥辱

希人實―正客

を一つに極めて、親兄にもやさしみなかけ給ひそ。己れも思ひしめて候ふ事の侍り」と聞ゆるに、母も、「男女の中は因るも離るゝもある習なれば言はむ方なし。唯八郎が訇り誇りて貶しめたるこそ堪へ難う思ひたまへらるれ」とて、胸痛くし給ふさま、七郎見て、「しか思す旨は刀自よりもやつがれこそ勝りて候へ。此事においては、下官此のほど計らひおける事あり、いかばかりの事ありとも、かならず其際に至りて驚き思すべからず、いかさまにも恥をとらざる様に計らひ仕らむ」とて退きぬ。（源氏物語）さて俄に湯あみ、所を掃き清め（萬葉）かねてかくとしつらひ置きしにや、湯かたびら（和名抄今云ふゆかた）様の物までも、新に縫ひ仕立てたるを出し、妹に湯あみさせ、髪あげさせ、（萬葉髪あぐるは男みる時の例）さて白き絹の衣五つをなむ著せて、上に領巾なす木綿を被ぶらせ、（領巾は上代女の冠り物今の綿帽子にあたる）總次には夕飯酒などの事よく設けよとなむ宣りて、妹が手をとり上坐に（日本紀）誘ひ据ゑて、希人實とし、母に對ひていふ様、「知しめすごと、家貧しくなりて後は、傳へ持ちたる杯、陶物、（古語）文、卷物の類までも、米黄金にかはるべきほどのものは皆失ひはてけり。唯韓鞍一具、（延喜式）唐

うけひて―誓ひて

西山物語

卷之下

露の卷

仲人は彼の文を懐にして、七郎親子が前に來り、「おほし廻すことまでをさ〳〵うち包はして源氏物語聞えしかど、なか〳〵承引かず、そが上に云々訇誇りて聞え給ふ故に、二人の君だちの密に古語うけひておはする事どもを申し出でさむらへば、吾子古語を呼びいだし、押してかくなむ書かせて、うけひ文までも卷き込めさせておこしたまひける。此上はやつがれも申す言葉なければ、退ん出て候ふ」と語るに、母も七郎も氣色を變へければ、かへは次の一間に聞きゐて、やと聲をたてゝ泣き伏しける。七郎妹をよび出して、「これ見給へ、かゝる際には思ひ迷ひてかひなくくちをしき名をも後の世に殘すものなり。心

直に—眞直に

先愛子の君を爰に召して、萬葉いかなるぞと御心をねぎし古事記今云ふ吟味也給へ」といふに、八郎もだもやらず、萬葉爰には今云ふもだしがたくにあたる宇須美を呼び出し、「汝七郎が妹と誓ひつるか、直に申さずんば、此父が名の恥しみもいでくべき」と責めけるまゝに、「さる事毫末日本紀ばかりも違はず、唯父の御哀みには、彼のをとめを我嫡女としてたうべよ」と詫びける。八郎大に怒りて、「憎きものの業かな、己ひとり子古語にあらずば、殺害祝詞せむずるものなり。さらば今速かに離れ果つべき文認ためてかの許へ遣すべし。さる心なくば、父また遠き國にも追ひやらむ。日本紀いで〱父と離る、妻とや離る、直に答せよ」も責めけるほどに、父のことばのいと畏ければ、悲しとは思へど、誓ひたるしるし文を爰には起請にあたるなく〱巻きこめて、長く離りはつべしてふ文を、父がまのあたり古語日前なりに、わなゝき〱書いしためて奥に、

みつあひによりてつけたる下紐の絶えむと更に結ばざりしを三ツ合の糸は三ツ組の糸なり出所萬葉

とあるを、此うへは詞なしとて、仲人はそを懐にして退出けるとぞ。

しかは野伏山伏の云々ーかくの如く彼は野伏山伏の類ぞとなり

なでふ事なき事を一何とて由もなき事を

色よく母君に事へ奉れ」とぞ聞えける。さて八郎は仲人をもて聞えつるまゝに、と
すゞろけ（伊勢物語不遭の意）なる顔して、「こは思ひ依らぬ事をこそ承はれ、もとより七郎とは仇し
なかにもあらねば、彼が母をば我親と思ひ、我子をばうま孫とも弟とも思ひ給はりて是
までは過しつれど、己は去年のしはす、（萬葉としはつるの略語）知りたまふ如、七郎が太刀合に打ちか
ち、今はおほやけの御いへの子となむなりし上に、家もかく富み榮えつ、彼は武家（日本紀）
にこそあれ、頼みまゐらする君もなく、飯ぼ（日本紀飯粒也）ひとつ我物とて持たる領所もなし。
しかは野伏山伏の（拾遺集山伏も野ぶしもかくてこゝろみつ今はとねりのねやぞゆかしき）類なり。さるを彼が妹を我子の嫡女（日本紀よめ也）
とせむは、千曳の盤石（日本紀）と瓢をかけて、いづれか重きとはからむがごとし。たとへ天
地は倒になすとも、（源氏物語）此事においては承引くまじ、歸りて七郎にしかのたまへ」とぞ、
言ひ放ちける。仲人もさるものなりしかば、「こは易からぬ事をうけたまはる、なでふ事
なき事おしてかく聞え參らせむ。御愛子宇須美ぬしと七郎の妹かへをとめとは、去年よ
り密かにいひ契らひて、神に誓ひて違はじと書きかはし給へる事どもは聞しめさずや。

うちなぐりて―投げ棄てて

遊行女婦子やうの云々―遊女などの男子を見る如く輕薄に思ひ切るべからず

もふなりけり」と、うち泣き〳〵聞え給ふにぞ、如何なる物の報にか、かゝる絆にかゝりて(伊勢物語)親の御心を苦しめ參らする事よと思ふに、胸のみ迫りて、いひ出でむ言葉もなくてあるに、兄の七郎家に歸り來て、「こは何事にか、親子泣きそぼち(日本紀をぼちは濡るゝ義なり)てやおはす。爰に七郎が申す事を聞き給へ。かねて宇須美とかれが中は我もよく知りて侍り、八郎も亦よく知りて侍るを、わざと知らぬ顏にて、今は世に榮え誇る心つのりて、もののふの道をも忘れ、おのれに一たび報ふべき事あれども、それをもかい遣り、彼をもうちなぐりて、ひと時も早く此處を立ち去らむ心構(日本紀)する事は、己れあかき心をもてなむ見おきつ。犬じもの(萬葉犬の如きといふ意)八郎を妹が親と敬はせむは朽ちをしきことなれど、又若き者の思ひあひたるを、情なくかい離さむも心なきに似たれば、己れ先に媒人(催馬樂)をもてしか〴〵聞え置けり、そが返事を待ちての上に、下官(日本紀)又思ひ定めぬる事あり。かへも武士の家の娘なり、遊行女婦子(萬葉)やうの男見たらむ如、仇にな思ひはなれたまひそ。此の家兄かくある間に、恥はえこそ與ふまじけれ。涙も押拭ひ、髮も梳りて、(古語)氣

八百日行く——濱の枕詞

たまふにぞ、眞袖(萬葉集袖なり)を顔にあて、うつぶしに伏して、聲たつばかりに泣き入りつゝ、答(いらへ古語いらへはあへなり　あへはもてなしなり)も聞えぬを、母なほ心もとながりて、(古語)「何どてのたまはぬぞ、何事にまれ、親に隔て給ふ事やはある。そも唐國の事は知らず、此大和の國に神の生みひろめ給ひし人の數、八百日行く濱のまさご(萬葉集八百日行く濱の眞砂も我戀にあにまさらめや奥津しま守)に比へて、よむとも劣らめや。皆親あり子あり、兄あり弟あり、さるもの將これ己が世々(伊勢物語等には自分をいふ)にてところを異にし、家を異にして住むぞかし。かく多きなかに、此の嫗が娘とては御身ひとりならずや、そこの親とては此の嫗のみならずや。さるとほしき(萬葉)親子の中も、幾千世かけて住まふべき此の世にはあらず、殊に親と子は一世の契とこそ佛ものたまひつれ。また世の中の常なき事は、若きもあだし野の草葉の露と消え、老いたるが又高砂墨のえの松と世に榮え殘るならひも侍れば、此のほどの有樣を見るにつけて、何事も心がかりにて、朝夕賴み奉る御佛に向ひては、ひと日も早く老の身を佛の御國に迎へ給はれかしと願ぎまゐらするなり。かゝる心弱さも世のあぢきなさを(萬葉集妹の字意にて口にいはれぬ義なり)身ひとつにせめお

ひとつ心に―同心に

さとしたまふ―覺り給ふに同じ

知れず悲しくなむなりける。かへが許へ、「かう〳〵（伊勢物語斯々なり）事迫りぬ、いかに成りはつべき」と聞えやりけるに、せんすべなく（萬葉今云ふせんかたなくなり）て、「此うへは夜の紛にも忍び出でて、末はかたゐ（伊勢物語乞食樣のもの）とも成りはつべきか、又いかなる淵河にも紛れうせなむや、御心だに違ひ給はずば、自らしかせむより外の願はさむらはず」と聞えけるに、男も唯ひとつ心に思ひ定めける。母は此のほど打ちつゞきて怪しき夢どもを見るにつけて、娘が痩せ衰へて物思ふ氣色のたゞならず怪しくのみ思ひしかば、兄弟のあらざりける暇に、近く招きていふやう、「など（何とてなり）か此程は飯も參らず、髮なども打ち亂して、ひたすらに痩せ細り給ふぞ。こゝろひとつに籠めて思ひ迫ることには、よからぬ迷こそ出でくるものなれ。かゝる事の募には、親にも哀きめ（古語めはむねといふ言なり）を見せ、兄弟にも背きはつる例どもは、數々の物語どもを讀みてもさとしたまふべきなり。若し思ひつめ給ひしことあらば、死ぬに勝りて重き事は、人の上には侍らず。親兄弟もかくてあれば、如何樣の事ありとも、惡しくは計らひ給ふまじ、心にある事は包まで此親に聞え給へ」と、懇にの

片歌―短歌を三句にて詠みとめたる歌の一體なり

卯月ばかりは―四月頃には

計らひて參らせむ。今日なむかく詣で來しも外の祈にもあらず。ひとのよわみには、病などこそかゝり來るものなれば、心を取り直して、此の嫗が逢はせむといふ時をなむ待ちたまへ。いざ歸るべし」と聞ゆるに、よし〳〵しくも（よしみ〳〵しくの義 したしくの意なり）のたまふ物かなと聞えたり。（源氏物語）さて出で來る道のかたへの松に、彼の男の筆にて歌を書いて付け置きたり、見れば片歌（古事記）にて、

待ちしとは松に問はさね木のもとに

とあるを見るよりぞ又悲しくて泣きける。

わかれの卷

かねて卯月ばかりは東へくだり給ふまべし、と聞え給ふひとごのかみの、俄なることに、如月末か、彌生初には、西の國より上り來給ふべし、しかれば八郎も御供に參るべきこころがまへ（源氏物語 心支度也）急ぎ物せよと仰せくだされたるに、父は勇ましげなれど、宇須美は人

人こそ―人は彼の人即ち宇須美をさす

うしろめたく―後目痛くの約まりしことば

つきなき事―由緣もなき事

因りし中―相依り相親しみし男女の交

と聞ゆるに、娘は胸潰れて、（源氏物語）人こそ先に往きておはさめと思ふに、立ちても居てもあられず。天地にたちませる神々達、自が命を一時につゞめ給ひても、今日ばかり母のいたづきをなむおこたらしてたび給へと、心ひとつに請祈のみ（萬葉）ける程に、神も憐し（日本紀）とやおぼしけむ、やう／＼午過ぐる（晝過なり）ばかりにこゝち晴けて、誠に日も麗らけし。（古語）今よりや詣でむと聞ゆるに、いと嬉しけれど、時の移りぬれば、人や歸り給ひけむと、又うしろめたく（古語うしろ見たく也、心もとなき也）も思ひつゝなむ出でける。さて松の尾に參りつれど、大方にもえ拜まで、爰にや彼處にやと見れども、人のおはさぬに、さてこそと悔しく悲しくて、涙のさとこぼるゝ（源氏物語）を母見咎めて、「何をか心弱く物し給ふぞ。爰にはつきなき事なれど、人の緣は神のしたまふことにて、因りし中も離るゝ（因離二言共に萬葉）ことあり、離れしも又因る事あり、さるよりぞ、嬉しさも悲しさも、世の有樣も、唯これが常なればと心をやらむ（古語今云ふ心はらしなり）より外はなし。かくこそいへ、自も生れながらの老女にもあらねば、若き人々の心をさとし知らぬにも侍らず、さな思ひ沈みたまひそ。如何にもして思ふ如

霧のまがひ云々―霧の立ち迷ふひまにも隱れて逢ふべしとなり

から―空蟬のもぬけのから

春來ぬと人はいへども鶯の啼かぬ限はと思ひをりしに、いと珍かなる初音なりける。さらば啼きつる花は折らでや待ち參らすべき。古今集春來ぬと人はいへども鶯の啼かぬかぎりはあらじとぞ思ふ、同、待つ人も來ぬ物故に鶯の啼きつる花を折りてけるかな　うけたまはる如、去年にも似ぬ御隔かな。しかすがに　萬葉今云ふさりながら也　かくては止みなむや。さるは明日なむ此の御神に詣でなば、霧のまがひにも夢ばかりの逢ふせははべらむとうけたまはるぞ、こはこれ神のしたまふなりと喜ぼひに堪へねば、頓に答へまゐらするなり。

朝霞たちなかくしそ松の尾の森のしたみち妹や來まさむ

また、

戀しきに侘びてたましひ出でていなば空しきからの何や殘らむ　古今六帖

唯此頃はからのやうに　源氏物語　なりて、夜も日も辨別ず　日本紀　をりさむらふ。

となむ書いとゞめける。睦月八日になれば、宇須美は常する神まうでにかこちて、古語　つとめて　古語　出でゆきける。さるにても怯なむ、今日は心中惡しく覺ゆるなれば、得參るまじ

おもひたまへらるれ―思はるの敬語

ありのすさみに―何時までも其人在りと思ふ心の油斷にて

たちかへる年の麗けさに、氷れる涙は解けやらねば、梅に來啼く鶯の、思ひもなげなるを見るすら、羨みおもひたまへらるれ。古今集雪のうちに春は來にけり鶯のこほれるなみだ今やとくらむ さてそも蘆まの鴛鴦のたち離れたるばかりに住まひてなむ侍る事を早くも知らば、去年の春秋おなじ住居にさむらひし時は、ありのすさみにて、仇にや契りまゐらせし。古今六帖ある時はありのすさみにかたらはで戀しきものと別れてぞしる。伊勢物語おもふかひなき世なりけりとし月をあだにちぎりて我やすまひし あすは松の尾の御神に、母刀自にあとひて萬葉あともひての義 詣づることの侍る。知らぬ顔に詣で給ふまじや。人まの萬葉人も居ぬ間をいふ 侍りてかくなむ。

君にこひ明日を逢はむと松の尾の神にたのみてけふを暮しつ

また、

世の中の苦しきものにありけらし逢はずば戀に我や死ぬべき 古今六帖

とあるを、男いと嬉しく、とみかうみ伊勢物語 するに、人もあらざりしかば、やがてかい認めて、女の童に傳て返しける。

ひて歡び騷ぐこと

からさまなりしかば、風は吹き入れて燈火はきえつ。下樣の男女も、このほど夜晝と立ち騷ぎてくたびれふしぬれば、唯二人なむ天の河原に行き合ひたる心地して、此の程心の外に隔りし事ども、末の契をさへ神に誓約て（日本紀古事記）語らひつゝ、なへたる（愛には著馴れたるをいふ）衣を引き被き、（源氏物語）琴を枕として臥しけるとなむ。（源氏の詞をとり用ゆ）

文の卷

さて後は是かれにつけて、七郎八郎が中ぞすこし疎く成りにける。是につきては、二人も今までの如く互に立ち入らず、唯ものの便に書きかはす筆のすさみを逢ふに代へ（伊勢物語）（おもふにはしのぶる事ぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ）つゝ過すに、春にもなりにけり。ことだつ日（伊勢物語むつき親族あつまりていはふ日をいふ）なれど、互に出で入りて酒のみする（古語）事もせずなむなり行くに、いと苦しくのみ覺えける。さるは琴を枕としける曉を、おのが後夜とは詠めるなるべしと、（古今集しのゝめのほがら〳〵と明け行けばおのがきぬ〳〵に成るぞかなしき）今はた思ふなりけり。物の便あれば、小き疊む紙に書きて（たゝみ紙也歌集にしか書り）遣しけるは、

さかしらをすと—賢しき様をすとて

橡子—どんぐりの古名

うたげゑらぐ—手を打ち歌うた

と扇をうち鳴して歌ひ合せける。集ひ居ける賓客たちは、夢にもかゝる事は聞き取らざるえみしども（古語）なりしかば、唯よき聲なりと稱へて、引き受け〳〵呑む事のみす。中に醉ひなき（萬葉）する男、泣聲に聲張り上げて、

あな見にくさかしらをすと酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似る（萬葉）

と歌ひたるに、かたへに酒はえ呑まで、魚をのみ摑みてうちくらふ男、「こはやすからぬ歌をうたひ給ふものかな、さらばおのれらもうたひ舞はむ」とて、

あな見にく、酒うち呑みて眞赤なる、人の顏こそ猿とかも見め。猿よ〳〵何ぞの猿、嵐の山の猿ならば、顏を嵐に吹かれて、色の赤きはうべなり。おのが尻の赤きは、小栗を折る時、谷風や吹きあげし。橡子（萬葉）を拾ふとき、かりばねや（萬葉木萱の刈株なり）つきたる。猿よ〳〵赤猿。

となむ舞ひ納めければ、「此おぢが顏を猿とばしのたまひつる、朽惜しや腹惡しや、いかにせむ」とぞ泣きける。かくうたけ（古語）ゑらぐほどに、みな人醉ひふして、閉すべき戸もあ

峰の猿も寄り來べくなむ—俊蔭の女、山住の頃其子に琴を敎ふるに諸獸集り聽き猿は山果を贈りたる由見ゆ

こと問はぬ木—物言はぬ木

はりをみとりてをりさふらふに、琴とても塵かき拂ふばかりになむかい遣り置きしそが上に、此の歳月こゝろゆかぬ事どものみうち重なりて侍るに、少し習ひえたる手業も皆忘れにけり。仰にさふらへば、なま〳〵（古事記すゝまざる意）も彈くべけれど、さしあたりては掻き合すばかりも覺束なくてなむ」と聞ゆるに、「そは佗し人の申すことなり、かゝる中に何の御隔心か侍らむ、唯一手遊ばして聞え給へ」と、かの宇須美なる若人もかたへに出でてすさめける（古語なぐさむる也）まに〳〵、（萬葉今云ふまゝに也）「いと幼かるべし」といひながら、峰の猿もより來べくなむ引きならしける。（うつぼもの語）さて聲は佛の御國にあるてふ鳥の（迦陵頻伽をさしていふ）囀りいでたらむばかりに打ち上げて、

いかにあらむ日の時にかも聲知らむ人のひざのへ我まくらせむ（萬葉）

とうち返し歌ひながら、目は細くて宇須美が顔をなむうちまもりける。宇須美は聲よくて、豫て今樣を歌ひけるが、とりあへず、

こと問はぬ木にはありともうるはしき君がたなれの琴にしあるべし（萬葉たなれは手馴なり）

て、（新古今集になりやしぬらむ月影のきよき河原にちどりなくなり）東白の空いと明くなりゆくに見れば、松のうへに白き鷺の宿り居てありけるのみなり。さても怪しかりし夜の有樣なりと、今ぞあさましく（古語怖ましの意也）なりて、身を震はかしつゝ家にかへりけるとなむ。

琴の卷

八郎は太刀合にうち勝ちてより、その名四方八表に（日本紀）高く、世の敬ひも日に月に（萬葉）勝りぬれば、おのづから頓に幸をなむ重ねしほどに、夜晝となく、日は七日よるは七夜てふ間、人を集めてうち樂ぐ（古事記）聲里もとゞろ（萬葉）に聞えわたりける。けふは七郎親子、弟達も、賓客實（伊勢物語さねは眞也今いふおもの意なり）として迎へ奉らむと申し入れけるに、母も七郎も心に染まざりしかば、「風にあたり頭痛し」となむきこえて、弟の總次かへ二人ばかりをぞ遣はしける。さて何くれとなく（源氏物語今何かと云ふ義）あるじぶり（古語今云ふ饗應）して、夜にも入れば、かへに琴の一手をなむ望まひ（まひの反み）ける。かへ謂へらく、「知しめす如、春より母刀自（古語とじは稱號）のいた

ほざき―嘲弄

あらたま―荒魂にて修羅の妄執をいふ

男健ぶ―逸り猛むこと

郎はゝゑみて、「こはよき敵を得つる物かな。我が遠祖は、湊河の軍に勝ちて、そこの頭を賜はりし時、側に侍りける太刀をかく捨て置きて、くさ〲のえせつはもの（雑兵）どもの佩物となさむは朽惜しき事なりと思ひし故に、持ちかへりて家の寶とし、その裔僕にいたるまでも敬ひ尊むは、天が下に武士の大人と聞えしそこの勢を尊むならずや。さるを此の太刀に心を殘し、鬼となりて再び顯（古語）出でたるは果敢なしや、心卑しや。かゝる鬼等を太刀もてきらむは、やいばに糞を（古事記日本紀萬葉）塗るがごとし。唯面に唾を吐きかけてなむ追ひやらむずる」と、ほざきに（古語發言なり）ほざいて詈しかば、「否々武士の道はさる事にあらず、我が屍に頭のなきは、いくさのならひなれば、さるにてもいはず、武士のからだにしばしも佩ける太刀のなかりしと人のいひつらむ、其の恥しみ骨にとほり、その怒あらたまにしみて、今又鬼となりて來たれるも唯これなり、しか聞くも返すまじや」「いないな、さ承るとも返すまじ」「いな返せ」「いな返すまじ」といひあがりて男健ぶ（古事記日本紀）ほどに、曉がたになりやしぬらむ、河ちどり啼きとよむに、月の光はきら〲とし

堅庭―堅き大地

にかいはさみ、堅庭（日本紀）を踏み鳴し、太刀の尻（萬葉）空ざまにかへして、まくりでに（古語）とつか（古語ながきつかをいふ）を握り、「いで聞くべしや」とぞ大聲（土佐日記）にせめける。かの鬼かや〳〵とうち笑ひて、「汝は大森彦七が裔にてあるか、おのれは汝が遠祖に太刀を奪はれし楠正成にてなむあるぞ。汝が遠祖の彦七常にその太刀をはきたりしを憎みて、我輩入りかはり立ちかはり是を奪はんと謀かり（伊勢物語）しに、彼（彦七をさす）をば苦しめたりしかども、さる祈どもせしにうち負けて、終にとりかへさで數多の月日を經しが、いろ〳〵さとしごと（源氏物語奇怪）奇しき事どもを振舞ひしかば、是にまけてや、汝まで七代が間は、我がすむ山に置きたりしなり。然るに汝又こがねを持て來て山の主の心を蕩し、再びとりかへせしぞ心やすからね。又このほどまで汝が母を惱ませしも我がわざにて、その後のさとし事も、外よりなし來る事にあらず。今唯今、直にその太刀を我に返さば、此後さいはひ來らむこと掌をかへすごとくならむ。かくても否まば、汝が兄弟の間に祟出で來て、此太刀になむ刺れて死ぬべし。心を直に、勢を覆へして、我がいふことに隨へ」ときこゆるに、七

事負牛—牡牛の強くたくましきをいふ
倭鞍—下鞍なり

事ならずや。なでふ（伊勢物語いかなるの意）ものも、かゝる手わざのいち早きことは振舞はじ、彼見よ、目の三つある物ぞ彼處にたてり、是を見よ、首は糸のごとくて、物に纏ひありく女ぞ彼處より來、さても俳優なるかな」とて、よろづ常のごとくなれば、此勢に引かれて、總次も初のごとは驚き騒がず。もとより人にも語るべき事ならねば、先づしかして日を經るほどに、ある夜雪高く降りて、（うつぼ物語）廿日餘六日の夜の月清らかに冴え渡りけるに、七郎西の京（朱雀道より西をいふ）に行きて、夜更けて桂河を渡りて家にかへり來る道に、木垂たる松（萬葉）の侍るその上に、體は一つにて頭の七つある事負牛に（萬葉）鼻縄はげて（萬葉）倭鞍（萬葉）うち置き、身には白き糸もて縫ひたる甲（日本紀）を著たる武士の、向背（古語）に白き幡をなむ插したり。そを見るに、流れ出でたる水に散り浮きたる菊の花を縹色に染いだせしが、月に映りてさやかにぞ見えたる。七郎心に思ひけるは、此程怪しけなる鬼どもの躍り歩きつるは珍らしからざりし。此鬼ぞいと心にくき奴なれ。さまれ、彼の家の印をさしたるは心得ず。「汝が名のらさね。（萬葉のるは告る也されの反せ也）おのれこゝにて聞くべし」と、袴の端折りて高く帶

どよますー震動せさす

の鳴く聲しきりにきこゆ。かへは魂ぎらして（源氏物語）母にひしと寄り添ひをれば、總次は杖をとりて、かの刺鍋を打ち落さむとするに、なか〳〵漆もてつけたるごとく、抉じて（古事記）放さむとすれどもかい放れず。杖をもてうてば、此鍋狐の聲を出して鳴り渡りける。あな憎や、いかなるけちにかあるとも騒ぐに、七郎は唯見やりしばかりにて驚かず。母呆れて、「刺鍋（和名抄銚子）に湯沸かせ子ども、狐にあむさむ」と、によびける（萬葉さしなべに湯わかせ子どもいちひつの檜橋より來むㇾ狐にあむさむ。吟は古語）詞につきて、その鍋大聲をあげ、「あゝしやこしや」と（古事記今云ふをかしなり）うち笑ひて下に落ちける。さてその後は家鳴り出で、簀子うごく事しば〳〵にて、晝すら、靜なれば、火桶陶物の類、金椀（古語）柄杓（催馬樂）やうのものも、おのれと躍りいで打ち合ひなどし、解洗衣（萬葉洗濯物也）脚結（萬葉今云ふ脚半股引の類）袴やうの物も、竿に懸りながら人の行くごとく空に馳けり歩き、夜はしも殊に奇しき鬼どもの集り來て、鳴りどよます事さらに止まず。七郎も母も、「こは有る事にて、狢（日本紀今云ふむじなゝり）樣の物の戲れ遊ぶなり。貧しき家にはかゝるためし昔よりある事なれば、よき俳優（日本紀今云ふ役者やうのもの）どもを据ゑて慰むなりと思へば、いと〳〵おもしろき

ごときは、前後にむかふとも、たゞ一太刀にうちはらふべきを、いかなる天の祥なりけむ、たゞ一太刀あはせたるが、太刀は三段（日本紀）に折れて、たやすくうち負けき。たゞこれ時なれば、私ならずとおもひ晴けて（古語はらす也）なむまかり歸りぬ」と聞ゆるに、「さては人の誣言ならざりし。さる事の出できぬるも、かの太刀をとり返したる祟（古語）なりとおもふなり。ことにおほくの寶を失ひて、貧しきめを見る事も、よき事とは申すまじ。直に御寺に行きて、その太刀をまつり返してむや」と聞え給へば、七郎聞きて、「こはおのれが母にしては甲斐なき事をのたまひけることよ。七郎かく恥しみ（萬葉今此詞轉じて愛する方に云ふ）を受けしうへに、又しかのたまふ如くせば、愈（萬葉）人々の蔑しみを重ぬるなり。おのれ思ふ旨あれば、必ずな悔みたまひそ」とて、大盞に（古事記）酒をもり、（古語）引きうけ〱心よげに飲むを、母もさるものにて、おもふむねこそあるらめとさとしぬれば、すこし心も晴けて、ともに酒をもりて遊びをりけるに、怪しき事こそ出できにけれ。側に置きつる刺鍋におのれと躍りあがりて屋の梁につく。こはいかにと母も兄弟もうち驚くに、まだ畫なるに、狐（古語）

空頼め—當にもならぬ心だのみ

西山物語

巻之中

あやしの巻

今日の太刀あはせには、たやすく八郎に勝ちえて、守の御稱にあづからむと、神々にも齋瓶（萬葉神酒の陶なり）奉り、眞魚（古語）まうけなどして、七郎が歸をぞ待ちける。然るに、ふた太刀もあはせで、みそ〳〵逃げいでけるよし、さきだちて人のいひ聞かせぬるに、悲しく朽惜しく、いひ甲斐なく思ひ屈まりて、神にも御うらみを聞え奉りしが、さるにても人は誣言（日本紀）いふ物なればと思ふばかりを空頼め（源氏物語）にて、門にはかへ兄弟をつけ置きて、かへりを待ちける間に、七郎かへり來たれば、「けふの始終いかにか侍りつる、早く語り聞かせよ」となむ息巻（日本紀）荒く責めたまへば、七郎うけ給はり、「たとへ八郎なるものの

ば、そこの勝ち給ふには紛なし。我かゝる場に長居（古語）せむは面なし」と（萬葉面目なきなり）いひつつ、折れたる太刀を拾ひあつめて、足を早み逃げ出でければ、見どころもなき太刀合にぞ有りけるとて、來し人も本意なげになむ分れ（古語）散りけり。後にして人のいふを聞けば、七郎が持たるは銅にて造れる太刀なりしとぞ。さて八郎は多くの米を與へられ、御仕人となしたまふべきおしてぶみ（日本紀今の證文にあたる）をぞ給はりける。「又來むとしの卯月ばかりは、ひとこのかみ東（古事記日本紀）へ下り給ふべきあひだ、御供つかうまつれ、それまでは爰にとどまり居て、徒にも教へを傳へ、なごりをも惜しめよ」となむ、仰せくだされしとぞきこえし。

まよひにまよひたる—縒れもつれたるなり
人に著りて—貧乏神の人に執り著きてといふ事
能くならはしおきたるを—日頃使ひ馴れし太刀を
私ならず—公然の勝にて仔細なしとなり

る物をさへ失ひつれば、荒々しき布肩衣に、袴の裾は海松の如（萬葉）かき垂たるに、木綿もて織りつる衣の、まよひにまよひ（萬葉破れたる也）たるを著て、東の方より立出でければ、見る人、「こは貧しの神や、人に著りて（日本紀）辛めな見せ給ひそ」と笑ひける。されど丈高き男の、目は大久米の命（古事記日本紀此命眼利）にも勝りぬべし。鼻は猿太彦（古事記日本紀此命鼻高し）にしては、少し卑からむと見ゆるばかりなる、誠に雄々しき（萬葉）武士なりければ、「太刀合するにも及ばず、七郎こそ勝たむなれ」と、侍士は思ひをりける。さて太刀は白檮もて造りたる木刀にてぞありける。互に能くならはしおきたるを持ち出で、やと聲を合せて打ち合せけるに、八郎が打つ太刀を、七郎受けとむるとみえしが、その太刀段々に折れて柄のみ殘れり。よて八郎はからき目も見ず勝ちにけり。さて八郎七郎に向ひていひけるやうは、「そこの太刀たはやすく（古語）折れつるうへにて勝てるは誠の勝にあらず、今ひとわたり太刀を改めて出で給へ」となむ聞えければ、七郎答へけるやうは、「さる事にあらず、勝つと負くるは唯天の神のなし給ふなり。眞刀（日本紀）も折るれば折る時あり、今日の差別私ならずとおもへ

そこの御ひかり—其許の御恵

けぢめ—優劣

さる時はなほすら世のたゞずまひなく、日月は明しといへど、我爲には照らし給ふまじ。（萬葉）さるときは、母弟らも侍り、そこの御ひかりに當らでは、誰かはぐくみ（萬葉）賜ぶべき。かへすがへも是等の事御胸に籠めおき給ひてよ」と、懇懃（萬葉）に聞ゆるに、「否我れこそ賴み奉るべけれ」「こは恐こし、此方こそ聞え參らするなれ」と、互に信しく（古語）いひ契らひてなむ別れける。時はしはす望の日、大井の川の滸なるおほ野に幕打ち廻して、彼の西より上り來たりし侍士びと、解部（今市中の事を正す役）やうのものまで、猥に入りくる人を拂ひて、棚の（伊勢物語）外に守居けれども、此事都のうちにも隱なかりしかば、かゝる術心得ぬ民商人までも、時を違へず集ひ來て、野づかさ（萬葉高き所をつかさといふ）に登り、峰づかさに登り、木にものぼり居つゝ、その太刀合のけぢめをなむ見ける。かくて八郎は、布肩衣（萬葉）袴樣の物までも、黃金のあるに任せて、縫ひ仕立てたれば、人のがらも彌優り、振舞しとやかに立ちいでつゝ、西の　のあぐらの（日本紀等には床机などにあてて書けり）うへに腰うちかけて、むかもゝを（古事記本紀段なり）蹴出してなむ侍ちゐるける。七郎は貧しきが上に、彼の母のいたづきにつけて、殘れ

甑—米を炊く瓶なり

しげきがもとを—茂樹がもと

かにせむ。唯苦しき時になむ當れり。是につきて賴み聞え參らせたきことあり。そこの御術はことのきて（萬葉取わきてなり）我に勝り給へば、我は必ず打たるべし、さる時は我がともがら疎みて、ひとりだも隨ふべからず、しからば我此の後朝夕の糧にも迫りなむ。身ひとつにてさむらはゞ、甑は蜘の巣かく（萬葉）とも、麻の衾に雪を樂しみ、人はあらじと誇ふ（萬葉）べきが、唯ひとり子にてはべる者の憂へ呻吟ふ（古語）を見るに堪へじと、今より是を忍びかねつる、いよ〳〵さるときになり降（古語くたつはくだるなり）なば、宇須美をそこの御弟とも（日本紀古事記）おぼし、よしあるひとの娘を迎へて、早く孫をも見せしめ給はゞ、此のうへの御ひかり（源氏物語世に云ふ威光）何か侍らむ。必ず此事おん心に標（萬葉）おきて賜（催馬樂）よ」と聞ゆるに、七郎うちなづき、「こは此方よりぞ申すべき事なり。そこは常に御徒を集め給ひて、此の術に怠り給ふことなければ、おのれ如きに太刀あはせ給はむは、利鎌をもてしげきがもとを打ち拂ひ（祝詞）給ふよりもいと易くおぼすべし。知しめす如（古語）、春より母のいたづきをみとりて、心くらみ力盡き、骨も撓まり筋も弛まりて侍れば、なほに（古語）打負けたてまつるべし。

もたる—持ちたる

長兄—爰は國大名をいふ

みそかに—ひそかに

太刀の巻

西の國に領所（古語）もたる長兄（日本紀）坐しけり。此守兵の道を好みおはす御心ふかし。さるよりぞ、弓射、馬乘り、鉾を突き、太刀を合する術の、世に越えたりと聞く人をば、多くの米を賜はりて、家の仕人となむし給ひける。爰に七郎八郎あることを聞き給ひて、侍士人（日本紀）を遣し、「彼ふたりが太刀合せするをためし見よ。いづれにまれ、勝ちたる方を家臣（古語）とせよ」と仰せありければ、やがてまづ此事を先だちて案内しける程に、友がらなるものども、「こは氏の神の引き給ふ善き祥なり、此方や勝ち給はむ、彼方や勝ち給はむ」と、とりどりその寄る方にはとよめき（萬葉さわぐなり）ぬれど、世の聞えは、「必ず七郎ぞ過たずして勝ため」とこそ言ひあへりけれ。さてあらかじめ（萬葉むはよそなり）其の太刀合の日も定りしに、八郎みそかに七郎許行きていひけるやうは、「此度の事家のほまれとはいへど、おなじ腕をもて、おなじ力を爭ふごとく、たとへ優劣あるも、其のけぢめ（伊勢物語分めなり）をい

唐文の中にも一
論語に歳寒くして然る後に松柏の凋むに後るゝを知るとあり

面に白き赤きをつくり、身には黄なる紫なるを飾りて、ひと時の盛を見するがごとし。これに愛で迷ふ人は誠の色好には侍らず。此嫗が目には、群紅葉に立ちならびたる松柏こそ、唯眞心（萬葉）の男女（古語）なれ。さるは唐文の中にも、松と柏の雪のうちに立ちても、其の色は變へずとなむはべりと聞け。我せこ（古事記日本紀夫をいふ）の翁、御身のうまれ出でたまひし時、唐の文にはさる事こそ書きおきたれ。此の娘が名は松とや呼ばむ、柏とや呼ばむと。みづからに問ひ給ひし故に、此の嫗おもへらく、松は千とせといへど、雪嵐に負けて、折れ倒れたるをば幾度も見き。かへといふ木は、千歳經るなど詠みたることも聞かねど。雪霜にもか負けず（萬葉）いと堅き物とおもへば、此子をばかへと告るべしと申せしなり。宇須美にもいと若き人にておはす。娘もしかなれば、おひさきはいかばかりの事はべるとも、花紅葉の色にな愛で給ひそ。今此の嫗がいへるごと、雪霜にも變らぬてふこそ、眞人の心なれ。しかおほされよ」とあれば、二人は唯いらへもなくてなむありけるとぞ

さむらはして—侍ひてといふ語の敬語

ことわり給ふ—批判する事

宿なれば、何をなぐさめに見るべきはなけれど、ちかきは小倉山、とほきは高尾愛宕の山の吹きはらふ嵐につきて、白き雲間より濃き薄きもみぢたる中に、松柏の緑なるが、染めいだせるばかりなりとて、紙格（源氏物語）すこしおし開きて、かれ見給へ（源氏物語）とて、かへが褥なむしかまへたるに、漸々ゐざり出でて、（源氏物語這ひ出る様也）「宇須美も爰におはせ、かへもそこにさむらはして、いま此のおうなが古物語するをなむ聞き給へ。（是より次萬葉巻一長歌をとりていふ）むかし大津の宮に天が下知らすすめらみこと、（天智天皇）藤原の鎌足の君に、春山のよろづの花のにほひ、秋山の千々の紅葉の色、いづれか勝ると詔ありしとき、額田ひめおほきみ（天武の夫人也）御側におはしけるが、歌をよみてことわりたまふ。其歌の中に、春の花はいとおもしろけれど、草深ければ入りてもとらず、又秋の葉は折りても忍び（萬葉）また青きをば置きてぞ嘆く、（萬葉なげくは長息の義）しかは秋こそ愛まされと聞え給ふなり。さる事にはきこゆれど、此の嫗が辟心（源氏物語）には、春の櫻は散りやすく、秋の紅葉はうつろひやすし、いづれか誠の心とせむ。人は姿形のものにあらず。かれ見給へ（向峯古語）の群紅葉は、譬へていはむには、

ふたほかまり廿日—二百二十日

七郎がり—七郎の家もとになり

俊蔭がむすめ—俊蔭は異人より技を傳へし琴の名人

り（源氏物語要には快氣にあて書けり）はてければ、はらからのもの、八郎親子も、唯あれたる冬の庭に老木のさくらの咲き出でたる心地して、いと珍かにも喜ほひ（伊勢物語）をりける。おほよそ此母の病著をとりみ（萬葉看病なり）ける月日、ふたほかまり廿日ばかりになむありければ、兄弟のみにては、いとくるしからむとて、八郎が若子（萬葉）の宇須美を、七郎がり夜も宿らせて、つきそはせまゐらせけり。彼の宇須美、顔形きよらにて、風流（萬葉）ごとを好み、歌よみ文かくわざは、明直（日本紀長長の義）まさるひともなく、年ははたちまりひとつになむなりける。又七郎がいもとなるは、十まり八つになりて、是また顔形端正しく（日本紀）みやびの道は、此母なむをさなきより教へたてて、類なかりしうへに、琴ひくわざは俊蔭が娘（うつぼ物語）にもけおされ（源氏物語氣押さるゝ也）まじくなむ有りける。さてかくてある間に、母熟睡し（萬葉、古事記）兄弟うちねむる透（萬葉）には、密に（古語）およひ（和名抄なべての指をいふ）して、おもふ事を書きかはしなどするを、母はおほに（萬葉おほかたなり）さとしぬれど、能きあはひなればとなむ思ひをりける。しぐれうち降りて、庭の紅葉やうやうつろひ行くに、仕渡したる眞垣もこゝかしこうち倒れて、荒れたる

いでくるはし―出で來る始

かのにけぐさ―鹿の和草の義

で痛著（萬葉 疾也）いできぬるまゝに、兄弟みたり枕方足方（古事記）につかへて、あるかぎり扶けまゐらすれども、日に異に（萬葉日日なり）心ぼそくきこゆれば、兄も弟も、妹がまさか（萬葉今要はの時と云ふがごとし）の時とたくはへおける單の衣までも、藥にかへ、米にかへなどして、春より秋ばかりまでは、彼のをしゆるわざもせで、是にかゝづらひける。（源氏物語）これは正しに（萬葉）彼の太刀をとり返したる故に、けちどもの出でくるはしなりなど、人々いひあひける。此母、人となりよろづ儼（伊勢物語世にいふかたき方）たりしかば、日頃交らひ薄く、同じあはひの老女（古語）達すら、かゝる時にもより來ず。八郎が妻なりけるものは、この母のよろづ心をくはへて物しやりければ、「いきてなむあらば」と、八郎夜晝たち進止（日本紀）て、此事をぞ悔みいひ出でける。もとより八郎は徒（爰には弟子をさしていふ）もおほく、集ひよるにつけて寶もわきみちぬれば、得難き唐國の人參、（和名）或は虎とふ神（萬葉とふはといふなり）の膽、又眞珠（萬葉）やうの物もたやすく買ひもとめつゝ、親のごとくになむ仕へければ、七郎はらから、なみだおとして、かゝる報いはいつの時にかせむとぞ拜（日本紀）にける。かくして冬のはじめまで病みて、漸々おこた

「もとより是はわが寶なり、今こそ持ちかへるなれ」とて、速足を出して（うつぼ物語）逃出でけるに、あるじ心得がほにて、「こはおほぬすびとかな、（竹取に大ぬす人のやつがとも書けり）人やあらざる、能盗人まゐりてあるぞ、いたくな追ひそ、捕へてにぎりうたむは（古事記用持捕搤批之字）佛の戒なり」と、唯みなそこをうちまもりて、ほゝ笑みてなむおはしけるとぞ。

かへの巻

七郎なりけるも、八郎なりけるも、太刀あはせて必ず勝つべき術をなむさとしをりければ、是をまなぶもの我が大人（古事記萬葉）と稱へたてまつりて、をちこち集ひ來。（古語）しかるに、七郎はこゝろざし高く、人にくだらざる性（古語）にてあるあひだ、術はたぐひなく聞えわたりしかど、八郎が人ざまの和（源氏物語）なるかたに引かれて、おほくは此方にのみ集ひまさりけり。されど七郎は、ものねたみの心は更になき男にて、八郎とはまじはり唯水と魚如して、互にたのもしく、貧しさも救ひあひけり。さてあるほどに、ひとりの母あやしきま

珠を爪ぐり—珠は數珠の數の字脫ちたるならん

うつゝなく—本心を失ひて見惚るゝ樣

なげ打ち捨てよと我が佛は說き置き給へり。さる穢へある物をもて來て、とほつおやのをさめ置き給へるものすらあるに、天が下の寶と替へもて往かむとは、このあるじを愚き（萬葉）ものとや見たまひつる。欲する（萬葉）心ふかき者とやおとしめ給ふ」と、淸々（日本紀）しきおももちして、（源氏物語今云ふ顔付なり）袖（古語）をかきあはせ、珠を爪ぐりておはしける。七郎もとより心利をとこにて、心のうらをのたまふ事をいちはやく（伊勢物語）知りぬれば、「こは恐き（古語）ことを憚らで申しつる事よ。されど此の黄金は御寺に納むとてこそ持て來つれば、いかでか持て歸らむ。今御をしへをうけ給はるに、淵河に捨つべき物これなり。幸に（萬葉）御前に泉こそさむらへ」とて、封じたる黄金を解き、三十枚五十枚の數もいはず、みぎはの山吹の散りかゝるごとなげうちしかば、あるじ立ち騷ぎて、「こはもの狂はし、たてくはへたる石にあたらば、寶や碎けなむ。あれころ〳〵（古事記）と物にあたる音すなり」と、かしらを掻き足を爪たて、頤を垂れ、唯水底をうちまもりつゝ、うつゝなく見えけるさまを見るより、七郎つとたちて彼の太刀を籠め置きたりし金戸（萬葉鎰さしたる戸）をやぶり、袋ながらひき出して、

はつか―わづか

たぐふべく―比すべく

の世のますらを（日本紀古事記萬葉大丈夫也）と人にも稱へ（古事記日本紀）らるゝ男にてなむあれば、熟おもふに、わが家の寶とするは、唯かの太刀一ふりなり。さるをめゝしく（源氏物語女々しくなり）かひなく、はつかの事におそれて、山寺に納めつるこそくちをしけれ。（源氏物語朽惜しきなり）たとへ家は貧しくなるとも、また祥（日本紀古事記世に云ふ告なり）事の出で來るとも、なでふことかあらむ。（伊勢物語何と云ふ事かあらむなり）其太刀とりかへさでは、七種のたからも（萬葉七寶なり）我においては用なしと、日比おもひをりしが、こがね五百枚（日本紀）とゝのへたてて、彼の七代さきの親、納めおきつる御寺にまうでて、「おのれこそ大森彦七がはつ子にてさむらへ。今こがねいほひらをこのみ寺へをさめ奉らむ。さてぞ祭りおけりし太刀は我にかへしあたへ給へ」とぞ願ける。院のあるじ、さは能きことこそいで來つれと心にはおもへども、さる氣色もせで、「是はうべ（萬葉世に云ふ尤なり）ならぬ事こそ承はれ。劍は正成ぬしのはき給へる太刀なり。この人ぞ天が下武士のかゞみとは申すならずや。さる人のはかせたまへる物なれば、くさなぎの劍（古事記以御刀之前刺割而見者在都牟刈之太刀是者草那藝之太刀也云々）にもたぐふべく此あるじは思ひをれり。黄金は又何ぞや。たとへ千枚にもせよ、淵河に

けち—怪しく不思議なること、割註「けちの反き」一本「けちのなき」

太刀をあはする（古事記日本紀劍術なり）術なむよくしければ、是を人に教へて、幽けき（萬葉）便（萬葉）とはなしける。七郎はまたひとときは其わざに勝れて、これは弓を射馬に乘ることまでもよくしけり。身のたけは六尺二寸ばかりにて、太刀もことさら長きをぞはきたりける。又この七郎なりける男は、（日本紀）大森彦七といひし武士の裔（古事記日本紀子孫なり）にて、八郎とは從弟（萬葉）にてなむ有りける。さて七郎がはける太刀は、楠正成のぬし津の國湊川にて軍破れてうせたまひし時、血つきたるつるぎの太刀（古事記につむがりの太刀むつがり此今云ふとがり太刀は斷の義）の侍りしを、彦七とり歸りて我家に殘しおきけるが、そのはつこなれば、今この家にとどまりて、世にふたつなき劍なりとぞいひ傳へける。然れども、楠のぬし惜しむ心や殘したまひけむ、是につきては種々（歌詞）くしき（日本紀奇なり）事どもの侍りしことを世々にいひつたへけるあひだ、七代ばかり先の七郎なりけるもの、この太刀をさる山寺に納めまつりけるより、さるけち（古語けちの反き也）ども聞えず、家も富みさかえて、ある大宅の長臣（萬葉）となりて、ときめきけるよしなり。しかるに今寶滅び、家も貧しくなりぬる事のよしは、此七郎ぞ武士の道をみがきて、今

西山物語

綾太理つくる

巻之上

こがねの巻

山背の國乙訓の郡、松の尾といふところに、大森七郎といふものゝふ、一母同産（日本紀）みたりまで住みけり。妹の名はかへといひ、その次なるは總次となむいひける。妻ははやくなくなりて、老いたる母のおはするを、家は貧しけれど、三人の子して、とにもかくにもかしづき（竹取物語大切に仕ふるなり）參らせける。またおなじ里に、おなじ氏の家にて、八郎といふものあり。これも鰥夫にて、（和名抄）うせし妻のかたみに殘しける愛子（萬葉）のあるが、その名を宇須美といひける。是もおなじ貧しさにて、世のわたらひごと（伊勢物語渡世なり）もなきまゝに、

下

露の卷……
よみの卷……
ほきの卷……

西山物語 總目録

上
こがねの卷
かへの卷
太刀の卷
中
あやしの卷
琴の卷
文の卷
わかれの卷

三卷。題曰二西山物語一。苟志二國風及片歌一者。能朝二習夕積之一。則置二身於莊嶽間一之術矣。余有二古雅之癖且方外之誼一。今受二其請一。故爲二之序一。

明和五戊子春二月　　金龍敬雄老杜多撰

序

今同古者人情也。古異今者語言也。語言何以異也。蓋世有汚隆。人分雅俗也。是以學者通古語也。戞々乎難哉。雖稱能通者。大率如隔靴爬痒。豈愉快哉。倘能以古御今。卽俗爲雅者。業之成也。東都綾太理。博古知今。卽俗爲雅。嘗唱國風復古之學。專以片歌樹赤幟于詞壇。夫片歌之於國風也。猶如唐詩有絶句。但裁其句。今體而微耳。其調則高。其辭則雅。而其出古書。不一而足。其名尤彰明者。安部安丸。奉淸御原天皇勅。所撰古事記也。輓近乃響影其字法。寫俚言卑辭。杜撰呫嗶。以爲俳諧者陋矣。雖然下里巴人。屬而和者多。可嘆哉。綾太理嘗悲流俗固陋。能繼千古墜緒。欲播片歌於天下後世。忘躬爲道。孳々不休。然歎其落落難合。余謂曰勉乎哉。有志者事竟成也。客歲遊于平安。下帷講授。戸外屨滿。於是欲俾從學士。曉以古御今。卽俗爲雅之術。乃記時事。以爲

古今奇談繁野話　終

仕置を出し—出しは致しの誤か

が居城に逼り、諸大將後詰して一時に乘りおほせ、早く土地の仕置を出し、捷を津島に獻じけり。駒場が助勢も、からき場を引きとりて逃れかへり、是より再び手を出さず。宮の御座所は年月に興旺し、南朝の餘音猶此處に響きて、臺尻うつたといふことば、拍子物の名となりしも、久しき世の調ならん。

付け入り｜敵の退城につけ込みて攻め入る事

味方の船に調じあはせ、城の追手を目あてに漕ぎ寄する。只今降りたるもの、那の燈籠高き船こそ大將よと告げしらすに、宇佐美、宇津宮手勢を卒して、二艘の快船に、合圖の笛鼓、早拍子をうたせて、燈籠ある船を目あてに向へば、十一家の船、提燈晝とかゞやかせ、早拍子を合せて會ひ集り、元より肌具足堅固にかためて、臺尻が船を眞中に取りこめて、大將士卒分ちなく、悉く海に切り沈め、其時十一艘同音に、「臺尻うつた。みさいな」とはやしける。臺尻が殘りの兵船、後よりすゝむ所に、本船の大變あるを見て、たがひに招きあひ、今は生きてかへる面目なしと、家の子等死を一決して、三百餘人岸にあがり、切つてかゝる。城がた、よせ立てじとふせげども、夜軍になりて敵つよく、思はずひらきなびくとき、眞圓になつて城に斬つて入る。城門色めきて、二の郭へ士卒を引き取らんとあわてさはぐを、付け入りにせんと進む三百餘人、忽ち作りたる道陷りて、深き泥の内にたゞよふ所を、大橋中務兵卒を下知して、熊手に引きあげ絡めとる。半ばは泥の内に自殺して失せけるぞはげしけれ。藤綱宇佐美この機をすかさず、船を飛ばせて臺尻





じくす。城は大橋中務のみとゞまり、今年は神影を城内にむかへ奉るべしと、前日より内堀所々に材をわたし、道ひろくかまへて掃ひ清め、すでに當日も晩に向ひて、川の面賑ひあへる時、大竹千幹が五六十騎、百姓の體にて、五人三人道を迂り、島にいたり、處處に伏おきて、我は城をめぐり物見しけるに、此日は内外の郭兩門とも大に開き、女房童よき衣きてこゝかしこにむれて、流れに臨み、大樹の下により、うたひあそぶ。千幹進、物遠き堤のかげに味方を待ちあはせ、一所になりて、やす〳〵搦手の門に入り、先其邊に火をさし、喊をつくる。早くも彼のすみ此のくまより火消の者出できたり、水はじきそろへて火を打消し、門をひしと閉ぢて、船にありと見えし宇津宮、宇佐美兩方よりあらはれ出で、大勢にて取りかこみ、半は斬りたふし、多く搦めとる。大竹はうち死す。降るものはゆるして、敵の樣を尋ね問ひ、手だてを奪ひて、卽時に敵を僞引く計策をなし、城中に柴を燒きあげたり。臺尻は五六艘に人數を匿し、所々に分ちおき、祭事見物の體にて、日の暮るゝを待ち居たるが、合圖の煙を見て、我船に號の燈籠を高く擧げて、

十一等―十一艘のあて字か

ひあるまじく、と申遣したり。かく披露におよぶからは、今日明日の間にあるべし。彼若しかく我方に油断させて、此方へ取りかける事もはかりがたし。士卒の面々其心得あるべし」と内々に觸れたり。扨明日物なれたるもの兩人を分ちて、早尾と佐屋とへ物調へに遣しける。早尾に遣しぬるは調へてかへりぬ。佐屋へ遣したるは得ずしてかへり、「今日彼所に、強く人改して他所人を入れず、用心の體なり」といふ。さればこそ、此城へ佐屋よりすつぱを入れけるとさとり、宇佐美、宇津宮内議して、却て敵のうらをかく手段を計りけり。元來此佐屋に臺尻大角、大竹千幹進といふ兩人あり。津島を手に入れんと思ふ事多年なり。近比宮移らせ給ひて、勢さかんなるゆゑ、手を出し兼ねてあるに、駒場、飯田の兩家より、力を添へんとあるに思ひたち、日比に忍びを入れ置きて、其動靜を窺ひけるが、次の年彼島の祭禮に、諸士の船遊に出でたる其不意に打つべしと工みこしらへける。既に水無月の祭日にいたりて、今年は去年にまさり華美をつくし、十一等、船をならべて酒もりし、大吹大播にてうかれ遊ぶ。漁人らも船にうかみて、上と樂みを同

銅拍子—銅製にて笠の形したるもの二個をうちすりて鳴らす樂器

すつぱ—間諜、水破と書く

竊候—斥候の誤

家の紋の幕を走らせ、數の提燈に姓氏官名を書きしるし、船中に笛、つゞみ、銅拍子をならして戲樂をなし、民家漁人までも船をかざりうかみける程に、此島の繁昌四方にかくれなし。宇佐美宇津宮は、かゝる折とても、城中を守り油斷せず、朝夕城をめぐり、島をまはり、人の氣色にも心をつけ、毎日心服の家人をしたがへて、内郭、外郭、要害あらはに、人のよぢ出づべきと思ふ所には、かすかに箒痕をつけ、或は砂をならしなどして、人にはしらさで、かく用意しけるに、或朝、たつみの方高く險きに添つて引かせたる柵の際、人のすりたるあとあり。あやしみ思ひて、心を付けけるに、五日十日の間、必ず其邊箒目に足印あり。されば城中に敵の犬こそあれ、いづれよりのすつぱにやと案ずるに、近きあたり敵となるべきは、早尾の堂が崎か、扨は佐屋の臺尻なり。定めてそれらが窺うて入りたる竊候ならんと心づき、一日諸家を集めて評議して云ふ、「番豆崎何某、佐屋と早尾と同日に攻むべき手つがひなり。兩所より加勢を乞ふとも、必ず御ひかへ給はるやうに、」と申しこしたり。味方此節外への手つがひする所存なければ、其條御心遣

表裡―意外の奇策

いへば、宇佐美は「我も天の便得て、味方損せず、大勝を得たり」と、互に其手段をかたり悦び、加勢の衆にむかひ、「つぼみ際の軍、御合力を以て仕おほせたり」と、詞を厚くして是を謝し、加勢の武士五人三人づつかへし遣はしぬ。勝利の餘勢近國にふるひて、道の間手を出すものなく、氣色いさましく、津島に參りければ、宮御悅喜大かたならず。大橋の人々も其武器を感じられけり。是より近國味方に參るものおほく、宇佐美、宇津宮士卒の調練おこたらず、常に川をわたり、遠がけして、鷹がりなどと出で働くこと毎度なり。駒場が一類遠く聞きて、「このごろの出陣は、士卒には宵よりしらさで、鷹狩など云ひて鳥を出し、道より城攻にかゝる表裡多ければ、早晩隣國に發行し、我かたにや寄せなん」と、其備をなし、上杉今川にも告げやりて、用心しけるとなん。初はよせんよせんとせし敵がた、却て宮方を心づかひしける。萬の勢の形は皆かゝることぞかし。十七家の英雄、心を一にして守護し、此所以ての外に安靜なれば、當所天皇の社内に、尹良王の靈を若宮にいはひまつり、始て祭禮を執行ふ。十一家の人々より船十一艘を出し、





擬勢ばかりにて云々—勢を示すのみにて強ちには敵を追はずとなり

馬八十騎を率ゐて道を馳せつけ、聴子につきて、直に敵の後をふさがんとぞかゝりける。駒場が陣には、今川敗軍の告を聞いて力を落し、敵つのらぬ内にとて引いて行く。物見の士かへりて、「向ふの切通しのあなた、岐路の平地に伏勢あり」と申すに、「後なる敵の挾まぬ内に、力をつくして斬り脱けよ。此時生きんと思はゞ、却て一人も免れまじきぞ」と、士卒をはげまし、用心して行く所に、大木の下に馬を立てたるは宇佐美左衛門、聲を擧げて、「今膽を寒して通るは駒場が一軍か。兎群兎に異ならんとして市に出づれば搏たれ、魚群魚に異ならんとして岸に上れば斃る。身の程しらぬ者どもの逃足こそいたはしければ、官軍の勇士達の送つて給ふぞ」と、五六十騎の健卒さつと馳せ出づれば、駒場逃耳に聞かせて答へもせず、道の塞らぬを幸にと、くづれ立つて逃げて行く。官軍は擬勢ばかりにて敵を慕はず。總軍と一所に合うて行くべき道すぢなれば、すきまなく追うて行く程に、敵は居所にも得こもらで、山ふかくこもりぬ。人々残念々々と口々にのゝしり、そなへたゞしく、參州路へ打ちこえけり。藤綱「今こそ勢を張りおほせたり」と

老人いたて負ひたるは―老人と痛手負ひたる者と

見くづれ―見しばかりにて崩るる事

をさぐり聞くに、「宮方きのふは多かりしを、今川おさへの爲にわかちて、老人いたて負ひたるは此手にのこり、勢をやしなひ、かしこの勝負を見て、いかにも身の進退を定めんとす。其人數いまは百計に過ぎじ」とぞ告げたりけり。「あなむざんや。今川の大勢に、二百計の人行きたりとて、一かけも合さるべきか。のこるやつばら、一々生けどりにすべし」と、すでに其所を發せんとする時、よこ道より、どつとおめいて百餘の兵押しかゝる。駒場彼より寄せんとは思ひもよらず、殊に急に取りかけられ、此所は足場よからず、二町計退き、山の尾を後にあてて備を定めんとする時、東の森より桃井が伏おこり、民家の人の聲を雇ひて、おびたゞしく喊をあげたり。敵かばかり大勢なるべしとは思ひがけず、駒場が人數見くづれして引いて行く。藤綱、桃井、備を合せて押し行く程に日は暮れたり。駒場は大辻の小堂を楯にとりて陣し、在家をこほち、篝に燒きてゆだんせず。藤綱、桃井は對陣とりて守る。其夜いまだ明けざるに、宇佐美が勝を得たる一軍、本陣の戰ひ心もとなく、馬なき者は後陣に一隊をくませて、ゆる〳〵と押させ、騎

眼に入りて、痛さすが如く、眼を開きがたし。面々手を顏にあて、痛を喚びて進みかぬる所に、宇佐美が勢兩方より出でて、究竟の歩武者切先をそろへて切つてかゝり、暗號を定めて働けば、今川勢心ならずひらきなびき、「敵は順風揚毒の計を用ひしぞ。一先引けや」と、大將先に立つて引く程に、士卒踏みとゞまるものなく、散々に仕つけられ、頭だつものも多くうたれぬ。宇佐美、兼て小高き所こゝかしこに積み置きたる柴を燒きあげたれば、白晝のごとく險道をてらし、士卒を指揮して、斬つて落したる敵どもを、はしりまはりて驗を取らせける。敵六十餘人を打ち取つて、「うれしや一石にあまる胡椒番椒、よき價を求めて賣りたり」と、どつと大笑して凱陣しける。こゝに宇津宮藤綱は良王を大門山の南の間道より津嶋にすゝめ來り、今は心安しと、二百人を二手に分ち、一枝は桃井右馬亮、七十騎をしたがへ、宇佐美が陣を助くるよしにて西北に行き、明神の森に伏し居る。藤綱百三十騎をしたがへて、手配言ひ合せ、よく〳〵馴らし、敵間を見て間道を押し行きける。駒場が勢貳百人計甲州道に來り、此所に士卒をやすめて、敵の樣

陣がへ―陣變

盬にして―引潮時の意

らひてよりつかず。宇佐美は、後より吹く深山おろし、味方のしのぎかねるを見て、「暮れなば、風に背きて陣がへすべし。石壁の下に風を除きてこらへ給へ」と云ひなぐさめ、暮にいたる程、いよ〳〵風はげしきを見て、もとより味方風かみに陣せし事なれば、足輕を下知して、敵ちかく走りまはり、根笹茅原に火をさしたり。たちまち火さかんにひろごり、敵のかたに燒けかゝる時、宇佐美下知して、楯をたゝき、鼓をうちて、喊をどつと上げたりければ、今川方、火に氣をとられ色めけども、大將物馴れて少しも騒がず、「敵は燒打にせんと議すらん。逃げんとせば、此陣忽ち敗るべし。出でて敵をむかへ合戰せよ」と、衆をはげまし、先にすゝんで茅をなぎすて、火をふみこえて敵にむかひたるに、喊の聲聞えしばかりにて、敵壹人も見えず、遙むかふに、敵の引くなる把火のひかりあり。「扨こそ敵はこれを盬にして引くぞ。追打にせよ」と、大木を引きのけ踏みこえ、はやる人數を今川とゞめて、「かゝる險地にて敵のかゝらぬは、迂闊に此方よりかかるべからず。追はゞ用心して進むべし」と、一町ばかり行く所に、吹き來る風諸勢の

の字を添へてかへしぬ。兩將顔を見合せ、いかにもと點頭き、馬上の禮儀して出で立ちけり。かくて今川兵五助は、駒場が後詰せんと、すでに鹽尻を越ゆる所に、物見かへりて、「東の山ぎはに、南軍と見えて、其勢は林にそうて、多少はかりがたし」といふ。今川聞いて、「それこそは宮がたの宇佐美なり。百騎にも足るまじきを、林によりて、限り見せじとするこそ可笑けれ。かれらに押へられて此にためらふべき弓矢にあらず。一時に打ちつぶして通れや」と、五百餘騎を推し出して敵近くにいたり、吶喊んで戰をいどみけるに、宇佐美は戰はんともせず、一騎ものこらず後の山に取りのぼり、元より案内見つくしたる陣所なれば、備を鳥雲にたて、こゝかしこ便りよき所に射手を出し、素引してあだ矢を放さず、大將山の小高き所にありて敵味方を見くだし、小旗をうごかし指揮す。道は大木を倒して塞ぎとゞめ、山に向はゞ大石を轉ばさん結構なれば、今川方陣脚をしりぞけて、弓の手を敵間ちかくはたらかせ、射させけれども、巖石に楯をかきつづけて事ともせず、近よる者を見ては、楯のかげより矢比に射ておとすにぞ、衆軍ため

楯をかきつゞけて—楯を並ぶるなり

六耳―二人以外に一人にても聞けば六耳に入るといふ事

昔日のちなみを思ひ、聞き傳へに、招かずしてはせ來るもの、かれこれ二百人に充てり。殘軍を合せて五百人にはやなりぬ。「軍配は宇佐美、宇津宮兩人執り給へ」と衆議定り、扨今川は大勢なれども、是を押ゆるはゆるやかなり。駒場は小勢なれども、大事の軍なり。兩軍師は、只其のむづかしきかたを我うけ給はらんとはげまるゝによつて、兩將鬮をとりたるに、宇佐美北のかたに向ふべきに極りて三百を授かる。桃井利貞兩將に談じていふ、「此對陣、敵の氣を奪ふばかりなれば、兎角に人を損せぬ工夫ありたし」といふ。兩將も「其旨に候」と、宇佐美定輸、卽日出馬に臨み、宇津宮にむかひて、「戲に似て事古りたれども、勝利のためし、今度の軍の必竟とする所、互に書きて取りかへ見んはいかゞ」藤綱「尤」と、疊紙に書き付くれば、定輸も疊紙取り出し、一字をうつして取りかはし、一時に聞き見れば、藤綱は勢の字を書きたり、定輸は天の字あり。藤綱云ふ、「是軍機の祕なれば、六耳に傳ふべからず。下に一字を添へて問ひ奉るべし」宇佐美「實々」といひて、藤綱が勢字の下に張の字を書き添へてもどしければ、藤綱は定輸が天の字の下へ便

こらへる間―防ぎてくひ止むる間

こすが中にも―おこせし人々の中にも

合の軍は、味方に戰ふ志なく、敵は案内の地に不意を打つて我軍を苦しめたり。あらかじめ其心して戰はゞ、此藤綱においては、十に五つは勝つべし。十に十は互格の軍せんと思ふなり。諸君も賢慮有れかし」といふ。何れも軍機に馴れたる歴々なれば、皆尤と同じ、「去るにても、今川の勢駒場を助くるといふなるを、いかゞして防がん」と云ふ。宇佐美左衛門定輔進んで云ふ、「是は味方を二手に分けて、一手は今川をおさへ、こらへるあひだに、一手は駒場を追ひかへさん。此小勢二つに分ちがたければ、皆々舊識知音のかたに乞ひて人數をかり給はゞ、百二百無きことはあらじ」と判じければ、諸士面々親疎をかんがへ、近き所に人はしらかし、「今こそ君の御大事なれ。年來の恩遇に合力して給はれ」と、十七家の人々より觸れたりければ、由緒厚きかたよりは、即時に加勢來りぬ。其外家人持ちたるものも、物騷の時節、家僕乏しく、はか〴〵しからねども、「かれは弓をこそ能く引け。これは場數見たり」とて、こすが中にも、鎧なきは鎖かたびらに布袴のせきひもむすび、馬に乘りたるは少く、人並に軍すべきものの數の半なり。其外新田殿

互格－不負不劣
並合－前に見えし地名

にも寄すべきとの風聞に、宮方は、早く間道より津島に立ち越えんといふ人のみ多かりしに、宇津宮藤綱衆人にむかひていふやう、「扨もかく打つどきて、身かたの爲によき事は出來で、先公の御難以來、楯と賴みし原田桃井、忠死あり、新田義則入道行衞しれ給はず、味方の大事此時に迫りたり。しかるに、是迄の合戰のやうを見るに、道の間は、只のがれん〳〵とのみ心得て、敵を打つべき道理をなさず。殘念のことに存ずるなり。今日此所を逃げまどうて津島にゆかば、官軍を見あなどり、道のあひだにも敵おこり、石の卵を壓す思ひをなし、たやすく攻めよせて、合力し給ふ大橋殿まで損付くるのみか、其末は移し奉るべき所も覺えず。さらば其時戰はずしてやむべきか。斯行先も〳〵受太刀のみになりて、此方より打手なくては、つひに受けはづして、口惜しき負をするものなり。今度は君を御迎ひの人に供奉させ、先へうつし參らせ、此面々、邊り近き所緣を募りて勢をかり、飯田駒場の居所へ攻よせるこそ遙なれ、慕ひ來らば、便りよき所に待ちうけて彼に當り、十分の勝を得ずとも、互格の戰ひならば、大に敵の氣を折くべし。並

供養の軍―弔合戰

其翌年參河國足助に移らせ給ふ。道中並合の大河原にて、飯田太郎、駒場次郎、三百餘騎にて待請け、不意に出でて支へ奉る。宮方命をすてて戰ひ、飯田駒場を打取りけれども、味方に、原田、羽川、熊谷を始め、二十五人討死して、士卒も散々になり行きければ、宮のがれがたしと思召して、在家へ入らせ給ひ、火を放ちて御生害あり。其後は良王も、寺尾に御座堅まらで、桃井が落合の城に移り給ふ。其折節、尾州津島、大橋何某は、尹良王の姻屬なれば、此方へ入らせ給へと申しこさる。各相議して、道の便宜をえらみ、甲斐、信濃を歷給ふ所に、去んぬる比討たれし飯田が一族、兄を討たれたる駒場三郎、供養の軍せんと、多勢をそろへて襲ひ奉る。桃井貞綱ふみとゞまり、討死しける。良王其ひまに落ちのび給ひ、笛吹峠を過ぎさせ給ふ。此所にて敗卒等追ひつき、又追々御加勢として來る人數ありて、二百計になりぬ。かゝる所へ、津島大橋氏より御迎として、常川信矩二百の人數にて來り合せければ、味方も生き出でたる心地す。是を聞いて、駒場飯田も上杉今川に告げて加勢を乞ひ、其通信をまち、軍を圍めてためらひける。上杉今

きと傍訓す

死せざれば俠にあらずとは、情義を鼓吹するのことば、兩人が身によく當れり。世の風月に遊ぶもの、此一篇を看破きて、情のある所興のとゞまる所を知らば、人の笑ひを惹かぬ戒ともなりなんかし。

九　宇佐美宇津宮遊船を飾つて敵を討つ話

南朝中務親王の御子兵部卿尹良親王は、遠州にて御誕生あり、後に吉野へ參り給ひて、元中三年大將軍を賜はり、應永四年、新田、原田、桃井其外の宮方相議して、上野國に迎へ奉り、岡本、山川、十一家の人々供奉し、駿河國富士が谷、田貫次郎が館に入らせられ、よつて宇津の親王と呼び奉る。此田貫が女子は新田義助の妻室なりしかば、その好によるうへ、富士十二鄕の諸士、脇屋殿の舊好を存じて、味方に參り、守護し奉る。同五年甲州武田右馬助館に入らせ給ひ、それより上州寺尾の城に移り給ふ。其間合戰度々におよぶ。同三十年、寺尾には御子良王を殘し置き、御身は信濃國宇野六郎が城にうつり、

の山には孔子倒れ」

撈かせ—水を潛りて求めさす事

水陸—原本せが

るのみか、上國の人になれて俗情に疎からぬを悦び、やがて家務をゆづり、司を知らしむ。扨岸の惣官成雙は、小太郎が其後信なきをいかゞと思ふ内、我も國に歸るの期きたりて、大物の岸に船に移りたるに、さし添の少刀を水に落したり。小物なれども家の傳來、取りあげて得させよと、漁人をやらひ撈かせけるに、さし添の外に一ツの箱を取りあげ、是倶に此殿の落せし物なりと思ひてさゝげたり。成雙いかなるぞと開らき見れば、皆夜光珠の類にして、一角、魚膽、鳳瑑、龍珠、名をしるす所皆無價珍寶なり。彼漁人褒美の酒に醉ひて、成雙が前に額づき、その樣女の動作し、「我は江口の白妙や」とて、小太郎が始終を遂げざると、柴江が惡心をかたり、「むかし我小太郎殿の心を見ん爲に、半金を求めしめたるに、君わらはが眞情をさとりて、速に其數をそなへて、事成就せしめたり。此恩を謝せん爲、いま漁人に托して百寶を致す。聊美意に酬ゆ」とかたりて、跡は詞つゞかず、女の樣體なく、他事をなん醉言しける。成雙白妙が靈なることを知つて寶貨をうけ收め、水陸を設け、供養して、幽魂を慰しける。痴ならざれば情にあらず、

戀の山——睡「戀

盛粧躍海目無涙

去處俠魂伍緑珠

此やいふべき。傍人皆牙をかみて小太郎を笑ひのゝしる。柴江も海賊を言ひあらはされ、心驚き、直に船を出し、其所を去り、南海に行かんとするに風定らず。大洲の沖に船がかりする所に、兼て海賊柴江を捜る鎌倉の密使、國人を役して、船と陸とに取りかこみ、今の女が指しおしへたる、舳頭に紅衣かゝりたる船こそ、召捕つて正せやと、柴江をはじめ、一人も殘らず綁取つて去りぬ。彼小太郎は船中にあつて大に恥ぢ入り、心地くるはしく見えしが、きつと悟りて思ふに、女が深情にそむきたるは殘念なれども、彼は浮華の身のうへ、我も若年の浮氣放蕩、彼は彼が俠に死し、我はわが潔きにかへる。しりて惑ふは我ばかりかは。今さら遁世などせば、いよ／＼人に笑はれん。父の不興を詫びて、家にかへるべしと、太刀刀、萬の調度、國を出でし時のさまにかはらで古郷にかへれば、篤重も小太郎がために詞をつらね、父正方も、何とやらん、此冬は年の衰を覺えて、老の坂には騏驥も惱み、戀の山には孔子倒るべく、男が若きしわざ、一旦のいかり解く

に所定めず、常に經歴すと聞くなるが、定めて此頃此所にや候ふらん。此太刀鞍の早く出來るを見れば、若し其人ならんか。さある所に行きて、下半世のやすき事あらんや。今小太郎殿志定まらず、情の方にくじけやすく、行くすゑとても頼もしげなきこそ、うらみてもなほうらめしけれ。里の姊妹の贈物と假に申しぬれども、是こそ年來顧の諸君、都鄙の客商の惠み贈れる百寶にて、情人と終身の生活とほしからぬ設なれども、今とゞめて用ゆる所なし。我箱の中に玉あれども、情人の眼中に珠なし。是皆妾が薄命の展びざる所、妾すでに烟花を出でては、復び舊を送り新を迎るの念なし。逢ふことのたえば命もたえなんと思ひし初心にかはらで、妾は殿にそむかず、殿こそ妾にそむけり」衆人の見る所、小太郎羞ぢ入つて涙を流し、白妙にむかひ過を謝せんとす。白妙推し開きて、「此時にいたりて、一旦彼船へ參らで免るべきやは」と、寶匣を抱きて船ばたに出で、「さらば其船へ參らん」と、深きかたに向つて躍り入りたり。船中急に救はんとする時、白波滾々て影もなし。正に是こそ

扶桑の瘻附子—扶桑は支那の東方に在りといへる國の名、瘻附子は一種の菌類、味苦く疝氣腹痛等に効あり

熊若猴玉—羊鹿類に生ずる石黄、解毒の藥となる

所領—所得に同じ

收めて袱紗におしつゝむかと見れば、是も海中に投げ入れたり。艶なる女の、船端に出でする事なれば、此時岸の高きに人多く集り見て、惜べし〳〵と云ふも、何のゆゑかくするともしらず。白妙下の層を引き出せば、内にまた一重の匣あり。其中は上等の夜明珠、火齊珠、劒玉、鐙玉、通天犀、人魚膽、鳳琢、龍珠、其價定めがたき種々なり。衆人見て、皆其珍奇を稱賛す。是をも投げんかと、爲重押しへだて、小太郎も熟と見て、終身の養ひ、その設あることを知り、大に悔み、爲重も忙迷ふ。白妙柴江が船に向ひて、聲高く罵つて云ふ、「賤妾小太郎殿と里を出づるまで、容易の事にあらず。人の愛を貪り、恩を割くなる仇人、われ死して神あらば、必ず其人を放つまじ。その面を見ずといへども、今日其ありさまを思ふに、蘆もまばらに葉がへすなる莖の渡の邊に、柴江酒部の輔といふ人あり。主づく所領とてもなく、何の所徳ありてか、家榮え富みて、人の田宅重寶などを質として、利を納るゝこと年々に夥し。時々我住みし里へも來り遊ぶことあり。人はしらずとや思ふ。此人今公より求めらるゝ海賊の張本なる事紛れなし。國々





心あがり―氣も浮き立ちて空になるなり

八重垣―和歌八重垣といふ書

太秦、亞刺敢―共に西域の國名

回々―西蕃の國名

燕窩の安達貝―燕の巣に在りといふ貝の名

「やがて其船へ參るべきが、今遣したる箱の中に、小太郎殿の護身の香嚢あり、これを戻し度候ふ間、暫くこなたへ」といふ。柴江すきまよりみるに、白妙が艶麗昔に減ぜず、尙も愛敬づきたるに心あがりして、何かためらはん、從者に命じて箱をおくりやる。白妙鑰を取り出し、開けば内に抽替あり。先第一層を抽出し、内に冊りたる草紙二品を小太郎に授けて、「是は去りにし歌よみの白妙が集めたる、古今新集竝に八重垣の私抄、われに記念にとゞめしを、今また殿に奉るなり」「其外なるは何ぞ」と問ふ。白妙かぞへて云ふ、「太秦の牛頭香、亞刺敢の雀腦香、奇南沈水香數種、九華丹、絳雪丹、紫靈反魂の靈丹、共に是海上の仙藥、世の珍とする所、今留めて益なし」と海中にざぶと投げ入れたり。爲重も小太郎もあやしみ驚き、柴江も見やりて目をはなたず。白妙第二層を引き出し、紅と紫の包袱を開けば、金條環、八寶器、珊瑚の枝を出せる、瑯玕の緒絞に琢きたる、球琳、琨瑤、火珠、琬琰、回々の自鳴鈴、方寸の中に時をひゞかせ、地中海の金錢龜、小合の中に游ぎて好く舞ふ。燕窩の安達貝、扶桑の瓔附子、鮓荅猴玉の類その數多し。白妙、

そ此一生を托するはじめ、世の常にあらずと、脂粉香澤こゝろを用ひて、化粧の芬芳人を拂ひ、光彩あたりをてらし、天仙のごとく、「小太郎が乘船よせたり」と聞いて、小太郎に先だちて船にいたる。柴江が船も其所によせて、數歩を隔ててつなぎたり。爲重小太郎おくれて濱に來り、爲重は柴江が船にいたり、小太郎は我船に來りて、白妙に顏を向けかねて、背きゐたる心のうちはいかならん。思ひきや、江口を出づる時、かゝる時の來らんとは。興移り、情衰へ、義折け、恩絶ゆるにいたりては、行末初に引きかへたること、世の中に多かるめれ。爲重きたりて、「婦人の匳具を送り給へ。それを信として謝物をいたさん」といふ。白妙身邊なる描金提厨を指して、「わらはが調度此餘なし」と、僕に命じて隣の船に送らしむ。柴江すなはち、彼太刀鞍並に小太郎が晴著の小袖まで、櫃の蓋によそほひ盛りておくり來る。小太郎見るに、我重寶に紛れなし。やがて女が身のうへの去書と取替へてけり。白妙も見覺ある調度なれども、違はずやあると小太郎を見やれば、彼は只いたゞき〳〵て喜しげに見ゆ。白妙船端に出でて柴江が船をまねき、

五字の題名云々 ─妙法蓮華經五字の題目の功德は本文八萬字のそれに比すべしとなり

ふれまへども ─原本の通り

ほも頼みきこえ、「官人の虚言はあらじと存ずれど、彼太刀馬鞍衣服の類は、急に落手すべきや」といふ。柴江心中に笑みて、「心やすかれ。人をだに遣はゞ、早速尋ね得てん」と、卽時に奴僕に好くあつらへて、津の國へやりぬ。二十日ばかりの後、「其物皆さぐり得たり」と返り聞ゆ。爲重來りて、小太郎に「重寶は到來せり」といふ。小太郎窓のそとより「其物調ひたり」とおとづるゝ。白妙此時すでに寫して譬喩品にいたり、不覺不知不驚不怖の句にあたりて筆を閣き、迷へば法華を失ひ、悟れば法華を得る。五字の題名、八萬の字に準ふ、苦になんぞ全部を期せんと、机上に留め置き、外面のありさまをうかゞひ見るに、爲重は、萬胸いたけに、打しめりてふれまへども、けつく小太郎は面色悅ばしく、白妙が出づるを見て、外の言はなくて、「かゝれば、我も此所に一日もひとりあられんや。同じ日に歸船を促さん」と、躍り走りて船の設す。柴江も、跡にて事の變ぜぬ爲に、女を得ば卽日船を出すべき心にて、「明日はおのれも異所に去るなれば、女を船へ送られよ」といひ遣る。白妙、其夜をこめて、燈をてらし、梳洗して、今日こ

紅き拂もちたる云々―唐太宗の臣李衞公名は靖といへるを布衣なりし時見出して身を托せし名妓張氏の渾名を紅拂といふ

聞く、紅き拂もちたる妓女よく托むべき主を知り、韓鄿王を卒伍の中にえらみむつびし梁夫人は、たれも〳〵眼慧しといふなれど、我輩のえらぶ所は、多く其境にあらず。たゞ、溫柔に混沌ぬ人を得て終身の偶とし、懇懃を勞せず、嚴重なるを憚らす、婦女の古訓ならねども、年來川竹の浪枕を安め、下半世の放心せんと希ふのみ。今や、殿の父子の義全く、妾他姓に歸して身を托する所あらば、是こそ始は情に發り、終は禮に止る、實に兩便の策なり。染色に濃きより淡きにゆきがたく、人は深きより淺きにゆきやすし。いざさらば、いさぎよく此はからひを應承ひて、此便を取りはづし給ふな。但し其太刀鞍、する〳〵殿の手にをさまりて後、此身別人の許に行くべし。かならず其人に欺かるゝことなかれ。わらは今日より君と房をわかち、行く時に臨んで別を取り參らせん」と、すこしもうれはしげなく、其日より端の家に閉ぢこもり、人に面せず。白日にも燈を點じて机により、法華を拜寫して悶を遣る。小太郎は、爲重に女のうけがひたるよし告けて、「快くことをはかりたまへ」といふ。爲重やがて柴江が旅宿に行きて、な

ゆるす時なく、我と儞と淪落して、夫婦の偶も保ちがたく、父子の義も絶えはてぬべし。今夜爲重我を責むること、理の答ふべきなく、寸心剖くがごとし」白妙聞きて、一桶の水を頭よりそゝぐがごとく、「さあらば殿の心いかん」「我と儞との間に髪を入るべきすきまなければ、局にあたつて手の打つべきをしらず。爲重我が爲に一計をなす。たゞ儞從ふまじきことを恐る」白妙云ふ、「心得ぬことかな。好きはかり事ならば、何の從はざることあらん」小太郎云ふ、「爲重兼てこの計をなさん爲、儞の身を安んずべき縁を求むるに、津國の人、儞を引き具して身のよせ所あらしめ、其謝禮として、都のはれに持參したる家傳の太刀刀、烈祖勇武の寶鞍、錢にあてたる品々還り來るべしと云ふ。我それを持ちて國にかへり、老父其遺失なきを見ば、不興もゆるすべくやと計ひ設けたり。さあれば、儞も終身より所あり、我も父母に歸すること、兩便の計ひなれども、儞を棄つること忍びがたし」と、かたりもをはらで涙さめ〴〵下る。白妙、懐し小太郎を合撲と押しのけて、冷み笑ふこと一聲、「思はざりき、殿かゝる英雄の魂あらんとは。傳へ

婕妤が恨―斑婕妤とて漢の孝成帝の宮人、其作なる怨歌行の中に秋扇に喩へて恩情の渝りやすき事を恨めり

きと起き―屹と起き

火にも水にも―萬葉「我背子は物を思はし事しあらば火にも水にも我なけなくに」

を見るべし」と、海山の思ひを胸にたゝへて、足なみも覺えず寓にかへりぬ。

婕妤が恨は更なり、人を待つを常とする女の身こそつらしな。増て心細き旅の宿り、白妙は小太郎が歸り遲きに心下せず、酒を溫めて待つ處へ、やをら歸り來りて、其顏色樂しまず、酒をも飮まず枕につく。白妙寄り添うて「何故にや」と問へども、長き息をつきて語らず、只睡入にもだえ臥す。白妙心ゆかせず、其動靜に心をつけて寢ねず。中夜にいたりて、「今夜和田殿と何をか爭ひ給ふ」と問へば、小太郎被を擁きてきと起き、言はんとして言はざること幾度、泪腮につたひながれ、聲を內に飮みて胸をさする。白妙いよ〳〵驚き、小太郎をわが膝に抱きて、言を軟かにして云ふ、「假初に馴れて、二年の程は久しきにあらねども、千辛萬苦をなめてこゝにいたり、火にも水にもなりてしたがひ奉らんと、心をつくす殿の身の上に悲傷ありて、いかでしらずして通さんや」小太郎聲をふるはし、「逢ひ見しより我を心に罩めて、今日に至るまでの情、わするべきにあらず。我反覆これを思ふに、親なるもの嚴威にして物を容れず。儞を具してあらば、不興

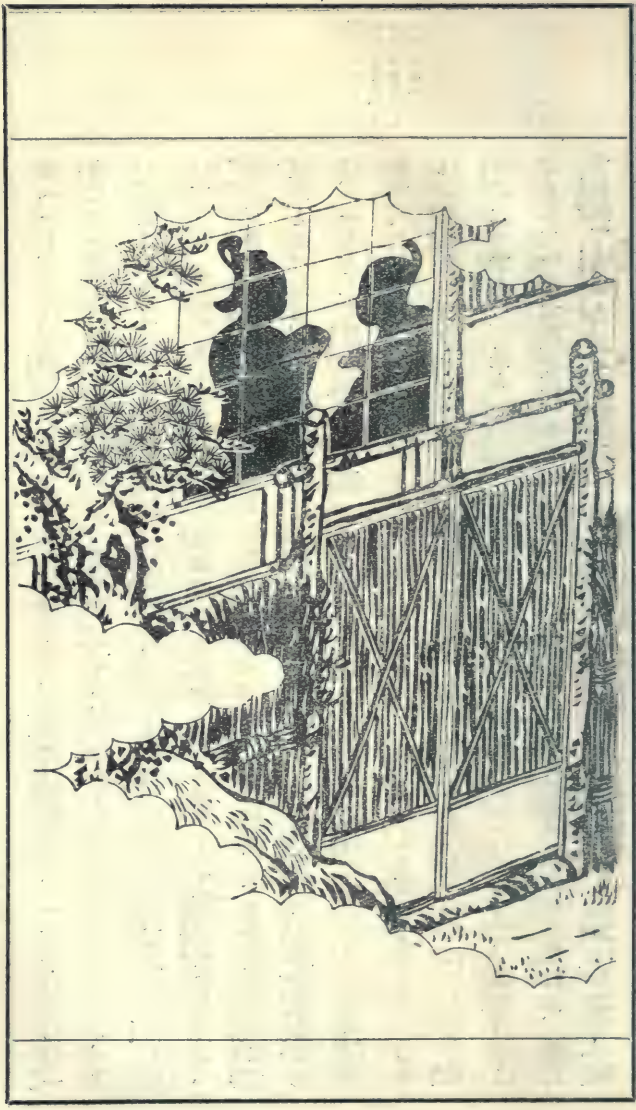
ねぐろ男―訛言
ねんごろ男の訛言

端を開く―話の口を切る

や娼家の女ばら、眞情も一時なり、假定も一時なり。彼高名の妓女、相識の人天下に幾ばく、或は西國にねぐろ男ありて、賢兄は假にちなみ、契帶きたり、餘人に行くの地歩とせるも知るべくや。今またかゝる尤き婦人を人に托へ、獨居にあらせ、賢兄ばかり家にかへり、うしろめたく時を待つとも、輕薄の子弟世上に多し。後俏を賣弄して、心の閑をゆるがせ、言を諾り、求めに便りし、操を撓めて折らんとし、墻をこえ、隙を抉つて、必ず事を仕出かさん。色にたはれて家をすて、親を離るゝ浮浪不義の人は、天地の間に立ちがたきぞ。熟々思ひたどりて善心に回らせられ」と、詞を盡し說く程に、元よりすなほなる小太郎、理の當然に伏し、自失てひざをよせ、「是我不義なるのみか、拙きに出でたり。今是を免れん計はいかに」ととふ。「外に計なし。女を他に適かしめ、獨身にして歸られなば、おのれ尊父の怒をも申しなだめ、無くせし太刀鞍もあがひもどし、女が身もよき計ひあらん」小太郎思ひ切つたる顔色にて、「女と是まで昵みしこと、世の道の間ならねば、頓に離るゝ事かたかるべし。少しく其端を開きて、彼が有りさま

袒をせらん—原本のまゝ也、せん又はせられんの誤なるべし

給へ」と、柴江が旅店をもかたりて別れぬ。此人は和多の然重とて、安方が母かたの一族なり。柴江が頼もしくかたり、女の授け所まではかり聞えけるに、一つの力を得て、猶も柴江に問ひはかり、一夜小太郎を我旅亭にいざなひ來り、「いかにもして此事を轉じ給はずんば、箱崎の家も血脉たえ、不孝御身一人に歸すべし。尊大人平生嚴重なる人にて、貴方の都にて遊興に耽ると聞くさへも、愛を絶つべき所存なれば、今女を具して所々漂流ふと聞きなば、打斬つても捨つべく思さん。一屬親友多しといへども、當時家勢盛なれば、一人として尊大人の意を迎へざるはなし。誰か賢兄の爲に袒をせらん。たとへ詞を出す人ありとも、尊父のいかりを見ては、却て其人も賢兄をそしりて退く事なり。さあれば家業を他門の子にゆづりて、賢兄一生故郷に歸去來ことかたく、いつはてしなき旅宿のたゞずまひ、長らへの計にか、貯を空くなし、糧つくるにいたつて、進退いかにせらんな」小太郎、此時手中の物大半費し、行くすゑいかゞと思ふ折からなれば、覺えず點頭て悔めるさまなり。爲重又いふ、「そも〳〵婦人は水性、丸くも角にもなり、況





つき〴〵しく―尤もらしく

よすが―身を托すべき所

の人は、足下の爲にいかなる人ぞ」「彼者は小人が從兄に侍る」「さあらば用心のため申すなり。彼若き人あやまてる人とは見えねども、此際海賊のかくれすむ多きとて、我も公の命を受け、ひそかに此所にあつて、海賊をさぐり捕へんが爲なり。若き人其心して住み給はずば、あやしめられ給はん笑止さに申すなり」と、つき〴〵しくいへば、此男堅固の田舍人にて、頭を叩きて悅び、「懇志を賜はり、如何が謝し奉らん。彼若きものは、豐前にて郡領が一子候ふが、召具せる賣女だに決絶なさば、家督をも連續させなんを、國なる親は一生對面せなくと勃恚せるに、小人も當津に參著し、問答數日に及ぶ。膽の細き生得ゆゑ、承納せるかと見えても決斷なし。何とかかまへて女を棄却けさせ、獨身にて帶携いたし、父の不興を調へ得させたき」と、涕を落し、底を傾けて語る。柴江假意に感じほめて、「親族を思ふこと深切なる主かな。女の寄所は、おのれ身に負ひて計らはゞ、我門葉の内にも妻を授らせるものあれば、いかにもよきよすがさだまらん。我にゆだねてさはりなくば、露こゝろおき給ふな。此事は内意なれば、二人に深くつゝみ

かひに見る—甲斐に峡をかけたり

立ちもとふる—徘徊する

船の上にともなふけふのかひに見る筆の露おく妙の白菊

妙吟して、「筆の露いかに珍らしくや。すがたさへ御製めきたり」と笑ふ。日數經て、周防の室積にいたり、船を下り、此地こそ古里の便宜なれと、風景ある所に寓居を點じて、箱崎の親しき方に、ひそかにつげやりて、親の氣色をもうかゞひ聞かせ、晴たる日には程近きに遊行し、雨の日はこもりゐて酒のみかたるほどに、すこしは我家のこゝちしけり。こゝに人あり。江口の西なる柴の島に、柴江酒部輔原繩とて、由緒ある浪人、何の生業にか、此室積に數日客寓しけるが、人家の內より、白妙が男につれ徘徊するを見て、元より舊懷の因ありて、里にある時は、路の柳、いつも折るべく思ひしに、今人に具せられ、此田舍に下りしを見て、俄になつかしく、本意なく、跡を見とめさするに、其所まぎるべくもあらず。柴江いかにもして白妙にたより、身の上をも聞かまほしく、朝夕に心をつけて、其所を立ちもとふるに、白妙が寓より出で來る人こそあれ。柴江これを呼びとゞめて、「申すべきことあり」と、我が知りたる人家にいざなひ、「あれなる夫婦

づれを慰むる畫軸、競香、翫弄種々、これ此里衆姉妹の餞の物、此中に收めおく所なり」白妙是を受けて、謝辭ねんごろに申し聞え、「此所の君達は、われも人も、皆さそふ水にまかせるならひ、わが身は、わきてかゝる田舍にゆけば、又あふべきと思ふも、期しがたく、これをかぎりの別れともならん。いづれの君も、身のいたはりなく、千とせのせんざい、かはらで、たのもしげある世をしめ給へ」と、此涙こそいつはりならず、わかれかねたる出船を、もそろ〳〵とこぎ出す。去くも留るも浮れめの、定めなき身ぞかこたれけらし。かくて二人は大物にいたり、筑紫の便船を求め、所々に風を候ちて、船中の九日、菊もなければ、妙が戲に一枝を畫きて、其上に贊の詞さへ男と見ゆ。

解レ印歸來欲レ臥レ家　東籬無レ菊首堪レ爬
丁寧莫レ索塵中種　恐是路傍媚レ客花

安方見るに、墨がきの霜葉、奇にして白菊とやいはん。「儞自ら謙して、其語畫菊に及ばず。我是を添へん」とて、

さそふ水―小野小町の歌に「わびぬれば身は浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞおもふ」とあるに據る

もそろ〳〵―そろ〳〵の古言

大物―攝津河邊郡

舟中の九日―菊の節句を舟中に迎へたればなり

東籬無菊―晉の陶淵明の詩に「采二菊東籬下一悠然見二南山一」とあるに據る

吉々利々栄耀など―神楽の餘興に用ふる小前張曲中の明星といふ歌の初句、吉吉利々千歳栄の千歳を略し栄を呉音にていひやうといふより栄耀と誤語りしなり

扨しも云々―白妙の思はくと見るべし

白妙にあたへ、二人をかたり慰め、其夜は其所に宿せしむ。妙こそ田舎人に具するを聞きて、里にある程の諸妓悉く来て、吉々利々栄耀など歌ひ舞ひ、各藝を盡し、醉をすゝめ、「妙ごぜ、風流の領袖、從良に其人を得給へり」と壽きこゆ。小雪云ふ、「二人此を去つて、進退の心得定るやいなや」小太郎云ふ、「老父近日いかりつよく、今又妓を娶り歸ると聞かば、なんらのやうだいをかなさん。是ゆゑに倘萬全の計を得ず」小雪云ふ、「父子は天性、豈能く終に絶つべきや。今倉卒に其顏を犯しがたし。古郷近き所に浮居して、殿一人先かへりて、したしき友に求め、父君のゆるしを得て後、妙ごぜを迎へ給はゞ、事安からん」白妙聞いて、「我口よりはいひ出でがたきに、よくぞや」とうれしげなり。「扨しもこゝに久しくあらば、室の木に聞えて、何とかはらあしくのゝしらん」とかくする程に夜も明けぬれば、從者楫取「早去りなん」と騒ぐに、小太郎もろとも船に移る。明月、雲井、其外の妓女も、皆船ばたに手をかけ、水に臨んで別をなす。小雪手づから一つの提厨を贈り来り、「二人國に歸り給へども、安身の期定めがたし。長途のつれ

時に白妙云ふ、「我此家に來て十年、生活によつて致せし金錢幾千にのほる。今日我身の從良するは悅び給ふべきなるに、親口數をきはめて、今其數のごとし。尼公もし信を失はゞ、殿此銀持ちまかで給へ。我も目前に水に入りて、人と財と二つながら失ひ給はん」と、日比に似ぬ怨言を聞きて、刀自半晌詞なかりしが、「よし〳〵事すでにこゝにいたる。わぎみ去くならばゆけ。平日の衣服、調度、此房にある物、一つも念とすることなかれ」と、口に答ふべきなく、憤みいかり、小太郎白妙を房のそとへ推し出し、鎖を下す音高く、詞をもかはさず、厨後に行きぬ。此時九月のはじめ、白妙起きてよりいまだ梳洗せず、垢衣のまゝにて、あきれながら、尼公の背後を拜みて、「年月の撫養のうへ、此一身を賜らば、外に何の望あらんや。我平生心しりの姉妹あり。かしこにて事をはからん」と、小太郎と共に其家を出で、川下の小雪が家に行きて、「名殘惜まん爲に來りたり」といふ。白妙が寢衣のまゝ、髮も梳せぬを見て、小雪大に驚き、「いかにや、いかに」といふ。白妙、我刀自の怒つよき動作をかたり、やをら梳洗をはれば、小雪小袖を取り出し、

南鋌—南鐐といふ二朱銀の別稱鋌は鐐の誤
朝もよひ—起床の身支度
花降銀—四隅落ちたる長方形にて表に花降と文字あり四十三匁十兩に通用す

好色の腸は別にして、俊傑も改むることあたはず。幸に此妓實情あり。足下をあざむくものならず。我一臂の力を助けん」と、とかくして百疋の價を辨じあたへ、砂金は、雜事の費用あらんと、其まゝに返し、「吾足下の情弱なるは厭はしく思へども、實に是れ白妙が情の憐むべきが爲なり」小太郎成雙に謝して江口にかへり、白妙に逢うて、「物調ひぬ」といふ。妙聞きて、「先日一錢も調はざるに、今日如何ぞ全き數とゝのひたる」小太郎成雙が言葉のしだいをかたる。白妙合掌喜びて云ふ、「我が二人の願を遂げしむるは岸君の力なり」と、深く其志を感ず。其日なほ日數の九日なれば、心ゆるく妙が房に宿す。妙云ふ、「此身價交易するやいな、即時に殿に就きてこゝを去るべし。出舟のそなへをなし、彼砂金を南鋌に換へて行費とし給へ」など、此ほどの心もだえゆりて寢ねける程に、明朝いたう失曉てけり。日高きに起きて、朝もよひする所へ、刀自來りて、「今日、限の十日なり。約せし事いかん」小太郎、「辨じ得たり」と、「纏百疋の當に花降銀二十枚、即ちこゝにあり」と取出す。刀自小太郎が銀あるを見て、今さら悔める氣色なり。

嫖經—傾城買の虎の卷

小太郎眼瞼に涙をたゝへて、「其の人薄情、いまだ辨じ得ず」妙云ふ、「さもあるべし。かなしきことかな。今夕共に其事を計るべし」と、刀自には「事半ば調ひたり」と披露して二人酒うちのみて小太郎を慰め、「さて實に少しの辨ずべきなきや。或は是をよき別れの時至ると思して、人にもはか〴〵しく求め給はざるか」小太郎涙を落し、「山崎の築紫の津に、家ふるき好みあれども、有るにかひなき棹子なり。それをよそにしては、成雙一人をこそたのみつるに、かくなんいひし」とかたる。その夜はいとわびしげにて臥しぬ。曉天にいたりて、白妙小太郎をゆりさまし、我頭に鋪くところの枕を取つて他にあたへて、「此絮の内に幾兩の砂金をつゝみかくす。是わらはが年月集むる所、殿持ち去きて絹に當てなば、半の用にあたらん。其餘は隨分岸殿に求め、數に充てて、限りの日をあやまらず來り給へ」小太郎悦びて、枕をつゝみ、都に行き、成雙に對してこのやうをかたり、枕を解きたるに、絮のうちにかくせる砂金、算へ計るに五六十疋の當あり。成雙いふ、「花柳に遊ぶもの、趣を得て早く身を抜くといふこと、嫖經の聖言なり。然れども

せちに—切に

成雙に恥をすてて請ひ借らば、辨ぜぬ事あらじ。若し銀をかり來りて、約に變あらば、成雙いよ〳〵我を笑はんと、詰りて云ふ、「恐くは、我をあざむき、錢を辨じ來るともむだごとならん」「さあらば執照を參らせん」と、老氣を張つて、十日限りの契約をうつしあたゆ。小太郎是を取つて、しぶ〳〵立ちいづれど、いかんぞ極めて辨ずべき。別るゝに臨みて白妙云ふ、「五日過ぎなば、事のやうを必ず聞かせ給へ。我に腹黑きことはなき物を」と、いふことばの耳にのこりて京に行き、岸の惣官が寓居にいたり、辭をさげて、身價のことをはかる。成雙誠あるをのこなれども、小太郎が浮華多きを見て心得ず、江口の白妙は名出でし妓女なり。いかんぞ絹百疋にゆるさんや。これ華費の財をからん僞なりと思ひて、たゞ「當時乏し」とこたへて、尙「人にも求めおほせん」とて、酒くみ、もてなしてかへしぬ。其より外に計るべき人もなければ、江口にかへり、あらぬ人の家にとゞまりて五六日にいたる。白妙此よしをさぐり聞きて、「日數の內くるしからず。來り給へ」と、恥ぢて來らじとするを、人してせちに迎へ、「辨ずべき物はいかゞ」と問ふ。

そらむね病む—何となく胸安からず悩み居るなり

取言—引きとり代りて言ふ事

繡佛—縫ひ取りたる佛畫

を說ひいだすより、小太郎赤面して答ふる所をしらず。白妙も、傍にそらむね病みてありしが、「いかに尼公、たゞ其數を說き給へ」といふ。刀自心に算計りて云ふ、「長の齡、時過ぎたれども、尙芍藥の色あり。別人ならば、纔貳百疋を求むべし。此殿今乏しき時節なれば、百疋を求む。それも三日を限りて、左手に價を取り、右手に人をわたさん。三日過ぎなば、我家に來り給ふなよ」小太郎默然として言を出さず。白妙取言して云ふ「かゝる限りの近くては、爭でかなし來らん。十日の限を延べて、約をなし給へ」刀自思ふに、此窮人、百日を限るとも、なんの錢を得べき。日を延して錢を得ずんば、尙恥づる所ふかく、鐵皮に面をつゝむとも、よく我家に來らんや。日數經ば、女も新人有つで、かれにうとくなるべしと、限をゆるくして、「さあらば十日をかぎり、辨じ得ずんば、かたく我家に入ることをゆるさず」白妙、小太郎がかたを見やりて、「この殿其價を辨じ來るとも、恐らくは、尼公違變あらん」刀自、百匹ならばと心にゆるして、「老が身六十に近く、日夜繡佛に長齋す。いかんぞ信を背かん」小太郎心にたのみなけれど、

かだましく―姦見なりと

端的―たしかな

らず」白妙いふ、「此門戸の作業、尼公の言をまたず、わらは知る所なり。彼人初より空手にあらず、大錢を費して方纔てかくのごとし。今忽に無情の言葉を出しがたし。左なきだに、我輩をかだましく人のいふなるものを」戸自云ふ、「和君心よわく、彼を追ひ出すてだてをなさゞる時は、我家の衣食何によりて得ん。今はたゞ此貧客に談じ計り、他器量あらば、幾貫幾匹を納れさせ、和君彼に跟ひて出で行くべし。我外に長となすべき女兒を討めて過活とせん。他其器量なくば、和君いかに思ふとも空ごとなり」「我老、短見に言葉な出しそ。彼人今窮しけれども、本國に家あり。幾貫を辨じ來らば、其時悔ゆとも甲斐なからん」刀自、兼て小太郎が衣服太刀かたなまで賣りつくし、質となして、すこしの物なく、本國は不通なるを從者どもに聞きつれば、彼がわきまへ得ざるをしりながら、「和君が身の價相當の數あらば、我に二念なし」といふ。妙顏をそむけて、「彼が手に物なきをしりつゝも、わらはは說きがたし。尼公直に說きて、端的をしり給へかし」「われ是を說くに何のためらひあらん」と、後對二人が向ひ居たる席にて、此事

殿と稱して來るー遂には我が夫とのみ稱して名を言はざるやうに成りゆくなり
卓にしてー卓は罩の誤なるべし
情人云々ー「色男金と力はなかりけり」

水も云々ー水もろく／＼飮まれぬ

妙を見んとすれども得ず。小太郎錢財を用ひること大差大使、刀自笑を獻ずることたえまなく、此客人こそ我家の搖錢樹なりと奔走すれど、必や情人の篋中に聚寶盤なく、囊中日々に空乏して、刀自の笑顔漸々に變ず。國なる小太郎が父親、男兒が都にありて行跡つゝしまずと聞いて、書をよせて呼び回せども、月の半月の末と、延び捱れて歸心なし。後は父の怒はなはだしと聞く程に、愈恐れて愈かへらず。昔より、利を以て交るものは、利盡きて疎く、利足りて變ず。男女の眞情は懐の冷なるにつけて、心の裡いよいよ熱する習ひ、刀自、白妙に知恵つけて、他を逐ひ遠ざけんとすれども、只耳つぶしてあれば、今は直に小太郎に對し、種々無興をいひ、他が怒りて出で去らん事を催せども、性得溫柔の人、いよ／＼詞やはらかに、激するさまなければ、只ひたすら白妙をののしりて、「我輩の衣食は、客に穿ち、客に喫ひ、東窓に舊きを送り、西軒に新しきを迎ふ。彼人こゝに來りて一とせに餘り、新客はもとより、知音も跡斷て、わが家に鍾馗あれば、一匹の小鬼もより來らず。少女等は年足らず、一家の人口、水もまた飽くに足

嫦娥—月の女神姮娥の音ごろを正しとす
飛燕—前漢孝成帝の皇后の號體輕く歌舞に妙なるに取る也
撒漫—金をまきちらすをいふ鷂
兒—遣手
朝々睦月夜々乞巧—晝夜の親睦天上の二星にも比すべしとなり乞巧は乞巧奠とて七夕の祭をいふ

く人情の向ふ所を知り、貴賤の顧厚く、是がため、身を擲ち、罪を得る若人あまたなれど、たゞ此君を見んとて、日を爭うて來る。里の諺にも、「妙が座には下戶も千飮し、妙を見れば粉面皆黑し」とぞいひはやしける。小太郎白妙を初めて見るに、臉は蓮莟の鮮なるが如く、眼は秋水の潤ふがごとく、嫦娥月殿を離れ、飛燕新粧によれるすがたあり。かゝる艶色の、墻の花の中に盛き出づるも、生したつるの巧なるやと、初は名ある君かぞへて見んと思ひしも、此に凝りとゞまりて、溫柔の性は妓女の心も穩に、撒漫の手は鷂兒を喜ばしむ。白妙と情意相投うちて、はじめより別るゝ期の來らんことを恐る。元より白妙煙花を出でんとするの心あり。小太郎が志のあだ〳〵しからぬを、深く心に占め思ひて、終身相從はんことをいどみ求む。小太郎は、只父なる人の怒りを恐れて、白妙がことばに同意せず。底解けやらぬ氷室の草も、繁らばなどかしけらざらん。朝々睦月、夜々乞巧、終日妻と呼べば殿と稱して來る。恩愛を海にくらべては恩の底をしらず、情義を山に譬ふれば義尙高し。只兩人が中に風流を卓にして、其餘巨室大賈、白

取りまつろへ―取り鎭め

郡司を知らせたる國人―國司より郡司を命せられし土地の人

世を知らざる日―世職を繼がざるうち

旅宿の友にちなみよりたる―旅宿の友として懇意になりたる

見きとないへば―見きなどの誤か

室木の刀自―妓樓の主婦

煙花―くるわ

國司の知行有りて、國司代などいふものを置きて取りまつろへ、郡司を知らせたる國人に、箱崎の太夫正方といふものあり。それが子に、小太郎安方とて、生れ清げに、心さま優に、鄙には似ざりけり。「いまだ世を知らざる日に、王城の尊きをも拜み、國司の館へも參り馴れ、心ゆるく上國の風景遊覽してこよ」と、親の慈心より、萬に缺く事なく取りしたゝめて登せけり。京に旅宿して、折節には館に伺候し、詣づべき所詣であるきけるに、珍らかならぬ所なく、水清く、人柔かにして寄り添ひやすく、田舍より京に入りたるものの、國を忘るゝこと少なからず。旅宿の友にちなみよりたる、播磨の住人、岸の惣官成雙といふ人、常にかたり興じて、花街の品定など聞えけるに、江口の遊君其の才色優長なるを聞いて、ゆくての遊興に歸路を促し、江口に赴き、「眼に見るのみを甲斐とするは眼嫖とそしり、みもせぬ君を見きとないへば、口嫖と笑ふも口惜しけれ。名ある君と青樓の酒を酌みて、古鄕の語り句にせん」と、室木の刀自が許に日をかさねける。其時に、白妙といへるは、十三歳より遊客をとゞめ、九年の煙花に、物馴れて、よ

いかめきことと―誇るべき事

宿世の寃―寃は緣の誤か

東門闉闍の女云云―詩經の鄭風に出其東門有女如雲、又出其闉闍有女如荼とあるに據る東門は城の東門、闉闍は城の內外の重門なり

川竹の瀨はかはらずして云々―憂き節しげしといふ意にて遊女を川竹の身といひ其の住む里を川の瀨にて瀨といふ

ひ來るをいかめきことに思ひて、符ことば街にひゞき、次郎三郎かしづきよばひもて來るも疎ましく、いづれ風月の爲に役せられて、その趣、忍ぶ忍ばざるの際にあるならまし。わきて此里の詮とするは、都に往きかふ河船を招きとゞめて、緣ある纜を結ぶ手にしばしの情を賴む。つくしのはて、吉備のこなた、數かぎりなく都にゆきかへり、神崎、橋本に遊君の家多かれど、此里に泊る船多く、はじめはしろしらぬあやなき人の、後は思ひのしるべとなるも、これほどの事の、宿世の寃ならぬはなし。漢土のむかし、東門闉闍の女、雲の如く、荼の如く、管仲が女閭七百を開きしより後つかた、漢やまとの末の世まで是を免されて、親はらからのために身を棄つる藪澤は、卽ち遠人旅客を慰するの設けとなりて、世に女の數少かりせば、人の爭ひおこらん、非禮の地を設けて非禮を安んずるの計ならんか。川竹の瀨はかはらずして、流れの身はもとの人にあらず。地に數ある遊女の家、文殊、普賢、白妙など、世に知られて、此里のかざしとなれる華名なれば、幾世重ねて其名をば絕えざらしむる習ひなり。其比は鎌倉の時代、西國には倘

古今奇談繁野話

第五卷

八　江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話

往昔江口の色里といへるは、岸に沿ひながれに臨みて家づくりし、後の世の所せくにはあらで、かしこに三瓦、こゝに兩舍、蒲柳引き結び、藪をたゝみてめぐらしたる墻の門より、桃笑ひ、柳媚びて、春宵に景を翫び、長夏に涼を納れ、いざなひいざなはれ來る人はむべなり、霜凝る夜にも胸を焦し、月にそむき、星にさぐり、雨に、雪に、身のいたはりをしらで通ひ來るは、うかれ人の愚痴を病めるなり。水干に袴きて、章臺に馬をはやむるは、下司めきたる人の、所ひろく通へるなり。やんごとなき御方の、九重の霞を分けて、君みんとて、打ひそまりてわたらせ給ふあれば、祿さだまらぬ人の、おのが通

所せくにはあらでー所せきの誤、所狹きまで建ちふさがりたるにはあらずなり

水干ー狩衣の變製、武家の平服なり

章臺ー妓樓

大領—郡の長官

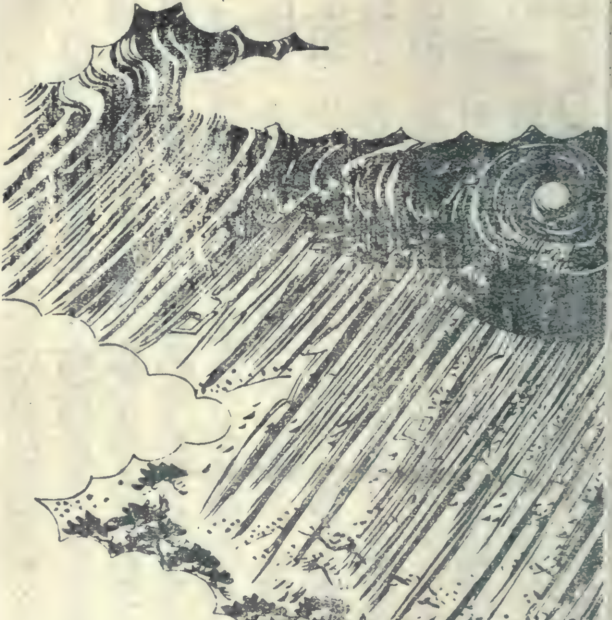
なり。「我はみりん王を捕へたる望月三郎なり。軍中にて穴に落ちいり、今こゝに出でたり」と、民家に勞を息む。山民等驚き敬ひ、「みりん王が取り掠めたるを免れし」と悦びかたり、「こゝなる隱妻も、いまは跡をくらまして行きがたなし」と申す。兼舍山を出でて都に上り、無道の兄なれども、弟の身として、其罪訴ふべきにあらず。只我一分の居所を賜はらんこと、なげき申しければ、異議なく舊領にかへさる。兩人の兄は、自ら辱ぢて身を隱し、蟄居しければ、其有つ所皆兼舍に屬して、家業相續す。承平の初、將門退治の命に應じて軍功あり、江州半國を守護し、甲賀郡に館を構へ、近江守と稱す。後は伊賀近江に跨りて大領を務めけるとなり。龍穴に入りし奇談は、千歲人口に遺りて、兒童に至るまで是を話柄とす。荒唐なるかな、其言や。

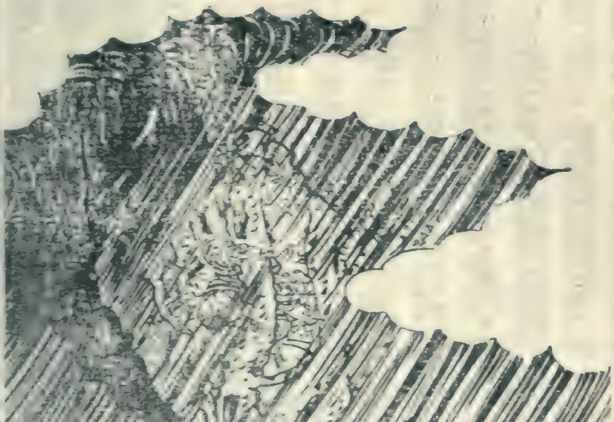
ぬ事
龍の如し―孔子の老子を形容せし語
龍女―八歳の龍女佛說を聽きて成佛せし事法華經に見えたり
易に乾の象として云々―乾の卦の象は龍にして潛龍勿用など見え坤の卦は利牝馬之貞とありて馬に象れり
造化なり―神通力なりといふに同じ

ずる事を得んや。佛說に龍女天龍を說きたるは、敎化の及ぶ所廣きをいふなり。又龍城にいたり、龍女に會ふの說は、文人筆を弄するの虛談にして、益これ文章なり。間現在に其事あるも、皆水物の妖に魅せられたるにて、眞龍の事に與らず。易に、乾の象として、似げなき坤の馬に配せられしは、却て我眞龍を知られしや、しらずや、覺束なし。今化生して形を現ずることは、儞を助くるの造化なり。我形常に有にあらず。儞此穴の泥を身にぬりて、晦冥の時を待たば、體を損ぜず、上升の氣に乘じて穴を出づべし」と、細に告げて、早くも其形なし。數日の後、穴の中黑暗にして、雲烟沸くが如く、其氣蒸すが如し。山岳震動、天折け地崩るゝがごとく、閃電しきりにかゞやき、岩中の大石動いて揚らんとす。兼舍、身自にまかせず飛揚す。是出づべき時至ると、傍の岩を攀ぢてのぼれば、穴の口を出づるといへども、冥々の裡、其勢とゞむべからず、大虛にも上らんとす。手に觸るゝ木の枝をいだきて、夢現のさかひを知らず。俄にして雲晴れ見れば此身大木の梢にあり。急ぎ地に下りて路に出づれば民居あり。是すなはち賊寨の後の山村

一氣―宋儒の所謂理氣の氣にして萬物を化生する二元素の一をいふ
老子は虚無を以て―老子の教の清淨自然を尚び無爲默化を主として心德を養ふをいふ、有とは人の心身をいふなり
空有二つに著せぬ世法―空とは大乗佛教有とは小乗の教をいふ
著せずとは拘ら

物を撃つ。うちて消せざれば、凝含みて子母炮の勢ひの如く、いよ〳〵觸れていよ〳〵迸り、消滅してやむ。是陽激して、陰に戰ひ勝ちたるなり。陰陽相搏ちて芒毛を生じ、又獸をも生ずべし。龍は地中積欝の陽氣、地下の陰氣に和せず、地外の陽の時に動かされて發し登る。水氣を引いて、雲烟を起し、雷電をもいたす。半ば雲に入つて旗の如く掛り、雲端に伸縮の貌あるは、其氣暢びんと欲して振ふなり。既に暢びて消散する時は一氣に和す。一氣に和する時は、本來に歸して形なく、釋氏の寂滅の空にかなへども、老子は虚無を以て有を養ふの教ゆゑ、其發揚して退藏の德を失ふををしみ、彼龍の如しと譬ふるは、時あつてきら〳〵現はるゝにあらず、上に升るべきもの地下に潛藏して、陰陽にも動かされず、いつまでも密藏して、發せざる所を云ふなり。儒教とやらんは、空有の二ツに著せぬ世法なるべし。物に滯ほる時は、釋氏の空を以て消し、動きやすき時は、老子の虚無を以て息む。三教併せ用ひて世道安からん。俗説に、豐城の劍、延津に入つて龍となるといふ。劍は鍛煉して作るゆゑ、自然の物にあらず。豈能く龍と變





沆瀣—海氣とし露の氣ともいふ屈原の楚辭に見えたり

還元反本—自然の本願に還る事

失はず、翁の嗜み好む物あらば、常に此穴に進めん」といふ。翁頭を掻つて、「我は清虚にして、沆瀣を飲食とし、嗜好なく畏悪なし。彼の燕血を嗜み、苦楝を畏るゝは、是れ蛟蜃の類のみ」兼舎問ふ、「眞龍の好む所はいかなる」翁曰く、「只睡を好みて、長ければ千年、短ければ數百年、洞穴に偃臥して、鱗甲の間沙土聚り積み、鳥木實を銜み來て其上に遺せるが、鱗上に兩葉を生じ、太き事抱合すに至り、盤根甲を折きて、方て睡を覺し、遂に修行をはげまし、其體を脱して虚無に入り、其神を澄して寂滅自然に歸す。形と氣と、其化する隨なるを得て、胚胎なきがごとく、凝結ばざるがごとく、恍忽に杳冥たり。此時や、百骸、五體、芥子の門にも入るべく、還元反本の術を得て、造化と功を爭ふなり。しかし此説は、龍を有形の生活にして、工に勢をいふ、畫工の三停九似の法を設くるがごとし。聞く人も面白く奇にして、左もありなんと思はるゝ。是を定形なき物にして説くときは、眞龍の體は雷と表裡せしものにて、雷は中天頓鬱の陽氣水を引いて雲雨を釀し、其水氣に逼られて、團りて純火を生じ、雨水の氣に觸れて、迸り射て

食に當つべき物やある―あらんやの意

て行きけるに、幽に天色を見る處あれども、出づべき道も無ければ、何の賊徒かこゝにかくれん、是兩人の惡心にて、我を陷れたるよとさとり、かくては終に餓に及ぶべし、穴の内に、食に當つべき物やあると、胸つぶれたるに、來るていも見えずして、ほのぐらき中に老人ありて、「象舍、儞憂ふことなかれ。穴を出づべき使こそあれ」と力をつくるに、少しは心だのみせられて、此老人を拜して、「穴を出る事を得ば、實に再世の恩なるべし」と、兄兩人の姦智を訴へ告ぐ。老人云ふ、「世の人心頼みがたきは古より珍しからず。我は久しく爰にあれども、百年二百年には此穴を出でず。近日此穴を出づべきものあれば、必ず儞を送り出すべし」象舍彌悦び敬ふ。老人黑き餅を出して、象舍にあたへて、「餓をしのぐべし」といふ。象舍是を喰うてより、また餓を覺えず。「去るにても、いかなる神仙にて渡らせ給ふ」と問へば、「我には古より其名をつくるあたはず。鱗蟲の長なる龍を以て呼ぶ。能く幽に、能く明なるは、鱗屬の及ぶ所ならんや」象舍、扨は千年山に住むなるといふ、是れ龍穴の主なるべしと察して、「我世に出でなば、一郡の主たるを

新發意―新たに佛門に入りし者をいふこゝは其人の通稱なるべし

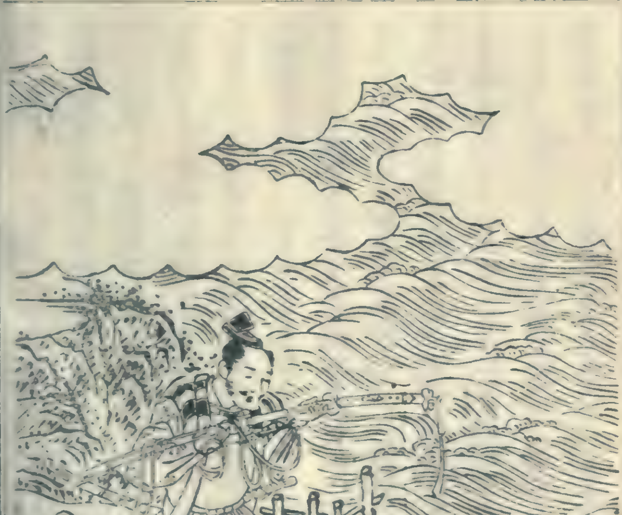
立ちもとほる―徘徊する

即兼舍なり。生捕を牽かせて、兄の陣所にいたる。太郎、二郎是を見て、手柄を弟にこされ、安からず思ひ、かゝる僧衣のものを、いかんぞ眉鱗王といふべき。いぶかし」とうけがはざる所へ、最前の、衣をはがれたる頭陀の僧、「錦袍弓劍を持參して其樣をかたる。此僧こそ藥師堂の新發意、兼舍遣して、敵ちかく細作をなさしめたるなり。遂に兼舍が手柄に極る。山寨の金錢重器を衆に分ち賞する中に、彼の鐵の盃あり。兼舍生捕の中にて、此盃に數盃を傾け、輕々と酒もりす。兄兩人石丸が說を聞いて、賊營の側に古き人穴あつて、賊首の眷屬かくれゐる、是をのこし置くべきにあらずと、三人再び山に登り、彼窟に臨み見るに、直にして井のごとく、石を投ぐるに其底ふかし。「人をやおろし見ん」などいうて、立ちもとほるやうにて、兼舍を不意に突き落してけり。土を以て穴の口を塞ぎ、始終を兩人が功とし、眉鱗王を引かせて凱陣し、兼舍戰死と披露し、二人恩賞を受けて、領地を安堵せり。兼舍は穴に落ちて、一たびは絕入すといへども、漸々正氣つき、打ち損じたる腰膝難儀ながら、岩中に明りのあるかたを、拔穴にやと、ゐざり〳〵

うるはしく物召さればー薩張食事せざれば、前後もなく、人より言ふべき歌語を自ら言ふ所即滑稽なり
べた／＼のかちんー牡丹餅
空だのみなる潜上…當てにもならぬ高言

は、先祖大山邊のみことより傳來の家寶なり。治世の後持ち來らば、此山半片を賜はり、僧徒の檢校たらしむべし」と、空だのみなる潛上、大言して、渡頭をさして急ぎける。招々たる舟子も、朝まだきに、猶船のなかに鼾の高きを、呼起して「船仕れ」といふ。舟子目を擢り、欠伸しつゝ船をよせ、軍人なるを見て腰を屈め、きたなき僧の後れてのらんとするを、「次の便船をやるべし。見ぐるし」と叱りとゞむ。乘りたる軍人口々に、「僧なんくるしからず。いかに、早くのりね」といふに力を得て、のりうつるを、「ともべにをれ」とゐすくませ、船を出し、岸につく時、五人の兵は早く上る。舟子竿を取つて、再び川へ押し出す。此僧いぶかり、「我をいかに上ぬぞ」と、すさまじき目をにらみ出す。舟子棹をすてて、「扨恐ろしき眼つきかな」と、つとよりて雙手にしかと組む。僧も力を出し、からがひしが、船の上、足の踏所定らず、力なくも組みふせられたり。舟子繩を出して縛めつくるを、岸にあがりし五人、船を見てあせりさけぶ。邊の農人出で來りて、五人の兵を擒にす。是農人にあらず、豪舍の家人丹二、丹三等なり。舟子は





上襲―袍
下襯―袍の下に半臂といふを著け其下に重ぬる衣後の裾長く地に引くものなり
衵―下襲の下に著る衣綿を入れ二三枚重ぬる事もあり
きせなが―大將の著る鎧の特稱
村籐―所々間を定めず籐にて卷きたるもの
清見原の吉例―天武天皇皇子たりし時僧となりて吉野に隱れ後兵を擧げて本意を遂げ給ひし事をさす

を、さま〴〵に云ひてぬがせたり。扨大王の上襲、下襯、著け換へらる。下に御したる白綾の衵を、榛染のひとへなるに召しかへ、上なる潛僞の日月袍は、白布袷のあかつきたるにかはり、密金葉のきせながを、五倍染の僧衣の、然も破れたるに召しかへ、身はかはれども、猶頭に潛僞の金冠たかく載きたるは、いかに似なき御姿かなと、僞官人等思はず笑を吹き出す。やがて雪帽子にいたゞきかへ、髮を帽子の内に束ね擧げて、烏頸の御劒にかへて、小々やかなる鉦を取つてかけたるに、大の男の乳のきはにさがりてふらめき、村籐の弓を禿びたる鐘木に取りかへたる御有りさま、水に映して、我ながらせはしきなかにもをかしく、隨ふものども腹痛き迄に笑ひ倒けたり。みりん王猶口を改めず、「群臣必ず笑ふことなかれ。創業の君は難多し。蒙塵させたまふときは、賤の服を御すること例あり。いま僧となるは清見原の吉例なれども、此あひだに醴賣家さへもなし、まへより、うるはしく物めさねば、いといたう飢えたり。此川をわたらば、岸の鼻の嫗が店にて、べた〳〵のかちんにてもめして參らせよ。いかに下素の僧、其烏頸の御劒

眩術―幻術

頭陀する―梵語修行の義

ふものあり、それを傳へて、鬼を役し靈を使ふことを習ひ、軍中に用ひて、山に據り、林に托して、眩術をなし、一頻に勝軍に心怠り、清淨をつとめず、後の山村に妻をなんかくし置きて、折節は暗道を通ひける。こよひしも妻の許に行き、酒のみゐる所に、身ぢかきもの二人三人周章て來り、「内郭に敵入りて變あり。此處へも搜り來るべし。御用心」と告ぐるに驚き、只五六人を從へて、溪をつたひて落ちゆく。間道の歩はかどらず、里ちかくなりて夜は明けたり。從者皆云ふ、「われ〳〵は、寄手の加勢のさまにもてなし行くべきが、いかにしても、御姿のきら〳〵と、かくれなく見へ給ふ難儀さよ」といふ。眉鱗王「實も隱れかぬるは朕が身なり。潛みたる行の折からなれば、早く龍衣を脱せんとおほせども、換へて參らすべき御衣なし。宸襟これが爲に惱む」といふ所へ、水に添ひたる路を、きたなげなる僧の、朝氣の雨を簑にふせぎ、鉦子頸にかけて、里に頭陀すると見えけるを、やがて取りとゞめ將て參り、「忝くも是こそ山中の君にてわたらせ給ふ。僧が衣服を召さるゝ間、錦の御衣に換へて參らせよ」此僧大に驚きおそれて聞き入れぬ

そゞろに―輕忽に

半眉鱗王が無狀なるに安き心なき折からなれば、「御下知に從はん」といふ程こそあれ、石門をとぢてこゝにこもる。兼舍此時相圖の哱囉を吹き、假の方便に、「みりん王打ち取つたり」と、奥より軍師の郭を責むれば、石丸大にあきれ、掛橋をおろし、木戸の方へ逃げ出づる。木戸にとゞまりし數十人のもの、相圖の螺をつぎければ、麓に出張せし太郎次郎、すはやと責めのぼる。石丸先後に敵をうけて、遂に太郎、次郎に降りける。兼舍は、暗道の案内させて、みりん王うたんとおもへど、此騷動に、恐らく、其道より逃げ行きて告ぐるものあらば、此道へは歸り來らじ。「若し歸り來らば、手をそろへて打ち取るべし」と、老黨新藤六に申し含め、「猶内郭よくかためよ」と、自身は暗道の案内聞きつくし、表の陣へいそぎ行きぬ。賊主眉鱗王と申すは、出生の時に眉に鱗有りしかば、むつきのまゝ山中に捨てられて、後は親しらず人となりて、力強く、膽太く、山賊の頭領となり、生れし時の奇怪を人の言ふまゝに眉鱗王と號し、衆にすゝめ擧げられて、そゞろに大事を起したるものにて、深慮計策あるにもあらず、先年手下の老賊に呪術を行

見ごり―見懲

して、あすの軍の手合、上意を談じて歸るべし」と、小卒を添へて猶奥にやりぬ。其道二重の門あり。開閉嚴しく、夜を警むるものおこたらず、「火あやふし、火あやふし」と、木木合々よばひめぐる。其次に自然の石門、一人ならで通るまじき狹き所をすぐれば、夜直の賊徒、多く板屋の下に群れゐたり。軍師の使を見て、「しばらくそれに待たれよ」と奥に行きしが、立ちかへりて、「只今大王潛行して坐さず。皆々軍師の府に行きてためらふべし」といふ。彖舍思ふに、扨は暗道ありて他行するか。こゝにあらぬこそ幸なれと、急度案じて味方に暗號し、面々一度にかゝりて、中にも頭と思しきが帶びたる太刀を奪取り、早く兩三人速に切り殺し、直に其太刀を取り用つて切つてまはる。其勇勢、弱々しかりしには大に相違して、賊徒うたるゝもの多く、見ごりしてのがれちる。彖舍が人數、一度に本陣に切り入り、處々に呼はつて、「明日は朝廷の加勢來りて、儞ら一人もゆるさじ。只今官軍につくものは、命をゆるし、爰に積める財寶名々分ちやり、朝敵の罪をゆるし、去るとも、降るとも、心まゝなるべし」といざなひければ、内郭の者どもは、過

岸頭に鐵門のかためを過ぎて―岸頭に鉄門を設けて固めたる所ありそこをば過ぎてなり

くぼか―凹みたるなり

其餘は爰にとゞまるべし」と云ふ。兼舎時に色青くなし、身を慄して、「後日はかくべつ、只今一人はなれて御本陣へ參ることは、いかにしても心ほそく存ずれば、頭たるもの八人の内、はなれては參るまじ」「つかはすまじ」と、皆々詞をそろへ、「とかく歸つて休息するに如かず」と、恐懼れたる有りさまなれば、「是程の弱卒、奥へ入れたりとも何かあらん。いざ來れ」と、賊徒が前後に引き包みて、梯をわたり、岸頭に鐵門のかためを過ぎて、軍師の陣に參る。軍師石丸、虎椅にかゝり對面す。望月が衆、詞はじめのごとし。石丸竊候の徒に見せしむるに、「寄手の武士の内には見なれず。定めて實情ならん」といふ。石丸契約の盃賜らんと、高さ尺ばかりなる鐵塊の、うへのくぼかなるに酒を酌みて、輕く一獻を擧げて兼舎にあたへ、自ら酌を取つてけるに、兼舎頂戴せんとせしが、得とり擧げで、二三度取りおとし、掌をさすり、見苦しくも口をよせて吹ひほし、「此盃の重さはかりがたし」と、顏を赤めて退くに、其餘は猶擧ぐるものなく、皆々地に置きて飲みければ、軍師をはじめ、手を打つて笑ふ。「いざや、此ものどもを上の御所に申

、

北郡—きたごりとあるは本のまゝ

貞頼、同三郎兼舎、兄弟三人一隊を結びたりしが、味方の引くにつれて敵間遠くなり、退屈してぞ見えける。三郎兼舎は、清らかに、柔和なる面體なるを、初より面を黒赤に染めて、諸軍皆生得と思へり。今素面を露し、清春、貞頼に合圖定め、家士丹二平六ら五十ばかりの人數に、變によつて應ずべき心得を示し合せ、故と悄々に敵の要害にいたり、「角申すは此國北郡の者どもなるが、案内に具せられて、一心ならず寄手の陣に候ひぬ。寄手此頃の敗軍に膽を消し、陣を拂ひ、退きて救を禁廷に乞ふよしなれば、引きわかれ御味方に參りたり。御許容あらば、次の軍に先手を仕り、粉骨すべし。御許なくんば、御勝利の後の安堵を賜つて、北郡に歸り、休息すべし」とぞ申しける。門卒等、「是我々が計る所にあらず。此にまつべし」と、嚴しく此人數を執かこみ、此略を書きて號箭に結びつけ、後の嶽にむかひ、射出したり。暫くありて、向ふの巖頭より掛梯を釣りおろし、兵士二三十わたり來る。一個々々虎の如く熊の如く、兼舎が人數を睨みめぐらし、「儞等頭たるもの一人、懐中を捜り見たるうへ、無刀にして、中陣に參りて軍師に對面せよ。

唐船―謡曲の名

所の市舶を禁制せらる。其事は明人の記錄にも毎載せたり。素卿が鄞江の一屬は、初に訴へ出でたるを以て系累に及ばず。四人の子は如何なりけんかし。機智ありて愼なき者は、素卿を以て誡となすべし。去るにても、其親子別を取りし別離の情、世の人をして酸鼻せしめ、和樂唐船の曲本、見る人今に至つて憂ふ。

七　望月三郎兼舍龍窟を脱れて家を續ぎし話

醍醐帝の御宇、若狹國高懸山に妖賊據り棲みて、其張本自ら眉鱗王と稱號し、賊徒を集め、公の命を拒む。其近邊の人民害を受くる事甚し。國司數々是を攻むるといへども除くことあたはず、朝廷より近國遠國におほせて助力せしめ給へども、賊徒强力のもの多く、あるひは其合戰難儀なるに及べば、賊主眉鱗王齋戒して妖法を修し、自ら出でて戰ふ時は、一身忽ち百千に變じて人を殺す。是によつて官軍勝を取る事あたはず、十分勝つべきの場にいたりても、必ず兵を折く。官軍の中、信濃武士に、望月太郎淸春、同次郎

市舶―貿易商船

海郷の鎮―支那東海沿岸の要所に設けたる倭冦海賊に備ふる要塞

きを上席に居らしむ。貢使は、其著岸の前後によつて座をさだむ。素卿彼地案内たるを以て、市舶の大監に賂うて數種の珍物を饋る。此ゆゑに、市監先に瑞佐が貨物を閲し、宴席に、先瑞佐を請うて首坐に著かしめ、宗設を次の座に居らしむ。宗設大に怒り、先例に違へりとし、瑞佐と忿爭になつて、席間に相搵つにいたる。しかれども、此席互に兵器を帶せず。何の仕出せることもなし。諭し教はゞ無事なるべきに、大監ひそかに刀劍を瑞佐に授けて戰はしむ。宗設が一隊、逃げて旅館にかへり、刀槍を取つて再び戰はんと騷動す。總督備倭都指揮劉錦是を聞いて、出でて兩方を制す。宗設が手下の者、憤にたへず、劉錦を斬殺し、大に猖まはり、寧波近邊、海郷の鎮を掠め、船を奪うて逃れ去る。近鎮より、兵を出して亂を靜め、急に北京に聞して、彼朝の所斷を經て其罪を論じ、市舶大監を斬に處し、素卿が私通の罪、亂階をなせし上、其亡命を憚らざるを以て、重き律に論じて、遂に死刑に行はる。謙道瑞佐は、外國の人にして、殊に使臣なれば、其罪を問はず、本國に還らしむ。この禍は元市舶より起ればとて、これより後、此

簾絹—車の前後に垂れたる帳

なほざりならぬなげき—かりそめならぬ歎

勘合の印—明國より外蕃に授けたる交通貿易の證印

とす。四人の子、父を中にかこみて、「大人、千萬保重」といふより外は、詞ふさがりて手をわかてり。こぎ出でて行くを、車はなほとゞまりて、船を見んとて、簾絹よりのべ出し見る顔の、いとゞ小さくなるまで見おこせたるが、車さへみえずなれば、船もいまは見うしなひてんと、胸つぶるゝやうなるも理なるかな。程ちかき所も、別れはつらきならひなるに、まして危き波濤を凌ぎ、千里のこなたに來たる身の、なほざりならぬなげきならんかし。やがて一日を來りてこそ、旅の心に立ちかはりぬ。かくて恙なく歸り參りたれば、信使調ひたるを以て賞賜多く、恩遇舊日に勝りけり。此て義晴公家の業を嗣ぎ給ひ、世の中騒々しければ、慮を遠くおよぼし、大永二年信使を明に遣はさる。時に細川高國管領に任たり。僧の瑞佐に素卿を添へらる。其の折節、周防の大内義興より、僧の宗設並に謙道を使として信を通ず。是は大内家、先年より別に勘合の印ありて、毎度遣す舊例なり。其使兩人、すでに素卿より先に到つて、倶に寧波に留る。彼土の先例に、凡番貢、外國の使至れば、先其貨を閲して筵席に請ふ。商客等は、主人家其貨の多

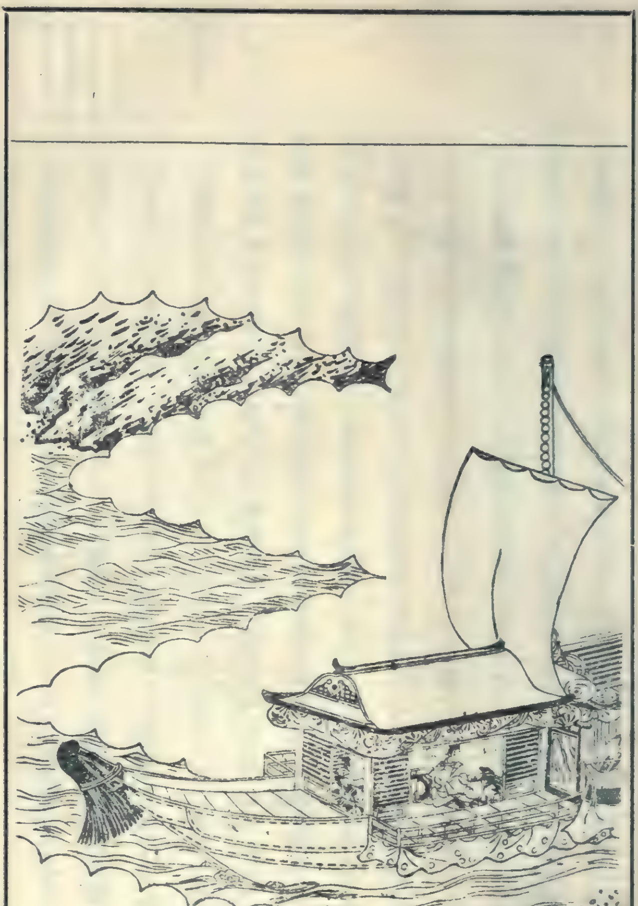
仲滿—安部仲麻呂靈龜二年留學生として入唐し玄宗の帝に仕へて光祿大夫御史中丞となり在唐五十餘年にして彼地に卒す

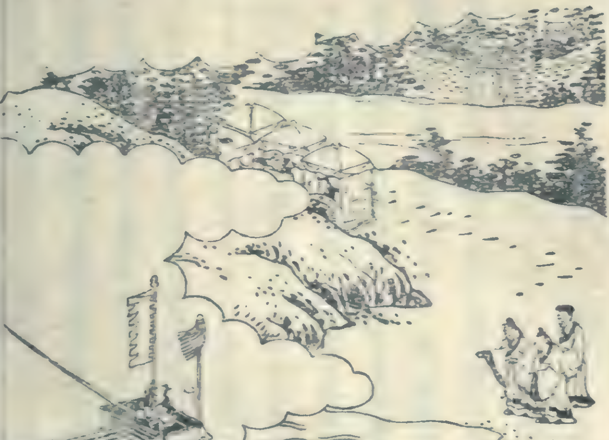
人の子の、わきて不便にかなしく思ふは、小兒の比のことなるを、父は若年の比行跡よからず、一族の諸君にうとまれ、儞らをすつるのみか、父母の國、墳墓の地を去り、他國にあつて異客となる。日本に貴き恩遇を得て歸ることをわすれ、古へ仲滿が跡を踏みて兩國の惠を蒙らんとす。儞ら我を慕ふといへども、我六十を過ぎて、いくばくの年か此世にあらん。我日本に榮ありといへども、外國の人親しみなく、誰に孤を托むべき。思へば和國の兩子も、病と外揚して此地にとめ置くべし。四人むつまじく、ともに唐土の人となれ。父は兩端を踏むゆゑに、後程の吉凶はかりがたき身のうへなり。まして、他國に久しきは我が初の志にあらず。幾程なく歸り來て一所に住むべし。此度父と一所に行かば、重ねては連れ來ることをゆるされまじ。其間朱澄の許にとゞまりて、物學びおこたることなかれ」と、さとし勸むるも副使に聞せじとひそみかたる。男兒等も、父の久しからず來んといふを力に、纔のこり留りける。素卿は海昌の津より船出する。四子も車にのりておくり來り、彼土の官人有司、みな別酒を酌みつくして、素卿船にのらん

り來らば、見あらはさんと起ちあがり、「父の命だに全くば、やがて歸り來ません」と、小童を言ひなぐさめて早くも出で去り、旅館にかへりて後、遂に一封の書を故鄉の親族朱澄に寄す。朱澄書を得て、朱縞が今の身のうへを知り、鄞の有司に告げて云ふ、「日本の使臣宋素卿と聞ゆるは、族子朱縞がことなるを、此たび朱の字を宋と見誤りたるよしなり。彼は出身しか〳〵のものにてと、始終を申して、後議を避くるの遠慮をなす。時の禮臣、外國の心を失はんことを恐れ、寬恕を專らとし、鄞の令にゆるして竊に其の對面を遂げしむ。朱澄やがて旅館に來て素卿に見え、舊をかたり、人情をなす。素卿是に金銀を交與して、兩子の事を托みあつらへ、一面人をはせて兩子をよびむかへ、今こそ親子の對面はゞかりなく、悲喜交かたるにつきず。既にして、素卿和國の兩子を携へ、歸船に赴かんとする時、存糸、素有は、希有に再會して望なく別るゝことをかなしみ、共に連れ給へと、ひたすらなげき告ぐ。素卿これを撫して云ふ、「儞二人は唐土に生ひたちて、今しらぬ國までゆかんといふも、兎に角に父と一所にすむべきの念のみならん。實や

歇息ー休息
沙鍋破甌ー在るものは唯是のみなりとなり
嬭ー乳母
勾當してー取まかなひて
晴してんとこそ思へー思へども

て入り、「行人路に疲る。片時の歇息をたまへ」と、石砧に踞けて見めぐらすに、四壁はありしまゝにて、床褥家伙一つもあることなし。沙鍋破甌、草を敷きて臥床とせり。「小童には父母ありや」と問へば、「父は胎内にある時亡命し、母は五歳の秋に死す。一族あれども、貧を惡みて疎んじ、嬭の解語が憐ふかく我が兄弟を養ひたり。それさへ過ぎし比疫を病んで世を去り、隣家の趙三、銭四、勾當して、化人場の灰となしぬ。孤は日ごとに近き溪水に行きて、水を上せる船を引きて、數錢を得て飢を助け、兄なる存糸は、人家に雇賃して、夜ふけて家にかへる」と、世に淺ましげなるさましていふ。素卿鐵石の心腸も刺すがごとく、目を開きて見るにたへず。「扨其父なる人の生死はしれずや」と問ふ。小童涙をはら〳〵とこぼして、「今は日本に」と計り云ひて、面をたれたるさま、素卿惣身慄ふばかり、しばしは涙にむせかへりて、「世には哀なる事多き。聞くさへ涙ながる」と、他家の事に取りなしても心にたへかね、言ひ明らめて幼きもののかなしみを晴してんとこそ思へ、隣家をはゞかり、假に且其時を忍へ、斯くいふ内も、存糸かへ





閹人―宦官

任を辭し、田野に就きて民たらんものを」と、此趣急に京都に達し、二子を帶びんことを哀み請ひ奉る。是元より官途を踏むものの言ひ出でらるべきことにあらず。兩兒をとゞむるは、彼が二心なき僞の質たれども、今日の其體、詐にあらざるがゆゑ、兩兒を具して行くべきをゆるされたり。素卿御惠を有りがたく存じ、兩兒を書童の樣にとりなし、船を出し、海上に月をかさねて、明の正德六年、彼土寧波に著岸す。是唐の代の明州の津なり。錦の袂を故鄕に飜し、京師に至りて信を通じ、並に孔子を祀るの儀注を請求むといへども、國書の中に求むるの語なきを以て許されず。素卿機智をつかひ、賂を厚くおくり、閹人内官に就いて内奏をなし、飛魚服を賜はりて、是を榮として歸程に赴く。寧波に至りて數日滯留したる内、私に鄞縣にゆき、故と日をくらし、庶人の服して、有りや無しやとおぼつかなくも、我が棲みし處に行きて見れば、家は依舊ながら、荒れのみまさりて、門戸破れ、扉だになく、人住めるとも思はれず。懷舊の感傷にたへず、徘徊する所に、十二三なる小童、襤褸の裾を拽きて外より來り、内に入る。素卿あとにつき

七十稀なり―「人世七十古來稀」杜甫の詩句

悟しけるが、此際にいたりて俄に云ふやう、「唐土は父の本國なれば、行き給はゞ、必ず歸り給ふことあるまじ。われ〳〵兄弟も携へて行き給へ」とかなしみ乞ふ。素卿云ふ、「我日本に來りて榮貴を得ぬれば、一たび故鄕に行きて、舊日の面目を淸めんと欲する迄の本意なり。いかんぞ此土に歸らざるの理あらん。公の使にまかるに、我兒をつるゝ事あるべからず。公道を知らざる未練のことかな」と、詞をするどにおどせども、聞き入れず、「御ゆるしなくんば、われ〳〵二人が命を失ひて後に、御心にまかせ給へかし。死して別るゝはせんすべなし。同じ世に添ひ奉らず、青冥の長天、綠水の波瀾、夢魂だも至らずといふなる所を隔てゝあらんは、死別にははるかにおとり侍らんものを」と、袂を取つて放たず。素卿此言を聞きて涙をながし、「理なるかな。人身の世にある、七十稀なり。其間親子の聚ること幾時かある。遠く隔たりて生きたるは、世にすむ名のみ計りなり。我職を守り、身を忘るべき仕官の身にもあらず、人を治め世を利する能あるにもあらず、いかばかりの榮を貪つて、幼き者にかなしみを見せんや。罷々親子一所に行かずんば、此

寧波―浙江省の東北岸
右京兆―右京の厩政を管理する職の唐名
膏粱―肥肉と美穀

國人の僞すところ、悉く奇にして珍かなる事のみなれば、都人多く迎へて奔走す。右京兆何某、其邸に召しおき、命じて詩を咏ぜしめ、文を作らしむるに、いづれ我邦の人の習はざる所、他は是より雄なれば、世に愛づる事多く、又漢土歴代の故事ども、記憶えたるまゝ語る程に、稱して博識多能となし、遂に室町の御所に抬擧し、拜謁をゆるされ、歴々の師となり、大に意を得て、富貴を思へば、唐土にありしには遙にまさり、膏粱に飽き、第宅に富み、財帛前に滿ち、婢妾後に群す。泉州以來、男兒兩人を出生して、其供育我が幼き時にもまされりと思ふにつけても、故國にのこせし兩人の男子、母と共に今頃はいかゞなりしやと記掛下りず。其時義植公、洛に入つて足利家の職を襲ひ、永正八年信使を唐土に遣はさる。幸案内者なればとて、朱縞を使に充てらる。過し頃、西の京の邊に聖廟を建てられしかば、孔子を祭るの儀を請得て歸るべしと命ぜらる。朱縞望む所と内心大に悅び、字を用ひて素卿と披露し、堺の濱に乘船の設美をつくし、すでに纜を解かんとするの時、送り來りし兩子十一十二歳なるが別れを惜み、兼てはよく覺

約束の套に入りがたく—大才の人は道德の約束に囚はれずして變通自在なりといふ事

瓶は井より小なるがゆゑに云云—才器のある者は自ら小器を面に誇りて身を滅すに至るとの譬

放逸の門を開く—以上二つの譬に對しすれば器用三度を超えて放逸に流れしむる事をいふ

古今奇談繁野話

第四卷

六　素卿官人二子を唐土に携ふる話

才ある人は必ず行なし。大才の人約束の套へ入りがたく、瓶は井より小なるがゆゑ井に陷るのたとへありて、放逸の門をひらく。古今律令の設くる、其垣を廣くして、知愚老幼も犯さぬ程の所に置きたるものを、その度をこえて人を損じ、身も保たざるは、守る才なしとやいふべき。明の弘治正德の比、寧波の鄞とやらんいふ所に、朱縞字は素卿といふ者あり。少年より、亡賴無行にして一屬にうとまれ、世路の便りをうしなひ、妻子を遺し棄てゝ、壯心にまかせ、商舶に附搭して大日本に來り、泉州堺に足をとゞめ、少年の時學びたる文筆を賣弄して、攝州山州の間に往來し、しば〳〵京師に徘徊す。異

老は知らず―老とは此物語せし老人自らいへるなり

三年おこたらず根をもらされしとかや。其所を後世猿掛の岸とぞ申すよし。こゝ去つて西國のことなれば、それをこそ老は知らずと語りつゞけたりとなん。

寃家―貌家の誤か

掾―國守の屬官

り。夫婦寢覺の床にいたりて、道人に謝し、布百疋を進らす。道人今や世財を受けて用なしと、只一匹を留めて服用とし、尙示していはく、「世の人陰陽の理にうとく、强ひて求め、强ひて恨む。寃家相得ざれば、其欝開けず。思ふこと遂ぐれば、花咲きて散るにちかし。是天地の消息なり。其内に、少しの遲速、强弱、幸不幸有り。貴内の貞堅なるも、洞に入りて後、日々に死の一字をゆるかせに思ひしこと、是卽妖術に魅せられたるなり」夫婦聽きて、彌敬服して退く。是より木曾山中霧のふさがりなく、山深きにも至るべし。樵夫、杣人、賤の男女迄、悅ばずといふことなし。女を失ひたる木曾の深坂、これより妻籠の名あるよし。馬籠といふ所は、其時從者を宿せしにや。兎角のあひだに月日過ぎて、早くも掾の任滿ちて、備中の本國に歸りぬ。菊のかた、年月の磨難を熟思ひ出づるに、かゝる變化の寢所ちかく役せられ、婢妾の隊につらなりしこそ、初の念よわりて潔からず、大に貞操に恥る所あり、終身の瑕瑾これなるのみか、又いきどほるべきのことにあらずやと、怪物の首を館の後に懸けて、自ら弓をとりて、日々これを射て、

變化を擊ち殺せり。因てわれ〳〵里をさして出づるに、ふしぎに霧はれて此道に出でたり」といふ。守大に悦び、女ばら白菊ともに、家人を分ちて里に送りやり、その身は山深く入る程に、道は見えざりし山の半腹に、廣き岩窟あり。其内に、石をたゝみ、木を横たへて、館の結構あり。正殿雷の爲に破られ、是こそ變化よと覺しくて、其長一丈あまりの異形の獸、雷火に燒かれて、褥の上に死せり。卽ち首を切りて取りもたせ、仔細に見まはせば、正殿を引きまはして、廻廊の如き家づくりし、畫ける障子もて間をわかつ。これ婦女の銘々局せし所なり。正殿の窓の下に、銀にて飾れる劍一振あり。鍔を見れば陽の形なり。鞘をぬきて見るに、今時のものにあらず。劍のかざり、寸尺、いつぞや狒々が岩穴にて得たりし劍によく似たり。思ふに此怪物と雌雄にやありけん。其外絹布財器數多あれどもこれをとらず、洞の内に火を放ちて、燒きつくして立歸り、國司に參りて始終を語り、虛病せし分說をなす。國司も希代の事に思ひて、人にも語られけり。白菊、家に歸りてより病に臥し、重く惱みけるが、三依道人の靈符を求めて平癒せ

恨むる事あらんや

擬—雷電を擬す文

景色かまゆるが如し—人工にて造り構へたるが如し

人尤と點頭きて卽ち壇に登り、髮を披下け、寶劍を把つて口中咒詞を念じ、檄を香爐内に燒き、大喝一聲す。忽然として殿中昏黑、一陣の怪風起る。守廉壇邊に俯伏して、見れども見る所なし。只聞く道人の聲にて、「燒雷公、今日此山精を擊つべし。雷公の難ずるは、彼に勝つことあたはざるが故ならん。今日大數到る。擊たば必ず得ん」言下、忽ち壇上より閃電起つて、一陣の霹靂雲間に震ふ。漸く殿中晴れて日氣を見る。道人守廉に敎へて云ふ、「雷の聲せし方格を求めゆかば、必ず驗あらん」守廉一躍し、急ぎ從者を具して峻しきを凌ぎ、雷の響きするかたをさして登ること半日。昨日迄霧立ちこめし谷峯、いつしか晴れわたりて、思はざるに通ふべき道あり。平かなる所は沙こまやかに、傍に名もしらぬ木草の花どもいろ〳〵に、景色かまゆるが如し。是飛雲が常に諸女と優遊する所なり。道の勞なく登り下りて、數多の山頭を過ぐる所に、白菊數人の女房と共に逃れ來るに行逢ひて、再會の悅びたとふべからず。扨、「いかゞせし」と問へば、白菊うれしさの淚をはらひ、「今朝、雨なき空に鳴神の、物おそろしく洞の上に落ちかゝり、

神を出し―神を致しの誤か

寃業―宿業に同じ

敬愛の法―夫婦の敬愛和合する修法

いかに況んや女を―いかで女を

を抽き、卦を敷きて云ふ、「鶥鴣氷を慘みて彼南風に翼けらる。是春風氷を解くのごと、足下夫婦完聚の占文なり。怪しむべしく」と、眼を閉ぢて神を出し、半刻ばかりにして眼を開き、守廉にさとしていはく、「もの皆前數あり。此怪物、支干甲子なれば、丁酉を得て滅すべき機あり。儞が妻の丁酉は火の運、甲子は金の運なり。微火を以て大金を消す、一生の厄とす。是大數の行きあひて、其寃業を消却せんとする時至れども、婦人貞實にして、たやすく從はず。おのれに害あるものを深く好めるは、寃業のなす所、神通にも及ばず。敬愛の法に頼つて女を從へんため、昨日法會に參じたり。變化の惡行貫盈すといへども、此緣をとげざれば、いつまでも亡ぶる時至らず。今卦の變じたるを以て見れば、今は前緣を遂ぐることあるか、是亦敬愛の法の應驗あるか、不可思議の妙をしらず。夫婦再會の後、是を以て心に挾み給ふことなくんば、再び拙道足下の爲に法力を施さん」守廉云ふ、「何條その念の候ふべき。我丈夫の身として、彼を降すことあたはず。いかに況んや女をや。此年月志を守りたるは、尋常の女の及ぶべきにあらず」道

天蒼氏—前に地を地貫氏といへる如く唯天をさしていへり

皇孫に對して反く心なければ、其餘の事は咎にあづからず。むかしより數多の女を攝り來り、召しつかひたれど、七人の閨婦、千石の粟は、天蒼氏の賜ふ常の產なり。婦女の輩も、元年々にかゆべきを、愛著の爲に私して、久しく洞に留むるにいたる。年經て送りかへすべきも、多くは命數たもたず。昔より山內山下の里々に、牲と名づけて、少女を供ぜしは、皆我が請けたる所なれども、多くは是れ村女なれば、われも欲せざるより、自然に其事たえたるなり。古は、我も常に形を化現してよき男となり、女ばらに思はれんとのみはかりしかども、我れ德をいだきて形づくりするは、無下に卑きわざなれば、里に出でて遊ぶ時ならでは容儀をかへず」と、是迄かたらぬ物がたり、實にも等閑の人ならずと、白菊をはじめ多くの女房、敬ふ心もおこりなんかし。こゝに寺內に宿せし守廉、明くれば道人にいとまごひす。道人對顏して大にいぶかり、「今日貴所の相を見るに、きのふと大に變じて、眉ひらけ、色悅ぶべし。守廉云ふ、「昨日今日、いかんぞ相の變ずることかくのごとくなるや」道人云ふ、「われも又其ゆゑをさとらず」と、再び著

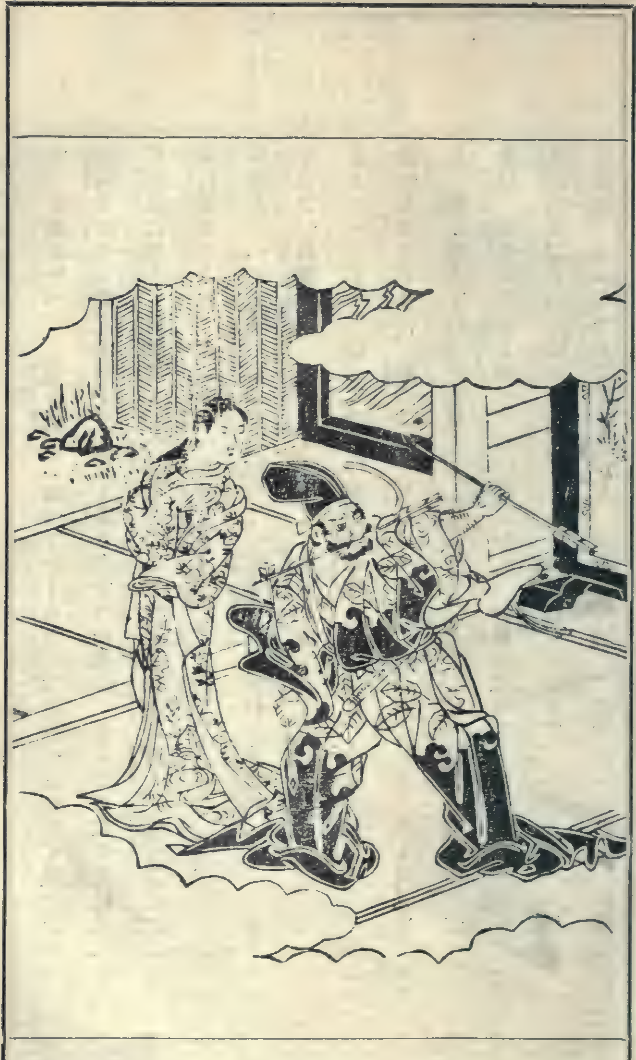
齊眉—後漢の梁鴻の妻孟光が夫に事へて敬を盡し常に案を捧ぐるに眉に齊しくしたりといへる故事

ありて、名知識の占にも、悪人の相はなく、凡人ならぬとあれば、神の化現にこそあらめ、守廨が力量、弓矢も近よることあたはず。われ女の身として、計校の有るべきやうなし、彼また、能くつかへなば歸さんと言ふ。身さへ汚さずんば、帳臺の賤役をもとりまかなひて、結句赦さるゝ時あるべしと、歸路に休らふ乘物にむかひて、是迄の不是を侘びなげく。飛雲も詞おだやかに、「身に近く齊眉をなさば、我ことばむなしからず。さあればとて、儞が貞心を強ひて奪ふべきにもあらず」とぞ申しける。白菊洞に歸りてより、女ばらに立ちまじりて、一應の事をもつとめければ、我が通力に驚きて、女が心和ぎたり、遠からずして本意とげなんと、悦ぶ事かぎりなく、猶も女ばらに向ひて、我出身を語つて云ふ、「我は神世より此所に棲みて、已に二千年。昔大山祇の神に説きさとされて天孫に從ひ、此邦守護の神の數にも入るべかりしを、身の不德をかへりみて辭退し、我山半を分ちて奉り、半を我が隱れ家とし、常に霧をふらして人間に見せしめず、永く引きこもりて世の事にあづからねば、我を隱れがみとも呼びて、勤役のことなし。

大德—僧侶に對する敬稱

へたり—へたばり

ず。守廉著忙つて、拔き設けて切つてかゝるを、大名きつと見むく眼のひかり、一身に劒刺す如く、覺えず居ずくまつて動き得ず。白菊は、もりかどなりとは見たれ共、是も又神通にやと、言葉なくてためらひゐる。大名怒の相を現し、「儞女房に念ふかく、還も職に就かざるか。女よく仕へなば、廿年の後は放ちかへすべし。奉公あしくば、一生かへす時あるべからず。よく思ひ取りて、速く官府に歸れ。大德達、又こそ參らめ」と、女を引きつれ乘物に、うつるとひとしく多くの家人、宙を飛ばせて足はやし。「いかに、其まゝかへさじ」と追うてゆく守廉が面を摺るばかりに、小家の如き大石、空よりどうと落つる地ひゞきに、肝つぶれて尻ゐにへたり、起きたつ時早く影も見えず。餘人の目にも、瀧の邊まで行くかと見えし、忽ちに見えずといふ。守廉、其夜は寺內に一宿して氣を養ひ、彌怪物の業と知り、目に見ながら、女房を取りかへさゞるを殘念に思へど、「是も眞の白菊ならぬもはかりがたし」と、道人にもかたりて、心惑ひするも理なり。かくて白菊は、はからず夫に逢ひながら、言葉なく別れ、道すがら思ふに、此變化いかなる德





褻衣―常の衣服

卷數―讀みたる經卷の數を記せる書附

貴人の籤六十三の歌に云く、
法の庭よき日まうでてあすよりは紅の衣を褻衣にせん、

女房の拈りたる九十四籤に云く、
あな尊けふの御法にあふ人は千年の命ありとこそきけ

道人壇を下りて、卷數を注して參らす。貴人頂戴して、悅び斜ならず下向ある。道人徒弟に命じて玄關に送らしむ。守廉は、歷々の武家參詣と見たれば、彼が歸るを待ちて道人に賴むべきことあれば、間を隔てて立ちかくれ、今ひそかに窺へば、大名の後に從ひ出づる婦人こそ、正しく失せたる我女房なり。大に驚き、變化にはあらで、此大名の仕業なりけり、誰にもあれ、眼前の怨敵脫さじと、物陰よりねらひを定め、兼て手練の一手、三箭連珠のごとく、ゑい、や、はあ、のひやうしに、つらねてはなつを、大名手ばやく左の手にて握りとゞむ。續いて來るを右の手につかむ。間もなく來る三の矢を、口にくはへて嚙みとゞむ。すかさず、しきりに射る矢を、悉く拂ひのけ、一つも身にあたら

かんぞわれ當らん。しかれども、我れ年來萬事意の如くなれば、道人の卦にもるゝ事なし。いかんせん、人界愛著ふかく、色慾の迷ひ多し。恐らくは德を損ずる所あらん」又召つかひの婦人を相せしむ。道人面相して、「命數めでたし」と、再び其支干を問ふ。「酉にあたる」と答ふ。道人卦を設けて云ふ、「內に懷うて替くること差ひ、永く貞祥を失ふ。火の木にあるや、燃ゆることを改めず。中年以來、人の婢となりて其家に終らん」大名近侍に命じて、金錢、卷絹を引かせて云ふ、「道人を煩はす一事あり。我れ給へる卦のごとく、萬心に足れども、近頃一つの任せざる心願あり。今日敬愛の法會に赴きて、此願を祈らんと存ずるなり」道人云ふ、「やがて晡時の壇に登れば、倶に法會に參して祈り給へ」と、茶菓を供じて待さる。既に壇に登り、讀經の宣卷をはり、香をひねりて、「南無十方の諸天、此一炷の香、四海安靜、五穀豐登、三の教昭明に、聖の君歡多かれ」又一炷撚りて、「十方施主、福德延命、拔苦與樂」又一炷を燒きて、「今此甲子の貴人、如意滿足ならしめ給へ」と、懇に祈り求めらる。參詣の衆、籤を拈りて、其數の辭を求む。

引かせ—引出物にする事、即ち布施するなり

晡時—夕暮

三の教—儒、佛、道

數の言—卦に現はるゝ命數を判斷することば

點心—茶菓

前供—前驅の誤

產、失せたる時二十三歳、今年二十五歳なるべし」道人爲に卦を敷く、數の言に云ふ、「其道を永くせば、得ざれども咎なく、此人存命疑なし」又問ふ、「其怪いかなる物ぞ。占ひ知るべしや」道人卦を設け、頭を搖つて云ふ、「大幽之門、窺而無間。其密なること見るに方なし。我智識に量りがたし」守廉拜をなし、內玄關に退き、點心を食し、休息す。其日も未の刻さがり、暮の壇に參詣多き中に、前供人を拂ひ、門外に留り、乘物のめぐり近習打圍み、玄關に舁きすゑ、烏帽子引きたて立ち出づる威風骨柄、小可の人にあらず。後乘は召つかひと見えて、美麗の婦人かしづきて客殿に通り、此大名道人を拜して、「何某は諏訪の一屬、小身なるものなり。忍び詣なれば名のらず。先づ我に卦を給はるべし」道人其の支干方位を問ふ。「我は此國の舊家なるが、幼にして孤となり、大君の家に寄食し、生辰を記えず。假に甲子を以て是に充つ」道人卦を敷きて、心驚きて云ふ、「天賜之光、於謙有慶。貴人德ありて隱るゝゆゑ福つきず。壽命は海山と共に久しく、よろづ心に叶はざるなし。凡人の卦にあらず」貴人大に悅び、「道人のことば、い

浦島が寢覺の床—木曾惠那郡の地名
孔雀明王の法—平安朝以來眞宗にて一切の魔障病患等を除く爲に行はれし一種の修法
白馬佛教を漢土に駕せざる以前—後漢明帝の時天竺の僧摩騰法蘭二人、五部の佛經を白馬に載せて漢地に入る、帝之が爲に白馬寺を建つ
玄文—手相
尊閫—奥方

き程は分け入りて、餉盡くれば里に出でて人家に休息す。兎に角に、霧立ちのぼる奥へは、人力にて至るべき道なければ、さすがの大丈夫も心屈して、心地例ならず、思ひつかれしも理なり。こゝに浦島が寢覺の床に、はじめは草庵を結ばれしが、後は其徒集り、葺きつゞけて殿門備はり、三依道人と呼ぶ翁すめり。持行する孔雀明王の法は、白馬佛教を漢土に駕せざる以前に、子玄仙人西域に遊びて是を傳へてより今爰に傳流し、病を祈り、禍を拂ひ、拔苦與樂の驗をあやまたず。面相玄文の占卜は、往を說き來を示して違はず。信心を擲ちて禳醮を求むるもの日々に絕えず。此一七日は三種の密法を修せらるゝとて、參詣の人群集す。守廉違例逍遙の爲此寺に來り、道人日中の壇を下らるゝを待ちうけて拜をなし、「某ははるか西國のものなるが、此國にて妻女を妖怪に取りさられ、生死の樣を究めん爲、山に棲む事三年を經たり。再會の期あるや否や、考を下し給はれ」と、懇に賴み聞えたり。道人守廉を近づけ、面相し、沈吟して云ふ、「いまだ時至らず。命を全くして待ち給へ。且尊閫の生土年齡いかん」守廉云ふ、「我と共に吉備の

つと入りて―つツと入りて

鹿兎の云々―引さき食ひ散らされし鹿兎

に矢をつがひ、這厮が笑ふ時を窺ひてへうど射る。巧にも上脣を額へ托けて射通したり。一聲さけびて、巖のうへよりころびおち、矢を負ひながらにげゆくを、のがすなと、跡をとめつゝゆけば、峯ひとつこしたる谷陰に、岩窟ありて血傳ひたり。外より把火投げこみ、見入るゝに、彼獸倒れて動かず、たゞ頻に號びて衰へたり。主從つと入りて、やがて大石を搿きて頭を打ちひしげば、一聲さけびて、其石を手まりのごとくはるかの所迄なげやりて死にたり。窟の内を見めぐらすに、岩のさし出でたる上に太刀一腰あり。銹び朽ちてぬけず、希有のものなり。尚もさぐり見れど、鹿兎の、引きさきくらひ散したる、こゝかしこに在るのみなり。たゞいま難所を走りたれば、主從共に大につかれて、「日も傾きぬ。此窟に宿せん」と皆いふ。守廉頭をふつていふ、「察するに、狒々は必ず雌雄ある獸なり。今殺せしを見れば雌なり。今にも雄が歸り來らば、此つかれたる我々ふせぎ難かるべし」是を聞きて、皆々怕れはしりまどうて出でぬ。我妻の事、此物の所爲とも思はれず。益なき殺生して雌を失はせたりと、我身に思ひたぐへて、猶も行かるべ

されども百年に一度は現はるゝといひ傳ふとかや。四五十年このかた、おのれが物おぼえてよりは、其洞を見たるものなし。仙人の住所と申し傳へ侍る。いかにもあれ、是より奥は常に霧ふかくして道なく、東西南北を別きがたく、樵夫山叟も入ることを得ず」と語る。守廉聞くにつけても心おとりすれど、よしや道なくとも、行かれぬことのあらんやと、把火先を照させ、霧ふかきまで、勉強て分け入りて見れ共方格しれず。からうじて里あるかたにめぐり出づるのみなれば、事ゆくべき共思はれず。一日絶壁に行きなやみたる邊りにて、一つの怪しき物こそ見えたれ。大巖の上に坐せるが、長は七八尺もあるべし、色あかく猿に似て、又人面のごとく、人を見て笑ふ。其聲鳥のごとく、音の章人に似たり。笑ふ時は上脣額につく。人を見て恐れず、去らず。従者どもこれを組みとめんとす。守廉制して、「これこそ聞き傳ふる狒々といふ獸なり。猴千年にしてなるともいへり。此物の所爲なるもはかりがたし。此物を捕獲まほしけれども、其力萬鈞を擧ぐると聞けば、力を以て勝つべからず。我むかし弓法に其傳を得たり」とて、ひそか

より屈竟の家の子兩三人、心を一致にして、餉をつゝみ、苔に臥し、松を打つて把火とし、巖の下、重る根、茂林、藪原を極め、谷神の棲む處、山祇の戸ぼそまで驚かして細見すれども 熊の館、猪の窩の外は、妖怪の住むべき所も見えず。峯よりおるゝ賤の男に、物語を仕かけて捜り問へども、「深き山中なれば、おそろしき物も、あやしき所もありなん。通ふべき路の外は、われどももいまだ見とゞけぬ所のみなり」といふが中にも、事知りたる顏に、麻ぎぬの袖、まくり手にして、「木客といふ魂消る物こそあんなれ。朽木積める葉に精入り、目一つにしてうごめきゆく。力つよく、智慧なし。道に障らざれば物を害はず、時氣によつて現れ、時氣によつて滅す。是をこそ眞の化物とやいふべき。又木きる叔父がかたりしは、昔より此山にかすみの洞といふものありて、春の頃晴天に、常にはあらぬ高峰を現じ、其懷に棟高き殿構せる洞穴俄にあらはれ見ゆることあれども、またゝくひまにかすみ立ちこめて、いづちとも其所見定めがたし。これを見れば恐しきことあるよし。山かせぐものは、一生の內それにあはぬやうにと念ずることなり

千鈞の弩—第二卷第四章の頭註に出せり

生ひすがふ—生ひ繼ぐなり

散らぬ花を踏み分け—棧道高くつきたれば脚下に花の梢を踏む心地するをいふ

を巧にして説きいざなへども、女の心にゆるさぬは、方圓の器にしたがふ水の、形はよわくして取り定めがたく、こゝにまろびやすきものはかしこにもとゞまらず。又は千鈞の弩の、一重の絹を穿ちかぬる理なるべし。

白菊の下

却説も守廉は、妻女を失ひてより、岐蘇の谷峯につゞきたる險所をさぐり、飛驒信濃の山中を、こゝかしこに三日六日足をとゞめ、いつをかぎりとか獵りくらす。春は生ひすがふ木ずゑをわたす棧に散らぬ花を踏み分け、谷水の清きに夏をば外に聞きわたり、幾らの峯を凌ぎては、空も一つにうつ蟬の、聲する程ぞ今朝見れば、木曾の伏屋の竹ばしら、撓める雪に路を塞がれ、又立ちかへる山々の花、燃えんとするに心せかれ、思ひめぐらすに、此近國の山深きに住む妖怪變化の所爲なるべければ、いまだ女が命だにめでたくば、尋ね得であるべきか。先近きより遠きに及ばんと、信濃一國の幽谷を捜り、元

心に誓ひしも云云―寧ろ死なんと心に誓ひし事も又思ひかへすには負けて得も死なずとなり

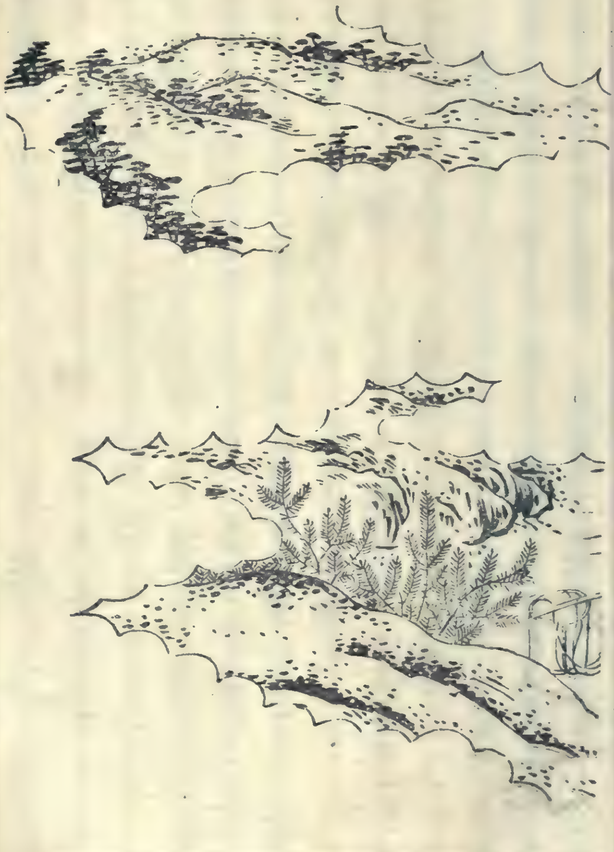
父の家より云々―壻より迎へられて父の家より行く途中

る類なり。さき程酌に立つて眠り、主の怒りに逢うて次へ出され、隨便桶を荷ひ、酒宴の席へ出で給ふより、我々も怪く思へども、言葉禁制せられしゆゑ、傍より見たるばかりなりしが、御身主を見てなつかしげに、桶をすてゝよりそひ、髪を擧げさせ、別るゝに臨みて一同に笑を許され、始めて聲をあげしなり。これ皆彼人のあざむきまどはす戲れなり」此花云ふ、「斯く云ふわれもこゝに來て、花鳥の音色、霜雪に其時を思ひわきて、十年にも及ぶべし。故郷にいつくしみせる父母、かなしと思へる兒をのこしたれば、離れて存るべき命かはと、心に誓ひしも、思ふには負けたるに、彼人のあはれみて、われを故郷に送りかへし、夫や子兩親にも、逢ふと見つるに慰みしが、或夜諸寢の夢破れ、見ればかはらぬ此洞の内、悔しさいふばかりなけれど、凡人の力にはかりがたく、又是なる映葉は、父の家より壻がねの迎へらるゝ輿を路より横ぎられ、はじめはむこ君の家にあるとのみ思ひくらされし類もあり。遲きと速きと、遂に其計術に落ちざるものなし」と、語るを聞いて白菊も、舌を吐いて言葉なし。飛雲も女を馴つけんと思慮をくるしめ、言

髮のすさみ—髮の亂れ

とよみをあげて笑ひ—響動して笑ふなり

逃げ歸るとも、神通の妖怪、千里とはのびさせまじ。退治せんことも、佛神の力をからでは、いかに本望達せんや。人多く催し、後の十五日にこゝに來り、おことに出合ひ、案内させて洞に斬り入るべし。其あひだは、氣色を察られず、心をとめてつゝしみ、身を汚さぬ方便こそあらまほし。今此所に時うつらば、變化いかにうたがはん。我は早く立ち別れん」と、行くを放ちかねて暫時と惜むに、男も心よわり、草の上にかへり坐し、つくづくと女房のさまを見て、「容色は衰へねども、絕えて櫛せぬを擧げてやらん」と、胡籙より鬢櫛とり出し、谷水に髮のすさみをうるほし、歸り遲しととがむるとも、よしやよしのの中たえし、妹背の山の茂り添ふ、木の葉敷寢に寄んとする時、笑ふ聲の高きに夢うちさまされ、見れば有りし宴會も闌にして、淺ましや、變化の膝によりかゝりてありし。夢に夫と思ひしは、これなりしかとおそろしく、拂ひのけば女房等、とよみをあげて笑ひ、是を酒宴の興とせり。飛雲も十分醉深く、扶けられて伏所に入りぬ。跡にのこりし女房等に、夢の次第を語らるれば、皆云ふ、「我輩の計に落されしも、多くかゝ





此世ならでも云云―來世に再夫に逢ふ事ありや覺束なしとの意

はこぶ足なみの云々―足並を浪にかけ、さて浪の漲る溪水の源といひ續けたり

取りすがうて―取りすがりて

や、淵に躍りてと思へど、此世ならでもあふせあるや。命こそ物を成就する種なり。變化が今かく無道にして勝つ人なきも、年經たるしるしならん。うらみ死なん命をつぎて、道なき人の果を見てましと、はこぶ足なみの、みなぎるもとの淀めるを、二つの桶にくみのぼせ、たゆき手を休むる所に、珍らしや其のこのかた、世の中の人とてはふつうに見え來ざりしに、向ふの峭をつたひ、道なきに葛を引きて登り來る人あり。弓矢かき負ひ、太刀刀おびたり。獵人ならんと、近づくを見れば、夫守廉なり。いかに、こはうつつか、うつゝならぬかと、早くも取りすがうて、女まづ泣いて詞出でず。守廉且つ喜び、且かなしげに、「我は別れてより、家をすて、祿を擲ちて、此山つゞきの麓の里にさまよひ、行衛を尋ぬること既に三月にあまれり。今日こゝに來り逢ふこと、夫婦の縁盡きざるか」と、たがひに染々泣きかたる。「扨しも何物の所爲なるぞ」と問はれて、身の憂きことは飯倉の、山にもまさるつらさをかたり、「かゝる變化にてこそあれ。洞は、是より西に見ゆる高峯の懐になん侍る」と、語るを聞いて守廉、「此まゝおことを具して

もちろんとて斯く命ながらへ居るなりとの意

節を壽き―九月九日菊の節句なるべし

「並の人心にはあらず」と申しきこゆ。飛雲今は大にいかりて、白菊を下家に下し、洞の中の用水を遠きに汲みとらせ、衣服を洗ふ賤の役をなさしむ。白菊却てこれをうれしきことに思ひ、日々谷に下つて、水を汲み衣をあらひ、此のいやしき業をなすとも、身を汚すにはまさりぬと心に足りて、故郷の土神を祈り、再び家に歸らしめ給へと、拜せぬ日はなかりき。洞の中、日數は覺えねども、月の圓きを月の半としり、三月計の後、飛雲其容色の苦しみに衰へんことを慮ひ、しばし賤の役をゆるして貌を養はしむ。一日南廂に宴を設けて節を壽き、白菊を酌に當らしむ。寵愛の綠樹、此花、梁瀬、吳の竹など宴に侍り、其餘の女、絲に舞ひ、竹に歌ひ、興ある席に、白菊しきりに眠を催すうへ、變化が女ばらに相狎れて戲るゝを、目の不祥、見まじ〳〵と俯につれ、酌をくはへながら、ふら〳〵ねむりて酒をこぼすもしらず。飛雲はらあしく罵り、拳をあげ撲たんとせしが、「此罪科に、此座より直に、谷二つあなたの瀧を汲んで來れ」としかりやりぬ。白菊は、實もあやまちせりと身の罪をしり、桶を肩にして、蹊をめぐり、流れに沿ひ、よし

朝夕に馴るればこそあれ—朝夕馴るればこそ斯く奉公して在らるゝなれ

いかなる風の末に吹き—いかなるよき風の行末に吹きて、深山隱の谷水の海に出づる如く再び世に歸らるゝ時

よりて、白菊の方をいたはりなだめ、さま〴〵にすかしこしらへ、「斯くなるうへは、長くかなしみて詮なきことなり。昔より、卑き軒端にてはかしらをさげずして過ぎがたし。われ〳〵も皆厭かぬ中をさかれ、こゝにとられ來て、逃れ出でんとすること幾度なれど、山中の方格しれず。行き〳〵ては舊の路へもどり、遂に出づることあたはず、既に五年の春を見たり。御身の今變化を初めて見たる思ひのごとく、かゝるむくつけき貌にあらずとも、元より女は男の美醜を論ずべきものにあらず。此變化里に出でて遊ぶ時は、其さま優に貴く、國司の形粧をなし、其人柄すぐれてうるはし。左あればとて、いかに心くだりて從はんや。朝夕に馴るればこそあれ。彼が心に從へば、彼もまた心を用ひてめぐみあはれむ。さればこそわれ〳〵が如きも、死すべき命をぬすみ、かひなき生をむさぼり、いかなる風のすゑに吹き、一水の海に歸するを待つ身とはなりぬ。また從はざればし苦しみをあたへ、つらく懲しめ、遂に妖術に惑し誘ふ。見來たるに、早く從ふを好き心得といふべし」と、和らかにすゝむれど、白菊答へだにせねば、女房ども詞つきて、

目に見えぬ鬼のとりしめなく云云―目に見えぬ鬼ならば何處を在所と見極めがたくて只戰慄するなれど是は人體を現したればさもあらずとなり

西施―呉王夫差の妾

虞氏―楚の項羽の妾

昭君出塞―漢の元帝の妃出でて匈奴王單于に嫁す、塞は國境なり

楊妃馬嵬―唐の玄宗帝の妃馬嵬といふ所にて斬らる

此洞のうち、別に一つの世界にして、こゝに來たる婦女は、年を積みても顏色かはらず。御身もなげきをすて、我によく奉公し、長生を樂しめ」と、手をとりて細やかにかたらへば、白菊は、彼が異樣に恐ろしきに、氣も魂も雲間に飛ぶばかりなれど、目に見えぬ鬼のとりしめなく、そゞろにわなゝかれるには事かはり、心をつよくなし、變化に向ひ、「自はさら〳〵此所の樂みを願はず、速に死せんことを念ず。非道の振舞あらば、舌を喰ひても死すべき」と、はげしき詞は惡ましからん、白き耳根に黑き髮のこぼれかゝり、泣き低れし顏の化粧の、泪に洗はれたるさま、惱める西施、泣ける虞氏、昭君出塞の憂容、楊妃馬嵬の愁眉もかくやと思はれ、まことに天然の國色。急にせまらば、身をや失ちなんと、女房等におほせて、誘めなつけしめんとす。多くの女房いで來り、いざとて帳臺に引かんとす。白菊是を拒みて、「我官人の妻として、由なき所の帳内に入るべからず」と、勢氣をつかひ、坐に據つて動ず。飛雲笑つて、「生人に熟言ふべからず。我は北窓に一睡して前夜の勞を息めん」とゆるぎ行きぬ。女房の中にも、此花、阿野、ちかく

かゝる事なん間に多かるとこそ聞け云々―かゝる事多かりとこそ聞けども、夫婦恩愛の情は更なり、如何にも意氣地なく思はるべければ本國の一門にも再會しがたしとの意なるべし

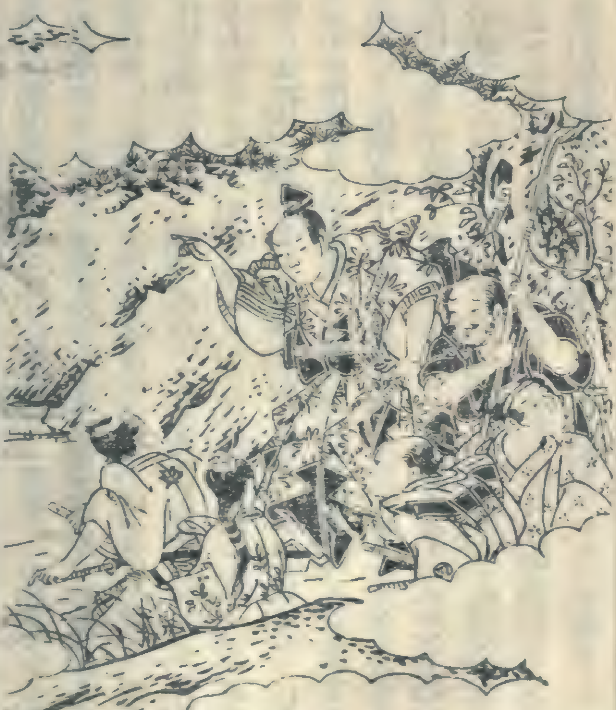
目―國守の下役

帳臺―帳にて圍ひたる貴人の座所

り、さぐり求むれども、何を見出したることもなく、「此山中にてはかゝる事なん間に多かるとこそ聞け、恩愛の道は勿論、女房を妖怪にとられ、本國の一門に、何の面目ありて再會すべき」と、物狂しき迄に憤れども、公事身にあり、怠慢しがたしと、其所を發して國の府にいたり、國司に謁を取り、前の掾に代りて、幸に目の舊きまゝ殘れるに、密々身のうへをかたり、所務を目にあつらへおき、もりかどは人に對面なしがたき病ありと披露し、引き籠りたる體にて、心腹の家の子三人を從へ、女房の生死を見屆けずんばやむべからずと、獵するもののさまして、岐曾の難所をこゝかしこ、道なき所まで探り迷ふ。白菊の方は變化に攝られ、洞のうちにいたりても、しばしは現とも思はざりしに、人ごこちつきて、扨は鬼の洞にとりよせられけるよと思へば胸つぶれて、涙湧きて流る。偸目に見めぐらし、帳臺を見やれば、媚ける女房幾人も伏侍ひて、大將よと思しくて、顏赤く、鼻尖り、身の丈け一丈ばかり、門の仁王のごときが、綾の衣服にまとはれ、帳内をゆるぎ出て、白菊の傍にむつれ近づき、「緣あればこそ此所にもむかへつれ、

數に折られたる身にて、いかに左程まで山賊に用心すべき。殊に天聽の命を蒙り、此國の鎭として、我が帶び來たる所の老黨若黨は、一人當千の家の子なり」と、勢つよき詞に、亭主も其席を退きぬ。若黨雜人は端に臥し、使女の輩は脇の間に臥しぬ。守廉は妻の白菊と正面の間に宿り、山中の靜なる夜のさまめづらしく、寢物がたりして笑ひ興ずる所に、さそふがごとくに眠きざし、しばしと思へど寢にけり。しきりの風の音に目を覺し、傍を見れば、早く女房を見ず。淸厠にや出でけんと、戸ざしのあたり見めぐらせば、いつしか家と覺しき物はなく、戸ざしと見えしは立木の隈、使女家人等も皆草の上にまろび伏したり。こはあさましと、急によびおこせば、家の子らもはじめて心づき、前後を見れども一つの民家もなく、月光明らかにてらし、遠寺の鐘聲を聞けばいまだ初更なり。守廉夢の心地して、いかなる妖怪のたぶらかして、旅宿を假に現じて、女房を奪ひ行きしや、山精などいふものの所爲にやと、忙れ迷へども今いかんせん。樹下に露をしのぎて其夜をあかし、民家ある所に立ちもどりて人馬をとゞめ、家人を東西へ分ちや





を通る一行の旅人あり。其中に一つの張輿あり。飛雲これを察するに、輿の内嬌き婦人あり。容貌閑雅に、あてなる顔花のごとく玉に似たり。其支干を推察するに、既に十六歳にして丈夫にかしづき、今年二十三歳におよぶ。いざや攝り來り、酒宴の興を添へんと、卽時に山神に命じて、往還の路上に一つの旅館を化現せしめ、「外に宿驛なければ、かならずこゝに宿るべし。深夜にいたつて、女を攝りて洞に入るべし」山神承はりて結構をなし、俄に白日を暗夜となす。守廉山路に倦みつかれて、日もくれぬと此所に來り宿る。從者奴婢居ながれて休息す。飛雲宿の老翁と化して、心よくもてなし、客の間に出でて物語し、「此翁今年八十餘歳、耳は頭のうへに雷落ちかゝりても聞えねば、物その用に立たねども、殿の爲に申すべき事こそあれ。これより向は山なほ深く、盜賊狼の害多し。具せられたる女房の御方は、此翁が許に預り奉つて、殿向へ御著ありて、多人數を以て迎へとらせ給へ。此間、美目よき女を奪ふなる、山賊のあるをしらせ給はぬにや」といふ。守廉冷笑ひて、「われ不肖なれども弓の本末を知り、本國にては、武きものの指

方格―方角

陰陽採補の術―陰陽二氣を調和する神術

耳報の術―居ながら天下の事を聞き知る術

人氣猶開けず、甚惡所なり。道の南北山中に、人跡いたらざる所多し。いづこの程にや、狒々谷といふ所あり。後世其所さだかならず。其懐に一つの洞あり、隱れ神の岩窟といふ。道は霧立ちこめて見えず、方格定めがたし。數十年の内、たま〳〵あらはれ、洞の中に宮殿有るを見ることあり。山下の人つたへいましめて、これを見る時は、早く其所を走り去る。若しためらひて見とめんとすれば、忽ち空より大石落ちかゝり、粉碎となる。此洞に一つの怪物あり。出づる時は一片の雲となりて飛行す。故に人より名をつけて飛雲といふ。其本身は猢猻の精なり。神代よりこゝにすみて、神通廣大、變化きはまりなし。朝夕霧をふらして、山深き所を人に見せず。欲しき物を攝り偸む事心に任せざるなく、時々人をたぶらかし、害をなせども、佛神もこれを制することあたはず。美酒に非ざれば飲まず、美服に非ざれば著けず。陰陽採補の術を得て、長生の道を煉り、近國諸山の妖怪山精皆これが部下にしたがへ、猛獸を役し、耳報の術を得て、洞の中に居ながら、百里四方の動靜を聞き知ること、掌上咫尺の如し。こゝに一日西南の方より、此路

ゆゑ―文とは禮儀作法衣服制度の類すべて人爲のものをいふ

萬歲の深山―漢の武帝嵩山に登りしに山神三たび萬歲を呼びしといふ故事

居風をしり、穴居雨をしる。深山大澤何の怪かなしとせん。昔東國に往來する商客、木曾の妻籠といふ所に脚を傷はり、數日滯留し、寒暑の異同も長夜の談に盡き、地名產物も計へつくしたる折柄、其里に祖上より久しく住める老人、座にありて云ふ、「此所を妻籠と名づくること、さま〴〵いはれある中に、老が先人どもかたり傳へたる長物語の侍る」とて、田舍人の口鈍く語り出せるは、事怪く、くだ〳〵しけれども、誠に千年の妖霧こゝに至つて盡き、萬歲の深山是に自て開くの談にあらずや。淸和天皇の時、美濃守源朝臣穎を信濃守に轉任せらるゝことあり。其時備中の國窪屋大領が弟三須守廉、權門の吹擧によつて信濃掾になりて、國なる妻女を催し登せ、さるべき家人等を召具して本國の路に赴き、日數歷て、飛彈と信濃の界なる、岐蘇の深坂にかゝりぬ。小笹原分け行く袖に露けくて、險き路五步登れば五步下る。人馬共に疲勞す。理かな、むかしは美濃と信濃と、通路不便なりしを、文武の時岐蘇山道を開かれ、岩を碎き、棧を通じ、當時何年に及べども路定りがたく、元より此山中烟瘴深く、妖怪出沒し、往來多からず、

狗神―犬の靈をする役一種の巫術

夏蟲の見―莊子に夏蟲には以て氷を語るべからずとあり、見識の狹きをいふなり

毛類は文なきな

に使はれ、狗神の人の爲に貪る類あり。凡そ生ける人並に種々の有情の物、皆神ありて、物に附き、人に托し、はるかに死鬼の神よりも靈なり。唯身を先にして、人の爲を後にす。是生者の天情にして、世の人多く免れず。故に自身は其神の通づるを思ひしれども、他人は知るに及ばざるなり。上古山川草木いまだ開闢けず、人居も密ならず、山魅の類人に近く、形を現じて人間に來り交る。人皆山魅の爲す所を知る。後世人民繁息し、山を開き、海を築きて、その食を足し、險を通し、水を引いて、その運輸にたよりす。人行くの處自ら蹊を成し、地平かなれば、人あつまりて居とす。龍蛇犀狼恐れて人に遠ざかる。山魅罔兩尤も靈なれば、なほ〳〵深く避けて人間に近づかず。後の人、多く目に見ざるか故に、鬼と魅との分をしらず、混じて一とし、又古への怪事を聞いて、今見ざるを以て、疑をおこすもあり。古へに有しを以て、今もありとして、理を誣ひるもあり、又古あるの事は今もあり、今なきの事は古へもなしといへるは、時變をしらざる夏蟲の見なり。毛類は文なきがゆゑ、天然に近く、開長生もあり。求めずしてよく前知し、巣

古今奇談繁野話

第三卷

五　白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話

罔兩―山川に棲む怪神

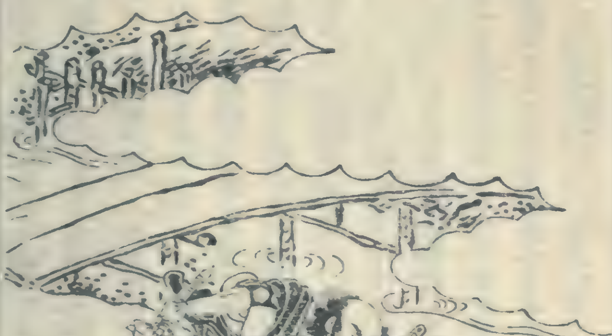
倀鬼―鬼の名鬼中の最悪なる者と聽雨記談に見ゆ

古人云ふ、鬼神と山魅の類と、幽現の別あり。山魅、木客、罔兩、猿狐の類は皆形體あるの物、時あつて形を隱し、時あつて形を現す。是にさへ、靈明を使ふに巧拙の分あり。巧なるは物を役使し、人の敬を發さしむ。拙きは、靈を假して人に役せらる。鬼は人沒して土中に歸るの名なり。骨肉は土に屬し、其氣の發揚して空にあるを鬼の神といふ。體なく、聲なし。是も尚異常あり。常なるは、祭れば降つて饗け、祭る人の心に交り、近くして其跡なし。異なるは、人に托して語り、人に附きて靈ならしむ。形體なきゆゑ、恐るゝ所なく、身の慾なく、靈を示せば專ら人のためにす。中にも愚なるは、倀鬼の虎

干城―まもり、「赳々武夫公侯干城」
會酌―會釋の誤
穩便―祕密にせよとなり

て行はるゝ、某は彦野部新左衛門尉爲光、上意承り、南方衰へたれども舊臣多し。中津川入道今京都の干城をなすも、其本心いまだ知るべからず。よつて某來つて貴侯の家に竊候をなす。今事急なるがゆゑに姓名を披露す」と云ふ。赤松刀を收め、會酌して、矢田十郎に說きたる利害の趣を語れば、彦野部も甚これを公論と稱し、「足下の本心如此なれば、貴宅に足をとゞむべからず。取りしたゝめて御いとま申さん。此事穩便」と、同伴して中津川にかへりぬ。入道矢田が志を憐み、住吉坊並に所の者に命じて、其地の堺田に埋め、土を築き、石を鎭となす。時の人是を山伏塚とよびけるとなん。其後靈蛇あつて、此塚に出沒するを見る人多し。又靈火あつて此邊に出遊す。怪しといへども害をなさず。偶これを見たる人は、必ず其の志願を成就すと云ひ傳へたり。





烏足―烏の如く刻み足に飛び進む事

心ゆりせず―氣掛りでたまらず

陪臣にあらず―諸侯の臣にあらず足利家の直臣ぞとなり

安堵の御書―將軍より下しゝ領國の命令書

を行き拔けて、住吉坊も程ちかくなれど、かく頼もしげなき入道と同道して行きなば、彼坊も我を無道人のやうに思ふべしと、元來短慮の義啓、よし〳〵入道を打捨にすべしと、兎餓の尾と古渡邊の間、人遠き所にて、詞をも掛ず、せはしく切りつけたり。入道心得、飛びのきて拔きあはせ、よせつ開いつ二三度せしが、入道烏足を速くはこびて、したゝかに切りつけ切倒し、「傷ましながら、世の爲に害をのぞく。自ら儞が愚を恨めよ」と、刀の血押拭ふ所に、向ふなる神祠の藪かげに、一人の農夫、鍬を杖につきて咏めるたるが、走り來りて笠取るを見れば、中津川に新參の下部なり。「殿の單身にして出で給ふを見て、心ゆりせず、見えがくれに御供せり」といふ。其體如何にも心得がたく、入道怒りて、「いはれざるおのれが猿知惠、生けておかば、始終を世上にもらさん。刀次手に懸くるぞ」と取つて引きよする。事急なるに及んで、此男制止かね、「我は陪臣にあらず。麁忽し給ふな」といふ。入道つきはなして間をおき、すこしも油斷せず。其時此男、懐中の嚢より安堵の御書を出して、手にとりて見する。「御墨付紛れなく、何々の郡を充

一分の善―我昧方だけに取りての善

後末の名欲―後世末代の名を得んと思ふ心

連れける。道すがら云ふやう、「義登、儞と我と舊識なりといへども、志の懸隔すること君子匹夫の違あり。匹夫は君子の心を知らずといへども、君子は匹夫を見る事易し」義登心怒りて、「我いかなる所か是匹夫なる」入道云ふ、「天下の善をなせば天下を利す。是君子なり。一分の善をなせば天下に害あり。是匹夫なり。近年、天意騒亂に倦みて治世に入り、蒼生よみがへりたる思ひをなし、四方に弓兵を動すもののなきに、儞一人存念を立て、自ら憤を快くせんと欲して亂を唱ふ事、遂ぐべきにあらねども、火起れば風加はつて、微しの勢を得ば、上下を震驚し、人民業に就くことを得ず。天兵一たび臨んで、片甲も留めざるにいたり、儞は一旦の義勢を振ひて、後末の名欲に死するとも、笑を含まん。儞が爲にいざなはれたらん幾百の人命を落し、處を失はしめ、其罪皆儞に歸す。老夫日々世の安寧を庶幾ふ心より見れば、匹夫たることを免れず。擧頭三尺神明あり、隔壁一層人耳多し。再び此志をいふことなかれ。今拙老を無二の力と思ひてかたらへども應ぜざるがごとく、世の人も又しからん物を」とかたりつれて、已に融寺の南門

論語に吾れ復夢に周公を見ずと孔子の歎じたるをさす、こゝは其事念頭に入らざるをいふ

耳目をなす—目附役

片時も回復の念やまず。あはれ昔日のよしみを忘れず加袒あらば、日ならず事を擧げん。貴君には見認り給はん、今勢州に櫻崎左兵衞と變名するは、正しく楠判官と見えたり。彼が三男正勝、衰へたれどもなほ千劔破を守る。奥路に兒島高德あり、四國に義宗ひそみたり、熊野、十津川内心變せず。誰にても、一たび義を徇ふる程ならば、期せずして集るもの多からん」といふ、ことばの中より入道面色かはり、「義登しばらく待たれよ。此事我館にて談ずべきことにあらず。必ず無用たるべし」義登面慍つて云ふ、「貴殿、身の逸樂に安んじて舊きを捨つること、人の禽獸に異なる所を知るや」と、早惡言に及ぶ。入道聞くに忍びず、既に太刀取りなほさんとせしが、自ら氣を降し、胸をさすりて云ふ、「拙老此處にあるは、退隱に似て、實は足利殿の爲に耳目をなすなり。異樣なる山伏來りて我に逢はんといふさへ、家人等疑を起すなるに、かゝる論談に時を移しては、兩人愼なきに似たり。只今儞を送る體にて、住吉坊の方へ行きて談を交へん」と、義登を促して座を立たしめ、其身は一個の僕奴をも具せず、脇の門より出で、南に向つて打ち

本山―紀州高野山

宮―大塔宮護良親王

夢にだも周公を見給はざりし―

山にありしが、上京の路次、懐舊捨てがたく、推參仕る。此趣取次ぎて給はるべし」といふ。看門心得て、やがて入つて達する程に、入道誰なるやと、廳に請ひ入れて、立出で見やりたるに、年隔りぬれども見覺えある矢田義登なり。「能ぞや恙なかりし」と、詞を親くし、茶を吃せしめ、酒食を饗し、往事かたるにつきず。「住吉坊に宿すれば、又こそ參らん」と、其日は何事なく辭してまかりぬ。日を隔てて再び行きしに、少しも疎意なく相待して、酒食席を同じく吃し、昔にかはらぬ氣立を見て、義登膝をすり寄せて申すは、「南朝の股肱竝に宮の昵近、跡をくらまし、頭を出す人なし。時うつり、代かはり、感傷にたへず」といふ。入道も嘆息して、「宮の御謀反、實は叡慮より出でて、却つて咎を宮にゆづらせ給ふ、例の手のうらかへす君命なりしぞよ。是しかしながら造化の自然、かたるに所なし」義登云ふ、「むかし日夕に欝憤をおさへしこと、おのれは今に忘れず。貴君には如何」といふ。「我も人情の免れざる所なれども、隱居して世に當らざる身は、日に月に其情うすく、夢にだも周公を見給はざりしおもむきにひとし」義登云ふ、「僕は

これを用れば―これとは兵をさす

情人眼中に西施を出す―あばたも笑くぼ

其邊動靜―其邊のなるべし

密教―眞言宗

人入り來りたれば、何氣なく貌を正しくし、思ふに眞劍を我には授くまじきことなりしと、立ち出でなんとする時、左兵衛出で來て再びいふ、「次郎、備見よ。淸平の世、これを用れば、大人は德を害ひ、小人は必ず凶なり。用ひずして安き時は鉛刀に論なし。動くは止るにしかざるべし。是愚老が足下を送るの辭、今より永く絕すべし」といふ。次郎甚恥ぢ入り、面を低れて、鼠の逃ぐるが如く其處を去りながら、左兵衛が動作愈尋常の人柄ならず、世の人口疑なしと、我心迷ひてかく思へること、是情人眼中に西施を出すといへる類なるべし。宇田次郎、すでに口外せしうへは、早く思ひ立たんと、夫より其身山伏の姿に打扮ちて、渡邊の住吉坊は古き知音なればとて、彼所に行きて、其邊動靜をさぐり聞き、何とぞ則祐入道に一面せんと、中津川に立ちこえけるに、壘高くかかげ、高門大鋪嚴に設け、處々に水を盛れる舟を置き、鳶口の鉤數多插みて火災に備へ、門内の白砂見入れるに奥ふかく、對面のことも迂闊に申し入れがたく、看門の者に向ひ、「某は圓能と申す修驗道也。先年密教に參ぜし時、御主人に朝夕伏侍せし以來、本

一時の實—一時援兵などありても敵の兵力充實せる場合をいふ

兵書—孫子

破身—破瓜の謂か

強弩の勢も—史記漢書等に見えたる支那の古諺、魯縞は魯國にて產する薄き帛の名

是なり。打ば必ず其兵を損す。是もたゞ、陣に臨んで一時の實をいふなり。今の世の如きは、實常となり、打つべきの時にあらず。或は此占、虛なるかた堅くして通らず、實なる方貫けるが如き變卦あるを待たずんば、事成就すべからず。人情常なく、初勇氣あるも、一たび利を失ひては、勢折け、始終を保ちがたし。兵書に、始は處女の如く後は脫兎の如しと云へり。脫兎は、處女の既に破身したるを口惡に言ひたる其比の穢談なるを、孫子取つて譬とせりと、新田殿雜談に語りたまひし由。強弩の勢も、放したる末にては、魯縞の薄きを通さぬと同意なり。足下の如く、思ひはやりにはやるもの、勢を用ひすごして、必用の時には氣勢なきものなり。此上かやうの事思ひとゞまり、愚老が諫に從ひ給へ」と、理をせめて蒙を開くの詞に、次郎赤面しても心服せず。彼がうけがはざるは是非もなし。我密事をかたりて此まゝに歸りがたしと、彼長刀の鞘をはづし、なぎつけんとする時、左兵衛早く後の一間に入りて、戶を引き立てたり。一重の障は物かは、突き通さんと突く長刀の、鐔本より屈るを見れば鉛刀なりけり。かゝる所へ、門生數

公―楠公

孫武子―支那戰國時代齊の兵家兵書十三篇を著す孫子といふ

り、終は命の革るを見て、死を以て君に報ず。公の靈あらば、談者の愚を笑ふべし。但し濫に楠公とは呼びがたし。古代樟の字、俗に梓と省したるを、楠の字に混じたるとも聞けり。抑また南朝舊恩の餘類ありて、時節を窺ふものあるべし。是は人情なれば、惡むべきにあらず。しかれども、此時を以て見るに、南朝の根基とせる大和紀の路一統して、基本巢穴なし。今蜂起の徒の事を成すべきにあらず。さて足下にも年比詣で來るちなみなれば、思ひ立ちたる事の成るか成らざるか、占うて參らせん」と、枕にすべき角なる木を二つ取り出し、「是こそそれがし常に子弟に示す隱器なり」と、掛けたる長刀を下して宇田次郎に授け、「足下心中に誠を降して、石突を以て直下に突き通し試み給へ」次郎鐏を下になし、心中に念ずる所あつて、力にまかせ突き下す。此角木貫き得て徹れり。又一個を取つて突き下すに、此度は、鐏ゆるぎて角木依然たり。次郎問うて云ふ、「此占如何が主どる」左兵衞云ふ、「其貫き通りたるは、內虛にして箱の如し。志力强き時は通るべし。後の貫き得ざるは、中外なく純木なり。孫武子が賓するもの伐ずといふもの

政そむけ―建武の政道理に背きたるをいふ

つかし―盡し

圖をはづさぬ―時を失はざる

其踏む所―身を托すべき主人をいふ

に及ばざる所は、理をせめて命にまかせ、一人に敵するも、日本國を引受けても、死するは一身一命、頼まれ奉りしより此生を君に捧け、節操たゆまず、心力を王師に勞じ、恢復の時を得て、足利殿謀反の初に、一たびは西海に走らしめ、叡山より還都なし奉るまで、盛名を落さゞること、一つは時運のすゝむによるものなり。以來政そむけ、賞罰均等ならず。新田殿英雄なりといへども、家勢初より微にして、高氏に對せず、既に家運傾くの北條すら手ごはかりしに、大事勃興するの足利、天命の歸する所、明眼より見れば、勝つべきの敵にあらず。元より軍利手に握りたるものにあらざれば、此にいたつて精氣をつかし、時を見かぎりたる戰死なり。已に嫡子正行、生得多病にて、病に死せんよりは王事に從はんと、二十六才にして飯盛山の下に戰死したるは殘念なれども、今にて見れば、死戰の圖をはづさぬを知るべし。士たるものは、初に其主人をえらぶべきこと一生の大事なれば、黄石公が直と履を墮して張良に取らしめたるは、其踏む所に心を用ひよとの教を隱したる所爲なり。楠殿、初は天命の歸する所を知つて頼まれ奉





祁山—魏の國境

始めて橘の姓を賜はりたる—葛城王の孫犬養三千代なり

に迷惑の體にて、「世上の人我を楠と沙汰する事、疾より我耳にも入りたれども、出所明白なる某、恐るべきにもあらず。跡かたもなき雜説にて、貴方を始め、世の人軍情を知らぬ故なり。蜀の諸葛、幾度も祁山に出でしは、必ず勝つの術あるにあらず、魏の勢日日に洪大なれば、此方無爲にして、取靜めたるのみにては、氣を呑まれて危きに近きゆゑ、勢を張つて、國家の氣を養ふ計策、かゝる相國の身となりて、いかばかり心苦しからん。いかなる英雄にもせよ、是程の知惠あれば、敵を計るに足れり、我軍略是ほどあれば、是にて此軍に勝つべき手當十分なりといふやうはなし。其上時變あり、兵變ありて、千慮の外に出づるをや。愚老聞き傳ふるに、昔土師の何某に、始めて橘の姓を賜はりたるは、葛城王の外戚なるを、故ありて其姓を繼ぎ給ひて、八代好古の大納言より枝を分ち、楠殿にいたりては、小身微力なれども、官軍の大指に屈られ、根ざし久しき土地の理を得て、大敵をふせぎ、軍機を我物として、變化、鬼神のごとく見ゆれども、是皆其時に從つて、疢疾の中より智計を練り出し、一族士卒の精忠により拒ぎおほせ、智

といふ者、其人心輕く、人の顔色を見ずして多言なるが、一日人なきに乘じて問うて云ふ、「世の人のいふなるは實や。南朝の功臣、武名四海に達し、攝、河、泉の受領し、從三位中將を贈られし判官楠公、湊川に假腹切りて跡をかくし、任をのがれて、今變名する所即ち先生なりといふ。小生も年頃心を著けて見奉るに、常倫の器にあらず。御大事の時節に參り合はずといへども、おのれは最初の官軍、矢田十郎義登といつしものなるが、宮流刑の節身をのがれ、生國なれば此地に來り、近きあたりに幽にすめり。爾來、土も木も足利の風に偃して、南朝日に衰へ、其舊臣たる者、朝夕齒をくひしばるにたへざるべし。先生にも遺恨に思し召さば、其徒なきにあらず。師の律師則祐今攝の中津川に館をかまへ、赤松附屬の地を看る。僕と無二の舊遊、心に南朝を忘れざるべし。奥に、備後の三郎高德存生して、時々文通おとづれて、只南方の衰敗をなげく。九州の菊地勢微なれども義心屈せず。新田義治の方、其所をしらねども、蟄居存命なり。今にても眞督の人あらば、其後に從きて馳せ集る者時を同じうせん。賢慮いかゞ」と問ふ。櫻崎實

引きかねし―萬葉集に「打日さす宮に行く子をまがなしととむれば苦しやればすべなし」とあるを本歌とす
なげきつゝ―古歌に「思ひには契もなにか朝もよひ紀の川上の白鳥の關」とあるを本歌とす
朝もよひ―「別れにしたつかの弓の白鳥を紀の川ゆすり戀ひぬるはなし」を本歌とす

やまざりければ、同じ思ひに、庄司有與かくなん咏じける。

引きかねしたつかの弓の束のまも思へば苦し遣ればすべなし

雪名も、かくおもひつゞけて、

なげきつゝいるやいづさやたつか弓紀の川上の白鳥の關

夏人、

朝もよひ跡ふみとめて紀の川のたゆるひまなき我涙かも

二人は本意をうしなひて、大和和泉にかへりぬ。彼の雄の山の關を白鳥の關とも呼びなせるは此謂によるとかや。

四　中津川入道山伏塚を築かしむる話

足利の世漸く一統ならんとす、貞治應安の比、勢州多度の郷に、櫻崎左兵衛といふ人、文武雙全の聞えありて、遠近從遊の人多し。其中に、三年ばかり入來る浪人、宇多次郎

重く―重ねての誤か
望たんぬ―望足りぬ
其位―其の身分

を取隠し、我身のかはりとして、重く夏人に預け、大和なる雪名をさそひ出し、此所に來り、儞が魂を迷はしめて、漸く殺生をとゞめ、望たんぬと思ふ事かなへば、又白狐を獵らせらるゝことのうたてさよ。しかしながら、是れ人の言傳にて、狐裘何の寶となるべき。腋下の皮を縫ひあはせて、色白きやうなれども、體に重くして服御に堪へず、肌不平なり。年經て白狐となりしは、毛落ち皮枯れて、裘となすに美觀なし。此よし公に告げて、狐白裘の用なき事を啓し給へ。去るにても、靈なるかな彼良弓、遂に他家にとゞまらず、自ら飛んで山口の家に歸る。神なるかな掛畫、虎威眞に逼りて、我が多年の通變を破る。是皆物の定數にして、我が力に及ばさる所なり」と、其夜同じ夢の物がたり、庄司次郎、雪名、夏人もたがはぬ一詞なれば、元來一狐の所爲によりて、三人種々の心機を勞しぬる、其根本は庄司次郎、おのれが殺生より事おこりたればとて、此弓を長く庫藏にをさめ、其位にあらずして無益の獵をなすは、公を潛するなりと、みづからくやみしりて、再び殺生に遊ばず。雪名、夏人も迷惑はれながら、女房を慕ふ心の

弣—弓の握る部分の名

司見て大に驚き、雪名にむかひ、「其弓こそ我家に祖上より傳へし良弓、尊敬してたとき弓と云ふ。靶唐様なれば、とつか弓ともいふを、家の子等いつしかよこなまりて、たつか弓と稱せり。この弓を以て獵するに、得ものなしといふことなし。近比は惜みて深くをさめおき、苟且に用ひることなし。況や、久しく殺生におこたりて、箱をもひらかず、此比都より、白狐の裘の用として、近國に命じて、殊に予家射獵をよくするを以て、年經る狐を求めしめ給ふにより、昨日箱を開くに弓を見ず。家人の内に盗みとりし者あるやと、捜り求むること急なり。其方を見るに、盗賊とも見えず。怪しき分説とるにたらずといへども、今目前に見たることもあれば、世の中怪事斷じ捨つべきにあらず。其男はとゞめおき、本國に人を遣りて、其身許をも聞くべし」と、其日は皆々興を掃ひて散じける。其夜庄司が夢に、小蝶來りて云ふやう、「我母といふも同じ狐にして、登美の長者が爲に眷屬の命を免るゝ事幾度ならず。其報として、彼が家に掃帚をとり、猶も雄の山の關守が殺生に耽るを制止せんとの念ありて達せず。我れ其念を續ぎて、先汝が寶弓

あとさけびて―あつと叫びて

百濟川蟲―名匠百濟川成の子孫めかして設けたる名なるべし

既に客殿にいたりて席に進み、上段の壁にかけたる猛虎の、竹を倒し風に咆吼する勢ひ、眼光人を射るがごときに、小蝶一目見て、あとさけびて庭に飛びしが、忽ち狐と化し、築垣をこえ行がたしらずなりぬ。雪名周章て驚くといへども、此すがたを見て、人目を恥ぢて追ひとらへんともせず。身に著けたる小袖は、帶むすびながら脱の殻、單皮はふみそろへて緣に遺り、髮のかざりも落ちちりて、むざんかぎりはなかりぬ。人々唯あきれにあきれて、面見合ひたるのみなり。庄司次郎、今は何をかつゝまんと、我が野心のすぎこし次第こと〳〵く雪名にかたり、女が出身を尋ぬるに、雪名いふ、「此女房は、其はじめ遠國より賣り來るを、親なるもの買ひとりて婢となす。我これにちなみて、親のさづけんといふ妻をうけがはざるゆゑ、かくうとまれて遠くさまよひ來るにおよぶ」―庄司次郎云ふ、「さもありなんかし。此虎の繪は、新筆なれども、百濟川蟲の秀逸、高向太夫祕藏なりしを、聟引入れに得させし物なり。恐れて本體を露すこと、畫眞のまつたき所あるや」と、語るなかばへ、關の者ども夏人を取りかこみ來て、右の弓を持參す。庄

じ、われも同じく對ひ食する所に、此弓忽羽うつおとして、白き鳥に變じ飛び出づる。食膳かいやり、追ひ出で見れば、南をさして飛行く。其方を目につけつゝしたひ行くほどに、日も暮にちかく紀泉の堺にいたる。傍なる大木の高枝に住りたる白き鳥有り。是ならんと見あげたるに、やがて飛下り、夏人が手に留るにいたりて、原の良弓と形をかへす。あやしくも夢かと疑はれ、しばらく其處に佇立やすらふ所に、雄の關の侍ども兩三人來かゝりて、持ちたる弓を見とめ、取圍みて大にとがめ、「其弓何として汝が手に入りたる」となじり問ふ。夏人有りのまゝをかたる。侍どもさらにうけがはず、「かゝるあやしき分說こそ心得がたけれ。先庄司殿へ申して、其上のはからひこそ」と、夏人を中に取込めて行くほどに、いかにするやと安き心なし。かくて庄司次郎は、彼の濁れる心の底すみがたく、月日往くほどに、ひたすら我富貴を見せなば、女の心に羨むこともあらんと、折節によせて雪名夫婦をまねき、重寶重器をつらね、山海の珍味をあつめて饗宴す。一日殊更心を盡して設をなし、夫婦をむかへけるに、女も粧ひを凝らして入り來り、

前に嫁したる所にて出生せし女を具して此家に嫁し來り、夏人に配せたるにて、誠に髮を結びたるよりの夫婦、別きて女の心かしこく、夫をたすけて家を治め、水と魚との和合、住みこしことをかぞふれば、十といひつゝ七とせの秋、ならび寢ねたる夫の夢に、妻かなしみかたるやう、「年ごろかく相なれて、中途に捨て奉るは、物の情しらぬに似たれども、我は母なる人の志をつぎ、一類の爲に遙なる所に行きむかへば、今より長く別れ參らせん。此一品を紀念にとゞめ置く。我思ひをなして手なれ給へ」と涙を枕にそそぎて立ちあがり、右見左見回顧て、放出のかたに出づると見て、夢さめみれば女はなく、枕上に見馴れぬ一張の弓をたてたり。淺ましと足ずりして、落つる涙の水かさとなり、空魂ならばかへりくるがに、是はたゞ火をうち消したるがごとくにて、何をしるべに尋ぬべき。其日を菩提の日となし、供養おこたらず。この弓を傍に立ておきて、朝に執つては暮に携へ、心かれせず手馴れける。かくて二年の月日かへり來て、けふなんかたみの主の去りし日なりと、朝とく起きて席をはらひ、此弓を客位に立てよせて、早膳を供

十といひつゝ―「手を折りて逢見しことを數ふれば十といひつゝ四つはへにけり」伊勢物語

放出―はうでは俗稱正しくははなちいで、母屋より續て出したる室

落つる涙の水かさとなり云々―古今集に「なく涙雨と降らなんわたり川水まさりなばかへりくるがに」とあるに據る、がにはその爲にの意、こゝは誤れり

心かれせず―心に忘るゝ事なく





わをによりて結べれば絶えての後も逢はんとぞ思ふ」

沙汰―世話

て托み調へければ、刀根子錦部に行きて、能折からに臨み、「姫を山口殿へ取り結び給はんや。是相當の縁ならん」といふ。太夫聞いて、「山口は古家なり。我懇望する所なれども、今の庄司は無益の殺生に獵りくらす徒者のやうに人いへば、我心に欲せず」刀根子云ふ、「實に此事ありといへども、今は全く獵をとゞまり、常に過ぎにし事を悔いて、優にやさしき手すさみに心をとゞめらるゝよし。げにも久しく獵のよそほひを見はべらず」といふ。「左あらば我壻に取りて恥なきをのこなり」と内意解けて、山口庄司老黨をやりて音問を通じ、程なく婚姻を調へける。是によりて、庄司一入あつく萬事の沙汰しけるほどに、雪名夫婦衣食缺くことなし。庄司好絹をえらみて、小蝶の衣服の料に贈れども、生得新衣を製する事を好まず、その絹布皆刀根子におくり、他が舊衣と換物にして服用す。是なん常の人には異なりとぞ人もいふなり。爰に和泉國の舊族、登美の夏人といふ富民あり。親なるものの代より堅く殺生をいましめて、夏人に至りても、只生けるを助くるを以て心とし、他人の殺生をも說きさとして休めしむ。女房は、後の母の、

郎いつしか心よわりして、日頃の殺生もおこたりて、獵狗は里の犬と群れあそび、心しりの獵奴等も休息に退屈す。それのみならず、雪名にかたらひて風月の道に心をよせ、花を賞し、景を翫ぶ。人なきひまに女云ふ、「むかしは婦節重からぬやうなるに、後世義氣にはげまされて、おの〳〵天とし戴ける丈夫あつて、あはでの浦のみるをだに心にまかせず、是を外にして君の求め給へる緣あらば、われに赤繩の術あり、君が爲に成就すべし」庄司云ふ、「我年來射獵を好み、日々奔走して、いまだ婚を議するの念なし。錦部の高向大夫、女子あり、容儀の聞え高し。殊に彼は其所の舊家なれば、結びて婚家とならんに、たがひに恥かしからず」小蝶云ふ、「わらは心得あり、必ず事成るべし」庄司次郎悅びてねんごろにあつらへてかへりぬ。雪名かくと聞きて、たやすくうけがひたるゆゑを問ふ。妻笑つて、「其道遠からず、近きに有り。我前日眼痛ありし時、行きて治を求めたる醫女刀根子、かの高向の女子の眼疾を療じてより、常に親しくまうで行くよしなれば、是を緒となして、あわをによりて合せんこと、仕そんずまじき物」と、刀根子の許に行き

あはでの浦―尾張なる阿波手の森の名によりて作りし歌名、逢はでにきかせたり

みるをだに―海松にみるをかけたり

其道遠からず―道在邇而求諸遠（孟子）

あわを―より合せたる緒の義といふ、伊勢物語に「玉の緒をあ

日頃好める獵を云々ー誓言なり

哀むべき」と問ふ。女云ふ、「外ならず、是れ雪名の哀むべきなり。われ一婦人の爲に父に逐はれ、親屬にうとまれ、朝夕に相賴とし、憂に、樂しきに、かたらひ誘ふものとては、われならで誰かあるや。かく人に口もらふ身となりては、それをだに保つことあたはざるはあはれむべきにあらずや。君は此所の勢家として、われに勝加婢妾多くあれども、眼中にあらで、朝暮獵りくらして樂とす。豪華の至りなり。今雪名は色に隱れたる貧士にして、我身君の爲に犯されば、是れ富貴を以て貧人を奪ふなり。豈大丈夫と言ふべけんや」庄司此語を聞きて野心頓に收り、女を引き立て、手を拱きて云ふ、「我一時の暴惡、前後を忘れし初事ぞや。尊嫂これを流水に附して、胸中に淀ましむる事なかれ。我若此事に二念を引かば、日頃好める獵を、病にかゝり、爲すことあたはざる物なり」と、苦に斷り聞えて出でぬ。其後雪名が氣色を窺ふに、少しも聞きしらぬさまなり。女も前にかはらでかたり笑ふ。扨は女が我が爲に面目をつゝみけるこそうれしけれと、過ぎつる誓ひも壞れやすきは此道、實なるかな、猛き人の、腰をれともなるならひ、庄司次

なでうは何といふての義、客に戯れ言はれて打消すことば

是は得がたきことにこそ—客の好意を謝する挨拶

あるまじ—有るべきことならず

などと、物語を引き立て興ずる氣はひ、靜閒なるが中に媚ありて、なみの素姓にはあらじ。雪名も此女の爲にこそ親にもうとまれ、故郷に得たまらでと思はるゝ。是より常に來りて四方の雜談をかたりきこゆ。夫婦が心へだてなくしたしみけるほどに、いつしか庄司次郎不良心おこりて、これかれ戯れによせ、情を含みたる詞の端きらめけど、女何とも思はぬさまなり。雪名元より耳にとゞめず。ある時、雪名が闕に行きたるを窺ひ知つて此所に來る。女房、獨りありて便なしとや思ひけん、扉の引きよせたるあひだに身をかくし、音せである。昔より、美女のかくるゝは見えんが爲といふなる、又は心得ずや有りけん、白く小やかなる足尖の、扉の下より見えきたるに、こゝにこそとさぐりより、やをら抱きとゞめて是を凌ぐ。女服せず、力を極めてこれを拒ぎ、聲たかく奮ひて、「かゝるふるまひ、あるまじ」といふ〳〵、女のちからにたへず、汗ながれて雨のごとく「君がいざなひに從ふべし」といつはりて、庄司を推し開き、歎息一聲して、「哀むべきことにこそ」といふ。其顔色慘然として人の心を傷ましむ。庄司あやしみて、「誰をか

温柔鄕の人―天性温和の人

しか〳〵―相應に

かゝる事なんなでうあるべき―

具して紀の國に來り、山口にたよりて扶助を乞ふ。庄司次郎賴もしき男にて、抱へ惠み咄し敵とするに、雪名生得すなほにして、温柔鄕の人なれば、庄司悅び思ひて、宜き人求めたりと、居るときは膝をくみ、出づる時は馬をならべて獵す。或時は、關所の横目に、我が代勤となして、便なる事多し。雪名が女房小蝶、年わかく、生れ淸らかなり。紡績の業におこたらず、夫の衣服にそなへ、しか〳〵賜はるべき祿とてもなく、唯糊口ばかりなるに、其居所の取りかこみたる、いといさぎよく、洒掃に心を用ひ、萬わびしからず、賤めきたるさまの見えねば、雪名が國を出づる時、囊中に物ありてこそと人皆思へり。庄司次郎初めて雪名が居所へ訪ひ行きたれば、雪名悅び、心のかぎり饗應すれども、奴僕とてもなければ、何をまうけせん。妻も心苦しく、竈にあたりて、須臾に十餘枚の蒸餠を造り、淸き漆器に槲葉敷きて盛り出し、雪名諸とも慇懃に是をすゝむ。庄司是を食ふに、其制うつくしく、味田舍の品にあらず。是に茶を下して物語す。妻も時々客位のかたに向ひて、「かゝることなんなでうあるべき」「是は得がたきことにこそ」

雄の山の關―紀州名草郡山口の庄中筋村の北六七町

羽を飮んで―矢の羽までも深く射込まるゝなり

古今奇談繁野話

第二卷

三　紀の關守が靈弓一旦白鳥に化する話

往古いづれの世にや、紀泉のさかひ、雄の山の關を、山口庄司次郎有友といふもの、家につたへて是を守る。多の家僕日次を挨めて關をつとむ。庄司次郎生得心武く、平日獵を好みて外の樂しみを要めず。又祖上より家に藏せる一張の寶弓あり。鹿鳥の類、矢ごろにだにあれば、射あてずといふ事なし。中る時は皆羽を飮んで一箭に斃る。近村四野の禽獸、此弓に獲らるゝこと幾世幾年をしらず。家に貴きを以て、たとき弓とも、たつか弓とも呼びなせり。庄司次郎家門古く、一族處々に多かるなか、今は音問たえ〴〵なる、大和の國人橘の村雄といふ人の末子雪名、親の氣色かうむつて家を逐はれ、妻を

雪裡云々ー詩の大意は、起句は跡を埋めし守屋の後代に廟祀せられし事をたとへ、二句は太子が衆生濟度の大績ありながら子孫の斷絶せしをいひ、三四句は兩人の得失成敗史を待たずして明なりと斷ぜしなり

功ありて、其子孫續かざるを、佛法福なしと愚人の疑はんことを恐れ、僧家此説を妄作流言して、其事を掩はんとするものならん。家運は大數の定まる所、夏殷周の三代も時あつて盡きぬ。入鹿今勢を得るとも、豈久しからんや」といふ。果して程なく、馬子三代の繁華、入鹿に至つて子遺あることなし。翁世の變易を見つくし、時代遙に後れて、今は憚る所なしと、はじめて里人に告げて云ふ、「我は先朝の大連物部守屋の臣、世をのがれ、此地に生を引いて今日にいたる。我を此地に祭らば、國に水旱の憂なく、安寧永久なること湖水の盡きざるがごとくなるべし」と。遺托によつて、逝去て後小祠を建てて、荻野明神と祝ひ奉り、祭祀おこたらず。大連の匿れたる巖窟も、今に依然として遺れりと、かたり傳へたると承る。

方正道人、廐戸王、守屋の臣を諷詠する詩あり。

雪裡柳條順克柔　石梁度レ人斷時休
臨レ史何取口碑實　紅白就分荻與レ萩

兩旁の地脈を斷ちて—墓域を狹むるなり

堪輿—天文地理を職とする者、堪は乾の誤か

風水家—地相など占ふ者

海に歸り去り、翁に對して太子の仁惠をかたる。翁歡喜して云ふ、「攝政王、仁は國を化し、惠み死骨に及ぶ。民永く其賜をうけん。我悦びこれに加ふることなし。我今日國の念を忘る」と。其後は敢て世上の事を問はず。後厩戸王薨ぜらると聞いて、傷み惜みて止まず。年を經ては里民と往來し、彼に敎へて、水を放ち土を開き、利益すること少からず。皆人里に出で給はんことをすゝむれども、山中老境に應ぜりと、性を養ひ、百歲の長壽を保ち、皇極の朝に至つて、厩戸の御子山背王、入鹿が爲に亡され、其嗣を絕てりと聞いて、歎じて云ふ、「此人の子にしていかんぞ此事ある。彩雲早く散じ、美器もろきにあらずや」小坂云ふ、「此頃世の人是が爲に說あり。太子豫め墓地をえらみ、其兩旁の地脈を斷ちて收めざらしめ、子孫あらせじと兼て期せられし志願なるよしいふ」翁聽きて笑つて云ふ、「葬地の吉凶によつて子孫の盛衰を論ずるは、堪輿の流弊、風水家の說にして、人を惑すこと其害大なり。我國其事の行はれざるを以て一の幸とす。いかなれば、墓を築きたる身として、其墓を守るべき子孫の禍を願はんや。是太子佛を信じ世に

て臥せる旅人あはれ親なし」といへる本歌による

生かるがや—「いかるがや富の小川の絶えばこそ我大君の御名は忘れめ」を本歌とす、此事太子傳、今昔物語等に見えたる事實を改め作る

すたべの具—棺の事

大饗—大臣任官披露の饗宴

人をして見せしめ給ふに、邑長すでに衣食をあたへて、飢人生きかへりたるがごとく、官人太子の御詠をかたりて仁徳を稱す。飢人世に有がたき體にて、官人に對してかくとなん。

　生かるがや民の小川はたえばこそ我大君のみそなはすれば

使歸りて此よし啓す。さればこそ異人なりと、重ねて人をして飢人を召し給ふに、使至る時、賜へる衣を其地にとゞめて、其人は影もなし。はやくも小坂は出所の顯れんことを恐れ、其所をのがれ去り、境をへだてゝ逍遙くほどに、歩みつかれければ、乞兒の群れたる中に交りて、道の傍に惱み臥したり。程なく所の雜仕する人來り、群れたる悲人の數をかぞへて食をあたへ、此の臥したる悲人を見て衣をあたへ、「儞遂に起きずんば、すたべの具を得させん。心安かれ」と云ひて去る。衆乞丐等面々相對し語つて云ふ、「前の日攝政王、片岡にして、飢人を惠み給ふのこと、諸有司はやくも聞きつたへて、大饗の料を減じて、今日よりかゝる惠を沙汰せらるゝ有難さよ」とかたる。小坂是より遂に淡

貿々然—瞀々然の誤、暗きさま
いまだ投げあたふるの食を云々—予唯不ㇾ食嗟來之食以至ㇾ斯とある禮記の語に據る

死なでゐるや—「しなてるや片岡山に飯に飢ゑ

て哀と見給ひ、左右に顧みて、彼に衣食を賜ふべしと命ず。從へる官人、飢人の傍に來りて呼んで云ふ、「飢人、上の惠を思へ。攝政王衣食を賜ふ。既に村の長に命ぜり、今至るべし」といふ。飢人強ひて起坐して云ふ、「賤者飢ゑて目力貿々然にいたれども、いまだ投げてあたふるの食をくらはずして此つかれにおよぶ。今得がたき御惠なれども、大公目前一人の飢寒を見て衣食を賜ふ。天下の飢人いくばくありとも、こと〴〵くそれに衣食を賜ふことを得べきや。是れ近きに親しく、遠きに疎く、公道を缺き給ふにあらずや」官人不興して答へず。すなはち歸り來りて其樣を申す。太子奇特のことに思召して、御詞を下し給はりて、「飢人聞け。其見る所を先にするは人情の常なり。況や、執政一人の心は億萬人の心なるをや。我に、近き飢人を惠む心あれば、遠き國の司、又其心なからんや」飢人地に拜して畏れ伏す。太子宮に歸らせ給ひて、實にや此飢人凡常のものにあらず、唯其飢に斃れんこと傷むべしと、爲に咏ず。

　死なでゐるや片岡山に飯に飢ゑてふせる其人哀をや成しし





老矣—老い果つる事

前をもはず—行列先の人を追ひ拂はぬなり

得て、代の移り行くさまをも見んと命を存らふ。此處山の懐にして、人の通ひ來る路もなく、荻のみ生ひふさがりたる中に庵引きむすびて、高名を草萊に埋む。世人是を知るものなし。是ぞ隱中の隱者、自ら荻生翁と稱し、此所に老矣を期す。いつしか世のなか推古帝にうつりて、廐戸皇子嗣の太子として政を攝り給ひ、佛法時を得て興り、大刹を建立し、僧尼を成就す。使を唐に遣し、隋唐の式に從きて、冠服を制し、位階を定め、禮を肇め、樂を正し、國に疾疫なく、五穀豐熟し、海内の治安前代に越えたり。小坂時々里に出でて、世の動作を聞きて歸り告る。守屋聞きて、一たびは憤り一たびは喜んで云ふ、「廐戸政を用ひて、君安く民和樂せば、我において他儀なし。儞出でて遠く都にいたり、民間に立ち交はり、實に民人の澤を被むるや、佛行はれて國安きか、窺ひ見て我に聞かせよ」といふ。小坂憔悴せる形に弊れ垢づきたる衣をつけ、乞食して大和の都に經過す。里遠くしては常に飢ゑがちなるに、寒氣に犯され、片岡なる所になやみ臥したり。太子此時法興寺に去きて經營を見るが爲、常に微行して前をおはず。此所を過ぎ

稻城—稻にて造れる城

勾—川限

ぎて立つ、是用明帝なり。厩戸皇子時を得て威名あり。守屋の臣が權勢稍移らふ。用明崩じて、守屋の臣、御弟穴穗部皇子を位に立てんと計る。穴穗部皇子威勢を頼んで愼まず、炊屋姫を殯宮に見んとして、七たび門に呼ふ。此ゆゑに衆心屬せず。馬子遂に内命を含んで穴穗を害し、諸皇子と群臣に謀つて、守屋が河内の家を圍む。守屋眷屬家人を率ゐて、稻城を築きて戰ひ、三廻敵軍を却退かしむ。厩戸皇子後軍にあつて戰を力む。守屋が軍此に利あらず、一族從者悉く恩のために死し、其身も矢にやぶられ、動作自在ならず。合軍に告げて、「速に逃れて身を脱るべし。我はこゝに命をとゞめん」といふ。家の子漆部の巨坂、强て守屋が服を賜りて死に代らんと乞ひ、弟小坂、主人を諫めて脱れしむ。守屋總軍と同じく、皂衣に服を換へ、馳獵たるものの體にして城を離れ、廣瀬の勾にいたつて、是よりおのがさま〴〵のがれ散る。守屋主從只二人、晝は葦原にかくれ伏し、夜は道を行きて、伊勢路をめぐりて淡海に入り、我采地に年ごろなれて召したる邑の長にたよりて、彼が宅の後なる山の岩窟にひそみかくれ、創を養ひ、全きことを

烟を分つ家—富人の陰によりて生活する家々

王者の民は—堯の民鼓腹撃壌して帝力我に於て何かあらんと歌ひし故事

し、榮を常と思へるがゆゑ衰をかなしみ、財祿多くして血脈續がぬあれば、眷屬に富みて養ふに足らぬあり。煙を分つ家多きは身につくすことあたはざるの福なり。世人足ることを知らざれば貧におとれり。手を以て物を與ふるにあらずんば利益にあらずと思へるか。王者の民は、喜の色見えずして惠のうちに生活す。佛の利する所其域に近からん。大連熟再思を加へ給へ。今漢土に聖教既に來るといへども、三韓の傳へにして親切ならざるを惜む。丸は直に漢土に使臣を遣し、面授口傳して我國を利せんと思ふこと常にやまず、大連の高明、しらず、如何とか思はる」大連少しも慍る色なく、從容に答へて、「聰明の論じ給ふ所、世の惑を開くに似たり。小臣御陛に當つて詳に論ずるに及ばず、臣が愚見は、唯知廣まり、文華しげりて、質朴の國風を失はんことを恐るゝのみ。王子、大臣、よく〳〵高見に明斷し給へ。餘は多言に及ばず」といふ。帝元より佛を好まず、守屋が一言を取るべきとして、佛教を停め、佛像を流し、僧徒を禁ぜらる。しかれども、疫病いよ〳〵さかんなれば、佛を流すの祟にやと恐るゝ人多かりけり。豐日王嗣

書の無逸――書經、周書の篇名、周公成王の逸樂を戒めんとて作る所

みて是を棄つ、有識の賢者其妄を知らざらんや。其道妄ならば、其教何ぞ漢土我國の今日につたはり、天神鬼神心を傾くるにいたらん。又妄なれども、佛の妄は證すべきなしといふものは、不通の論にして、愚者の見る所、其人如何ぞ虚實の體をしらん。世の人、我に異なるを憎むの意あるは、大智にあらず、公道にあらず。其憎愛を以て取捨せば、後世必ず互に相排斥して、勢二つながら立たずと思ひ、佛家は儒生を愚人とし、儒生は僧家を姦人とし、若し僧家人を品せば儒生を舉げず、儒生史を記さば僧人を列ねず、互に溫柔の和を失はん。又佛教入つて命數を促すといふこと、忌滯の說にて、已に書の無逸に言はずや。時より厥後亦克壽きこと有ることとなし。或は十年、或は七八年、或は五六年といふ文あり。彼時は、漢土いまだ佛の名をも聞かざるの時にして然り。佛徒の中にも壽なるものあるをや。漢土に佛語入りて後は、言語集雜にして、頌誦變ずることもあるべし。其國に通ずる時は、音移り語雜はること、自然にして免れざる所なり。佛語入りて萬民福なしといふは、福たるの利をしらざるに似たり。早く開くる花は早く謝





を救ふの激論なりといへども、今日其言を用ひ、佛をしりぞけ、國津神に謝し給はゞ、萬民安きにむかひ、宸襟樂しかるべし」とぞ申しける。時に馬子大臣、幷に豐日王の長子厩戸王子、幼年なれど、聰明人に秀でたるが、すゝんで守屋に對ひて云ふ、「大連の言ふ所心を用ひずといふべからず。しかれども、佛は夷狄の法、用ゆべからずといふこと、いまだ深く考へざるに似たり。我邦上古、西より遷りて東し、神武皇西鄙より起つて宇內を御す。漢土舜王なるもの、諸馮に生れ、東夷の人、文王は岐周西夷の人なれども、皆法を彼土の後世に垂れたり。佛は淨飯國王の子、其國漢土に隣る。漢土と我邦とは、北ならず、南ならず、世界の中國にあり。大に觀る時は分別すべからず。已に漢制におひて取り用ひらるゝことあり。佛教もならべ用ひて萬民を利し給ふべき事なり。又佛法實なき事ならんや。凡そ理を以て說くもの、其理に達せざる時は、其實を見ることあたはず。佛は其富貴を捨て、道の爲に身をわすれ、患難飢寒を免れんが爲にもあらず、何の因る所ありて空妄不實の事を說かん。世の凡夫不實の事をなせば、年月を經ずして、衆人惡

宜しきに就くの禮樂—我が國風に適はせて制定せる禮儀音樂

雅頌の音—雅は朝會燕饗の樂、頌は宗廟の樂なり、音は即ち音樂なり

人の量泛く—人の心の内廣かりきとなり

れざる風あり。我國上古より宜しきに就くの禮樂あるうへ、新羅、百濟、王化に歸順してより、漢土の禮樂、書に傳へ人に傳はつて、堯舜行ひ孔子述ぶるの道、其緒を開けり。然れども禮樂は世代により變ぜざることを得ず。文武周公、復生ずとも時宜に從ふべし。況や本國、風土習染の異なる、悉く從ひ用ひがたし。近年佛國の教傳來して、敬信するもの多し。其國遙に隔りて西夷にあり、いまだ其土風の善惡をしらず。先朝にあつて、中臣の鎌子、愚父なる尾輿等、疫疾の事によつて奏して申したり。本朝元より百八十の社稷の神ありて、祭事おこたらず、天下平なり。何の缺くことありて夷神を用ひ給はん。彼佛は夷狄の法、施を好みて世法に驗なし。其事皆實あらず。寂滅をつとめて生成を悦ばず。漢土の上古は、君臣皆長壽にして百歳に下らず。佛法其地に入つて年代尤も促る。漢土に佛入らざるの前は、詩書雅頌の音あつて、萬民自ら多福なり。我日東に儒教來らざる以前は、人の量泛く、壽もまた長かりし。今夷國の神を信じ、本國の神を輕んじ給ふゆゑ、國神怒りて疫疾を致すならんと、朝廷につらねし數言、時の弊

のゝめき—さざめきに同じ
彫刻の莊嚴—雲形の彫刻の飾

ちそひてたえず奇峰を出し、靜なる世の觀にそなへ、厥時を忘るゝことなかれ」と、壽きのゝめき、漸々として四方に分れ去れり。沙門夢さめて思ふに、雲水の主とは我を指すにはあらで、此に妙なる彫刻の莊嚴なるべし。珍しくも雲魂の談を聞いて、人にもかたり問ねて、此津の四方に豎てる雲の、昔より各其名あることを初めて知られぬ。左もあれ、夢に白雲と遊びし心空なる妄言、聽く人も妄聽し給はんか。兎にもかくにも書きすてける。

二　守屋の臣殘生を草莽に引く話

敏達天皇の御代、疫疾大に流行し、蒼生を害すること少なからず。此時物部の守屋の臣、大連の職に在つて、諫行はれ、言聽かれ、大に威名あり。因て言を進めて曰く、「凡善教の世界に行はるゝや、此國の善政は其國に往き、彼國の善教此國に來るは、貨を交易するがごとく、互に取り用ひて恥なしといへども、地を易へては行はるべき事あり、行は

しなとの風　科戸風、科戸は風神の名
北國來風—北國東風の誤
筌蹄—祕法

六月にあらざればいふべからざるが如し。本朝處々の俗稱多かれども正しからず。昔より乾の風をあなしといふは、此風吹けば雨なし、水氣までも吹きはらふ。しなとの風ともいふよし。北國來風とかや、吹きあての横ぎりたる、遠く來りてもつよし。眞風は西南の山なき間より、海にも吹きおとさず、眞一字に吹き送る。其すがた清らに涼し。風雲の行は四方ともに眞正ならず、斜がちに隈かけて吹くゆゑ正風は稀なり。四方より吹く風を颶風と名づけ、吹くときは雲の心さへおだやかならず。實にや雲雨、風煙は畫にもゑがかれず。風はやみ、むらちる雲の形勢をゑがかんとて、絹に白粉を落して口にて吹き、ちるまゝに形をなすを吹雲と名づけ、細にゑがかんと欲せば、羅章の傳を心に含みて、眞畫の雲の筌蹄とすること、八雲翁より人世に傳へたるよし。我ながらかくとはしら雲に、人こそかしこかりけり。今こそ年來の雲氣を吐きて、心にかゝる雲なし。百とせの後つかた、太平長に時を得て、祥雲、瑞氣常にたな引き立ちて、福利海に滿ち、人文林をなし、限なき東風惠みふかく、我等ごとき浮雲も端袖をひるがへし、常に四方に立

山のすがたを簾中に見せしむ—香爐峰雪撥簾看といへる白樂天の句に據る

は、心の雲鬱々しきをいかんせん。ゆるやかなる時は絮のごとく、綦のごとく、烏の距の如くさがりたるあり。唯直下の人は足なし雲と見れども、遠き空を横ぎりて行きかふには、一陣々々其脚をあらはす。形は風に順へども、現れ、消え、聚り、散ることは陰陽の布くにまかす。風の有無の界にある時は、吹きのこされて長く一疋の練を引く。又織姫のはたて廣く、水まさの文をなすは、風の中ぞらにたゆたふなり。霰をあつめ、雪をちらしては、山のすがたを簾中に見せしむ。左に旋つて賤の臼ひくかたちなるは天氣の常なり。あなたの雲北へ行き、こなたの雲南を指すは、風かはらんとして其あひだにめぐるなり。上なる雲東に行き、下なる雲西にむかふは、風上下にめぐり、聊雨氣の動くなり。空より吹きおとす風は、其地勢によつて吹きもどることあり。浪花の朝はかならず谷風吹いて出船を送り、晩に秦風千帆を入らしむ。天然の大津、實に輻輳の攝地なるかな。風の勢は四方の山形に因るがゆゑ、土地に隨つて異なり。唐土の書に名稱多しといへども、方角を四時に合せたれば、此邦に用ひがたく、東南の風を黄雀風といふも、時

久かた―大空

一當―一同

消の化―消滅の果を得るに譬へたり

しほてる―難波の枕詞より轉じて鹽海の義となる

にほてる―近江の枕詞より轉じて湖水の義となる

世の諸人は大空の一屬のやうに思はるれど、其系圖大に違ひて、大空氏は其德を常にして、久かたに、蒼天、昊天、旻天、上天と四季の名かはれども、みどりの色かはらず、其形深くして限りを見せず。我等は平地より八丁と量られても、所定めず無くなれば、かくるゝ所さへしらず。風は形なけれども吹き行きて吹きかへるに、我は一日の間に消息定まらず。一向日のたてぬきに照りて、日本晴とやらんいふ時は、一當みな消の化を得て無苦界に遊ぶ。古人の雲を賦したる辭に、冬の日は寒をなし、夏の日は暑をなすとは、露ばかりも我にはあづからぬ物を、我が造す物の、世の助ともなるは雨而已なり。是も其土地雨氣に應ずる時いたらざれば行ることあたはず。或は他方の雨の爲に行く雲を見て、此方の天氣を卜ふ人は、雲情を取り違へること多し。時ありて水を取るに、鹽海、湖水の分ちなけれども、鹽氣を去ることは我雲中の祕事なり。龍に從つて起るは、眞龍卽ち風雲の類屬なればなり。雲なきにふる雨を奇水と名づく。多く是れ遠方の龍雨なり。又春の靄氣の空に滿ちたるが、夏に向うて溶け降る。是に誘はれてさみだれ雲となりて

立つ雲の異名、山葛は冠の額に懸くる飾なれば此雲山の額にかゝるよりの名なるべし

攝の空—攝津の空

極惡人の部類に入り—惡人を雲に譬ふるを云ふ

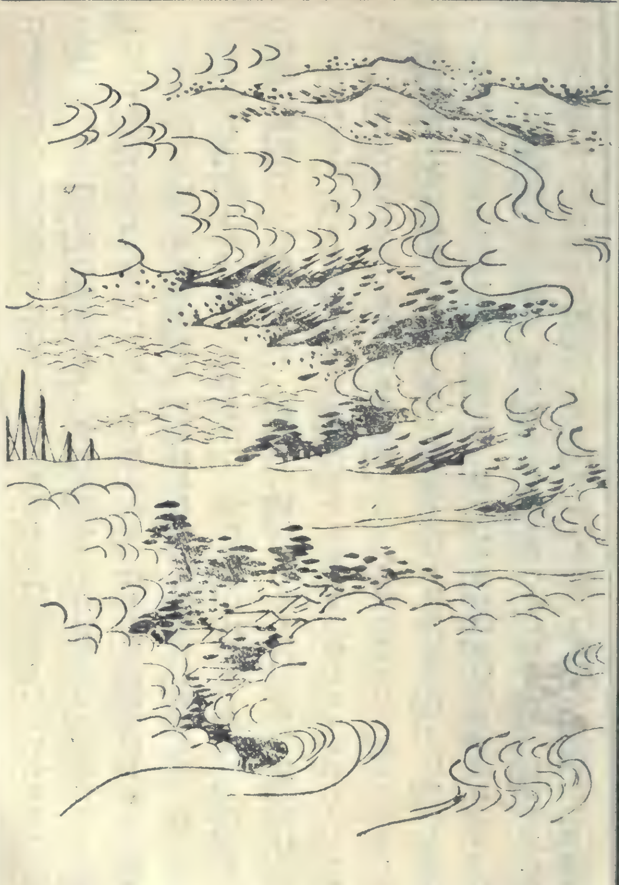
月に無の字を添へしむる—仲秋三五夜の月なきを無月の夜といふ

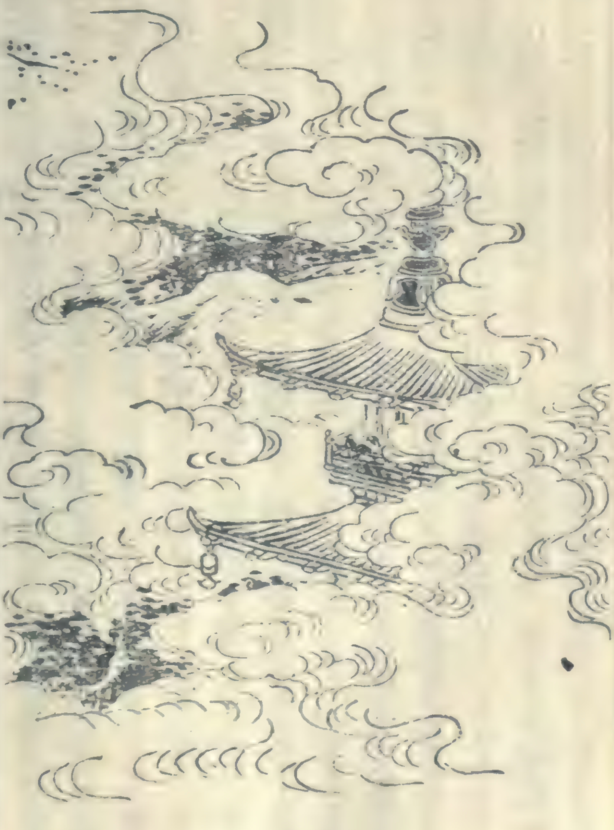
地黄氏—大地

に衣きせては、單しといへども行く人の足を催し、東北の隈に深く聚れば雨かと疑はれ、高く六甲を越ゆれば日和かはらんとし、海上に陰けては漁利を害す。或時は北へ東へ右にめぐつて、遠方の雨に應じ、攝の空に陰け暗る。夏の日北方の雲展びざれば、東南の山に據つて急雨を行る。凝りのみまさる秋のあつさ、すこしむらがりても衆生の心いさめども、黑雲頭上に暗くしては遊船の楫を回さしむ。況や雨のうへに三日覆へば厭はるゝも口惜しからずや。秋の最中の淸き夜に、一ひら二ひら、風のまに〳〵月にかゝれば、月をもてなすかと見え、雨にともなひて陰りふたがる時は極惡人の部類に入り、詩客の宿題、歌人の擬作、空しく腹中に朽たしめ、晦ならずして月に無の字を添へしむるこそ罪ふかく覺ゆれ。風に驅られて往來に惛憊るは、まかせたる身の我に由らざれば、暮ちかき早風には、何を周章ていそぐらんと人も見とめ、行く雲よりも月の行くやうなるもうるさき。雲の集る處を靄といふ。日の邊に赤き雲を霞といふ。俗には混じて分別なし。又我素姓は地黄氏の類族にて、目にこそ見えね、地上三尺より我が占る所なるを、

手づま—手品
いかめしく思ふ—誇らはしく思ふとなり
岫を出づる—雲無心以出岫鳥倦飛而知還（歸去來辭）
いかでか—[illegible]に

にも積むゆゑ、浪花の人目には黒みがちに見ゆるゆゑ、黒きといふの名なるべし。返照に薫ぜられて、雲の邊に金色を生じ、彩色の手づまも及ばぬ色を設し時にこそ、浪花人はいかゞ見るらんと、我心にいかめしく思ふなり。時として北雲我がしりへを襲ふことあれば、我れ六甲の高きを恃とし、卑くおりしきて彼を南海に出でしめ、我は山に據つてうごかず。在間三郎、出づることまれに、かたち直なれども、雨師の小將なり。思ふに進退は國處によつて異なれども、我輩の情はいづくも同じくて、恐らくは人世の知らざる所ならん。かゝる折から、且は雲水の主をもなぐさめのため、おのれ〳〵が思ふことを、一言づつにてもかたりて、せめて心遣とせん。實にも思へば、無くてもよからんものは我輩なるを、德堯禹より厚しと古人の譽められしを思ひ出す時々は、羞かしき汗のしぐれをなす。天の戸あきて朝に茜すは、是をこそ我日の出の時を得たるなり。いづこをさしてか春雲鶴に似て飛び、何を宿として岫を出づるの句あるや。曉のすがたを山かづらとながめらるゝはいと覺束なし。されどこれらは人の目にも好景ならん。西北の嶺





乾達馬城にもたとへて、蜃樓に混ぜらるゝも、底の心は其趣あらんかし。たゞ高き風によこをられ、東西になびくをいかんせん。又春夏のそらに雨氣を帶びたる村雲、秋冬にむれ飛ぶうき雲、たゞいま吹きはなたれたる山烟などの、近き風に吹きまはされて、北より西に、南より東へめぐるは、我が同姓にあらず。我がたつそらは遙に遠く、吹く風さへ同じからず」「それがしを奈良次郎といふは、東に立てる形、恐らく奇峰の體を得たりと思へども、腰ほそきゆゑ太郎に及ばざるか。但ならび立ちて夫婦の如きこと我雲のすがたなり」「やつがれを泉の小次郎とよぶは、南の樓臺遠くして、人望兩所よりおとりたるゆゑなり。常に海風に障へられて、立つこと稀に、奇峰のたゝずまひ獨立なるゆゑ、世の人、泉の小次郎が妻を奈良次郎に奪はれたりと、有情の身に引きたくらべてかたるもゆゑあるかな」「三方は同じ白峰姓なれども、遂に馴れてかたる時あることとなし。扨それがしを魔耶九郎と名付けしは、太郎次郎の次第にあらず。元より素姓各別にて、後は六甲の左右にまたがり、首は常に魔耶、多々部の山頭にむらがり、東西ながく幾重

乾達馬城―乾達馬は梵語、空中に棲みて酒を守る神、城は其の住所、俗に蜃氣樓をいふ

兩所―太郎次郎をいふ

三方は同じ白峰姓―太郎次郎小次郎三雲は共に色白くして亂峰を現し出す故に同じ白峰姓といへるなり

止り居し雲の朝に出でゆくなり
なにはしるけき此寺—難波にて有名なる寺即ち天王寺
浮屠—塔
けやけきはなし—人の心ほど際立ちて現金なるものなし
月のすむらん高津の宮—いにしへの難波の事を思ひいでて高津の宮に月のすむらん(金葉集)
九郎—下に見えたる耀耶九郎といふ雲の名
雲水の因—天王寺の五層塔は層毎に雲水の彫刻ありて世に雲水塔といふ、此の因もあるによりて乘り停るを得たりとなり

勞を休め、一夜此寺の浮屠の五層に登り、佛像の上に坐するは恐れなきにしもあらねど、人の臨むべき爲の樓窓ならめ、倚るべき爲の欄にこそと、秋涼の通夜讀誦しけるに、かばかり高ければ、世とへだたりたる心地し、雲路近きかとうたがふ。人の心ほどけやけきはなし。上絃の月中ぞらに高けれど、雨氣くもりて咫尺も朧なり。夜目にそこはかとなく見わたすに、月のすむらん高津の宮さへさだかならず、大に興を掃ひ、眠を催す。塔の頂に物音して、「珍しや汝達、陰陽の命を分ちてより、四方に位してたがひに遠く望むばかりにて、南よりは眞北に行くの雲路稀に、北よりの雲路は半にして絶えがちなり。けふしわきて九郎は海邊に住みて、南に出づれば海氣に消され、行き逢ふ時まれなり。しかも右旋左旋の風に吹きめぐらされ、この雲水の因あるによつて、衆雲と共に一片づつにてもこゝに停ることを得たり。世の中に、雲心なく、呼名ありとも覺えざりしに、薄雲村雲と品おほくわかかつ、人たるものゝこざかしさよ。我を丹波太郎と呼ぶは、北に立つ奇峰中にもかさみて見ゆるがゆゑか。看々數坐の樓臺を組みたて、變化定まり無きゆゑ、

古今奇談繁野話

第一巻

一　雲魂雲情を語つて久しきを誓ふ話

雲を體とし、水を心とし、不生消しつくす種々の心、世塵に著せぬ桑門の身にも、唯忍ばしく見まほしきは、祖師の法蹟、飛鉢の遺地、拜しめぐりて精進の助ともなさんと思ひたつ沙門は、年比程ちかき和氣の法華堂に籠りたりしが、大永の初の春たつや、霞と共に出でて秋風を歸る期とし、順路にあらふる高峰々々を眺望して、富士の麓に過りながら、若かりし日は登臨の志やまざりしが、年經ぬる身は何事も思ひやりて心ゆくもをかし。往きかへる路の曉昏は、空の色、雲の容のみ目に親しく心に染みて、朝たつ雲に花洛を出でて、夕ゐる雲のあしたゆくも、なにはしるけき此寺の僧侶に知音ありて數日の

飛鉢の遺地―高僧止住の地
和氣―備前の郡名
霞と共に出でて―都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞふく白河のせき（能因法師）
あらふる―あらゆるの誤か
夕ゐる雲のあしたゆく―夕べに

中津川入道山伏塚を築かしむる話
第五篇
白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話
第六篇
素卿官人二兒を唐船に携ふる話
第七篇
望月三郎兼舍龍窟に龍と談る話
第八篇
江口の遊女薄情を恨みて珠玉を沈むる話
第九篇
宇佐美宇津宮遊船を飾つて敵を平ぐる話

以上九篇

古今奇談繁野話 惣目録

近路行者著
千里浪子正

第一篇
雲魂雲情を語つて久しきを誓ふ話
第二篇
守屋臣殘生を草莽に引く話
第三篇
紀の關守か靈弓一旦白鳥に化する話
第四篇

へども、卑說憶談、名區山川、古老の傳聞、土人の口碑、此に述べずんば世に聞ゆまじきを、是が演義して、長き日の興にも備ふべし。實にや鶯の谷より出づる聲なくばと、此草紙を愛れど、彼しるべなき暗に月をおもふ愚の心もて、華房の枝葉しげ〳〵なる野話なればとて、作者の自ら厭はるゝも、大方の誹に先だつ自明ならんかし。僕千里浪子に形影の好あれば、其ひとたび校せられしを可して、一語を贅する事已むべからざるの業なるかな。

明和乙酉の冬　　十千閣主人撰



近路行者、三十年前、國字小說數十種を戲作して茶話に代ゆ。千里浪子其中に就て、英草紙九種を摘みて書林に授たるは、廿年に早なりぬ。其このかた行者の行藏常ならず、市に隱れ、山に棲み、卜を賣り、字を鬻ぎ、舊游に違ふ事多し。去年春復浪華に過る。書林予に緣て其餘稿を求む。行者默して、誠に其事あり、今其有無をしらずと。往に通家に寄せたる筐の中より、册子をとり擧げ、紙魚を拂ひ、與へんとして、その榛蕪を恐れ、閒談を恥ぢて沈思する所あり。それを奪へるが如くして求め取り、一觀するに、其首なる雲のたちゐる談は、是をこそ一方の雲の賦と號べきか。守屋の連不言の裏に意ふかく、廐戶の理もよく展びたり。手束弓の故事に任氏の傳奇を繫ぎ、邪色の人を蕩すことを覺す。白菊の卷は白猿、梅嶺の舊趣を假り、占卜の前數に因ることを說き、女教の名實まつたからんことをはげましむ。唐船の彌言は聚散の悲喜を盡し、望月の寓言に龍雷の表裏たるを斷る。江口の始終は、杜十娘を飜して、俠妓の偏性をかたり、子弟の戒となすなる。宇佐美宇津宮の戰略は、軍機の得失顯らかに、南朝の絕えざる昔物語見ゆ。彼是九種、倂に長談なりとい

古今奇談英草紙　終

折からなれば、道の程は大内筑前守の下向に同伴して下るべし」と、二人を乗物にて宿所へ送りかへさしむ。次郎左衛門宿にかへり見れば、宿の門前に賀使の袖をつらね、執事の媒ありし婚姻なることかくれなく、諸家より送り來る絹布財寶、宿の庭に充滿たり。程なく執事より贈りきたる長櫃に千貫の助資を盛り、備前への下文、一個の文匣にしためたり。額田面目身にあまり、悅重疊する折から、大内筑前守より家の子をつかはして、「執事のねんごろに御賴ありし程に、明朝御供申すべきあひだ、御心置なく早早わたらせ給へ」と言ひおくる。此良期をあやまるべからずと、夫婦とも大内に同伴して備前に下りぬ。こゝにても、執事の緣者とて人の心よせ重く、後直義と將軍と合體の時を得て、尙も眉目を開き、むかしにまさりて昌えけり。

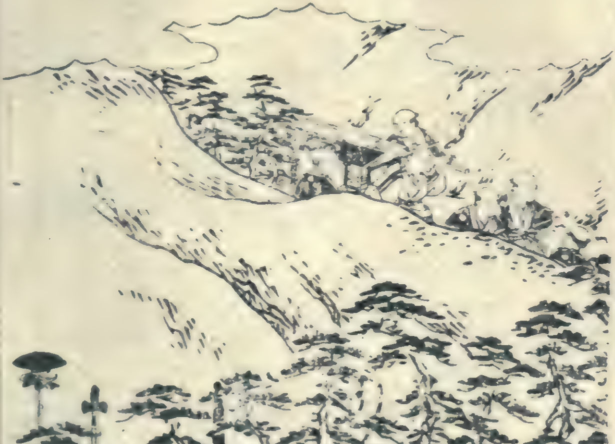
下文—下任の命令書

久曠の歎—夫婦永別の愁

于飛—原本めろとづれと傍訓す、詩經に「黃鳥于飛集于灌木、其鳴喈々」とあり、喈々は雌雄相呼應する聲也、これらに出でたるなるべし

て、婚儀料千貫をそなへさせ、又直義の分地備前國への下文を調へ、兼て事備はりて、今こゝに額田を召しよせしなり。額田は執事の美意を知らず、只あわてゝ胸安からず。執事ことば穩にして、「儞が昨日のものがたりを聞きしより、惻然としていたましく、食もくだり兼ねたり。儞が久曠の歎あらしめたるは、偏に我罪なり」次郎左衛門はるかにすさつて、「鄙人困窮して智短く、心神顚倒、昨日の無禮言語に絕す。願はくは、執事の海量これを許すことを容れ給へ」執事いふ、「今日吉日なり。それがし媒人をなし、足下の婚を完うすべし。行費の資千貫、備州への下文こゝにあり。婚儀成つて後、于飛して任に赴くべし」額田たゞひたすら頭を地につけて拜す。忽多くの使女にかしづかれ出づる勝子が容貌、額田もいかなるものにやと猶豫する時、執事自ら酌を把り、土器をそなへて、婚儀を調へらる。障子のあなたに壽の謠物、數人の聲にひゞきわたる。額田夫婦、肺肝に銘じて執事の恩情を謝す。執事いふ、「我いやしくも天下の政務にあづかる身なれば、此後故なくして對面なりがたし。早く夫婦とも西國に下りて時をまつべし。物騷の





門 小書院―常の客殿

見向通り―正面

て一町ばかり、次郎左衛門戦々懼々として、小書院ともいふべき所にいたりしに、銀燭の光り煌々として、執事袴ばかりにて、端ぢかく座してあり。後に一人の少人太刀の役に候ず。近習の士七八人左右に居流れ、天下の柄をとる骨柄一目に著く、次郎左衛門魂天外に飛び、地に平伏して仰ぎ見ることあたはず、流るゝ汗背を浸す。執事左右に命じて、次郎左衛門に坐を賜うて、見向通りにすゝましむ。此時額田額を擧げて、偸目に執事を見れば、髪のかゝり優美なれども、見まがひもなく昨日の侍なり。こゝにおいて、いよいよ驚懼して兩握の汗をなし、低頭して息をつめ、生きたる心地なかりけり。是元來、執事常に閒なる時は、すがたをやつし、街上に出でて世の謠説を捜り聞く。昨日次郎左衛門に逢うてより、館にかへり、勝子を呼び出して相見するに、果然として十分の顔色あり。執事かれに問うて、「爾が夫爰にあり。一見を願ふか」と問はれけるに、勝子涙をながして、「隔りてより夜と日とわすれず。しかれども、今館にある我身、對面すること、君のゆるしなくて賤が心にまかせんや」執事其言の正しきにかんじ、司庫の家人に命じ

臺盤所―勝手元といふに同じ

塀重門―表門と寢殿との間の中

ち見えず。扨はかの侍、好き顏の應對して、假に諾けがひたるならんと嗟歎する內、燈點じ、想ひ寢の枕とらんとする時、兩人の武士ありて、さわやかに出でたちたるが、供人引き具して此所に來り、外面より、「額田次郎左衞門やおはする。執事の召され候なり。疾々倶して罷りなん」といふ。昨日の侍にこそと、透間よりのぞみ見れば、夫にはあらで、紛もなき高家の侍、しかも末々の人柄ならず。さればこそ禍はやく起りたりと、聞所なき奧に逃げこもりて出でぬを、宿の主は執事の召すといふに驚き、強ひて額田を抑し出し、此人なりといふに、次郎左衞門いふやう、「それがしいまだ執事に相見せず。殊に此襤褸の便服をつけて、いかで執事の御前に出づべき」兩士聞きあへず、「執事の嚴命、一刻の遲參こそ無禮なれ」と、兩人して額田が手を執つて、飛ぶが如くにいそぎて今出川の館に至り、「こゝに待たれよ」と、額田を大玄關にすゑおきて、兩士は臺盤所より內堂に入りぬ。程なく出で來つて、「執事今日館に在つて汝をまち給ふ」と、兩士案內して、白砂をめぐり、塀重門より入つて奧庭に行く。其間燈籠ありて道を照し、めぐり〳〵

かひ皆よく見知りたり。足下の申さるゝ女子あるやなしや、たづね參らすべし」といふ。次郎左衞門實に女が出所をつげ、「貴君此消息をきかせ給はゞ、我死すとも快く目を閉づべし」此侍次郎左衞門が始終の不遇をあはれがりて、「明日此時刻にはまた此邊へまうで來れば、其時こそいかにも女がおとづれをきかせ申さん」と、たがひに別をなして去りぬ。次郎左衞門おもひまはせば、此侍かならず執事の家人なるべし。我執事をうらむるのことば、もし執事の聽にたつせば、怒りを犯さん事踵をめぐらさず、禍の來らんこと立所にまつべしと、或は悔み或は恐れ、心のうち好生安からず、一夜眠りて眼あはず。明の日、心ならず執事の館近邊に行きて、其動靜をうかゞひ見るに、門前市をなす。伺候の人のかたりあふを聽けば、「執事今日すこしの勞ありて評定所に出で給はず」其音問として、諸家よりの使者門にむらがり、一日の不豫すら是をさしおかず、出で入る諸士星のごとく、數しらぬ中にも、きのふの侍とおほしきものなし。しばらく徘徊して執事の繁華をうらやみ、宿にかへり、午飯を食し、きのふの時刻にいたれども、人影

ちも眼のうちうるめり。此侍云ふ、「足下の身の上いかなる愁やある、細にかたり給へ。語れば心も慰むぞかし。あるひは御心得にもなることあらば申さんものを」と問はれて、次郎左衛門姓名をあかし、海賊に逢ひたる以來の困窮をかたる。此侍いふやう、「船中盜に逢ひたるは足下の罪にあらず。錦小路殿ましまさずとも、何ぞ執事の家にいたりて此事を告げ給はざる。執事行跡と志と甚だ異なり」次郎左衛門いふ、「それがし錦小路殿の身うちのものゆゑ、執事の家へ執次いで得さする人なし。たとへ執事に達したりとも、人の妻女を取り上ぐるほどの無道人、たのみ甲斐あるべからず」といふに、此侍きゝとがめて、「しらず、執事果して此事ありや」次郎左衛門いふ、「某は世の中に住み果つべくも覺えねば、憚る所なく物語るなり。某幼年より約諾せし妻女、いまだ婚をなさゞるうち、執事の妾となりしゆゑ、其事より起りて、かく浪々の身とはなりぬ。執事の美女をあつめらるゝより、われらが緣も奪はれたり」此侍きゝて、「其女子の出所は何國ぞ。やつがれ年ごろ執事の家に出入して、多く執事の內事をうけたまはる。多くの召つ

同前―同然の誤

添翰―そへかん原本のまゝ也、そへぶみとよむべきにや

笑止がる―氣の毒がる

州の海上にいたりて海賊に出であひ、多勢に敵しがたく、からうじて身ひとつのがれ、脚船に乗りうつりて陸に上りしが、金錢は元より、賜りし添文まで失せければ、進退すべきやうなく、袖乞同前にして京都に歸る。其際わづか一月ばかりの内、變化はかりがたく、直義錦小路の宅を出奔して行衛しれず。反逆の志やましますらんと、とり〴〵の說街に充つ。たよるべきかたなきまゝに、先に仕せし西の京に行き、隣家の茶坊にあはれみを乞うてやどり、明の日すこしの知音をたづね行きて、執事の館へ内縁をもとめ、右の次第を達せんとすれども、直義ましまさず、添翰の失せたるは證據なしとて、取次ぎて得さする人なく、此日もすご〳〵茶坊にかへり、せんかたなげなる有さまを、主人も笑止がる折から、武家の侍と見えて、一人の年たけたる男、袴のもゝだちたかくとりたるが、茶坊にやすらひながら、次郎左衛門がさまをつく〴〵見て、「足下には何方の人にて、旅人とも住人とも見え給はぬ」と問ふ。次郎左衛門いふやう、「御尋なければ扨やみぬ。御尋あれば此始終を聞いて給はれかし。かたるに憂さもおこたりなん」といふ

へいたりしに、元より美女多き館にて、百花の中の一花なれば、執事是にも心をとゞめず。かくて次郎左衛門は母親の追悼に折を得て、不興のゆるされありて、國にかへりて後、荻野が女子のことを聽きて大に憤り、聘禮定りたる女子を他家の婢につかはす法やある、此こと武士の見捨てがたし、彦六と打ち果さばやと思へど、もし此事により師直が怒に觸れては、我父一族の爲にもなるまじと、胸をさすつて暮す内、父治部少輔も世を去り、家勢彌衰へ行けば、中々本意を遂ぐるかたへは倘遠く思はれ、さすれば人に知られたるこの國に住まんも面ぶせなりと、一族に長の別をなして都にのぼり、西の京邊に假住し、出身の便を窺ふあひだの經營に、幼より覺えたる藝なれば、畫工を業として日を送る。其畫人にすぐれて氣象高かりければ、吹擧する人ありて、直義の御所に召され、畫の業を以て日々伺公しける程に、いつしか近習に召しおかれける。元より武門出身なれば、心も剛に、賴もしげありければ、直義の分地備前の國、郡吏の缺所あるに著けられて下るとて、鳴尾の浦に二十日ばかり風待して出船しけるに、わづかに播

伺公―伺候の誤
郡吏の缺所あるに著けられて―郡吏の缺官あるに補せられて

遊君をあつめて日夜酒宴にくらし、美女をあつめて足らずとし、大名國守に求めて美妾を納れ、情を酒色に肆にして餘年を樂しむといふ。當時將軍よりも人の恐るゝ執事なれば、在京在國の大名より、其求に媚びて、白拍子と名づけ、遊君と名づけて、送り來るもの數をしらず。師直來るものはこばまず是を納るゝ。こゝに丹波の國に名をしられたる侍に、額田次郎左衛門といふものあり。額田治部少輔といへるものの子なるが、弱氣にて親の不興を蒙り、他國に行き去る。親の許にある時、是も同國に名ある荻野彦六といふ人の女、勝子といへるを、次郎左衛門が妻女に約諾して、聘禮すでに定り、親の許せし結びに、づゝしみをわすれ、互に消息のとりかはしして悅びあひしに、次郎左衛門、斯く勘氣をうけて行衛しれずなり、彦六が娘も早十六歲に及ぶ。生得花を堆ね玉を琢ける美質、歌咏絲竹に妙なりしかば、國守何某より、彦六に乞うて、此勝子を師直が召仕にぞ遣しけり。勝子は次郎左衛門を定る夫と思へば、主親の命に從ひ、しばらくみやづかへには出づれども、死するとも操は折じと、心に深く誓ひて都に入り、執事の方

柄を執る―權柄を執るなり

く其言葉を悟つて、高名の下を去つて、山林に隱れ、身を全うするは、中華智士の做すところ、身命を輕んじて、主君の業を建て、我家を興すは、日本義士のする所、今の時節、身命を全うして名を做すことあらんやと、遂に意に挾まず。師直柄を執るにいたりて、新田の一族は北越の雪と埋れ、楠氏の餘類は南山の雲に散りて、官軍最初の赤松圓心、多々部の壘に據りて却て楠氏に備へ、足利の爲に西國の嶮口を守り、鎌倉に中將義詮あり、洛に副帥直義いまして權威を助く。海内略一統に歸して、畿内漸く無事なり。こゝにおいて、尊氏佛法に歸依して大刹を建て、財寶を喜捨すること數をしらず。師直是を諫めて、「戰鬪暫く穩なれども國家多事、宜數不虞に備ふべし。漫に金錢を費すの時にあらず」尊氏我意のむかふ所に一味にして、これを聽き納れず。あまつさへ、佞智をすゝむる小人多く出頭して、當時師直が内外に權強きを、尊氏を始として忌むの意あり。師直自想ふ樣、我威權おもきうへ、夙夜國家の爲に勤勞す。如斯にては、却て忌み猜むものあつて、恐らくは禍を生ぜん。こゝにおいて、口に國家の事を言はず、瞽者、

發跡—世に顯はるゝ事

して、食を絶ちて死す。此兩人、富も貴さも人に勝れながら、餓死の相逢には免れず。勸善の話に多く説く、極貴の相ある人も、惡を積めば、陰德を損じて富貴に至らず、また極惡の相ある人も、善を積めば、禍を返して福と成るといへり。是懲惡のことばにして、古代人を相するに謂はざる所、相家の深妙は尙高きに有るべし。惡相を變ずる程の善をなす人、はじめより惡相見ゆべきや。善相を失ふ程の惡をなす人、はじめより善相と見ゆべきや。人相は善人惡人によるべきものならず。今日不善の人に出身發跡する人あり、善人にも下賤にうづもれ果つる人あるを以て見るべし。足利の高祖尊氏、天下を創業する時、執事高武藏守師直なるものあり。譜代の家臣なるが、彼幼少の時、家弟師泰と郊外に出でて、鷹を放つて獵をなす。偶旅行の僧此所を通りて、はからず兄弟を見て歎じて曰く、「此兒羨むべく、又傷むべし」といふ。兄弟其故を問ふ。彼僧云ふ、「貴人の相あれども、終を善くせぬ相あるゆゑ、かくはいふなり。功名の下久しく居りがたし。久しく居らざれば大事を做さず」と言ひ殘して去る。師泰は其ゆゑを知らねども、師直早

淨御原の天皇―天武天皇

籍して―沒收して之を官籍に記入するなり

九　高武藏守婢を出して媒をなす話

淨御原の天皇、生得乞兒の相ましませしかば、皇子たる時、此相を果さん爲、偕は乞食に類することありとて、薙染して近國に潛行し、これを以て大友皇子の威を避く。是即乞兒の相空しからずといへども、後遂に御位に即かせ給ふ。漢の文帝の寵臣、鄧通、南風を以て恩幸比なし。許負といふ相人、鄧通が面を相して、縱理紋口に入るはかならず餓死すべしといふ。文帝聞召して、人を富貴にすること我心のまゝなるに、たれか鄧通を窮せしむるものあらんと、蜀道の銅山をたまはりて、錢を鑄ることを心のまゝに許し給ふ。此時鄧氏が鑄たる錢天下に布渡て、富をいへば皆鄧通をたとへとす。後來文帝登駕、太子卽位して景帝といふ。鄧通が先帝に媚を獻じて錢法を壞りしを罪として、其家產を籍して取上げ、鄧通を空屋に幽て其飲食を絕つ。果して餓死す。丞相周亞夫また縱理紋口にあり、景帝彼が威名の高きを忌み、あらぬ罪を尋ねて獄に下し給ふ。亞夫怨憤

いふ。衆人此屍を舁きかへりて上覽に備ふ。官平夫婦是を見て、恐れ得て面色土のごとく變ず。國守、「死骸をあらためよ」とあるに、死骸の項に布をまとひて、絞めころしたる有樣なれば、衆人皆駭然たり。やがて當官平夫婦に此事を責問はれければ、つひには白狀しける。此當官平、權藤太と申せし時、小瀨とひそかに不義をなし、人知るものなし。先官平卦をうらなうて家にかへる時、權藤太彼家にかくれ居て、三更の前後、醉ひふしたるをうかゞひ、勒殺して井の中に隱し沈め、權藤太髮を拔けて、面をかくし、走り出で、橋の邊にいたりて、大石一塊を把つて橋のうへより投げ下し、身を投げたる體にもてなし、其身はかくれかへり、ひそかに小瀨と計りて、竈を井のうへにうつさせ、井を別所にうがちて、人の思ひがけなく彼家に入贅して夫婦となりしまで、二人の白狀死罪のがれず。段介には一枚の金子を賜はりて、賞すべしとの詞の信をたがへず。權藤太が惡計は、人のいましめの古語となりぬ。

開き―言ひひらき

あやしきことを申し上ぐれば、其書きたるものを持ち來れとの御意に、畏りて立ちかへり、入れ置きし所より尋ね出し見るに、こはいかに、たゞ一張の素紙のみにて一字も見えず。如斯にては、我麁忽を申し出でたる越度ともなるべし、然れども、初よりの事を申上げて開きとせんと、此素紙を持ち出でて、妻女が見たるあやしみのあらましを演べけるに、儞が妻の出身はと尋ねられて、「かれは幼少より茅渟官平の家に生ひ立ち、今それがしが妻女に倶しぬ。妻女主人の許にあるときも、竈のもとに怪みを見たるよし申せし」とかたる。國守打點頭かせ給ひ、このあやしみかならず茅渟官平が家のことなるべしと、官平夫婦を召し出して、心おぼえなきやとたづね給ふ。夫婦とも、「かつて思寄なし」と申し上ぐる。國守ひそかに官平が宅へ數人をつかはして、竈を毀ち見させられけるに、衆人、何事にやといぶかしながら、官平が留守の家に行き、竈を取りのけぬるに、其下に一塊の石あり。是を搔きのけて見れば一つの井なり。井の内をさぐり見るに、一つの屍ありて生けるがごとし。見知りたるものありていふ、「これこそ先の官平なり」と

これを帶びられたりと覺ゆ」段介も、つね〴〵女房が、「竈の下に先主人を見たる」といふをあやしく思ひくらすうへなれば、いよ〳〵不審く思へども、指しておもひよるべきこともあらねば、なまじひなる問はずがたりして、適得たる金子まで手につかぬことも出來なんと、この故に段介も人にかたらず。しかるに國守の或夜夢み給ひしは、髮を被むり、頭に丼げたをいたゞきたる人、眼中血の涙をながし、一紙の願狀を奉る。其文唯二句あり。

要ㇾ知㆓三更事㆒　可ㇾ開㆓火下水㆒

國守夢覺めて此兩句を忘れず、吟じ給へども其意を解せず。こゝにおいて、此二句を書き付けて市門に掛けしめ、能く此意を解くものあらば、賞金を與ふべしとなり。國中村落の小文才あるものどもあつまりて、兎や角と論ずれども、字はよく解しながら、何の爲に此句あることを知らず。段介此掛札を見て大きにおどろき、是こそ妻女安が金子と共にもらひかへりし、先主人の末期の言葉に差なしと、やがて國守の門に上りて、此句の

立ちもとほる―徘徊する

櫛笥など調へあたへて、同じ郡の、段介といへる商人に嫁しやりぬ。此段介酒をこのみ、賭をこのみ、三月を過ぎざるに、臥被までを賣りつくして、安をせめて、「茅渟の家に行きて助力を乞ひ來れ」といふ。一兩度は行きて、三五兩の銀子を乞ひ請けぬれども、後は與へず。わづかの銀子盡くれば、また安をせむる。ある夜おのが醉へるまゝに、夜中をも安をせめのゝしりて、すこしの錢を乞ひ來れといふ。安も、所詮此家に住みはてがたし、よしく\乞ひ得ずばこゝへは歸らじものと、茅渟の家をこゝろざして、門前にいたりしが、時刻深けたれば、敲き起して怒に觸れんもいかゞと、立ちもとほる折ふし、「儞に金子をあたふべし」といふ聲に、ふり返り見れば、屋のうへに立ちたる人あり。「我は是先官平なり。此帒の内に金子あり、儞にあたへて貧を助く。また此紙にうつしたるは我末期の一句なり」と、地下に投げあたへて、消うせぬ。安恐ろしながら、貧窮の時節、金子の二字に肝つよく、ひろひかへりて、不思議に金子を得たることをつとにかたり、「此金子を入れたるは、先主人の常に腰につけられたる火打帒なり。思へば入水の時も



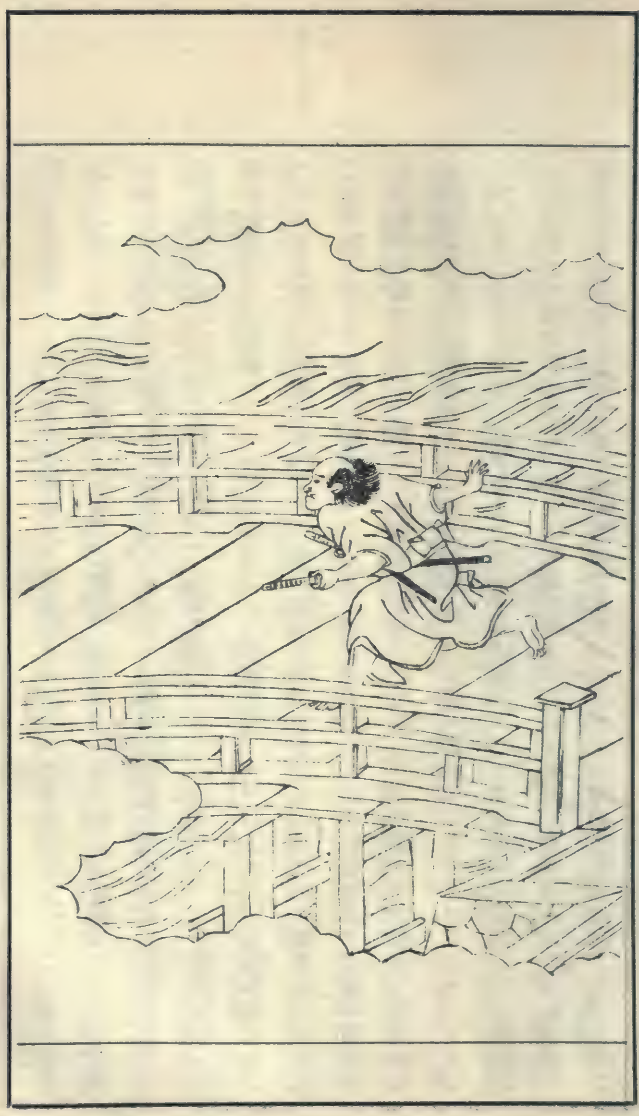


不肖ながら—ふしやうぶしやう、いやいやながら

あひだもよろしく、前の官平は年少し耄けたるに、是は似合しき夫婦なり。女房は徳とりたりと人々申しいひ合ひける。或夜夫婦寝ねんとして、睡りがちなる使女を呼びて、酒を温めさせける。安睡たき儘に、不肖ながら竈の邊によりしに、俄に此竈ゆるめきて、地を離るゝこと一尺ばかり、人ありて竈を頭にいたゞき、頭髪をふりかけ、舌をはき、眼に血の涙を注ぎ、安々と呼ぶ。使女是を見るより、大に叫んで地に倒れ、面皮黄に變じて起き上らず。夫妻急にたすけおこして、水をそゝぎ、わづかに甦りたり。「儞何に驚きてかくのごとくなるや」安いふ、「われ何心なく火を焼く所に、先主人かしらがみを亂し、目のうち血を流して、我をよび給ふと見て、其後は覺えず」といふ。小瀬大にいかり、「儞夜中にかまどを焼くことを懶がり、わざと物恐れをなすと見えたり。酒温むるに及ばず、早く睡よ」と叱りて、夫妻臥室に入る。小瀬獨言して、「此使女も、年比經ぬれば、斯く懶惰になりて、物の用にたゝず。我道理あり」と、それより急に安をいづかたへも嫁せんと欲し、よきころの家をきゝよりしに、しかるべきえにしにや、早くも事なりて

入舍の丈夫ー入り婿

のうちにもわれ〳〵に聞かせ給はゞ、近邊申しあはせ、夜をねずして守らば、家を走りいづる時、とらへとゞめぬことあらじ物を、殘念さよ」と、明の日近隣のものども死骸を求むれども、いつしか海に落ちて見る所なし。官平は狂氣の死と沙汰してやみぬ。小瀬は使女と倶に、亡夫の靈位を設け、追善をなし、すでに百日もいつしか過ぐる頃、小瀬が親里より、再緣のことを進むれども、うけがはず。再三に及んで、小瀬父親にむかつて心底を明し、「此家にあつて、入舍の丈夫を迎ふる事ならば、せめて家をたつるを以て心やりとせん。他家に嫁し行くことは、決して本意にあらず」といふ。父親も實に尤と、娘の言葉について、然るべき家督人を聞き定むるに、同じ國守の郡役をうけ給はる岸の何某が弟に、權藤太とて、郡方の取計にも能く馴れたるものありて、官平とも常に出合ひしものなるが、此事をきゝて、「茅渟の家に入つて相續せん」といふ。兩親得心の上は否むべきにあらずと、何ごとも親のはからひにまかせ、權藤太を呼び入れ夫婦となり、名を官平と改めさせ、郡鄕の役儀其儘につとめ、茅渟の家を相續しける。夫婦の





いふ、「我儞と今夜寝ずして、針線に夜を明し、死するか死せぬかを守るべし。儞睡る事なかれ」と、笑ひながらいふ。「かやうの時いかんぞねむらん」と、言葉の下よりゆらゆらと眠る。「いかに、睡らぬ約束のはてぬに」と、ねむれば呼びさましよびさまして、更鼓を聞けば三更なり。「是ぞ其時なり。陰陽師のいたづら言、何の故なくて死する理あらん。最早たがひに寝ねよらん」といふをりふし、忽ち官平が寝間を飛びいで、中戸に走りいづる響におどろき、ねむりゐる安を呼起し、ともに手燭を點じて外門の戸のひらくを追つかけ出でて見れば、官平白き服を著て前へ走る足疾く、女の足に及びがたきあひだ、橋の上へあがると見えしが、水に飛びこむひゞき高く、漸橋のうへにいたり見れども、海に近き川の、水多き折ふしなれば、形もさだかならず流れ行く。二人の女は橋の上になげき臥して、「何ゆゑに身を沈め給ふ。狂氣ばし仕給ふか」とさけぶ内、かのさわぎに夢をさませし近隣の人、跡より追ひ來りて此體を見、小瀬をなだめて宿所にともなひかへり、始終を小瀬が物語に聞きて、「彼うらかたの見通したることばを、日

現然たる―嚴然の誤

にかへりても、白水翁が言葉心にはさまり、面に憂容あるを、女房小瀨、「何ごとにや、上司の氣色ばしあしかりしか」と問ふ。官平云ふ、「さやうのことならず。今日陰陽師にうらかたを問ひしに、我命今年今月今日三更に死すべしとかたく云ひぬ」小瀨これを聞きて眉をさかだて、「左樣の當なきことをいふいたづらものを、など追ひ拂ひ給はざる」といふ。「我も惡しと思ひしかども、人の勸によつてゆるしぬ。彼ものみづから罪をおそれ逃げ去れり。我今日死せずんば、明日かれを尋ねて、虛言の罪を正さん」といふ。小瀨打わらひて、「それほど現然たる人の、何ゆゑに今夜死すべき。か樣のけがらはしき言葉を、酒を飮みてわすれ給へ」と、其日もくるゝやくれず、官平は酒氣を帶びて假寢するを、小瀨は使女安をよびて、主人の假寢、風入らせじと、二人して官平を扶けて正しく寢ねさせ、小瀨は使女と二人物がたりして、「主人今日陰陽師のうらかたを聞きて、今夜三更に死すべしといひぬ。儞も聞きしやいなや」安いふ、「われも今日傍より聞き侍りしが、何ゆゑに主人の死し給ふ事あらん。これ信とするにたらぬことなり」といふ。小瀨

こしらへかへし―すかしなだめて歸し

一口の氣―人々の言ひ分

の中、幾の月に死すべき」「今年今月死にたまふべし」「今月幾日に死するや」「今年今月今日死にたまふべし」此人心中に怒を帯びて再び問ふ、「時刻は幾時ぞ」「今夜三更子の時死に給はん」此人おぼえず言葉を厲くしていふ、「今夜眞に死せば萬事皆休す。若し死せずんば明日僞をゆるさじ」翁いふ、「貴君明日恙なくば、來つて翁が頭をとり給へ」此人彼が詞の強きを聞きていよ〳〵いかり、翁を床より引きおろし、拳を擧げて打たんとす、近邊のものはしり集りてなだめ、此士をこしらへかへし、翁にむかひ、「僞しらずや。彼人は此所に執りはやす侍なり。彼人の氣色を損じては、爰にあつて卦店をひらき難からん。かへす〴〵も、僞應變なき人かな。人の貧富壽夭は數の定る所ならんに、卦には如何に出づるとも、すこしは詞をひかへてこそよからん」といふ。翁一口の氣を歎じて云ふ、「人の心に應ぜんとすれば卦の言にそむく。卦の實を告ぐれば人の怒をおこす。此所にとゞまらずとも、己自留る所あらん」と、卦舗を拾收めて別處に去りゆきぬ。彼卜を求し侍は、當所郡代の別官をうけ給へる茅渟官平といふものなるが、家

古今奇談英草紙

第五卷

八　白水翁が賣卜直言奇を示す話

文明の頃、泉州堺に白水翁といへるものあり。よく人の禍福吉凶を決し、成敗興衰を指すこと差はず。常に大鳥の社の邊に行きて卜を賣る。一日一人の士こゝに來りて其卦を問ふ。白水翁其年月日時を聞きて、卦を鋪下し、考を施して云ふ、「此卦占ひがたし。早く歸られよ」といふ。此士心得ぬ體にて、「我卦何のゆゑに占ひがたき。察するに、卦のいづる所よろしからず、あらはにしめしがたきことあるか。いむことなく示されよ」といふ。翁もとより言葉を飾らず、「拙道が卦による時は、貴君當に死し給ふべし」此士いふ、「人死せざる道理なし。我幾年の後か死すべき」翁云ふ、「今年死し給はん」「今年

災牆の内におこりたれば―吾恐季孫之憂不レ在二顓臾一而在二蕭牆之内一(論語)

黨の後にさがつてひかへゐる。中にもくすの木彈正左衞門はるかに手をつきて、「いかに御屋形、御惡事のつもりて、御運もいまがかぎりなり。われ〱如きが手玉にあたらせ給はんより、いそぎ御腹めされ候へかし。さすれば御一族の内を見立て參らせ、御家は傳はるべし」と、思ひがけなくつめよせられ、義氏あたりを見給へども、味方と思しきもの一人もなければ、災牆の内におこりたれば、今はこれまでと、腹十文字にかき切つて、

打つ太刀のひらりと見ゆる影よりもはかなき世をば去るは物かは

これを辭世として果て給ひぬ。猛將のをはりぞいかめしき。七黨立ちよりて、御骸を其所に埋め、七黨手づから土をおほひ、川南の郡中に札を立て、民に此よしを告げ、百姓の業怠ることなからしめ、塊をも動さずして義氏の無道を打つて、人民を安んじける。皆楠がいさをしなり。武藤の家は義氏の御舍弟兵庫殿と申せしをとりたて、大山の先知をさめさせ、是を十九代の屋形となしける。

かたたがへ―其日の吉凶によりて他出の方角を避け違ふる事

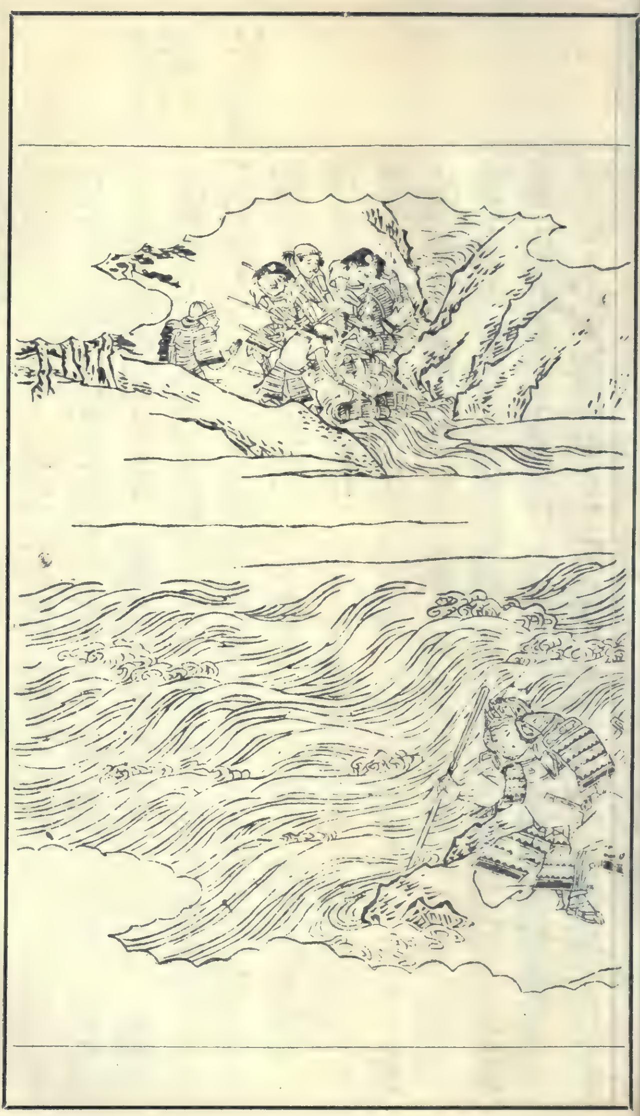
し」と叮嚀に說きさとして、修驗者は辭して出でぬ。義氏・尊海が詞にまかせ、其日より南方十二町の外にひそみ出でて、しづかなる崗林などに安座し、夜に入りてわづかに城にかへり、明の日は東方にひそみ遊び、三日めは北に出で、四日めには西のかた高舘山のふもと、新山の森といへるふかくしげりし森にゆきて心をすまし、つゝしみかへつてゐられける。相隨ふ心服の人には、佐藤刑部、高坂中務、草刈大藏などいふものの外、七八人の下部のみにて、忍びやかなるかたたがへなり。日すでに西山に落つる比、義氏心氣つかれて、しばし鋪皮の上にねむり給ふ內、太刀おとするどきに眼をさまし見給へば、草刈大藏、高坂中務二人が刀の下に、佐藤刑部を切り伏せたり。「こはそも如何なる意趣にや」ととがめ給ふ時、いつよりこゝに來たりけん、森の奥より、楠彈正左衛門を先として、田川、大庄寺、酒田、山中、佐竹、竹中の七黨、いづれも腹卷の上に素袍引きかけ、ばら〳〵と立出で、手に〳〵鐵砲をかゝへておつとりまはし、今も火ぶたを切らんありさま、草刈大藏、高坂中務も敵の一味と見えて、召しつれし下部とともに、七

なさず」といふ。義氏此山伏のへつらはぬさまに信を増し、強ひて占を求め、黄金十枚を備へ出す。尊海先づ此黄金をとり収めて、やう〳〵義氏の掌文を相、眼耳鼻口こまかに相しをはり、稱賛して、「貴人なるかな」といふ。義氏の支干を問ひ、卦を設け、一算するに至つて大に驚き、面色をちがへ、ことばもなく座を立つて去らんとす。義氏これをとゞめて、「卦のあらはす所何の吉凶をか主る。はゞからず申すべし」といふに、尊海頭を低れて答へず。義氏左右近習のものどもを遠ざけ、「ひそかにいふべし」と宣ふ時、尊海眉をしわめて、「屋形の禍急なるがゆゑに、是をいふことをはゞかりぬ。今日より七日の間、甚だ重き御つゝしみなり」といふ。迷へばいよ〳〵迷ふならひ、義氏聞くよりふかくおそれて、「命數の限りは是非もなし。たゞし此凶兆を避くるに術ありや」と問ひ給ふ。尊海云ふ、「禍をさくるの道、唯御座所を別所へ移してさけ給へ。今日をはじめとして、毎日四方二里の外に忍び行きて、心をすまし、安居し給へ。さわがしき世の中なれば、かならず人にしられ給ふな。今日南方よりはじめて、東北にめぐりて出で給ふべ

出羽國の三山―羽黒山、月山、湯殿山

さみせし―侮蔑せし

は、相傳の家來東禪寺さへ心がはりする時節、川北は未だくだし得ず、近比は何とやらん氣おくれして、いづかたへも手ざしすることをひかへ、安然として鋭氣をやしなはれける。其比日本の高山をあまねく巡拜し、出羽國の三山を拜して、尙奥へ通る修驗者、相摸坊尊海といへる山伏、人の憂をいのりて功驗ありとて、村里の人民是を崇敬すること生不動ともいふべし。義氏日來はかゝることをあざけりさみせし人なれども、進退に心決せざる折ふしなれば心迷ひ、此事を聞き傳へ、使を遣はし、尊海を請うて城中にいたらしめ、家運を祈らせ、對話の上にて、自身の掌文を相せしめて、「吉凶を占ふべし」とある。尊海これを辭して占はず。それをいかにと、左右の人を以て問はしむるに、彼いふ、「それがし本國を出でてより、愛愍の志を以て祈禱は施せども、占卜の道は深く愼みて施さず。其の故は、占の表我口より出づれば、其人の禍福吉凶一言の下に決す。其ゆゑに輕々しく占はず。やつがれ是まで占を施す人わづかに兩人、其名姓はあらはしがたけれども、倶に近國の大人なり。卜料の式、黃金十枚を收む。其禮備はらざればトを





かはし、最上川の水上、わづかに巾せばき所をえらみ、大木を斬つて倒しかけ、水をせきとゞめ、山に添うて湛へ置き、敵の川を渡らんずる日の未明より、水せきの大木取流せしかば、清川俄に水出でて、一日の洪水を成す。また兼て東禪寺が許へ使をやりて、「其元手勢を以て、今度義氏出陣の跡を襲ひとり給へ。しからば川南をわけどりにせん」と申し送りしかば、右馬介其詞に應じて、急に本城へとりかけし故、義氏つひに川をわたらで引つかへしたるなり。こゝに川北に屬せし侍に、草刈大藏といふものあり。是が妻女容色すぐれたり。むかしより、財多きは盜を引き、妖冶あるは淫に悔ありといへり。七黨の内に田川次郎左衛門といふもの、かくれなき好色人なりしが、いつしか此草刈大藏が妻女に人しれず密通して、女と手段をめぐらし、つひにおのれが館にかくして出さず。大藏田川が所爲なることをよく知つて大にうらみ、即時に川北を去つて大山に來り、義氏を頼みて奉公無二をつくし、「願はくはちか〴〵に川北征伐あれかし。命をしまず田川に近寄り、鬱憤を晴さんものを」と、常に齒をくひしばつてこれを待つ。されども義

水もかさおちて─水かさの減ぜしなり

討罰─討伐の誤

敵をわたしさへせねば手ざすに及ばず。明日は敵川をわたらんとすべし。明日一日敵をわたさねば、義氏に一生川北の地を踏ますまじく覺ゆる」といふ。「其計やある」と尋ぬれば、「われすでに其そなへあり、必心を勞し給ふな」と、人なみならぬ彈正左衞門が詞を賴に、酒田は少し安堵しける。明の日、義氏は一萬餘騎を先後にわかち、川をわたらんと岸に出でて見れば、淸川の水滔々と張りて、大水岸をひたす。これにてはわたり得じと、些し退きて水の落つるを待つ。其日の暮頃水もかさおちて、今夕やわたらん、明朝やわたらんと、筏を組み連ぬる所に、本城に殘せし佐藤刑部がかたより急使を馳せて、「屋形の出陣をうかゞひ、東禪寺右馬介又本城へとりかけたり。いそぎ御馬を返されよ。兩方よりはさみ責め給ふべし」と告げしかば、義氏驚き、先こゝより取つてかへし、備を立てて掛られしかば、右馬介二方に敵をうけ、手下多くうたれて落ち失せぬ。義氏城に入つて休息し、諸軍も勞を養ふ。是によつて、しばらく川北討罰は延引しける。是元來楠があらかじめ思慮を廻らして、大庄寺何某に人數をさしそへ、ひそかに湯殿山の東につ

自親─自身の誤

にこそと、相傳の恩義も讐とかはり、衆人と力を合せ、義氏を殺害して人民の助とせんと、其場を去らず、一責せめけれども、義氏みづから下知をなして防ぎ戰ふに、右馬介も力つかれ、一まづ其場を引き退きぬ。義氏は右馬介が心の變じたるを見て、今は川北の七黨を自親にせむべしと、出陣の用意を觸れわたし、其勢壹萬二千餘と聞えける。川北には、惡屋形自身むかふと聞きて、人民おぢおそれひしめきあふ。此時楠彈正左衛門は、田川大庄寺をはじめ七黨の兵を、多くはこゝかしこにわかちやりて、以の外無勢なれども、すこしもさわがず、川北分內の百姓どもに、「軍おこらぬうち、隨分作物を取り收めよ」と、すこしのこりし兵も民家につかはして百姓を助けしめ、十分にとりこませ、中中戰ふ氣色なければ、いかゞしたる心底にやと、七黨の內酒田何某、楠に對してこれを問ふ。楠云ふ、「今作物秋收の時なり。十分にとり收めてこそ敵と戰はめ。作物むなしく損ずる時は、戰に勝ちたりとて、利ありとすべからず。元來義氏の勇猛にかたれぬことを知るゆゑ、はじめより力をもつてかれに敵對する所存にあらず。畢竟は、川より北へ

さしもの—指物、戰の時、鎧の背の所に指す小旗の類にて、味方の目標とするもの

し、「各我指圖を受け給ふや」といふ。兼て其器量あるを見及び居れば、「いづれともよろしくはからひ給へ。足下の下知にまかせて力をつくすべし」と、一同に詞をそろへて心服す。「しからば、田川何某は物馴れたる人なれば、急に東禪寺が籏印、さしもの等を似せこしらへ、こよひ間道をめぐりて大山の本城にとりかけ、東禪寺右馬介、義氏をうらむることありて諸卒と共に謀反すと披露し、戰をいどみ、よいかげんにして引きとるべし」と細に云ひ含むれば、田川下知にまかせ、俄に東禪寺が籏印をこしらへ、みづから右馬介が體に出でたち、其夜間道より出でて大山の城へ押寄せ、鬨をつくり、「屋形に御腹めさせんため、東禪寺右馬介途中より取つてかへしたり」と呼ばはる。義氏甚だいかり給ひ、「あれ追つちらせ」と下知の下より、究竟の兵二百ばかり、拔きつれて斬つていづる。田川一戰にも及ばず敗北して、散々の體にて逃げかへる。東禪寺右馬介は、城に軍ありと聞き、引かへし城に入らんとするに、やぐらより雨のごとく矢を射出し、城中にのこせし右馬介が妻子の首を切つて投げ出したり。右馬介大に驚き、例の主君の惡行

たてづく―刃向ふ

ふ所に、七黨とて頭立ちたる士七人あり。むかしは武藤家に膝を屈したれども、近比は七黨ともに義氏の武道をうとみ、武藤家に附かず、七黨心を一致にして、各我分地を守りける。義氏常にこれを憤り、つひに是を討ち亡さんと、東禪寺右馬介といふ相傳の家來を大將として、軍勢をさしむけらる。此比の七黨、皆器量ある勇士なれば、右馬介も輕々しくよせられず、餘奈坂といふ所まで軍勢を押出して、こゝに陣をとりて、敵の動靜をうかゞひける。七黨の徒これを聞き、會合して防戰の計策を議す。此七黨の中に楠彈正左衛門といふもの あり。元來先祖は河州正成が一族なるが、南朝の皇子家良親王信濃宮と稱じ奉りしに隨ひ、常陸國小田の城に籠り、小田沒落の時、宮に引きわかれ奉り、此所に來り住せしより、子孫絶えず此彈正左衛門にいたる。平生些の謀略ありて、物に驚かぬ大丈夫なるが、此評議の先をとつて、各にむかつていふやう、「義氏の武勇、中々力を以て敵すべからず。しかれども、大家にたてづく七黨かゝる事のあらんは、われにおいてつねに其覺悟あり。それがし些の計をほどこし、心をつくして敵を防ぐべ

平胡籙の差樣―平胡籙は式事に用ひる矢壺なり矢一筋を差す是れ差樣なり
丸緒―胡籙に附けて腰にめぐらし縮むる料なり
其品よかりしかば―禮容の整然たりしをいふ
入部―領主の入國
軍の手つがひ―挑戰する事
打物―太刀、刀

七　楠彈正左衞門不戰して敵を制する話

出羽の國、大山の城は、中比まで武藤氏代々是を領し來れり。先祖は武藤小次郎資賴といつて、平家の侍、監物太郎賴方が弟なり。平氏滅亡ののち、囚人となりて、三浦介に預けられけるが、其比賴朝卿甚だ射禮を好み給ひ、平胡籙の差樣、丸緒の著樣等、分明ならざるの所に、小次郎資賴射術の達人なりしかば、彼の矢の故實を傳へ知るよし申すと聞えしかば、何さまかれは京家のものなれば、射禮に精しかるべしとて、召し出だされ、射禮をつとめけるに、其品よかりしかば、賴朝御感の餘りに、出羽國大山を賜うて、入部せしより、代々此所を相傳して、十八代に當る主を義氏と云ふ。此時義氏武勇にほこり、每度諸方へ無益なる軍の手つがひありて、人民を憐まず、惡行のみ甚しかりしかば、士卒等もうとみ果てて、惡屋形とぞ稱じける。しかれども、義氏天性力量ありて、弓矢打物に妙を得て、みづから敵に當らるゝ時は、これに近づくものなし。隣郡川北とい

辛勞じて—辛うじての當字

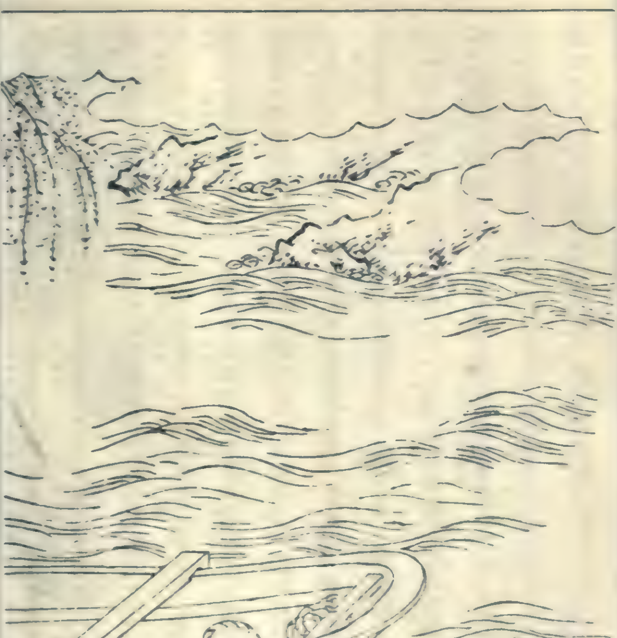
子錢家—高利貸

くことなし」と言ふ下より、むかふ袈裟に、手の裡滞らず、聲起つるまもあらせばこそ、とゞめを刺して水に推落し、手なれぬ棹をとりて、雨しきり風さへつよく、棹のたて所もしらで漂ふ船を、辛勞じて漕ぎつけ、岸にあがるより、飛ぶがごとく逃れ去り、其行く所をしらず。夜明離れて、三上と勘平が殺されし吟味ありて、其夜鄙路が行衞なくなりしは彼が所爲にやと、これを追ひ求むれども、いづち行きけん、影も見えず。其家を捜し見るに、平生すこしの物も貯へねば、書畫、弓箭、長刀の類の外一物もなし。唯篋中に多くあるは子錢家の當劵のみ。是によつて鄙路が俠聲益著れ、其頃遠近の話柄となる。姉妹三人、各志の違あれども、概遊女の氣性を出でず。後都の北山かげに、七人の比丘尼、共に庵を結びて住みけるが、其内一尼、此三人の遊女の始終をよく知りてかたる尼あり。此尼或は鄙路が跡を隱せるものか、捜り知るべからずとかたり傳へたり。

外揚―原本いひふらすと傍訓す

ぎつる約に赴かん」と戯れ寄る時、鄙路懐より直に刃物を抜き出し、かれにむかつておどしの空うち、ひうと鳴る音、光に驚き飛びのきて、「過仕給ふな」といふ。鄙路右に刀を携ち、左に勘平が帯を取りとゞめて動さず、「我儞に問ふ事有り。平四郎夜前三上が手にかゝりて此川に切り沈めらる、儞しらざることあるまじ。實に告げばゆるさん、しからずば儞をなぶり殺にせん」といふ眼ざしかはり、ばらけし髪そらざまに立ちあがり女とは思はれず。勘平いふ、「人を殺せし人、五郎太夫としれたる上は、此事實に申さん。夜前五郎太夫黄昏より此船に來つて、幾人を濟せども、彼は船に殘つて去らず。平四郎が船に乘るにおよんで、外に乘合せもなきを幸に、中流にしてしたゝかに切りつけ、水に斬りしづめたり。我是をしるといへども、一些も我所爲に係らず」鄙路云ふ、「儞船に讐人をのせて、渡る人をうかゞはせ、儞が船中にして是を殺させ、夜明け夜に入れども官府にも申出でずして、尙儞にあづかることなしと思ふや」勘平答ふることあたはず、只「此こと必ず外揚し給ふことなかれ」といふ。鄙路云ふ、「儞既に實を吐く、再び儞に聞





とを知り、其夜空くもりて、星影さへ暗きに、三上が來る道に待ちうけ、兼て平四郎が預け置きし一腰を携へ、赤き頭巾著たるを夫と見るより、「三上の主にあらずや」と問へば、「左云ふは鄙路か」といふ聲紛なければ、脇腹と思しき所を拔打にはらひつけしに、三上拔合すひまもなく、右の脇よりはすに切上げられ、しばしは立つよと見れば、やがて倒れて兩段となりぬ。鄙路死骸にむかつて、「儞靈あらば能く聞け。我一生人に身を許したることなければ、夫の仇を報ずるにもあらず、餘所に見てもすむべきなれど、我故に命を失ひしを知りながら、外ごとにもてなさんは、我心に恥づる所あればなり」と、刀を押拭うて懷にかくし、又渡場さして馳行き、船を渡らんといふ。濟守勘平鄙路を見て、「今も降り來ん空の暗きに、いづくへ行き給ふ」といふ。「思ふかたへ」と計答ふ。勘平、夜深け四に人氣なきを見て、前の約束をわすれず、船を横にさしわたして、僻所にいたりて、「平四郎已に世をさり、儞情人に乏しからん、我と終身の約をなさばいかん」といふ。鄙路只笑うて答へず。勘平船を搖りとゞめて、「空くもり、渡りの人もなし。過

らひ、鄙路が中夜濟を渡る時、勘平船を柳の垂れしけりしかげに棹しゆき、鄙路を抱きとゞめて情にあづからんといふ。鄙路心に怒るといへども、此夜平四郎が痛所あるよし告げ越したれば、一寸の遲なはらんことを恐れ、假に勘平を欺きて、「こよひ心にさはりありて從ひがたし。他日かならず一宵の約にそむかじ」と、汗衫を脱ぎてしるしにあたへ、かれをすかして川を越えしが、夫より再び中夜こゝをわたらず。三上此汗衫を勘平より得て、こゝかしこに噂して平四郎をはづかしむ。平四郎も鄙路も、是皆五郎太夫が所爲なることを知り、二人が中の笑ひ種として、すこしも恥とせず。三上此後は、一向平四郎を失はんとはかる志常にあり。鄙路又是をさとつて、我身三上に遠ざからん計をのみなしける。一夕平四郎が來るべき約ありながら、曉に及べども來らず。明くる遲しとその道に行きて見れば、「無殘や」など人のいひつどひ、濟の川中に切られて死にしは、見覺えある衣服、平四郎に紛なし。早くも彼が父親聞きつけ來りて官府に訴へ、死骸を舁きてかへりぬ。誰が仕業ともしる人なけれど、鄙路が心中には、是三上が所爲なるこ

一歡—一度の馴染

に會す。鄙路も、彼が微弱ながら生得溫柔にして物に拘らざるを愛して、時ならず美酒海鮮を贈り、自去きて庖厨をとゝのふ。いとまある時は、中夜といへども渡船を越えて、彼が所に去きて宿し、恩情略趣あり。平四郎、一味に鄙路を娶りて夫妻たらんと思ひつめて、常に心の底を鄙路に語る。鄙路笑うて、「年月舊きを送り新しきを迎へ、片刻の偶をなすもの幾人ぞや。此國に名ある人、我が一歡をなさゞるはなし。我が此身商人の婦となるもなほ醜聞に堪へず、況や武家の室とならば、生立ある儞を恥しむるなり。再び此事をいふことなかれ。左あればとて、此後儞に對して疎きことなし」といひて、從良のことはとりあはず。こゝにまた、此國に名高き武士、三上五郎太夫とて、生得殘忍にして、姓に二字は稱れども、憐愍の二字を知らず、權威に任せて我意を行ひ、國中に横行し、惡せざることなき不良人あり。鄙路が美色を愛して、平生往來をなし、他を贖ひて婢妾となさんと欲すれども、鄙路本心にあらざれば、固く諾せず。五郎太夫、彼が諾はざるは平四郎と相愛するゆゑなりとて、此二人が中を隔てんと、渡守勘平をかた

言葉づくり―言ひわけ

三四人の悪少に出逢ひ、言葉いさかひ、雜言を聞き兼ねて、一人を切殺し、殘るは手疵おほせて追散らし、我も面に礫瘡うけて其場をのがれ、道すがら花街に入り、鄙路が所に行き、顔の礫瘡癒ゆるまで隱して給はれと賴む。鄙路、彼が言絶えたる身ながら、賴むをいなむは勇なきに似たりと請負ひて、東藏を粧臺に隱し置き、一月計の後、東藏鄙路に對して頃の恩を謝し、先に好みてより年月音せざりし言葉づくりす。鄙路一言の答なく、「足下をかこひ養ひしは、我が父母なく姉妹なく、心易き身の上なれば、一時の俠をなすなり。儞世を廣くなるとも、此後再び我家に來ることなかれ。千回來るとも儞に對面せず。儞鬪傷の場に匹夫の雜言を忍ぶことあたはず、却て故なき賣女に身を隱されて、其恥を想はざるはいかに。疾く〳〵去るべし」とて追ひ出せり。人是を聞いて男子に勝れりといふ。夫より後、國の守の扶持人安那何某が一子平四郎といふもの、年齡二十餘、一たび鄙路に會してより、晝夜家にかへらず、父母の聞くを慮り、病を養ふと稱して、花街と河を隔てゝ、一所の宅をえらみ、こゝに住し、夜ごとに河をわたりて鄙路

さそふ雲水に隨ふ—「わびぬれば身をうき草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」といへる小野小町の歌による

水汲むきは—貧しき分際をいふ

祓する比—六月三十日

家は是を慕ふべし、妓家の風俗より見れば、遊女の終りを取ることの正しき、是を美談とするに堪へず。二姉皆死して名あり、我豈聞ゆることなからんや。遊女の終りは跡を隱すを以て高しとす。鄙路とかやいひしは、今誰が妻となるなどいはれて、其丈夫の富貴と人物とに著せしか、或は日影西に傾きて、さそふ雲水に隨ふかなど、或は假初に俊聰に愛でても、其人尋常の人柄ならば、是又我見識のかぎり知れて口惜しからん。夫さへあるに、後々子あり孫あり、膝のしたより祖母と稱せられんもうとましく、又は老いはつるまで志を得ず、水汲むきはになりて人に見られんよりは、行衛なくならんはなんぼう本意ならん」といへり。生得に俠氣ありて、志男子に勝れり。妓となるの初、寡婦の武道を識りたるものありて、邊近く住みけり。鄙路これに就いて術を學び、常に射をなし、劍を打つことを手ずさみとし、道路に是非を見る時は、かならず其弱きかたを助く。義によつて命をかへり見ず。其國に住める浪人の一子に、安達東藏といふもの、鄙路と一兩度の好あり。二年ばかりも言絶えて、城隍に祓する比、東藏參詣の道にて、不慮に

傍より其老を見ず一はたより見ては少しも老いたる所見えず

く身を起し、「皆々心を勞し給ふな。わらは些しの病もなし。病の根元を見せ申さん」と、懐より小さき酒瓶をとり出し、傾くれば、赤き色の流れいづる。「是蘇朴汁なり。我是を飲みて吐くゆゑに、重き病なりと、何某が我を送りかへしぬ。假病のはじめより、此の酒瓶を人に見せじと、心ぐるしくせしかひに、久しからずして父母に逢ふことのうれしさよ」と、此日より客を迎ふることむかしにかはらず。已に年四十に近けれども、傍より其老を見ず。此時父母も打續き世を去り、檜垣も幾ほどなく重き病にかゝり、此度こそ實の血を吐きて終に癒えず。逝かんとするの前日、比丘を請うて經を誦せしめ、些しく佛拜の儀をなして後、再び佛號を唱へず。沐浴し、上下の服を皆白布に用ひかへて、同社後進の妓女小髮等をあつめ、笑語平日のごとく、死期の願念もなく、一つとして心にさゝはることあらず。琵琶を操り、雛妓と合奏に曲を彈じ、半にして琵琶をさしおき、「儞が四の絃、調子呂たるぞや」といひて、瞑然として絶えぬ。季の妹郿路嘆じて云ふ、「姉が終をとる事、功を積める高僧といへども、此境界に及ばんや。しかれども、僧

ふ、「増したる五十金は費用の外、我々が配分してこれを納む」といふ。此彌左衛門先年より諸國へ絹を販ぎにまはるものなるが、檜垣に頼まれて、此ことを成就したるなり。檜垣此百金を、新衣の料と債家の首飾を贖ひ出して、殘る金あることなし。又一年奥國の商賈、一世一度の船盟にこゝに來り、檜垣に泥みて、歸國の時、又再び此地へ來るべき身ならねば、檜垣が別を惜しみ、千金を以て檜垣が身を贖ひ、具して國に歸りぬ。檜垣も、若かりし日の心地もせねば、誘はれ行きて、幸彼家に妻妾もなく、女の心も安堵すべきに、もとより良家を望まぬ檜垣なれば、半とせばかり在る程に、大病發し、血を吐いてやまず、折々は今も絶ゆべき有樣に、此主大きに驚き、所詮檜垣が此の病復癒ゆべからず、古郷につかはし、父母に對面させて、心易く終らせんと、人多くつけて、道の程こま〴〵申しつけて送りかへしぬ。檜垣は道の中も人心地なければ、尾の道に歸りて、父母の驚、街中の人のうはさにも、檜垣は死してかへりしなど、あはれげにいひつたふ。奥州より送りの者も、野邊送せし心地して、足もためず立ち歸る時、檜垣何とな

式臺—追從

金をとれり。それがしうけがふとも、妓家に聽かざる時はいかん。しかれども、貴客の檜垣を憐みて、かくとり計らひ給ふ所も據なければ、君と共に妓家に行きて、ひたすら是を求めん」と、民部諸共高渚に至り、妓家の長に對面して、兩人共に此ことを乞ひ求む。妓家も民部が人柄にや讓りけん、「貴人の斯くのたまふ上は」と、約券を取り出して彌左衛門に還し、壓手金五十兩取戻し、「伊勢の御方は頼もしき御心入かな」と、式臺して送りぬ。民部、彌左衛門が家にかへり、百金を渡し、檜垣が父より先年つかはせし債券を取戻し、壓手の五十金は百金の外に增して、詫料となりしかども、此事の調ひたるを上なく悦び、債券に文こま〴〵書き添へて、家人を使として、檜垣が許へ送りやり、其身は先達て東國にかへりぬ。使の者尾の道にいたり、檜垣に消息を達せしかば、檜垣悦ぶ事かぎりなく、此使に錢などあたへ、返り筆懇にしたゝめてやりぬ。扨此ことの悦びにとて、我が欲しき新衣を裁して、好む所の花鳥を縫ひ出させ、舊衣を出して新妓の徒にあたへぬ。十日ばかりありて、堺より彌左衛門來りて、百金を檜垣にわたして云

庸易—容易の誤

かり初ならず、再三ことばがためして、已に我を送り去らんと決す。今變ずるとも、庸易うけがはんや」民部いふ、「我歸國の日逼れり。歸路必ず堺に至る。彌左衛門とやらんを尋ね行きて、慇懃に此ことを求めば事調ふべし」といふ。檜垣是を聞いて僅に點頭し、「若し左ある時は、我芳名永く衰へず、君の恩を忘るゝ事なからん」と、忽愁眉を開きて髪を擧げ、悦び面にあらはれ、民部をとゞめて、和盤托出して是を款待す。民部は、檜垣が事によりて發帆の日を促し、すでに日ならずして歸程に登る。檜垣送りて其船にいたり、別酒を酌みかはし、「しばし見ぬさへ戀しき人を、遠く放ちやりて、明日の心いかならん。名花は散りやすく、名月陰り勝なる世の中」と、一陣の涙を流し、「我儕の涙深きは、却て實ならずや見ゆらん」と再び泣かず、「回る春こそ」と再會の約をなし、民部も涙ながら出船して、海路ことなく堺の津に著きて、旅店に休息し、彌左衛門が所を尋ね行きて對面し、かゝる次第を餘儀なくいふに、彌左衛門世に迷惑なる有さまにて、「それがしすでに檜垣を高渚に轉賣して、彼來りなば、其所へ送るべき約にて、壓手の

り、目を哭きはらして、憂の色深し。いかなることやらんと問へど、「此事我家の内事にして、君があづかり聞く事にあらず」民部云ふ、「儞が身の上の喜憂我が聞かざることを得んや」檜垣云ふ、「さりながら此事、遲と速と、つひに情人に告げざることを得ず。先年我父零落して泉州堺に在る時、彌左衛門といふものに百金の債あり。彌左衛門今貧窮によりて、是を乞ひ討むること甚急なり。我父親、すべきやうなく、我身を債の代につかはして、堺に在つて妓をなさしめんと欲す。我此所に年來時めきて、僅の債の爲に他國に移りては、芳名復び揚らず。彼の堺の地は、異國の商客多く船をとどめ、花街是が爲に興旺すと傳へ聞く。異國は大人すら人品日の本におとれりと聞く、まして商賈の徒の動作思ひやるべし。我身是が戲兒となるは恥づべきの限りなり。命は惜しからねども、死して親の助ともならねば、進退心に任せず、此故に憂ふるなり」とかたる。民部聞き終りていふ、「それがし不肖なれども、儞がため其數の債に乏しきことなし。是を贖ふ時は儞の憂免るゝならずや」檜垣頭を搖つて云ふ、「此こと

催馬樂―王朝の頃朝廷貴族の間に行はれし一種の歌謠

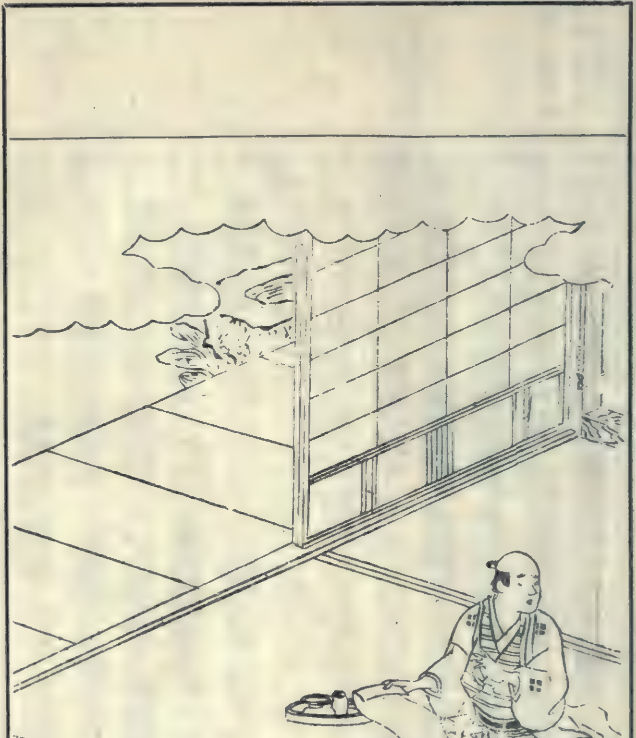
插櫛―「插櫛は十まり七つ有りしかどたけくのじようの、朝に取りようさり取り、取りしかばさしくしもなしや、さきんだちや」

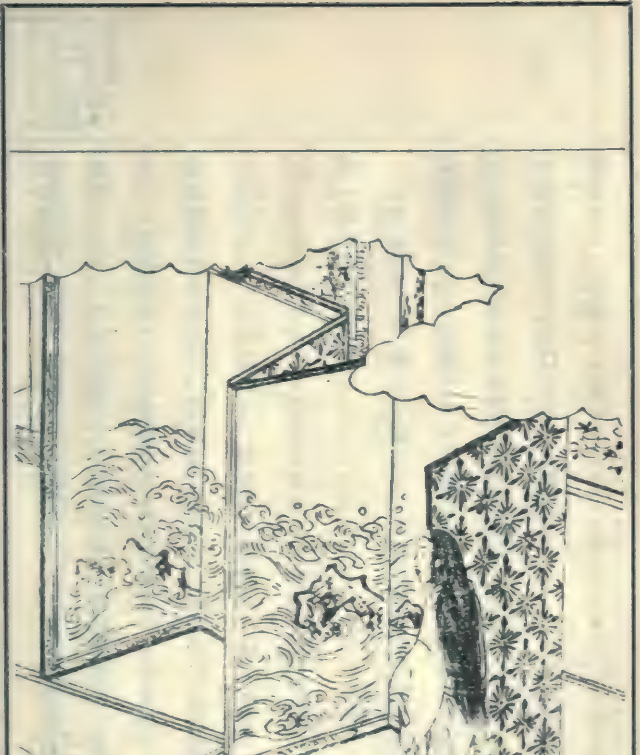
櫻人―「櫻人、其舟ちゞめ、島つ田を、十町つくれる見て歸り來んや、そよや、明日歸りこんや、そよや」

に類なし。豈自是を賤しとせんやと、心の趣も姉にかはりて、吹彈、歌舞、皆倫を離れて、なほ書を善くし、畫を善くす。中にも能く墨竹を畫くを以て、人かれを小竹と呼びなす。およそ當國に來る遠客、少年の子弟、花と柳との街に立ち入るもの、檜垣を識らざるを身の辱とす。常に雛妓、小鬟をあつめて、我入調せし曲を敎へ、今樣、平家の類を卑きうたひ物として、催馬樂の類をもてあそび、插櫛、櫻人を琵琶に彈じて、獨り是を樂しみ、折節は草を鬪し、香を競ふ。我好きと思へる模樣の小袖は、數多く調へて、雛妓小鬟に贈りあたへて、一樣にこれを著けしめて自快しとす。我畫く所の團扇、一街の人是を得ざるものなし。人に物を惜まざれども、我上等の衣服首飾、常に債の家に當て遣りて是を恨みとせず。巧に來客の心を取り、一たび會ふもの日々彼を忘るゝことなからしむ。伊勢國、飯野民部といへる名高き人、此國に親屬ありて、其許に來りて滯留のつれ〴〵、檜垣に深く馴れて、朝暮來らずといふことなし。檜垣も尋常ならず見えけるが、ある早朝に、民部檜垣が許に來り見るに、檜垣がさまいつにかはりて、髪を被

烟花—遊里の事
從良—原本身の片付と傍訓せり

ざるに、四五日ありて、都産が侍兒若葉、旅人に道の同伴を賴みて大和にゆき、廣瀨が許に尋來り、都産が已に死することをつげ、「其死せんとする前時、我に囑して云ふ、われ十郎殿を見ずして死することこそ本意ならね。彼人平生に愛する所は我手髮眉眼なれども、此物贈るに堪へず。今また一縷と手の指甲數枚を剪つて儞に托する間、我死しなば、儞便船を求めて大和にいたり、十郎殿の家に行きて、此二物を寄せて、約束のごとく彼家の壠の傍に埋みて、家の祭にもあづかることを、幾重にも〳〵傳へてくれかしと、言ひ遺して終りぬ」と、袂を顏にあてゝかたりなげく。廣瀨も我をわすれて、聲を放ちて悲泣するに、兩親も驚き、出でて此始終を聞き、世に類なきことに思ひ、都産が末期の望にまかせ、甲髮を先壠の次に葬り、印を建てて、我家の靈簿に亡名を寫し入れぬ。廣瀨も一生妻をむかへず、都産が志に酬いける。都産が妹檜垣、姊の死期の有さままで見及びて思ふやう、一たび烟花に落ちしものの、切に從良を願ふは、其恥を顯はすに似たり。遊女は、貴人高位といへども、待するに其分別をなさず、其高きこと世





石ともなるべき—望夫石の故事に取る、神異經に「武昌貞婦望夫化而爲レ石」

女が石ともなるべき心の中を察しやりて、來る年の此月比はかならず來らんと約し、涙ながら舟にうつり、大和にかへりしより、親は年老い、家事又多く、人を待たぬ年の足早く、一年は早いつしか過ぎて、また來んといひしも空ごとになりぬらんと、人見ぬ折節は涙を洒ぎくらす。備後より來る人、都產が許よりの消息を傳へ來りて、都產は病にのみ臥してありと聞きて、封を疾く開き見れば、書きつらねたることばのすゑに、

人を待つやどはくらくぞなりにけるちぎりし月のうちに見えねば

又一聯の句あり、

春蠶到レ死絲方盡　蠟燭成レ灰涙始乾

廣瀨消息のやうを見て大に傷感し、返言に、書つくして病をいさめ送りけるが、其後は便も聞えず。あるひ廣瀨我家の西面の柱によりかゝりて立たるに、向ふの屛風の間より半面を出すを見れば、正しく都產なり。こはいかにぞやと立寄る內、早くも見えず。廣瀨思ふに、都產もしや已に世を去りて、こゝに形をあらはすにあらずやと、掛念安から

平生に多かれど
なり
かねて心ならず
一旦心ならず

らねど、君が爲惜む所なし」と、自振解きて、一縷を剪つて廣瀬に遺る。廣瀬感悦して再會を期し、かねて心ならず別れ歸る。此日都産を誘ひて此に來る遊客、目前都産が憚る方なき仕わざを見て、忙然れ果てゝ都産に不采、かれをうちすてゝ歸り去り、再び都産が門にのぼらず。此とり沙汰街に充つれども、都産すこしも憚らず。廣瀬が頃病に臥すと聞きて、日々消息をつかはして、ひそかに其安否を問ひ、其速に癒えんことを慮るより外、客を迎ふること心上にあらず。廣瀬病癒えて、程なく本國より歸國を促し來るに、やみがたく、都産にもかくと告げて旅立ちける。都産は一里の外、船場に出で て別をなし、別酒を店中に飲みて、都産云ふ、「君才智あり、我麗艶あり。才と色と相得て捨てがたきは自然の理なり。君の意と我心と、是を神明に誓ひ、是を松操に結ぶこと久し。君異日少しの間を得給はゞ、再びこゝに來り給へ。我命だにあらば、朝と暮と君を待たん」こゝにおいて、二人天に盟ひて香を焚き、其灰を酒中に致して共に是を飲み、其夜此所に同じく宿して久曠遠別の情を演べ、日出で別るゝに臨みて、相與に大に慟き、

我平生に假のちなみありし中に離れて云々ー一旦絶縁せし假初の客に後復逢ひしが如き事我が

かく心の底を顯はし、先に屢往來せし知音の客來れどもこれをむかへず、廣瀬が外は皆病と稱して會せず。如此こと久しければ、檜垣姉にむかひて、其生業に疎なると、一つには父母への孝にもそむき給ふとうらみ聞え、倘ほ廣瀬と好を絶ち給はずんば、廣瀬を官府にうつたへて、彼がかたより絶たしめんといふ。都産假にたゞ點頭て、一言の答なし。廣瀬此よしを傳へきゝ、妹の毒ある言葉に恐れて、夫より復び都産に會せず。一日廣瀬濱邊に出でて逍遙しけるに、此日都産も遊客に誘はれ、こゝに來り合せ、廣瀬を見るより早くすがりとゞめて、「此比の中絶えしこと、君が情薄にもあらず、我心にも任せざればなり。過ぎし比終身の約をなせしは、骨となりても忘るべきかは。今日の恨を屑ずとすることなかれ。たとへ志を得ずして死するとも、我骨を執つて君が先壠の傍に埋みて給はるべし。我平生に、假のちなみありし中に、離れて復合ひしためしの多かりしは、たゞ其財をすかし取るのみ、いまだ曾て此身を以て許したることなし。我此黑髮、曉に夜にこれを養うて寶とすること玉のごとし。餘の人に與ふることは思寄るべくもあ

妻乞ふ―妻戀の說

かすりて―當てこすりて

るさま、我本心の志にあらず。世の中の士農工商、其業々をなして身を養へども、我儕のごとく、心寄らぬ人に笑を獻じ、言を巧にして、其財を取るを以て勤とす。つらつら思ふに、愧づべきこと限なし。父母を養ふことは、良家の婦となりてはならぬ事にや、良人に從ふ時は、入りては舅姑に事へ、家の祭祀を主り、出でては顧みる人に誰某が婦なりと稱せられ、死して其家の祭を受く、是を捨てゝ婦なるものの本意あらんや」と、すべての妓女とは心ざまかはれり。一とせ大和國の人に、廣瀨十郎といふもの、葦田府に叔父ありて、物學の爲こゝに來り、尾道に通ひて都産に好みをなしける。都産一度此人を見るより、我夫と思ふべきは此人なりと心に取定めて、うらなく相馴れしかば、廣瀨も妻乞ふ若ざかり、彼が誠ある心にほだされ、魚と水との離れがたきがごとく、およそ花に坐し月に醉ふも、皆手を携へて行き、戀々として兩に相捨てず。されど迎ふる人多き身なれば、其志の變ぜんことを、廣瀨が常にかすりて聞ゆる毎に、深くかこちて、

花すすき君が方にぞなびくめる思はぬ山の風はふけども

南枝まづ時めきて—露暖南枝花始開（朗詠集）に據る

趣差有り。いづれの治りし世の事にや、諸國の關の閉もなく、歌枕見る人、遠遊を好む人、諸國に往來する商賈も、進退自由にして、海道の驛亭旅店までも賑ふ比、備後の國尾の道といふ所に、名高き三人の遊君あり。本は都の生れなるが、父母の零落に隨つて爰に來り、其類あるに倣うて、遂に兄弟三人、遊女となりて父母を養ふ。姉を都產と呼び、妹を檜垣と呼び、季を鄙路といふ。三女とも、其顏色、歌舞、群妓の上に出でて、是と高下を爭ふものなし。中にも容色は都產まさり、南枝まづ時めきて、遠近の雅人此爲にこゝに來る人多く、一度其顏を見て榮とする人は皆名ある人々なり。此故に富有の商賈といへども、其意を動す事あたはず。都產、送迎の暇を偸みては、閨房深く籠り、姉妹の間といへども、言語ふこと多からず、笑を擧ぐることなし。琵琶は新聲を入調するに堪へたれども、操るに懶く、上代能書の跡を翫びて、筆の道に心をとゞめ、古き草子を乞求めて、見ぬ世の風俗を樂むよりほか、移り行く世の人の好所をも取らず、棄つるをも捨てず、唯寒中の花の末だ開けざる風情あり。傍より是を問へば、「我身の世わた

丈夫―我が夫
丫鬟―若き侍女
案を擧ぐる事眉と齊しくし―目八分に膳を擧げて敬ふなり
規模とす―この上なくよき事とす
靜貞を取り―浮氣ならぬを喜ぶなり
心肝とせず―眞のいろとせず

の未だ做さざる時是を做し、人皆做すときは却て做さず。人を請ずるときは來れかしと思へども、人に請ぜらるゝときは却て行かず。蔬菓、翫器は價の貴きを用ひ、必用の物具は價の賤しきを論ぜず。是貴人の賤人に反する所なり。長子より少子を愛し、男子より女子を愛し、人を信とせず、佛神を信とす。少錢を惜みて多錢を惜まず。息婦の時姑を怨み、姑となりて却て息婦を嫌ふ。物忌はすれども呪咀の怪きことを好み、早く老樂を得んと欲して、又人道の老いぬるを怕れ、丈夫の擧動は嚴しく防閑すれども、丫鬟が淫奔意に挾まず。是婦人の男子に反する所なり。婦人の中にも妓女と良家と稍異なるはなし。良家は其丈夫の美醜賢愚を論ぜず、是につかへて、案を擧ぐる事眉と齊しくし、些の外情ありても婦道の棄物となる。遊女は引手多き嫖客の中、意にあたる人に誠をトめ、人を閲ること多きを規模とす。良家は丈夫の靜貞を取り、妓家は其興あるを取る。良家は、情を寄する人あれども、肌を汚さざれば、事ありとせず。妓家は枕席を交ふれども、意中の人にあらざれば、心肝とせず。其遊女またおのがさま／＼意の

古今奇談英草紙

第四巻

六　三人の妓女趣を異にして各名を成す話

老いたると若きと、貴きと賤しきと、男と女と、互に其志の相反すること、言古りたれども、再び是を説かん。夜は臥さずして晝眠り、子を愛せずして孫を愛し、近比の事は記えねども、遠き事をよく忘れず。悲に涙なく、笑ふ時涙あり。近きもの見えず、却て遠き物よく見ゆ。打撲にいたまず、平日却て痛む。白き面黒くなり、黒き髪白く變ず。是老人の少年に反する所なり。夜は臥すべきに飲宴に明し、朝は起くべきに日高けても臥し、心は放鬆なるべきにこれを勞し、勞すべき身は却てゆるやかなり。使ふべき錢は使はず、使ふまじき錢をつかふ。病なけれども常に藥を服し、病あるとき藥を服せず、人

纔て―漸く、やつとの義訓

りて、山野里巷に四肢皆土につきて地を走り、羽翮を高く張り、飛行して食を求むる禽獸に生を托し、多くは獵師の獲物となり、皮を剝がれ、工人の手にわたれば、馬具敷物となり、蹈皮となり鞋底となり、肉をわかちては脂をとられ、煮られて盤に登り、膽を割かれて醫藥に備へられ、皮肉片々として所を異にし、戰馬となりて、數箭を蒙りて乘捨てられ、手柄にもならぬ命を捨て、死代りて海物となりても、釣網罟俎の憂を免れず。蟲類となりては、淺ましき生を受くる。是類皆地獄にあらずや」任重手を拍つて、纔て地府の規矩を拜服し、已に閻王に別をなし、我舍のもたれし机に、忽然として身を起し、雙眼を開きて、「我のみ地府の事を一々忘れず、奇怪々々」と獨言して、隣家の翁を呼んで夢の奇なるをかたり聞かせ、かく玉帝の命あれば、久しく延はりがたしと說終りて、目を瞑ぎて逝す。是亦定業にや。隣家の翁憐んで、其屍を邊近き林中に葬りぬ。幽冥の事奇怪なりといへども、彼數人の寃魂の云へる所、一々理の有る所は强ふべからず。

こゝにいたる人—萬法皆空と觀ずる人

九品の淨土—九種の極樂、上中下品に各上中下生の區別あるをいふ

出でず。極樂は天堂とも云ふ。人の魂氣、物の爲に凝らずして、火盡き煙となりて空に昇り、氣と倶に消化して、天の空なると倶に空となつて、些も形とすべきものなくなるを、極樂とも、彌陀の本身ともいふ。僧徒は、此空を現世より期したるものなり。貴所の見る所に近し。こゝにいたる人も亦少からず。しかれども、かく取る所もなく消果つると聽きては、身勝手なる末世の衆生、興なきことに思ひとりて、たとへうきふし多き世なりとも、人界へ生れ來らば、復び眉を開く事もあるべしと、殘念のはしを起さんことを聖の不便がりて、佛菩薩の名を徇へ出し、九品の淨土を說きて、是を願ふべき到り處と定められたると覺ゆ。彼滯り迷ふことありて、空と一つに消化することあたはざる魂氣は、凝り濁りて重き事あるがゆゑに、皆々地府に沈み來れば、隨次に生れ往きて、其內報應を散じ、解脫して天堂に昇るあり、又新に寃恨を結び、長く因果を引いて流轉するありて、暫くも地府に留る事なし。壽永以來の數人のごときは、甚だ稀なる滯獄なり。貴所の尋ねらるゝ地獄といへるは、極重惡人をいたらしむる所にて、是も人界に在

五行―木火土金水

き、冠服を卸し、舊の浪人姿となり、決斷する所の案卷簿籍、閻君に進看す。閻羅王嘆服して、此由を上界に呈奏す。玉帝深く賛して宣ふ、「百年來の滞獄、彼者六時の間に決斷し、天地私なく、果報變はざらしむ、誠に天下の奇才なり。任重天を經にし地を緯にするの才、今生屈抑して時に遇はず、來世彼を新田義貞の弟となし、脇屋義介と名乘り、兄の職を襲ひて南朝礎の臣となり、志は得るべけれども、善事の報にあらず、才學を以て轉生する者なれば、始終思ふ儘なる世は經さすべからず」と玉帝の御旨下る。閻羅王開讀し罷り、筵席を備へて任重が行を送る。任重告げて云ふ、「人界に常に地獄極樂の說をなす。想ふに、極樂は無苦世界といへば、名目はありて空なるべし。五行の氣皆天にあれば、其所に立ちのぼりかへり、本源の氣と倶に形なくなるを言ふなるべし。形ある時は苦ある事常理なり。左あらば極樂は、問ふに及ばずあるべき所ならず、地獄といへるは閻君悪人を懲すの所なるべし。其有樣我に見せしめ給へ」といふ。閻君笑うて云ふ、「爾博識明智、是を悟らざるはいかん。人界に、天地人を三才といふ。皆其裡を

の後賞せられず、元の佐用一郡を漸う住所に沙汰せられて、功勞の甲斐なかるべし。頼朝、儞宿善によりて日本の惣追捕使となり、家を興すといへども、度量窄く、人を容る事あたはず、二人の弟が訴へ皆儞が罪なり。今儞を民部卿三位局の腹に投じて、王子と生れながら、外戚賤しきがゆゑに、山に登り天台の座主となり、三千の衆徒を管領し、法燈をかゝぐる身とはなれども、前縁盡きず、還俗して護良と名乘り、父帝の志に從へども、北條家の權勢に頭を出す事ならず、南紀の際に蒙塵して千磨百難、怨敵亡びて後征夷大將軍になり、理を以て言はゞ天下を握るべき身の、却て獄に繫がれ、直義が命じて淵邊が爲に首を切らる。儞が殘忍なる報なり」三通の告狀悉く落著して、罪せらるゝも、賞せらるゝも、皆屈服す。任重鬼卒に命じて云ふ、「今此一場の怨鬼ども、前因によつて同邦に往生るれども、應報のあるものどもなれば、我ことばを心耳に殘さしむべからず。早々發出して地府に滯らしむる事なかれ」任重判斷明白に畢りければ、衆官人心服せざるはなし。判官一々細に注し、筆を擱く時、鷄鳴いて曉を告ぐ。任重殿を退

彼が陰陽を折く事ありとも云々—彼れ義經自ら命數を破りたる如くなれども、是やがて命數の內なれば畢竟汝が占術の未熟に因るとなり

南山—吉野

み、兄弟內議して師直を誅するまで、皆儞を助けしむるなり。又吉岡鬼一は義經を相して七十一歳榮華に終ると考へたれども、義經只三十一歳、彼が陰陽を折く事ありとも、是卽命中に有るべき事なり。儞が術の不練なるに依る。今儞を高階の一族に生を托し、師直と名のり、足利家の權柄を執り、追日天下を定め、四十一歳にして刀下の鬼となり、陰陽龜卜相人の術を以て人を迷はす胡言の罪を報ずるなり。形を替へ、法衣を服しても、凶死を免れざるは前業のなす所。時政、儞を再び北條の家に入つて平貞時が嫡子と生ぜしめ、高時と名乘り、亂るべき世を續きて心を勞し、終に鎌倉にて亡さる。前世功臣を謀り殺すによつて、來世一族まで亡さる。政子、儞を縉紳源家師親の家に投胎して、後醍醐帝の宮女とし、民部卿の局と號し、大塔の宮の母堂にて、其身一度帝の寵幸を忝うしながら、一生志を得ず、南山に零落して、宮直義に弑せられ給ひて後、憂に沈みて世を去る。是高氏が殺すにかゝる。重忠を謀り殺す罪を報ゆるなり。廣元は同邦播磨國赤松何某が家に生ぜしめ、法號圓心と號し、楠に次いで官軍に功有れども、治世





き事をしらず、義經が零落にゑみを含む不仁の志あり。今爾を同邦河内國楠正遠が家に生じて、幼名多聞丸、後多聞兵衛正成と名乘り、後醍醐帝に頼まれ、高氏義貞と共に北條家を亡し、一度帝を世に出し奉り、攝河の間に據りて、新田足利と三鼎の勢をなせども、前生上將の才なき身として、其任にあらざるを、ゆづることなく兄貌して上將を蒙りたる所あれば、後生義貞の下に附きて、彼が命を聽きて、才有りながら自己の神機妙算を伸ぶる事あたはざらしむ。重忠は、爾是れ武文二道の君子、功あつて罪なし。爾を下野の國足利讃岐守貞氏が家に出生せしめ、高氏と名乘り、北條は家の縁者ながら、機を見て志を變じ、北條に叛きて官軍に加はり、新田と天下を分ち、後來四海を一統するにいたる。是忠心に報ずるなり」重忠云ふ、「北條家の縁者となりて、萬一彼が勢盡きたる時志を變ぜば、義を知らぬそしりありて、思ひ附く武士あるまじ」任重云ふ、「我幾人の智者を生じて爾を助けしめん。江田源三は前生の智術を依舊に、重忠と同じ腹に托し、其弟に生じ直義と名のり、兄の爲に天下をはかり、計策を含み、或は遁れ或は進

准后—皇后を生みたる女官に賜ふ稱號

國色韶顔—原本くれに色あるうつくしきかほと傍訓す

脣亡ぶれば齒寒し—輔車相依脣

は日本國公卿阿野公廉の家に托生して廉子と稱し、帝寵を得て准后にいたり、後來南朝の國母となるべし。たゞし業因を引いて、義貞護良が爲に害をなすことも有りなん。二位の尼は是も西園寺家に托生し、實兼の女となし、家の先例によつて、入内して后に立つべけれども、廉子に寵を奪はれ、親しく帝を視ることを得ず、國色韶顔空しく深宮に埋もれ、婦人の薄命此怨情にこゆることあるべからず。是を以て安德君の報を贖はしむ。義經、備身命を惜まず、家の仇を討ち、君の宸襟を安んず。功勞ありて志を得ず。然れども不義の行跡多く、陰德を損ずる事あり。備を殺して、日本上野國住人新田六郎朝氏が家に生を托して、義貞と名乘り、高氏と倶に鎌倉を亡ぼして天下を分つの勢あり。後左中將に至つて終りを能せざるは、前生不義の罪の報ふ所、範頼又功あれども殺さる。來世其恨を報ぜしむ。然れ共我平治以來の書を見るに、征西の時、備上將となり、義經副將となる。副將は一器量あるゆゑ、毎度計策を仕中れども、備上將の才なく、却て義經が軍慮の妨をなす事多く、却て義經をねたみ忌む事頼朝よりは甚し。脣亡ぶれば齒寒

食錦衣、西京の美色後堂に充つ。何ぞ無儀の老婆を慕はんや。彼政子は、元來伊豆の流人山木兼隆が聘を受けて、既に定りたる丈夫有りながら、父時政都在番の留守の內、佐殿に密通しけるか、時政歸國して此事を知り、六波羅の聞えを憚り、直に山木が許へ送りつかはし、一度兼隆が許へ嫁したれども、佐殿の事を忘れかねて、山木の館を逃れ出でて佐殿に從ふ。心の操定らざる事かくのごとし。重忠幼より聖賢の書を讀み、人の道の大概を知る。無儀の志露程もなし」任重いふ、「重忠申所眞情、政子が口詞はぬり隱せし所あり、必ずしも言ふに及ばず。重忠は大功の臣、忠節比類なし。是皆北條が家より謀る所、後代北條の天下を以て三つに分ち、爾等三人に與へて生前汗馬の勞に報ゆべし」任重善惡の兩判官を喚びて帳簿を控へしめ、「決斷明白、恩は恩を以て報い、仇は仇を以て報い、分毫を錯らず。其連告の者までも一場に落著せしめん。何州何郡何鄕、姓は何、名は誰、幾時生れ幾時死す、細々と記錄して、罪人逐一發し去つて夫々の胎に投ぜしむべし」判官筆を把つて、任重の言葉に隨つて帳簿に寫しとる。任重云ふ、「安德君

谷の小門より入つて、內玄關にいたる時、政子一間を出でてむかへ、奥へ請じて酒三獻を酌む。政子淫心起つて、左右の侍女をはろかに遠ざけ、目を以て情を寄す。某彼が大事を議するを名として道なき事をなさんとするをさとりて、席を正しうして敢て近づかず、謹んで曰く、某大事に預りてきたる事を知り、御前の女中皆避遠ざかる。元のごとく次の間にさしおかるべし。恐らくは閨閫の誹あらん。政子怒色面にあらはれ、爾小義に拘つて大事を謀るに足らずと、座を起つて入る。我もまた不レ辭して歸る。其事我は堅くつゝみ、口外せずといへども、政子深く恥ぢて我を恨み、時政の室牧の方と計つて讒訴をかまへ、嫡子重保が事より起つて、我身も俱に亡ぼさる。是多く政子が謀る所」政子傍にありて告げて云ふ、「閻君他一人の詞を聽く事なかれ。凡世上男の女に戲るゝは常理なり。女の男に戲るゝは理の常にあらず。重忠我傍に人無きを見て、一時不良の心を起し、戲の言を出し、我爲に叱せられて走り歸りぬ。此故に、我後來言を托して無禮の罪を問ひしなり」重忠云ふ、「我源家に從ふといへども、數萬町を領し、大厦高堂玉

頼云ふ、「某鈍才なれども、兄の代官として、義經と俱に西海に下り、平族を亡し、頼朝の惣追捕使、皆我輩の力なり。誰か思はん、苦と同じうして樂を同じうせず、治世の後、伊豆の國に逐ひ下され、狩野宇作美に預けられ、言甲斐なき死を遂ぐる、此恨はるゝ期なし」任重云ふ、「爾が訴義經と同意なり。再び言ふ事なかれ」次に喚ぶ、

告人　畠山重忠　在りや　　謹んで曰ふ此に在り

被告　時政政子　在りや　　謹んで曰ふ此に在り

任重云ふ、「畠山重忠、爾何の罪あつて家を亡さる」重忠云ふ、「某功あつて罪なし。源家の再興多くは我等が佐くる所。頼朝逝去の後、政子素姓婬亂にて、諸大名の子供の美貌なるものを、内使にて招きて、酒宴の偶となさんと欲す。内監何某是を止めて、故なくして少年の大名を召さば、忽ち人の議論ありて、罪我等迄に及ばんといふ。こゝにおいて政子想ふやう、古老の臣は、頼朝の世より多く内外の政務に預る。是を招くは所謂なしとせずと。即ち隱密の大事ありと、内々の使者を以て某を呼ぶ。某使者と俱に、桐が

零落殺死―零落殺死せしめたりと句切るゝなり

誰かよく及ばん。我其時思ふに、廷尉は聰明なり、必ず功を武衞に讓つて自驕る事なからん、左ある時は其身も安全なるべしと。思はざりき、跋扈の動止甚しく、若不虞の事あらば、檻外に虎を養ふなり。たとへ頼朝一代患を成さずとも、子孫に於て油斷ならずと、睚眦もの辭をつくるは此故なり。夫程の事見えぬ人柄にはあらぬに、一比も梶原景季堀川の亭に到つて、行家追討の事を達し、是を以て其動作を計り見たりしに、再度に及びて漸對面して、然も病中といひながら、應對甚不遜なりし故、景季元より小人なれば、是を憤り、武衞の御前にて沙汰よろしからず。殘忍なる兄の心を知りながら、毒ある佞人と知つて、是を懐くる事もなく、却て其心に逆ふ。是皆老成ならざるの致す所なり」任重いふ、「義經の逐はるゝ、畢竟看來れば頼朝の罪なり。頼朝答ふるに詞なかるべし。廣元も、頼朝に姦智而已を教へて順道の謀を進めざるは、罪なしといふべからず。源氏再興、義經の身命を捨てたる功高うして賞なきのみならず、零落殺死。轉世此寃を報ぜしむべし」と、案を寫し、一遍にひかへさせ、又範頼を喚んで其告を聽く。範

馬耳風—馬耳東風、李白蘇軾等の詩句に出づ、又陸游の詩に「萬事從ㇾ渠馬耳風」

鄒魯—孟子鄒に生れ孔子魯に生る

て、三河の國矢作にて、十日計滯留して、光重を待ち合されし内、宿の長が娘とかたらひ、假初の契りをこめ、夫より下野に著して、深栖の館に半年計有る内、彼女はあだなる詞をふかく思ひとりて、數々消息を送るといへども、義經馬耳風ともせず、詞の答だになかりしかば、一筋なる女心に深く恨み憤りて、半年の間にむなしくなる。寃魂いづくにか散ぜん。青春十年を折く。檀の浦平軍敗れて後、女院の御船に參會して國母を犯し奉る。又十年を損ず。其身の不義を忘れ、却て兄を追討の院宣を申し下す。是によつて又十年を損ず。將家の常にして免れざる事ながら、義仲追討より以來、生を殺す事幾千萬をしらず。又十年を損ず。併せて四十年の壽命、此罪によつて削らる」義經云ふ、「大江廣元は、其身武衞の師範として、鄒魯の流を汲み、先王の道に泝る。文あり才ある身として、同胞の間を傷ふは何事ぞ」任重廣元を喚び出して問ふ時、廣元云ふ、「某は其時、頼朝の爲天下の爲の計を思うて、義經の爲にせず。彼の廷尉朝日將軍を戮し、平氏を八島につくす、其間數歲ならず。功をなす事の速なる、廷尉の英武にあらずんば

機を殺すし故と命數を減ずるなり

院の御氣色よろしからねば、其事のなるべきにあらず。後來身を安んずる地なからん事を察して、中途より見限り、それがしは山林に引籠り候なり」任重道ふ、「義經如何ぞ明白なる教に從はざる」義經云ふ、「余童形の時、洛に吉岡鬼一法眼といふものありて、深く陰陽の理を鑑み、偏く軍籍の奥を極む。人相を察る事都下に名あり。彼が相を求むるもの門に市をなす。會て某を相して、壽七十一歲、功名榮貴に終ると云へり。是ゆゑに、天道に任せて人の心に佞らず。誰か知らん、零落千摩、僅に年三十一歲、彼鬼一禍福を云ひて驗なく、虛名に乘じて人を誑し、人の一生をあやまる。恨むべし〳〵」任重鬼一を喚んで是を問ふ。鬼一云ふ、「人の壽命、延ぶべきあり、折くべきあり。星學者流常に壽命の定め難きは是故なり。義經七十一歲、是算上の理の據る所、かなしきかな、彼が機を殺す事太深く、陰陽を損ずる事多きが故に短折をいたす。某算命の違ふに非ず」任重云ふ、「義經幾件陰德を損ふ。一々云ふべし」鬼一云ふ、「始義經奥州へ志し、師の坊覺日の父下野の住人深栖陵之介光重と同作の約をなし、其身は金商人橘次と先達て首途し

受領—國守

給ふな、一兩度も辭退したまへなど、千萬心を添へしかども、一つも用ひず。あまつさへ、壽永三年左衛門尉に任ぜられしとき、使者を鎌倉に進じて、去ぬる六日左衛門少尉に任ぜられ、使の宣旨を蒙るよし申す。其時武衛甚悅び給はず、使者に對して仰せけるは、範賴義信等は、內々我方より內奏を以て受領の事を吹擧せし故、左もあるべし、彼が事は存ずる子細有りて、未だ其沙汰に及ばず、察する所遮つて所望申上げたるなるべし、是を以て日頃の無禮思ひやると、その怒詞にあらはるゝ時、大江廣元賴朝の後に在りて、聲を低げて云ふ、平家未だ西海に在つて戰爭半なり、將士を懷け重んずべき時節なるに、小事を怒り給ふな、と心を付けしかば、賴朝早く悟り、言を取り直して、兄にもまさりて速に任官を進められしは、內にも類なき忠勤を思しめしての事なるべしと、事もなげにて使をかへされしかども、是より彌賴朝の疎ふかし。我亦其時一計をすゝめて云ふ、上皇後白川院、賴朝が權威を忌み給ふ御志あれば、院の御所に近より、法皇の御計ひを假りて、身を立つる計あるべし、と心を付けぬれども、西海の狼藉を疎みて、

武衛―頼朝

に文治五年四月晦日衣河の館に自害してより、百年以來此恨を報ぜず。今日權閻王の明斷を願ふ」任重云ふ、「儞當初副將軍たれども、三軍只儞の名のみ知つて、範頼の名を覆ふ程の勢ありながら、都を零落する時、大事を謀る知臣もなかりしか、頼朝黄瀬川まで出馬ありしかば、人家の犬を追ひ出すがごとく、棒の擧るを見て都を逃げ出でしはいかに」義經云ふ、「曾て一人の軍士あり、江田源三といふ。平氏を亡して後、中途にして我を捨てて去る」任重鬼卒を呼んで源三を喚び到らしめ、問うて云ふ、「儞始あつて終なく、半途にして逃る、軍師の職を盡さゞるは何ゆゑぞ」源三いふ、「義經生得性急にして、人に親しむ事疎く、己を誇り、人を蔑にするの癖あり。是故に人の思ひ附く事少し。終には威勢の衰へん事を慮り、征西のをりから、每度彼に進めて、和田畠山は當時の大家、就裡重忠は博識多才、親みて恥辱ともならぬ人柄なれば、打かまへて睦敷くし給へ、梶原景時は侍別當の所司、軍士の奉行として、武衛よりの附人なれば、大小の事皆示し合せ給へ、木曾殿討手の時も、一族との合戰にいさみ進みて、心ざまを武衛に忌まれ





多田源氏―多田藏人行綱
懸け敗つて―斷け破つての誤

我を見る事路上人のごとく、我從者の外に味方なければ、遂に文治元年十一月二日すごすご都を開き、津國河尻にいたりて多田源氏に道を遮られ、懸け敗つて通るといへども、從者過半を損じて、大物の浦より四國へ渡らんと思ふもむなしく、時節冬の最中なれば、出帆の便りを得ず。其隙に東軍の逼らん事を恐れ、從者と引きわかれ、跡をくらまして大和吉野に入る。從ふものは聟有經、辨慶、景光、白拍子靜、纔に四人、爰にも足とまらず、辨慶とわかれ、獨身となり、南都、紀伊、伊勢、近江、所定めず蹐まり、或時は京都にひそみかへり、叡山、鞍馬、仁和寺にかくれ潛まり、幾度か追捕使の害を遁れ、陸奥の方へ落ち下らんと便宜をうかゞへども、海陸の通路を塞がれ、心ならず文治三年まで都にとゞまり、北國の關々も義經の改め怠り、血氣の大將今まで何國にかあらん、對島守が平氏を高麗に避けしに習ひ、疾くに蝦夷外國へも渡りつらんと、思ひがけ無き時節、越前越後を經て、巧に關を越え、奧州にいたり、再び秀衡を頼み、名を義行と替へて、當初は鎌倉にも知られざりしが、秀衡歿後に此事かくれなく、泰衡等心變じて、遂

閫外の權―將軍の權

在判―判官として在京すといふ事か、若くは在番の誤にも有るべし

磐石―盤石の誤

る世を、同姓より亂らんとせし故、平氏を收めしときの手際に相違して、行衞を知らずなり果て、終を邊鄙に取る。今こゝに却て兄を訴へ出づるはいかに」義經申して云ふ、「あはれ御前、某が告ぐる處一々聽き分けて給はるべし。某舍兄と異腹といへども、父の骨肉に紛れなし。奥羽に時を待ち、大庭野の陣にて兄に見參してより、兄の代官として、範頼と倶に閫外の權を主どり、義仲を江湖にとりひしぎ、平氏を西海に斬り沈め、家の仇を討ち、國の罪を問ふ。京都に在判して衆心を鎭す。元より業を興すの所爲なれば、手柄とも思はねば、功に誇るべきやうなく、身を容るべき郡國の沙汰を待ちて、太平を樂しみ、倶に武備の助となりて、天下を磐石の安きにおかんと思ひの外、兄の心狹く、惣追捕使に心をや掛けんと、軍をかへす日も、腰越より進ましめず、尚も大江廣元梶原景季等が言を聽きて、土佐正俊を都に登せ、刺客を行はしめんとす。過つて我爲に捉へられしに、某一時の憤怒によつて土佐が首を刎ねたり。是によつて、鎌倉より不日に大軍の登る風聞あれば、是まで味方と思ひし諸國の司も、義經敵と成りしと聞きて、

都を開く—都より落ち行く事
手足の情—手足の如き親みある兄弟の情

者の作りし物語より出でし事なるべし。宗盛の最期見苦敷を見て、平氏の恥を掩はんため、傘張法橋が子なりといひしも是に同じ。あはれ閻羅君此寃屈を伸べて賜るべし」任重云ふ、「安德君の云ふ處一々理に當る。二位尼答ふるに詞なかるべし。我想ふに、外戚清盛の計ひにて、安德君の女體なる事をつゝみかくして、男宮と披露して位に卽けたるもの故に、人手に渡し奉りては女體あらはれ、平氏の罪重く、後世の議論を恐れて、是をかくさん爲、倶に沈め奉るならん。我すでに落著あり。ひかへて待つべし」次に喚ぶ、

告人　のりより　よしつね　在りや　謹んで曰く此に在り

被告　よりとも　ひろもと　在りや　謹んで曰く此に在り

任重云ふ、「義經が告ぐる所理ありといへども、僞親兄の禮をまもらず、王城の判官たる時、兄賴朝に辭せずして、先達て位席にすゝむ。後に賴朝の不興を蒙りし時、都を開くに及ばず、自縛して囚となり、賴朝に逢うて罪を面謝せば、賴朝何ぞ手足の情を想はざるべき。あまつさへ上使土佐正俊を斬つて謀叛人の志を顯し、天意にて一統に歸す

三通の告狀を一齊に喚び出さしめ、原告被告檢次にならびて聽審。判官高聲に原告被告の名を呼ぶ、

告人　安德君　在りや　謹んで曰く此に在り

被告　二位尼　在りや　謹んで曰く此に在り

任重詞を開いて、「二位尼は、幼主に徇つて共に入水せしは忠心といふべきに、此訴へはいかに」安德君訴へて云ふ、「朕平氏に守護せられ、西海に下り、平氏勢盡きて一類海に沒する時、朕外戚は平氏なれども、正しく帝坐を汚せし身なれば、兵の手に渡りたりとも、命はめでたからんに、二位の尼腰に寶劍を帶し、按察の局に朕を抱かしめ、水の底に都あり、供奉しなん、といひて海に入り、わきまへなき朕を、己が死ぬる連累にせしは何事ぞ。あまつさへ後の世の說に、朕が母賢禮門院入內の後、惡人の女なりとうとまれて、父帝の御目かゝらざりしに、兄宗盛と通じて出生したる朕なりといふ心うさよ。我を宗盛の胤とせしは、源氏の朕にせまりて入水せしめたる罪を輕くせん爲、源氏最屓の

告人　南贍部州日本國養和之幼主言仁
被告　同邦同國平氏清盛妻　二位尼

功を賞せず骨肉を傷ふ告事

告人　南贍部州日本國源姓　範頼　義經
被告　同邦同國　源將軍　頼朝
　　　　　　　　其臣　廣元

功臣を忌みて家を令㆓斷絶㆒告事

告人　南贍部州日本國畠山氏　重忠
被告　同邦同國　北條　時政
　　　　　　　　其女　政子

任重覽畢つて、呵々として大に笑ひ、「是程の大事如何ぞ極め決せず、果して陰司決斷滯ほるにあらずや。今夜都て判斷して、一々明白ならしめん」と、直日の鬼卒を呼んで、

て、人身を得ざるべし」言ひ罷つて、閻君御座を起つて後殿に入り、任重を喚んで裝束を著けしむ。鬼卒等升堂鼓を打ち起てて、權閻君殿に升ると報ぐる程こそあれ、善惡の諸司、六曹の法吏、判官、小鬼、齊々整々として兩邊に別れ立つ。任重頭に天平冠を戴き、身に蟒衣を穿ち、腰に玉帶を束ね、手に玉簡を執り、閻羅天子の氣象に扮出ちて、昂然として屏風後よりめぐり出でて法座に升る。諸司吏卒參拜已に畢りて、其官吏卒に命じて、既に放告牌を掛けよと呼はる時、任重想ふ樣、死して地府に至る萬國の生靈限り無きに、只限ある六時の管事、倘し判問落著を結ばざる時は、我が無能に落ちて罪を取らん。「いかに判官等、新なる告を放るゝに及ばず。儞等是迄の告狀の內、疑ひ難ずる事あつて決せざるものあらば、寡人判斷して陰司の榜樣に備へん」判官查し上ぐるやう、「南贍部州豐葦原、後鳥羽帝文治建久の比より今に至つて尚決斷を得ざる三通の告狀即ち爰に有り」と案上に呈上す。任重開き看る時、

幼を欺きて令ニ入水一告事

事、恰も仁をすれば富まずとは聖言なるを、儞も人世にて見聞すべし。貧賤の者は子多く、子多ければ家絶えず、數子の中に必ず家を興すものも間あり。富貴の者金銀の光を見せて、物事足り滿つれども、多くは後嗣を缺く事あり。單瓣の花あるものは實多く、千瓣にて花見事なれば、實乏しきにて知るべし。是らは一生の内當座に濟む算用なり。其内に、惡人富貴を得て子孫絶えざる者は、惡報は終に子孫にのこりて苦を受け、其子孫の續くは前世の善緣と知るべし。善人にして貧賤なるは、前生の慳吝にして、福田を種ゑざるゆゑ、來世必ず饑窮の報を見ると知るべし。天の尊きさへ、高きにあれば、見る事久遠にして、應報の遲速あり。況や人間より天道の事を測り知らんや。汝が紛々の議論は、元其方が見識の薄きより出づる事なり」任重云ふ、「閻君、陰司報應爽はずと宣へども、果して然らば、先年よりの案卷をもつて一々我に看せ給ふべし」閻君云ふ、「それまでもなく、上帝の旨あり。此閻羅王位を六個時辰儞に替らしめ、告を放れて決斷せしめ、斷明白ならば、儞來世富貴を得ん。裁判する事あたはざる時は、永く地獄に落ち

空令―空零の略字

執行ふ。儞何程の德能ありて、我位にかはり、何事を更正さんと欲するや」任重云ふ、「儞閻君、天道を奉じて道を行ふと說けども、天道は人を愛するを心とし、善を勸め、惡を懲すを公とす。如今世の中に、善惡を辨へず、慳吝にして、握つて放す事知らぬ輩は、財積んで山のごとく、又施をなし、善事をなす者は、手中空令。刻薄にして、人を害するものは、富貴の位に居り、肆に惡をなし、忠厚にて人を扶持るものは、世を狹く暮して、其願を遂げず。善人惡人に欺瞞かれ、才あるもの無才の者に壓し凌がる。寃あつて訴がたく、屈められて伸ぶる事なし。皆閻君の判斷宜しからざる所、我に陰司の訴へを聽かしめば、此樣の不平の事はあるまじ」閻君笑うて云ふ、「天道報應、遲きと速きと、明なるがごとく暗きが如く、其上定りたる天道自然の權衡ありて、輕重を過る事なし。先慳吝なるものは、眼から火の出る程欲きものも得求めず、胸の焦るほど人に遣り度き物も施す事あたはず、出す事無きゆゑに、入る物積んで山のごとし。善事をなし、施を好むものは、出づる事多ければ、手の中空しけれども、金銀の光りを見せて、自由を得る





本事—得意の技能

欽旨—王命

閻羅王の位に半日替らしめ、陰司の寃枉公事、彼をして判斷せしめ、若し決斷明白なる時は、功を以て罪を恕し、公明ならざるとき、卽罪に行ふ時は、彼が心大いに服すべし」玉帝奏に准ひ、卽金星を陰司に遣し、閻君に命じて任重をとらへ到らしめ、權に王位の坐を借し、只一夜六時をかぎりて、彼に公事を聽き獄を決せしめ、決斷公明ならば、彼來世極富極貴、今生抑鬱の苦に酬い、倘し判問の方なきとき、酆都地獄に墮して、永く人身を得ざらしむべしとの欽旨なり。閻君天旨を畏りて、卽こゝに無常小鬼を遣して、任重を拘へて地府に至らしむ。任重小鬼に牽れておそるゝ色なく、森羅殿前に到る時、小鬼跪づけと喝す。任重問ふ、「上面に坐するは何人にて我に跪けといふ」左右の者曰く、「是すなはち閻羅天子なり」任重大に喜び叫つていふ、「我閻王に對面して、胸の中の憤を吐かんと思ふ事久し。大王、儞位尊く、左右の傍判官多く、千牛頭萬馬頭あり。我は單身にて孑然ありさま、王、威勢を以て壓す事をやめ、平心にて理を論じ、理に勝つ者を强しとせん」閻君云ふ、「寡人忝く陰司の主となり、凡の事皆天道に依つて

彼者凡識廣からず―凡識にして知識廣からずとなり

十殿の閻君―十王經に釋迦阿彌陀以下十王の稱あり、閻魔王は其一なり、俗誤りて十王すべて閻魔王となす、十殿の閻君といふもの即是なり

重怨詞を咏じて燈下に焚きたるを、夜遊神體察て、天上玉帝に奏せしかば、玉帝大きに怒り給ひ、「世人の爵祿貧富は氣運の然らしむる所、彼が了簡のごとく、賢なるもの上位に居り、不肖なるもの下賤にをり、才あるもの顯榮え、才無きもの黜落、如此の時は天下世々太平、世の中に是非の論なし。彼者凡識廣からず、却て天を尤む。速に罪を問うて妄語の儆とすべし」時に太白金星奏していふ、「紀の任重言葉無禮なりといへども、此人才高くして運蹇く、抑鬱不平によりて此論あり。善に福し淫に禍するはこれ常理なり。彼が言ふ所當らずとせず」玉帝宣ふ、「彼腐儒者、閻羅王と作つて刑罰を更め正さんといへるは狂妄ならずや。閻羅豈凡夫の做すべきの職ならんや。陰司案牘山のごとく、十殿の閻君食を給するに暇あらず。彼者何の本事ありて一々に更正する事を得ん」金星また奏して曰く、「彼口に大言を出す、必ず大才あるべし。下官陰司の事を見るに、果して不平の事無きにあらず。百年來の滯獄、未だ裁判決せざるものありて、地獄中の怨氣立ち升つて天庭を衝く。臣が愚見に依る時は、任重を陰司に到らしめ、權に

浄玻璃—閻魔の廳に在りといふ罪人の罪を照し見る鏡

武藏野や行けども秋のはてぞなきいかなる風の末にふくらん

書しをはりて咏ずる事數反、餘情盡きず、又古體一章を賦す。

蘭草自然香　生於大道傍　腰鎌八九月　共在束薪中

なほ〳〵怒を發しく、燈火を以て此詩歌を焚き、「烟とならば立ち登らぬ事あるまじ。天帝知る事あれば、我に對して言あるべからず。想ふに、帝釋は高きに座して、閻羅王をして刑罰を司どらしむ。閻羅善をすゝめ惡をこらし、因果によつて生を請けしむ。其裁判公正ならざるのいたす所か。我生得鯁直、我もし閻羅となり、地府の決斷を爲さしめば、善惡、理非、淨玻璃をまたずして明白成るべし」と、獨言して、机に倚つて眠る。忽見る、七八個の青面獠牙たる鬼卒、机の下より湧き出でて、任重を睥睨け、「儞いか計の才ありて、天を怨み地を尤む。今儞をとらへて、閻魔王の面前に還去つて、儞に口を開かしむる事なからん」任重頭を擧げて、「儞が閻君公正ならず、仰々しく人の誹毀を怪しむや」衆鬼一齊に前みより、手を扯き脚を扯き、黒索子を以て、任重が頭に套して牽いて行く。是元來任

五斗米に腰を折らねども—晉の陶潜の語
嚢をもるゝ錐尖—趙の平原君其客毛遂に對ひていひし語

るべき祿にも主づかねば、自五斗米に腰を折らねども、嚢をもるゝ錐尖人の目にさへぎり、博識の人なりと近隣の尊びありて、米穀野菜の微物もこゝかしこより贈り來りて、纔に口腹に充つるばかり、虹のごとき吐息はすれども貧窮に屈せず、ひたすら閉ぢ籠りて書を讀み、隣家の餘光に據りて日を送る。原より大見識ありておもふやう、當時北條家の横暴長久の事にあらず。天命改らん事程あるまじと、心を責めて兵策軍籍に眼をさらし、三軍の指揮にも暗からぬ器を成せども、年比五十を過ぎても空しく出身の便を得ず、常に心中怏々として足る事なく、こゝに世を憤りて或夜一詠をなす。其前書に曰く、

天、才ある人を生じて、又是を擧げ用ふる人を生ぜず。日西に傾きて、草むらの影いよ〳〵深くうづもれ、彼の紫錦を著、肥馬に跨る人は、胸に一物なけれども、嚢に餘る寶あり。富めるは雲にのり、貧しきは泥におつ、賢き愚なる、其位を顚倒する、天道私なしといはんや。

北野藤森ー北野の神菅公と藤杜の神舍人親王とをいふ

古今奇談英草紙

第三巻

五　紀任重陰司に至り滞獄を斷くる話

世の中の事、何事も天命に非ざる事なし。命の裡にある事は求めずして自然に至る。命の裡に無きことは精神を勞しても至らずと知るべし。其身天に對して是非を論ずべきに由なし。果して皆世々の宿業因縁なるやと、獨り此事を憤る一個の才子、弘安年中後宇多帝の時に、紀の任重なるものあり。資性聰明にして一目に十行を讀下す。詩文は家の藝なれば、北野藤森の骨髄を極め、國の風なれば、和歌の道にも又疎からず。其玄祖はいづれの朝につかへて、明經の博士にして、讀書を上りし家なれども、世下り家衰へて、雙親には幼にして離れ、任重成長にいたりては、些の家産もなく、才ありながら、しか

入りにし山の一かひといふ詞の序詞、山の峡にかけたり

一場大笑話

源太主手を鼓つて大にわらひ、菴に火をさして、棺と共に灰燼となし、灰の中より養生新論を捜り出したるに少しも焦れず。手づから道龍に授けて別をなし、其身は峯より峯にうつり、猶山深く入りて、去る所を知る人なし。我朝にても其道を修し得たる人は、かゝる奇特の事もありしとなり。

斧の柄よりぞ―　晉の樵夫王質、石室山中にて仙棋を觀るうちに斧柄の朽爛せりといふ故事による

近よるかと思へば消え失せて見えず。こはふしぎと思ひ見かへれば、源太主が形も見えず。是元來源太主が通じ得たる仙家の戲術、分身隱形の法なり。かゝる所へ二萬の道龍訪ひ來りて、「過ぎし比師の言ありて、二月の後迄山へ來る事なかれと警められぬ。二月過ぎぬれば、安否の心元なく、伺候仕りし」と慇懃に演ぶるを見て、深谷大に悔みて、女の淺間しき事を恥ぢて、みづから帶を梁にかけ、卽座に縊れ死しぬ。是ぞ眞個の死にして、傷ましくぞ見えける。嘉六太も是を見て、山下をさして逃げ去りぬ。後にのこりし道龍は、あきれ果てて立つたる向ふに、源太主形をあらはし、深谷が死せしを見てすこしもなげかず、屍を解きおろし、我出でたる棺に收め入れ、家の中央に置きて、口に隨つて咏をなす。

兼言も斧の柄よりぞ朽ち盡きぬ入りにし山の甲斐ぞありける

又一頌を作つて曰く、

儞死我必埋　我死儞必嫁　我若眞個死

よみぢがへり—蘇生

二人は見えず。かしこくも隱れたりと心落ちつき、源太主にむかひ、「わらははは御身の息絕えしより、日と夜と忘るゝ事なく、今棺中に物の音するを聞きとゞめて、古より言ひ傳へしよみぢがへりにや、ことに道を得たる主なれば、其事有るまじきにもあらずと、急ぎ棺を開きしに、果して生きかへり給ひぬ。此悅び何にたとへん」源太主、「よくも心づきたるかな。去りながら我棺を何故下家に移したるや」女房口に隨つて云ふ、「今日しも此一間を拂はん爲、かりに出したるなり」「我死して十日に滿たず。何事ありて、色よき小袖を著て、化粧のあらたなるは何故ぞ」女房云ふ、「先刻より棺中響あるを聽きて、凶服を去つて吉兆を招くなり」「然らば此寢間に一雙の枕ありて、杯盤の狼藉なるはいかん」深谷こゝに至つて答ふるに詞なし。源太主問ひきはめず、傍なる熱酒を取つて飮みつくし、「此酒人の腦髓に和して飮めば心痛を除くべきに、飮むべき人の見えぬはいづくへか行きけん」といふ。深谷胸に釘打つごとく、羞慙面に滿ち言葉出でず。源太主、「それがし道龍主從を呼び出して見すべし」と外のかたを招けば、道龍主從二人走り來りぬ。





化して—消して の誤

か」といふ。九郎云ふ、「四十九日の内の死人は、用ひれば功ある事もあるよし聞き置きぬ」といふ。深谷云ふ、「亡夫死して未だ日あらず。此の腦髓はいかん」といふ。九郎、「夫こそ某がよからんとも申し難し」と憚る體、深谷思ふに、萬一道龍我心を引き見ん爲の作病にや、左あらばいよく我心中の誠をあらはさではあるべからずと、「是こそ容易の事かな。婦人身を以て夫につかふ。此身尙惜しからず、なんぞややがて朽ちぬべき骨を惜しまん。此隙に熱酒を用意せよ」と起きあがり、柴を砍る板斧を取り出し、右に斧を提げ、左に松を燈して、下家に跑り行き、棺の蓋を只一打に打破り、蓋を開くや否や、此屍欠伸してずつと立ち上る。深谷肝を化してあつと飛びのき、妖怪の著きしにやと、よくく見れば、面色生けるにかはらず。さすがの女房身も戰はれ、思はず斧を取り落しぬ。源太主寬々と棺を越え出でて、「其松にて道を照せよ」と、女房を先に立て、家の内へ步み來る。深谷遍身汗になりて、家內に道龍が病發りて倒れ居ればいかゞすべき、よしく、事言ひ開き難き時は、何方へも遁れ去らんと、心ならず一間に入れば、

府上―原本しゐきどころと傍訓せり

て見せなん」と、上の小袖を脱ぎ去れば、下に色よき紅梅の絹をかさぬ。用意の酒肴を排べ、吉酒を酌みかはし、「去るべきえにしにやあらん、よきころの夫婦なり」と、一人言しつゝ臥具を敷きまうけ、對の枕に寄らんと立ち起る時、道龍俄に眉をしわめ、一足も動かれず、其座に倒れ、兩手にて胸を摩りて、「心痛堪へがたし」と叫ぶ。深谷驚き抱きかゝへ、いかにと問へど言葉いでず、口より涎沫を流し、面土色のごとく、奄々として絕えんとす。深谷九郎を呼んで是を問へば、九郎大に周章して、「こは何とせん。主人平生此の病あり、一二年に一度は必ず發す。藥の治すべきにあらず。只一品の祕藥ありて、是を用ふれば立所に治す。宿所にはあるべけれども、其藏所知れず。取り來る隙には命も絕えなん」と、男泣になげく。「夫はいかなる祕藥ぞ」と問へば、「此物至つて得がたし。生ける人の腦髓を取つて、熱酒にて是を飲ましむ。常に國守の府上に便りて、死罪人の腦髓を得て、是を治し來りぬ。今日こそ此持病の、命を取るべき時節なり」となげく。深谷云ふ、「生ける人の腦髓こそ得がたくとも、死せる人の腦髓は用に立つまじき

我夫婦となりし始、互ひに相愛しての事にあらず、かれは家業を嫌ふ大浪子の世事しらず、足下にも養生の道を授かり給へども、かれが身さへ色慾をつゝしまず、早く死にたれば、是印ある道にもあらず。又近頃山下にて、婦人の墓を祭れるに遇うて、此婦を誑かし、いかなる事をやなしけん、約束のかたみとも爲すべきとて、取りかへりし桃の樹、わらは打ち折つて捨てたり。如此なれば、すこしも心の殘る亡夫にあらず。又わらはは程ある越後國に兄はあれども、雙親はをとゝせ世を早うしぬ。餘國へ嫁する事は我が望まざる事なりしを、親の命なれば、やむことを得ずこゝに送られ來れり。我身の上、今更何の障をなす人あらん。君だに惡しからず思ひ給はゞ、九郎に言ひ送りし事のよきはからひこそほしけれ。さあらば遺りたる筆の跡までも、おのづから御身につたはるべき物なり。今宵則吉日なり。約束の酒を酌まん」といふ。道龍も心の動きしにや、「左あらば此うへは子細あらじ。いかにも御心に任せんなれども、いますこし日數の移る迄待ち給へ。葬家の服を婚儀にも用ひがたし。いまはし」といへば、深谷、「さらば色を直し

座しためず―居堪らぬなり

ことなう待ちわびて―存外に待ちしとなり

顏にたかるゝ火もあつからで―事急にして恥づるに暇なきなり

嘉六太を呼びて、手づから此棺を舁きて下家におろし、居間を拂はせ、我身も下に色よき小袖を著て、酒肴を調へて相待つ。其日も日中に至る。人待つ心のやるかたなく、嘉六太を催しにつかはしけれども、是さへやう〳〵日暮に九郎諸共歸り來り、「道龍は、山へ參るとて出でぬれども、道すがらの事辨じてまゐらるべきよしに侍る」といふ。深谷は待ちわびる上にも、心にかゝる今宵の納帛はいかゞなりたるやと、是も心の落ちつかず、一所に座しためず、幾度か門に出で、窓にもどり、思ひ餘りて身のかこたれ、思はずも涙落ちて、懶げに燈を點ずる比、からうじて道龍入り來りぬ。深谷踏所を忘れて一間に請じ入れ、「ことなう待ちわびて、けふしも日の長かりし」といふ。道龍唯「道に隙どりて」と計、外の言葉も出さず。やゝあつて、「けふ召しよせられしは何の事あるや」と問ふ。深谷何といひ出すべきとも覺えねども、今宵の事をさしとめて、世にせはしき戀路なれば、顏にたかるゝ火もあつからで、「此ごろ召しつかひの中言に御こたへのほど、理ありて覺え侍れど、其事悉くさはりなし。亡人の棺はすでに下家にうつし出したり。

棺いまだ家内に在りて、ことに間所なき家なれば、棺の邊りにて此體の事いふべきにあらず。二ッには源太主存生類なくむつまじくて、ことさら源太主は器量あり、道ある君子なり。はるかに劣りたる我なれば、後かならず見落さるゝ事ありなん。三ッには後室の心には角思ひ給へども、いまだ御故郷の兄親などのいませば、此人々の心もはかり難ければ、後にうけがはれざる時は何とせん。ことに此ごろにいたりては、御方の若き獨身を見れば、心のうごくこともはかりがたし。近くにつまを迎ゆるまでは、山へは行かじ、とかたく申して、今宵しるしを送るよしなり」と、首を投げてかたる。深谷いよいよ心せまり、「いかに九郎、今申しつる三ッの事は、一ッも心にかゝらざる事どもなり。しかれども、左程に事急になりてはいかゞすべき」と、眼の内うるみて見ゆるに、九郎云ふ、「事急なれば、とかくして今日の所延引すべき爲なれば、葬事につきて急にはからひを借り度き事ありと主人を招きよせ、酒などすゝめて、後室口づから餘儀なく宣はゞ、心の傾むかざる事あらんや」と聞いて、實にもと、九郎に言傳して、道龍を請じやり、

錦木の千束一度につもりて—思ひかねけふ立てそむる錦木のちづかも待たであふよしもがな（詞花集）古奥州の俗に戀人の門に染木を千束まで運び立てゝ心をあらはす習あり、それを錦木の千束といふ、茲は綺談の一時に調ひたるをいへり

あさて—明後日

は、心ざまも知りて誠ある人なれば、何とぞ行すゑまでも頼み度き所存なり。儞此心をつたへて呉れなんや」と頼みこしらゆれば、九郎鼓舌して、「世は思ふに任せぬ物かな。御身獨身となり給ふ事の、今十日計もおそかりしぞかし。一日二日以前に、隣郷の人の申しかたらひて、心にいりたる事のありしにや、錦木の千束一度につもりて、あさてこそ呼びむかへんと、あすなん幣物を送るとて、某も明日早く歸りむかふべきよしに申せしなり」と聞いて、深谷心驚き、失ふ所あるがごとく、しばし言葉も出でざりしが、「よし左あるとも、いまだ呼びむかへざるうちなり。ことにわらはに心ありしと聞けば、今宵立歸りて、いそぎ此事を告げてくれよ。もし事調ひなば、重く引出物せん」といふ。九郎首を傾けて、實にも此事調ひなば、我も身の上悪しからじと、粥の熟するを待たず立歸りぬ。深谷も臥所に入りながら、其夜は目も合ひかね、明くれば疾くより起きて手洗ふ所へ、九郎が來るを見て、いかにと問へば、此僕眉をしわめて、「事調ひがたし」といふ。「何事の故にや」と問へば、九郎云ふ、「主人の言葉尤理なり。一つには師匠の

せば、一世の人の何とかいふらん」と、打わらひて立歸りぬ。山中といひ、ことさら葬家の打潜まりたる折から、一人にても人の多かれと、道龍が僕九郎をのこし置きぬ。此夜深谷嘉六太に命じて粥を煮せしめ、其間九郎を呼んで、酒など賜はりて彼が心をとり、「儞が主人、いかなれば是迄獨身にて住み給ふやらん」と問へば、九郎打わらひ、「此村彼郷とり〴〵に言ひよる人あれども、美目えらみ深くて調ひがたし」といふ。「扨はいかなる女ぞ心に入るべき」と問ふ。九郎、「申すも慮なき申しごとに侍れども、御すがたに似たる人柄をこそのぞみ申されぬと覺え候なり。これいかにとならば、そも〳〵某主人に從ひ、御住家へ參り初めてより、常に宿にかへれば、けふしも深谷の親しき詞ありし、きのふはいかにや、言葉の數なかりつる、など、心ありげに申し出で侍れば、さてこそ御すがたに似たる人あらば、事調ひなんと覺ゆるなり」とかたる。深谷便よしと、膝をすりよせて聲を低うし、「其方も久しく見なれし事なればかたるなり。われもいまかく若き獨身となりぬれば、亡夫の三年の忌服過ぎなば、再び人に見ゆる身なり。儞が主人

南華經　莊子、天寶元年詔して莊子に南華眞人の號を賜り、其書を南華眞經となす

深谷も、道龍が此頃心を用ひて萬とりまかなふを、便りなき折柄、うれしと思ふより、常はたゞ能く利口人なりとのみ思ひし人も、心の趣ありて見る時は、物ごし動作迄に心の愛でて、彼人もいまだ定まれる妻なし、我もかく主なき身となりぬれば、せめて二年三年も過ぎなば、此人をこそ二度の夫とも見まほしく、あはれ、結ぶの神の、心して御はからひこそほしけれと、下心には思ひける。かくて一七日早明日こそと思ふなる日、道龍來りて、玄通先生は近來道術の達人なり、書き殘されし跡もあらば、授かり度よしを望めば、深谷何をがなと書櫃の中を搜りて、源太主が著す所の養生新論并に南華經の譯解兩部の書を與へければ、道龍押戴きて、「是しかも亡師の自書する所、筆の澤尚新たなり。師は父にもまさりて、一丈を隔てゝ影を踏むといへば、今より我母ともかしづき奉らん。かならず御心を隔て給ふな」と、誠ある詞に、深谷首をふりて、「わらはいまだ五々の齡にして、君がごとき年長じたる、似氣なき子を持ちて何とせん。妹と見られなば、さも有るべし」といへば、「それがしいまだ妻女をも設けず。わかき御身を妹に具

「我病もいまはたのもしげなく、末期たゞ近きにあり。過ぎし頃の桃の木、儞に植ゑて養はしめば、此ほどは能長じなん」といふ。深谷涙ながらにいふ、「丈夫心を迷はし給ふな。わらはも略女の道を知る。一を守つて二心なし。左程疑ひ給はゞ、今目下に死して赤心をあらはさん」と、潔き詞を聞きて、源太主うれしげに打笑みて、「左あらば我死すとも快く目を閉づべし。我死しなば、葬をはりて後我舊里へも告げ知らすべし。形衣服此儘にて棺に收め、死して十日の間は、必棺を家にとゞめて香を供じ、十日の後、葬所は此山下風水よき所に葬るべし」と、云ひ終つて息絶えたり。深谷屍に依添うて、絶ゆる計にかなしみ、あるにかひなく、老いうつけし僕嘉六太に命じて棺を買はしむ。二萬道龍は師弟の分あればとて、一入別れをしみ、遺命に從ひて、臨終の體其まゝに棺に入れ、居間の中央に直し置き、道號を玄通先生と謚り、靈位香燭を設けたり。深谷は日夜に泣きくらして人心地もなく、ふかきなげきの色外にあらはれて、見る目も當てかねたり。道龍も毎日來りて靈位を拜し、墓地の用意葬家の辨ずべき事など沙汰しける。

二君に仕へずー云云ー忠臣不仕二君、烈女不更二夫（史記田單傳）

山中暦日なしー偶來松樹下、高枕石頭眠、山中無暦日、寒盡不知年（唐詩）

介保ー介抱の假

り。わづか一人を擧けて例とするの道理あらんや」源太主云ふ、「我今にても世を去らば、儞未だ其花のごときすがたにて、よも三年を獨りは守らじ」女房云ふ、「二君に仕へず、二夫に見えぬは皆人の知る所、不幸にして身の上に輪り來らば、身を終るまで寡を守ることかたからず」源太主頭を振つて肯はず。女房云ふ、「女にこそ志を守るものはあるらめ。主のごとく、一人死すれば一人を娶り、一人を出しては一人を納るゝ、あきらめよき所爲にはあらず。ながらへ果てぬべき世ならぬに、人のこと草におちて、名を後身に汚さんや」と、顏を損じて憤る。源太主打點頭、「左樣に思はずしては源太主が配ならず」と云つて其言やみぬ。是より山中暦日なし、安閑無事に日を暮す。されば美色は命根を斬る斧なるとかや、源太主色慾に心長じて養生の術破れ、重き病を得ぬ。日比源太主に從つて養生の道を問ひ授かりし、二萬の道龍といへる醫師を呼びて、治療を施すといへども、日々に重くなり行けば、女房深く憂へて、晝夜枕を離れず、心を用ひて介保しけるに、たゞ惡しき方にのみなりもて行けば、一月計の後、源太主重き枕を擧げて、

頃多く爲る事ぞかし」と、教へに心づきて、女大に悅び、是に上ある易き事やあると、桃の木を拔きすて、源太主に一禮して立歸りぬ。源太主も此女の性急なるに興さめて、拔き捨てたる桃の木を携へて、山中の觀宅にかへり、端座しても猶嗟歎してやまず。女房深谷傍に在りて、「道すがら何事のありて、かく世を觀じたる有樣の見え給ふ」と問へば、源太主彼婦人の事をかたり聞かせ、此桃卽其物なりと聞きて女房眉を皺め、「扨も扨も世の中には薄情なる者もあるかな。婦人の風下にも立つべき者にあらず」とさげすむ。源太主口に隨つて、

在すときかくはいひつゝ亡くなれば桃の花さへ遲き世の中

女房これを聞きて、「女は一すぢなるものにて、世上の女一概に左樣の人柄なるにはあらず」源太主又云ふ、

虎の畫をゑがけど骨はゑがかれず面は知れど心しられぬ

女房大に腹を立て、桃の木を二ツに折りて源太主に擲ち、「同じ人間にても曲れる直きあ

うらなく━━心の隔なく

主婦人に向つて、「其實生を何とてかく叮嚀に生育て給へる」と尋ぬれば、此婦人、さすが田舍とて、飾れる詞もなく、「是こそわらはが夫の家にてあり。存生の時、うらなく相なれしかば、いまはに臨みてわらはを捨てかねて、言葉をのこしていふやう、我死して後異人に見ゆるとも、三年を過ぐる迄は待てよかし。實生の桃を家の前に植ゑて、花著きなば何方へも嫁すべしと、呉々言ひのこして、兩月餘り以前に世をさりぬ。自ら思ふに、此桃、陰地に植ゑて、いつしか花を見る事あらん。親兄などの日々に再緣の事をせまりいふにやるかたなく、此桃の速に長ぜん事を祈るなり」とかたれば、源太主笑を含みて想ふやう、世上の婦人多くはかくのごとし、詞にあらはるゝと顯はれぬとの違あるのみならん、彼むつまじく相なれてさへ然り。もし反目のものはいかなる心にやあるらんと、「いかにや、婦人のごとく性急にしては、亡夫の遺命恐らくは守りがたからん。亡夫の詞そむかじと思ひつゝも、左程待ちぐるしきならば、寺院僧家に托りて、三年に當る追悼を、期に先だつて執行ひ、それをかぎりとして事終るべし。都の方にては、此

印の木―家の上に植うる木

て、生得怜悧なるより、源太主に事へて自睦敷、夫婦共にこゝに移り彼に行き、所定めず、風水よき所は、山深きをいとはず住居す。然も夫婦一僕只三人の外は人なしといへども、いかなる故の有るにや、此源太主の居所へは熊狼も近よらず、盗賊もうかゞはず、道を得たる異人なりと傳聞きて、相見せんとて來る人多ければ、やがて外の地に居を移して人に交らず。一年金花山の奥に移り、桑門の住荒したる古庵に住みけるが、一日里へ出てかへるさ、山下を行く道の傍一所の墓地あり。化人場頭樹木自ら木立も殺氣くて、數々の印の石、多くは苔に埋もれたるまゝに、拂ふ人ありとも見えぬあり。源太主歎じて云ふ、「老いたる若き、愛せる惡める、賢き愚なるを分たず、爰におもむくもの幾人ぞや。人は塚となれども、塚復人を生ぜず」と、獨り言して歩み行く。こゝに新たに築ける碑石の傍に、素姓賤しからざる婦人ありて、塚の傍に植ゑたる桃の實生なるに、根に培ひ水を注ぎ、心をもちふる有樣、印の木とも做すべき爲かと、殊勝に覺えてよく見れば、結句碑石の前には手向たる水もなく、花瓶に供ぜる草もなし。源太

に後れては鬼妻ともいふは、亡者の妻といふ心なり。しかれば此所を思ひて、夫も一入憐むべき事なり。しかれども、女は生活の業を知らねば、或は親の意に從ひ、又は子の不便さに引かれて、心の外に兩夫に見ゆるもあり。又天性の淫婦あり、丈夫の在りても、偸漢の惡事、其ほか如何敷ことどもあれども、夫は閨中の愛に溺れ、枕上の言に迷うてさとらず、婦の言によりて、不孝とも不忠ともなるもの、高明の人にも多くこれあれども、達者豈しからんや。後奈良院天文年中、羽州象潟に黒川源太主といふ人あり。若き時、秋風道人と號する人に從ひて長生の術を學び、常の產あるまゝに、家事を家人に托して、其身は世上の事にあづからず。近國の名山景勝の地に周遊して心氣を長養し、百事緩悠にして物に愛惜なし。其氣象高きが故に、けつく世上のならはしに漏るゝ事はなさず、女色をも親まず遠ざけず、人のすゝめたれば妻をまうけしが、婦の緣薄くして原の妻は病死し、次の妻は過ありて離異したり。近頃娶りたる妻女は名を深谷と呼びて、越後國岩舟何某が女にて、源太主を德ある者とて妻せしなり。貌先の二人にまさり

不興―勘當
面俯―恥辱
相義して合ひ―相議してなり

四　黒川源太主山に入って道を得たる話

父子兄弟は一木の連枝なれば、不和ありて是を絶てども、父子兄弟といふ名は削られず、枝を折り梢を伐りはなしても、是其木の枝なりと、きりたる木口にあらはれ、親しみを切りたる親に恥辱あれば、子も是を恥とし、不興せし子なれども、行衛見苦しきは親の面俯なり。夫婦の間は是にかはり、天合にあらず義合にて、他人と他人がわたくしに約束して、寄り集りしものなれば、義理と信をのけては、何も無きものなり。相義して合ひ又相義して離るゝ事あり。離るゝ時は他人よりも疎し。諺に云ふ、

夫妻本是同林鳥　巴到天明各自飛

をつと妻は同じ林にやどる鳥明くればおのがさまぐ\に飛ぶ

是を和げて聞く時は、

此故に義理にも親しうせねばならぬものにて、ことに女は兩夫に見えぬ貞教ありて、夫

程なる—既なるの誤

桑間濮上—昔衛の君が濮水桑林のほとりにて聞きし琴の音にて亡國の淫聲なり

かるべし。琴の廢るべきも時運の命なるかな」翁始終を聞きて大に感心し、「家兒知己を得て未だ肝膽を吐かずして違ふ。惜しむべし、悲しむべし。さもあらばあれ、一先我家へ來り給へ。我家は上山中村の梢にあり」兼秋云ふ、「それがし所存あれば、一度都にかへり、萬とりしたゝめ、程なく罷り下り、時陰になりかはり、雙親の終りを見とゞけ奉らん。其故は主上御位に復し給ひてより、假初の御遊に琵琶箏など彈じさせ給ふにも、燕なる曲のみ造らんと望ませ給ひて、ことしげき世を治め給ふべき君にあらず。是古へより傳へいふ、桑間濮上の音起りて國亡びしといふも此心なり。久しからずして都も又一變すべし。我も二君に仕へんよりは、早く身を潛めて、天年を樂しむべき所存なり」と、翁に辭して、其まゝ都にかへり登りしが、彼是につけて日を送る內、果して兵革起りしかば、さればこそと讃岐に下り、山中村にいたり、老人夫婦につかへ、時陰にかはりて其終りを送り、兼秋も我子供は百姓となし、其身は入道して世を見かぎり、四國は南朝心服の國なれば、道の通路自由にて、折節は吉野の皇居へも參りけるとなり。





筝の組—琴の組唄、短き唄を幾つも組み合せて一曲としたれば組といふなり

たよりも知らぬ—山中に—をちこちのたつきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな(古今集)

思ふにあらずんば、此曲衰ふるもむべなり。今弾ぜしは、それがし心にうかみて手に應ずる一曲、大和ことのはに演べて、大内家の筝の組にも略似たり。其詞を聽き給へ」とて、

「此秋を、むかしになして人もがな。はかりしられぬ雲がくれ、新つかのかげ音もなし。

たよりも知らぬ此山中に、我ふりすてゝ一聲ばかり、それかとぞ聞くよぶことり。

是時陰を弔ふ詞なり」と、かたりをはりて、秉秋帯劍を抜き出し、琴を二つに割り斷れば、玉軫飛んで金徽零亂たり。翁驚き、「これはいかなる動作ぞや」といぶかる。秉秋嘆じて云ふ、「琴の曲久しく廢れて、漢土は元より、我朝にも知る人なく、其傳僅にそれがしに残れり。某是を棄つる時は、此曲永く絶えて、後の世に琴の正音なる事をしる人も有るまじ。時陰已に空くなつて、其音を聽き知る人なければ、我再び操りても其詮な

來り給へる小路の傍、右の方に一丘の新土あるは即ち時陰が冢なり。今日百日の忌なれば、老夫此香餅を持ちて墳前に到る所に、思はず足下に逢ひ奉りぬ」象秋云ふ、「しからばそれがしも倶に行くべし」と、老人にかはりて、布づつみを從者にとり持たせ、原來りし路に來れば、果して新丘あり。象秋衣冠を取り出して著し、花を供じて墳前に拜をなし、「我弟、聰明なれば死後にも神をとゞむべし。吾心中を察せよ」と、聲を放ちて再び泣き沈みたり。此山前山後の百姓山賤ども、見なれぬ衣冠の人横尾が丘に參詣せしと聽きて、遠近集りて是を見る。象秋備ふべき供物もなければ、行李より琴を把り出し、墳前に座して膝に置き、涙とともに彈じければ、此百姓ども、琴韻の鏗鏘たるを聞きて、興趣なきものと、掌を鼓つて大に笑ひ去りぬ。象秋彈じをはり、「彼ら何をか笑ひしや」と問へば、老翁云ふ、「邊鄙の人音律をしらず、琴を見て樂しみの具なりと思ふが故に、雅樂の清音を聞きて耳に入らず、興なきものに思ひて笑ひ散りたるなり」象秋云ふ、「今の曲さへかくのごとし。誠の琴の祕曲は猶さら馬耳風ならん。賤山がつにても興ありと

馬耳風—馬耳東風

大に哭し、涙ながらいふやう、「時陰は我忰にて、我家原伶倫なり。去年八月十五夜、採樵に出でて遲くかへり、都がたの樂匠とやらん、上の使にまかりて還るに行逢ひ、めづらしき琴の曲を聽きて、互ひに道をかたり、意氣相投じて、兄弟の約をなせしと、其人の贈られし金子にて、衣を買うて翁が老體を養はしめ、彼人にすゝめられて、再び家職を興さんと心をはげまし、朝に柴を打ちて重きを負ひ夜は音律の事に工夫をこらし、此故に心力耗廢して怯疾に染み、數月以前に身まかりき」兼秋是を聽くより涙泉のごとく、大叫一聲して地に倒れたり。老人、「扨は家兒の物がたりせし豐原將監殿にてはなきか」といへば、從者ども、「然り」と答ふ。兼秋從者に扶け起されて、人心地はつきたれど、ひたすら胸を打つてやまず、吐息して云ふ、「昨夜約を違へしかと思へば、すでに泉下の人となりしか。時陰と我と一體なれば、某ある上は時陰存生すと思ひ給へ。さもあれ、何くへか葬り給へる」老人云ふ、「我兒臨終の時、死後必ず屏風浦の崖の邊に葬り給へ、我豐原兼秋に其所に會せんといふ約あり、其言葉を違へじと思ふなり、と遺言にまかせ足下の

人、髮鬚白きが、左に藤の杖を舁け、右に布包袱を携へ、徐に步み來る。兼秋近くよりて、「山中村へはいづれの方へ行くやらん」と問ふ。老人云ふ、「東も西も山中村へ行く路なり。左へ行けば上山中村、右へ行けば下山中村なり。此里、衢一條にて、十町ばかり兩傍に人家連れり。旅人は山道より來り給へば、此衢の正中へ出で給へり。是よりは、右へも五町左へも五町。旅人の尋ね給ふは上の村か下の村か」と問はれて、兼秋默然として想ふに、我弟聰明の人、いかんぞ細かに居所をいはざると、案じ貌なれば、老人云ふ、「一定夫は居所をいふ人、上下を分たずに、只山中村と計り申せしなるべし。此村中に貳百家の莊戶有り。大都皆世を避けたる隱遁の輩なり。老夫此所に住む事年あり、村中に知らざる人なし。御尋の人の姓名はいかなるや」といふ。兼秋云ふ、「我が尋ぬる人は橫尾時陰といへり。名をつゝみ、世を避けたる人なれば、村中にては何と呼ぶやらん」此老人時陰の二字を聽きて、雙眼より淚をはら〳〵とこぼして、「旅人、別の所ならば行き給へ。時陰を尋ね給はゞ行き給ふな」といふ。「こは何故」と問へば、老人聲を放ちて

軫—琴の裏にて絃を引締むる所、琵琶には轉手といひ、三絃には糸巻といふ

事に輕重あれば—服忌の信約よりも重きをいふ

て待つべしといひしが、其影も見えぬは、約を忘れたるにては無きか、實にや此所に泊る船外にも多く有るべし、我今日の船去年の船に異なり、我弟如何ぞ分たん、去年は我琴を彈じて彼を得たり、今宵も琴を彈じてこゝに來れる事を知らすべしと、絃を調へ、軫を轉して、纔に搔き合せけるに、商の絃哀怨の聲あり。兪秋手を停めて操らず、商絃哀聲深切なるは、吾弟必らず憂に逢いて引き籠りあるなるべし、去歳年高き父母ありといふ、父を亡ふにあらずんば母に後るゝか、彼至つて孝子なり、事に輕重あれば、服忌の近きが故に我約に違ふならん、天明けば彼が家に行きて尋ぬべしと、琴を收めて寢ねたれども、眼も合ひかねて、明くるや遲しと船より上り、船にもいとま遣し、行李とり持たせ、五六輩の從者を引き連れて、香燭料に送らん爲、一枚の金を封じて、其外都の土産取り添へ持たせ、樵徑を傳うて、賤のをしへにつれて一里計り行きしが、里に入つて一條の大路に出でたり。山中村へ行くには、東へや行く西へや行く、所の人の來れかし、問ひ明らめて行くべしと、路傍の石に踞けて、少く憩みける間、左の方の路より一人の老

人と言ふべからず一堅く誓ふ詞

便あしゝ。今其期を聞かせ給へ」といふ。彙秋指を屈して、「昨夜中秋十五夜、天明たれば十六日、我來るはかならず此中秋雨夜の内に卽ち此所に來るべし。若し時を違へなば、人と言ふべからず」と堅く約して、互に淚を灑ぎ、別るゝに臨んで、彙秋一封の金子を出して時陰に與へ、「足下の兩親は某が爲にも親なり。是を以て供養の資とす、輕きを嫌ふ事なかれ」時陰辭せずして是を受け、岸に登りてかへり去る。彙秋が船も、順風に任せて大物に著岸して、是より送りの船を還し、都にかへり登りぬれば、天氣うるはしく、不時の祿など賜はりて休息しけり。光陰矢の如く、年人を待たず、春去り夏來り、中秋の節ちかくなれば、彙秋は時陰がことを忘れず、公に暫のいとま申し請けて、津國迄出でけるが、四國の何某が送り船の還るを賴みて便船し、順風に滯なく、八月十五日に彼の屛風浦に著きぬ。水手に告げて、去年時陰に逢ひし所かと覺しき所に舟をつけて、明けなば岸にのぼるべしと、こゝに船泊りしけるが、月明白晝のごとくなれば、想ふ去歲智音こゝに逢ひし時、雨止んで月明なり、今年重ねて來りて又良夜、他岸の邊に

知音—前に出せる伯牙鍾子期の故事に出づ

て、兄と敬ひぬ。後世に、懇意なるものを知音といふも此理なるべし。扨時陰の居所はと尋ねれば、時陰いふ、「こゝより遠からず、此所多度の郡の内なり。それがし住所はここを去ること一里ばかり、鵜足の郡に屬して山中村といふ。賢兄公のことにあらずんば草廬に案内申して、我雙親へも逢はせ奉りなん」といふ。兼秋何をがなと從者に命じて、酒を酌みて歡待する内、東方白くなりて、水手都て起き出で篷縄を調ふ。時陰も暇を乞ふ。兼秋更に一盃を進て云ふ、「賢弟に相見ゆる事、恨むらくは甚だ遲くして、別るゝ事何ぞ甚だ早きや。たがひの胸中語り盡すべきにいとまなし。此船に乘りながら、高松までも來り給へ。人を以て送りかへしなん」といふ。時蔭云ふ、「某もさ思へども、二親年老いて、今宵道に滯しさへ待ち侘びなんと、罪ありて覺ゆれば其事叶はず」といふ。「然らば跡より都へ來りたまへ」「其儀も親のゆるしの程はかり難ければ」といふ。兼秋云ふ、「賢弟又孝子なり。然らば明年それがし來つて賢弟を尋ぬべし」時陰云ふ、「賢兄明歳何の時來り給ふ。我道に出でて迎へ奉るべし。道の通路塞りぬれば、書信の往來も

たとへ其家にても—たとへ音楽の家に生れても

ひにも、鎌のつかを笛籟く様にして手ざしを教へしかば、我も心を用ひて授かり、親の覺えたる程は殘る所なく覺え侍る。琴の傳は今の世に絶えたれば、識人なしと思ひたるに、今宵珍らしき音色に耳をとめて聞きぬれば、我は琴を知らねども、管の譜に合せて曲を聽きとりたり」と語るを聞きて、兼秋、「さればこそ聞き及びたる堪能の家にておはすれ。たとへ其家にても、たゞ絲竹の程、拍子をよく覺えたるばかりにて、君がごとくに音を知るものは未だ我朝に聞き及ばず。我も琴を彈ずれども、君がごとくに音を聞とる事は及ばず。是天性の聰明にして、傳への爲すべきにあらず」時陰云ふ、「琴は古代の音なるゆゑに、其音に頌歌ありて[illegible]くべし。今の絲竹にては、譜なきものの聽きとらるべきにあらず。全體皆興ある音なれば、存亡吉凶いかんぞ音に聽きとるべき」兼秋云ふ、「足下のごとく音を識る人ありてこそ、我琴の甲斐もあるべし。此以後結んで兄弟となり、足下の傳はられし事も聞き、我が傳へし故實も語りて、再び足下の家をも興すべきはかりごとをなさん」と、互に心を傾けて、時陰は二十六歳にて、兼秋一歳長じたればと

琴、志在高山、鍾子期曰善哉峩々乎若泰山、志在流水、鍾子期曰善哉洋々兮如江河、伯牙所思鍾子期必得之(列子)鍾子朝死、伯牙破琴絶弦、終身不復鼓琴(呂氏春秋)

琴音を聞きて是を知るや否や」樵夫云ふ、「大人試に撫弄し給へ。小生隨分聽取るべし。若し言ひ當てずともとがめ給ふな」といふ。兼秋斷えたる絃を整へ、沈思半晌、其意を高山にあらしめ、琴を撫する事一弄、樵夫賛めて云ふ、「琴聲美なる哉、洋〳〵たり。大人の意高山に在り」兼秋答へず、又神を凝して再び琴を鼓す。其意を海水に在らしむ。樵夫又賛めて云ふ、「美なる哉、湛〳〵たり。志海水に在り」此兩句を言ひ當てられて、兼秋琴を推しのけて、樵夫を上座に直し、禮をなして、「思はざりき、砂中金あり。貌を以て人を論ずべからず。願くは姓名を聞かせ給へ」といふ。樵夫も此時にこそ身を屈めて答へて云ふ、「小生姓は横尾名は時陰、親なるものは、其むかし大和介といつて、代々天王寺に住みて、八幡太郎殿より琵琶の傳を授かりし家にて、時陰は家の通名なり。近年世の中騷々しく、津の國にも住侘びて、三十年以前に此國に下り、所縁にたよりて民間に潛み、淺間しき活業をなせども、此音樂の道は、故實などいみじき事ども覺えて、其事此事などは、樂匠の家にも取り失ひたると申す事多く、我等父子田かりに出でたるやすら

貞敏―藤原氏、仁明文德淸和三朝に仕へ入唐して琵琶の祕曲を傳へし名手なり

唐土にも音を知るもの云々―伯牙善鼓琴、鍾子期善聽、伯牙鼓

夜の數に象る。四絃は四時とす。我朝古代に翫びたること、もろ〳〵の物語に多く見えたり。是も壽永以來平語を彈ぜしより、貞敏が學びし廉承武が傳も衰へたり。唐土魏晉の世に、竹林七賢の內、阮咸といふもの、琵琶、琴の學びがたきものの爲に、其體を變じて四絃とし、十三の柱を加へて、律どころを分ち知らしむ。其以來彌變じて、近比琉球國より渡りし提琴、三絃琴といへるものを見るに、是亦琵琶の變體なり。我國に其傳を知るものなければ、世に行はれず。其音を聞くに、甚だ淸亮にして、其曲の品によりて、淫聲に流るべきものなれども、今の世の雅樂といへるも、隋唐の燕樂にて、酒宴の席、閨の中にても奏せし音なれば、此琴も、後世我朝に弘まりなば、末代に至りては、樂器にもなるべき物なり。其餘、新羅琴、百濟琴の名あれども、悉くかたるに及ばず」と、利口流るゝが如く演べければ、兼秋是を聞きて、想ふに等閑の者にあらず、雅樂の大概を知るものか、恐らくは是紀聞の耳學問なるも知るべからずと、又問ふ、「唐土にも音を知るものは、其彈ずる音を聽きて其人の思念する所を知る。我今思ふ所あらば、備

内の御神樂―内侍所の御神樂、十二月の行事なり

燕樂音―酒宴の興に用ふる俗樂の諧調

るものか。我朝神道の樂舞は別に其傳ありて、伊勢出雲熊野三輪などには、むかしより殘りしと承りぬれども、近比は聞き及び侍らず。上古には、神を降すに皆此和琴を鳴せり。今の世に内の御神樂に合奏す。神人和悅妖邪遠く去る、是和琴の妙所なり。箏のことは秦の蒙恬が造る所、今世に傳はる十三絃の物なり。上の圓きは天の象、下の方あるは地の象、中の空なるは六合の象、十三の柱は十二月に閏月を加へたる象なり。柱の高さ古へは三寸あり、是三才の象、長さ六尺あるは六律の象なり。今樂器に是を合奏す。雄略天皇の朝秦の酒公是を彈ぜしよし、其比はいまだ雅音を離れず。欽明天皇の世に舞樂初めて渡り、推古天皇にいたりて音樂こと〴〵く備はり、隋唐の音に合せたるより、箏も雅音を失して、今の燕樂音に混じたり。近比筑紫大内の家にては、雅樂の曲に模擬して、大和ことの葉の頌歌を添へて作り出されしを、此比は翫ぶ人も見えたり。雅樂には、音のみありて其詞絶えたれば、かく成り行くべき事と思はるゝなり。琵琶のことは、唐土の濫觴、西域より出でたるものにて、形滿月の象にて、長さ一尺五寸、三五

南風の詩―南風之薫兮、可三以解二吾民之慍一兮、南風之時兮、可三以阜二吾民之財一兮（詩經）

萬葉集に―いかにあらむ日の時にかもこゑしらむ人の膝の上わがまくらかむ（琴夢化娘子詠歌）

王一絃を添へ給ふ。其音淸幽哀怨、是を文絃といふ。後に武王一絃を添へ給ふ。其音激烈發揚、是を武絃といふ。合て七絃、宮、商、角、徵、羽、文武なり。後世唐の太宗二絃を加へて九絃とす。我朝へ傳はりしは、唐より以前なる故、七絃の古體なる、是猶尊むべし。此琴を撫するに、香を焚き意を正しうして撫す。美善の所にいたりては、虎狼聞いて吼えず、哀猿聽いて啼かず。堯舜の御世には、五絃の琴を操つて、南風の詩を歌うて天下大に治る。是琴の德ある所なり。又和琴は日本琴といふ。忝くも口の神天磐戸に籠らせ給ひし時、御琴神天香弓六張を用ひ、其弦を鳴して神樂に和せしより起るといへり。其製六絃にして、琴甲反りて上に向ひ、弓狀のごとく、楓の枝をとりて柱とし、牙骨螺鈿の飾を用ひず、膝に安きて彈ずること古風にや、萬葉集に、人の膝の上我枕せんとあり。それがし竊に思ふに、和琴といへるも、唐土の琴のいまだ武絃を加へざる時、我朝の神代に傳來せし雅樂の具と思はる、上古より有り傳はりし故にやまとことといふなるべし。又或は和琴、笛などは、正しく神代の樂舞と共に造り出されし物にて、異國を待ざ

琢する所―攈ぶなり

七十二候―周公の定めたる時制、五日を以て一候となす、七十二候合せて一年となる

八節―立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至

兩儀―陰陽

徽―琴柱

ず」樵夫座にかへりて、「左ある時は微く是を演べん。夫琴の類數種あり。琴箏琵琶和琴を我朝總てことゝ呼ぶ。こはおの轉音にして、ことゝは音なり。引きならせば音あるといふことばなり。足下の學び得給へるは琴のことなり。是唐土伏羲氏の琢する所、梧桐は鳳凰の棲める樹にて、樹中の良材なればとて、一つの木を伐らしめらる。其樹高さ三丈三尺あり、三十三天の數にかなふ。天地人の三才に據つて、是を截つて三段となす。上の一段を叩けば、其聲太清みて、輕きに過ぎたりとて是を廢て、下の一段を叩けば、其聲太濁りて、重きに過ぎて用ひず、中の一段を取つて是を叩けば、其聲清濁相齊く、輕重相兼ねたりとて、是を長流水に浸す事七十二日、是七十二候の數なり。劉りて樂器となす。其長さ三尺六寸一分、周天三百六十一度を取る。前の方濶の八寸あるは八節の數、後の方濶四寸あるは四時を象る。厚の二寸は兩儀を象る。金龍頭、玉女腰、仙人背、龍池、鳳沼、玉軫、金徽の名あり。徽の十三あるは十二月と閏月となり。其はじめは五絃有りて、外には五行の金木水火土、内には五音の宮商角徵羽を按じたり。周の文

穿きて、手に尖擔、腰に板斧あり。船中の下郎どもは、彼が物語の故實ある事を知らねば、彼のもの我主人に見參して、何をか物がたるやらんと、たがひにひそみ笑ふを耳にもかけず、樵夫は徐に簑を脱ぎ、藍布袷の腰のかゝげをおろし、簑、笠、擔、斧を船の端に置きて芒鞋を脱ぎて船艙に入り來る。象秋官卑しといへども、身宣旨の使なり。樵夫に對して禮を施さば、恐らくは官服を汚すべしと思へども、已に船に請ひ下したれば、いかんともすべき樣なく、只手を擧げて會釋す。樵夫すこしも謙讓せず、直ちに平座して、人を何とも思はぬさまに、象秋微し嗔怪を起し、わざと其姓名をも問はず、茶をも與へず、良久しく互に物をもいはざりしが、象秋彼を流目に見やりて、「崖の上にて琴を聽きしは其方にてありしや。爾琴の由來する所を知るや。琴は何人の造る所、是を撫して何の德ありや」と、盤問ふ時、船頭呼はつていふ、「風順になりて月明晝のごとし。船を出すべし」といふを聽きて、樵夫早座を起つて、「大人の御尋を申さば、隙どりて順風の便を誤り給はん」象秋、「はかるに、爾知る事あたはじ、知らば語るべし。船の遲きはいとは

あやしき草の庵より傳はりし事—逢坂山の草庵にて源博雅に琵琶の祕曲を傳へし事をさす

を詩とす。大人の彈じ給ふ琴の音は、今の世に傳はる隋唐の音にあらず、東漢以上の音なり。今宵彈じ給ふは南宮の譜の後詠、博雅四帖の曲なり。之を詞にあらはす時は、

秋月蘆江白　初驚冷露時

寒衣尚未了

郎喚儂底爲」

這の三句にいたりて絃斷れたり。第四句某よく記得え侍る。

兼秋是を聞きて心の中に想ふやう、「誠に此道は、其むかしあやしき草の庵より傳はりし事もありつれども、今の世にては貴人の手に而已もてはやして、村夫野人には疎き物なる上、琴は中にも其傳絕え〳〵にて、我家より外に知るものなし、彼いかゞして聞きとりたるや、或は若外の家にも傳ありて傳へたるや、彼を呼んで盤問ふべしと、聲を擧げて、「崖上の人果して俗子にあらず。崖と船と問答便ならず、此船へ來られよ」といふ。此樵夫辭する氣色なく、木の根を傳ひて船に乗り移る。誠に樵夫と見えて、簑を著、芒鞋

十室の邑―十室之邑必有忠信如丘者焉（論語）

ぎ給ふな。某盗賊刺客の類にあらず」と現れ出づるは、頭に菅笠を戴きたる樵夫なり。船中まづは仔細あらじと靜つて、其樣子を問へば、彼樵夫いふ樣、「某柴を打ちて日を晩し、驟雨に値つて雨具なければ、巖の畔に潜みて在りしが、雨晴れて歸らんとするに、珍敷雅操を聽きて、足を住め聽きとれてありしが、何とて早く終り給ひしや」彙秋大に笑うて、「山中柴を打つの人、我琴を聽き得る事あらんや。儞誠の樵夫にあらじ。察するに盗賊の張本なるべし。早く其所を立ち去るべし。未だ罪なければ、命は助け得さするなり」と、船中少しも心をゆるさず。樵夫崖上より聲を擧げて、「大人の言葉とも覺えぬものかな。十室の邑には必ず忠信あり。門内に君子在れば門外にも君子來る。大人は此荒れたる山下の雨の後、聽く人なしと思ひ給へども、既に此荒れたる山下の雨の後、爰に琴を撫する人あるはいかん」彙秋彼が言葉の俗ならざるを聽きて、船端に出て、「いかに樵夫、絲の音を聽きて興ありとは聞くべけれども、琴の品曲の趣を知るにはあらじ」樵夫云ふ、「我知らずして心をとゞめんや。詩と樂とは一體兩名、音を樂とし、詞意





雨注ぐが如し。多時ならずして風恬めば浪も靜り、雨止みて雲開け、一輪の明月かゞやき出づ。雨後の月、其光常に倍して、山に添ひ海に映じて、月色いふばかりなし。粂秋旅箱の中より琴の嚢を取り出して、嚢を開き前に置き、先づ香を焚きて琴を取り、調子を掻き合せて祕密の一曲を彈ず。曲未だ終らず、此琴聲忽ち變りて刮刺的と響く程に、新たなる琴絃の一根斷れたるを見て、粂秋大に驚きて、凡琴の祕曲を彈ずる時、音律を識りたるもの盜み聽く時は琴聲忽に變ず、都會の地、京城の片邊ならば、かゝる所にても音を識るものもあるべし、四國の海に臨みて、荒れたる山下、通ひ路さへなき所、那んぞ琴の曲を偸み聽くものあらん、若しは主上に弓引くものありて、宣旨の使を窺ふものあるか、しからずば、或は盜賊の、此船の財寶を心に掛けて、潛みかくれて、候更を待つなるべし、海上には賊船と見ゆるものもなし、「誰か有る。岸に登りて探り檢るべし。樹木の深所に在らずんば、蘆葦の叢中にひそみあらん」と下知をなせば、隨者送の侍迄、おつとり太刀にて崖に跳り上らんとする時、忽ち岸上に人の聲して、「船中の人々騷

つ。兼秋天へも擧れる心地して、諸卿の內年比懇意の方に就きて龍顏を拜し奉りしに、思召し立ちし最初、御輿に隨ひし者なれば、御氣色もうるはしく、夫より都へ還幸なりて、復公家一統の天下となりて、大功の輩に忠賞を行はれける刻、兼秋も原の祿にかへされしかば、再時に逢ひたる心地したり。其年の秋、伊豫國河野備後守通治が方より內奏せし事の叡慮に叶ひて、宣旨下されける其使に、心しりたる者をとて、兼秋承りて下りぬ。宣旨の使なれば、重く饗應されて、歸洛にも、多くの人馬を以て送らんとす。兼秋これをとゞめ、過ぎし比より足の病發り出でて、馬輿に堪へ兼ねつれば、船にて歸り登りたきよしをいふ。大事の御使なれども、已に事調へての歸るさなれば、海上もくるしかるまじと、花やかなる大船にて兼秋を送り登せける。船中の調度樣の物までも、心を用ひていさゝか疎略なし。一片の風帆千層の碧浪を凌ぎ、見盡したらぬは、遙山に翠を疊み、遠水の青きを積めるなり。旣に讃岐國屛風が浦にいたる。比しも八月十五夜、海天一碧の月を見んと、山崖の下に舟を泊め、暮るゝを待つ內、偶然風狂ひ浪湧き、大

「夏はよる、月の頃は更なり、闇もなほ螢とびちがひたる云々」枕の草紙

有るやは—有らばやの誤ならん

したゞみ—舌濁

書寫—播州書寫山圓教寺

所せくばかり—處せきばかりの誤

に、心の赴く事ありて、鳳管を取り出し、呂律を調る内にも、當初御遊に參りて目出たかりし事どもを思ひ出でて、懷舊の涙つゝみあへず、再び還幸を拜み奉る事も有るやはと、還城樂を籟きすましけるに、いつにかはり、快き音の出でければ、何となく心いさみして、音聲に心をとゞめて想ふやう、此一兩年はしたゞみたる音のみ出でて、我運命の拙き事を淺間敷思ひたりしに、今宵主上の事を懷ひ奉りて調べける此管、此比に覺えざる妙なる音の出づる事、考ふるに、近比主上聖運を開かせ給ふ事あるべし、都にいたりなば、其動靜の知れぬ事あるまじと、思ひたつより心忙敷、其夜に旅の調度とり認めて、明早に本宮を出で、夜を日に足して上りし程に、已に泉南の地にいたれば、此彼に人の打ち寄りて、いかめしく語るを聞けば、隱岐の帝配所を御のがれ坐して、書寫に御詣あり。今日しも兵庫に仙輿を蹕めらるゝよしを、民の心にもうれしげに語るを聞くより、兼秋は、途を變へて兵庫にいたり見れば、御迎の爲とて諸國の武家司所せくばかり參り集りたり。此日鎌倉の亡びたるよし、御座所まで告げ奉りしとて、歡びの聲街に充

古今奇談英草紙

第二巻

三　豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話

豐原太夫將監兼秋は、元弘の始、後醍醐帝鎌倉の逆臣を避けて笠置の石室へ臨幸なりし時、諸卿と共に供奉に加はり、御輿など舁きたる事ありしが、笠置沒落の時、兼秋も六波羅へ捕られ、糺明せられしかども、供奉したる計にて、させる罪科なければ、祿を放ちて京城を追はれ、紀の本宮に下りて、少の由緒あるかたへ身を寄せ、在るに甲斐なき身となりて二年を送りぬ。元來家の傳ありて、音樂に妙なりしかども、此年比の騷劇に紛れて、偶に絲竹を操るさへ、かゝる漂泊の身の故にや、絲管の音さへ快く出でざれば、みづから操るに慵く打過ぎたり。元弘三年の夏の孟、清女が更なりと稱せし月の比

清女が更なりと稱せし月の一頃

敢て儞を輕慢むることあるまじ。わが面に発じて恨を散ずべし」樋口が妻室も立ち出でてとも〴〵になだむ。原より幸が恨み罵る本心、夫を捨つる心にあらねば、こゝにおいて詞をやはらげ、此席において婚儀を執行ふ。樋口曰ふ樣、「賢婿常に岳家の卑賤を恨み、夫婦愛を失ふにいたる。今某緣者となれども、祿うすく、任卑しければ、恐らくは賢婿の意に滿つまじ。たゞ貴賤の字を論ぜず、英雄の志を以て交るべし」といふ。馬場我、心中に深く恥ぢて、面皮を紅めて、ひたすら尙罪を謝し、夫婦打ち連れて宿所にかへりぬ。此後馬場夫婦和好類なく、樋口夫婦に待すること眞父母のごとく、又觀音寺より淨應をむかへとりて、奉養して孝を盡し　其終を送る。馬場と樋口と、兩家由緒ある家と成りて、共に榮えぬとかたり傳へたるとなり。

行器—圓筒形にして三脚なる食器なり、帷具の一

て、「我に何の罪ありて如此に翫弄するや。執權家の勢を賣弄ふにあらずや」と、頭を擧げて看る時、燭臺白晝のごとくかゞやき、行器に腰打ちかけて立ちたる婦人は、原の妻女幸が姿に少しも違はず。馬場膽驚き、「亡妻の怨靈なるか、是我が鬼夢を見るにあらずや。さもあらばあれ、覺えある我罪なり。今更謝するに詞なし」と、顏に汗していふ。傍の女ばら皆袖を掩うて笑ふ。其時樋口奥より出で、「賢壻疑をやめよ。是こそ、某歸國の船中、水にたゞよひたるを救ひあげて、養ひ置きし我愛女なり」馬場ます〱おどろきをかさね、手を拱いて、「我惡事なり、何事もゆるし給へ」と、頭をたゞみに著くれば、樋口云ふ、「此事それがしが知らざる所、如何ともいひがたし」お幸怒れる涙を堪へて罵つて云ふ、「薄情の人我父親の助によつて、家業を成就することを得て、恩を思はず、われを水に沈めたれども、天の憐ありて、今の恩人に救ひあげられ、養うて義女とす。今日何の顏あつて僞に見えん」と、聲を放つて哭く。馬場羞慚面に滿ち、閉口言なし。只頭を低れてあやまりゐる。樋口お幸を勸めて云ふ、「今賢壻如斯深く罪を悔ゆ。此以後

に對し自らへ謙していふ語

岳家—舅の家

一堆と成り—身を堅く縮めて

ごとく、何の幸かこれに過ぎん、必定此事調ふべし」といふ。樋口悦びて、「左ある時は足下を煩はす。馬場に此由を通じて、好音を聞かせ給へ」といふ。梅山何某馬場が第に行きて此由を告ぐるに、馬場如何ぞ依允はざらん、「權勢ある人の我を女壻に望まるゝこと身の幸なり」と、梅山が媒介によりて、期をえらみ、財帛をそなへて聘を納む。婚姻の吉期にいたり、馬場親迎の儀を行ひ、岳家に至る。此時馬場心中九霄雲裡に登る心地、懽喜形容すべからず。玄關に入り案内につれて次の間に通る時、兩邊より七八人の使女ばら／＼と立ち出で、馬場を中にとりまはし、細き籠竹を手に／＼執つて、頭肩のわかちなく打つ。思ひがけなく、驚けども、女なれば手むかひもならず、雨點のごとくに打たれて、慌てゝ身を縮め、一堆と成り、「誰かある、是とゞめて給はれ」と呼はる時、奥の一間より嬌聲宛轉とひゞきて「道しらずを打ち殺して益なし。ゆるしえさせよ」と聞ゆれば、使女ども打つことをやめて、七八人がよつて耳を扯き、肩を挽き、足を地につけしめず、擁みて奥に引立て行き、新人の面前に引きすゑたり。馬場口中につぶやき

皆々聞かねども—其饒舌に其內情を聞かねども

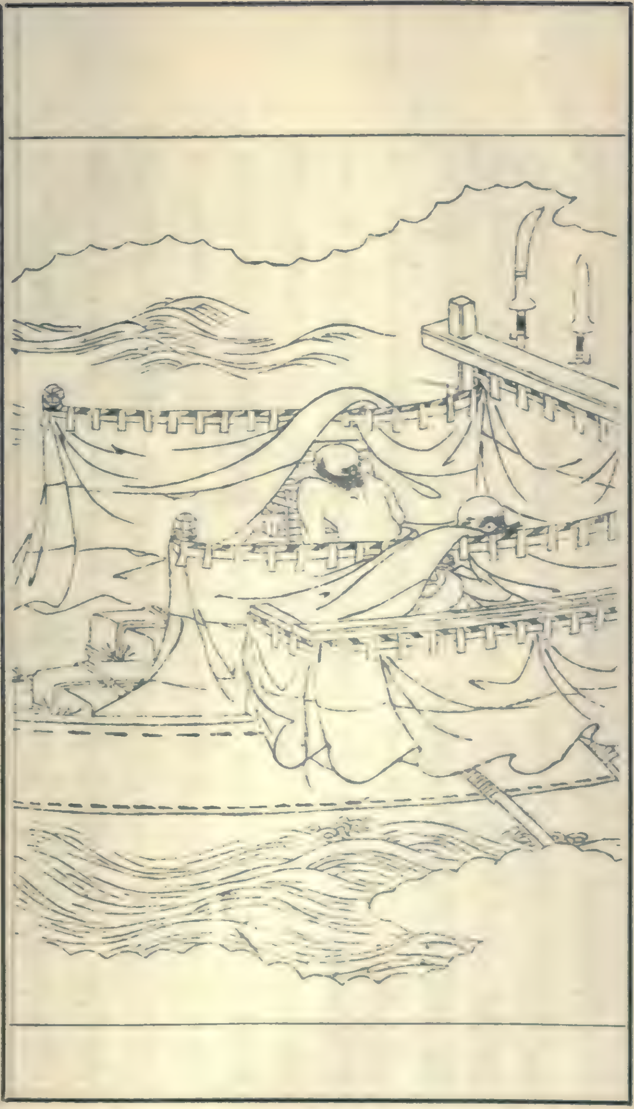
きりうど—きれ人、權臣

寒門—貧しき家

蒹葭玉樹に依る—貴戚を得たる

しつれども、はやく沈みて見えず、思ふに早晩魚服に葬りなん、不便さよ」と、顔に袂をおほひ、舟方どもに賞錢を與へければ、皆々聞かねども其心をさとりて、誰か再び此事を問ひ定めず。船すでに北浦につきて、夫より城下にいたり、紹介の人に就いて主君に相見し、兼て賜はり置きし設けの宿所に移りて住みける。爰に當家に肩をならぶる者なき一の人、樋口三郎左衛門といふものあり。此一兩年公役にかゝりて京都に在りしが、頃日歸國したるに、家のきりうどなれば、當家の諸士悉く來りて其無事を賀す。馬場も參向して、初めて對面せしに、懇意の會釋どもありしとて一ツの面目に思ひ、時ならず此家に行きて其安を問ひけり。樋口、馬場が若うして才識のすぐれしを愛し、彼がいまだ獨身なるをあはれみ、馬場が宅邊に近き梅山何某をまねきていふやう、「我妾腹の女子京都に生ひ立ちしを、此度倶して歸りぬれば、是を馬場に嫁せんと思ふ。彼若けれども、こゝろ高ければ、うけがふべきや否やを恐るゝ」といふ。梅山いふやう、「彼寒門より出身して、當家に出づることを得たり。貴君の緣者となることを得ば、蒹葭玉樹に依るが





秋影に讓らずと｜「すかし言ひつゝ」と語をそへて見るべし

旬、既に若狭に赴く。發足の日になりて、淨應宴を設けて行を送る。此時丐頭丐子恐れをなして門に近よらず。觀音寺より若狭にいたるは、湖上の便船よければ、書籍雜具等を舟に積み、馬場夫婦從者と共に乘り移り、岸を離れ、其日夜に入り長濱の邊にいたり、向風なりとこゝに船を泊めたるに、ころしも新春十五夜、月影晝のごとし。求馬舳頭に出でて月を見る。從者皆寢靜りて、四邊を顧るに人なし。心澄むに隨つて復丐頭のことを想ひ出し、忽ち一個の惡念起つて、是非此婦人を殺して、終身の辱を免れんと、お幸が眠を呼び覺して舳頭にさそひ出で、「今宵こそ一年の滿月の始なれ、賞せずんばあるべからず。ことさら隈なき影の水に映ぜしは、陰り易き秋影に讓らず」と、妻が思ひより無きをうかゞひ、力を極めて、一推に水中に推し落し、急に水手を呼びおこし、「肝要のことあり、快く船を開くべし、褒美をとらせん」といふに、何かはしらず、舟方ども櫓を取りいそぎて、一直に船を二十町ばかりやりぬ。求馬此所にてはじめて妻女の水に落ちしことをかたり、「彼月を見んと欲し、過ちて水に落ちたり。ちからの限り救はんと

我家の傳―祖先傳來の武術

七出―妻を去る七箇條、七去に同じ

の門風をかくさんとぞ願ひける。求馬は元來軍機武術の家なれば、何とぞ復び軍師の家を起さんと、和漢古今の典を涉獵し、累世家傳の書に心を勞し、我家の傳に付いても發明するに至る。是みな衣食の念に勞なく、一味に心を用ふるのいたす所なり。今の世の中、軍術を詢へて祿に就くもの多しといへども、當時高名の軍家わづかに一兩輩を除きて、外に將壇に登りて、我目より見上ぐるものなしとみづから心にゆるし、仕官の望急にして、其便を聞き繕ふに、當時將軍家の姻家として寄重き大名若狹國武田家より召されて、千二百貫の扶持を賜り、奉公の約相濟み、來春御國に引き移るべき由の嚴命なり。是も偏に父祖馬場何某が世に名をしられたると、ひとつには養父淨應が餘光によるものなり。世の人見るべし、人心反覆常なき事、是則常なるかな。求馬此時に至りて心に思ふ樣、早く今日ある事を知らば、此丐頭の女壻とはならじものを、是れ我終身の瑕なり、妻又賢慧にして七出の條を犯さねば、今更是を絶つ事もならずと、是に心を苦しめ、妻女の緣によりて名をなすの助となりしことは、いつしか春氷と解けて睦月中





さもあるべし—其の驚きさもあるべしの意
代赭石—朱黃色の繪具
疫神を送り—所謂厄拂なり
外道—惡魔
きようがる事—飛んでもない事
鳥目—ぜに

て見る時、さもあるべし。

物の多く集りしを壯觀とはいへども、癩椀破蓆を持ち連れしは詠めともならず。破襦袢を肩にて結びつぎ、竹杖破椀を手に携ち連れたる中に、顏を代赭石に彩色して疫神を送り、蛇を首筋に纏せ、竿頭に破椀を廻らし、拍子を打つて平家をうたふ、おのがさま〲なり。是等の外道窮鬼は鍾馗の手をかりても退くる事難し。

小二郎眞先に酒宴の席に亂れ入り、先手を下して、我一と酒肴を取り喰ひ、「聟どのに對面せん」とよばはる。五七人の喜客も肝をつぶし逃げ出づる。求馬もきようがる事に思ひ、朋友につれて逃げかくれぬ。淨應すべき樣なく、小二郎に向ひ、「今日は壻が招きたる人々にて、我招く所にあらず。近日汝をも招きて酒を汲むべし」と、衆乞丐にも酒をのませ、鳥目をあたへてかへしぬ。幸は一間にありて、涙にくれて夜を明し、求馬も朋友の家より歸り來る。淨應も壻にまみえて、面に羞を含み、お幸と共にわが門風の惡しきを恨み、とにかくに、一日も早く求馬が出身の便を得て、他國にも移り行き、こ

一寸の招狀―意を強めたる語勢

前後しらぬ―向ふ見ずなる

我媒して參らせん」といふ。馬場心に思ふやう、我今衣食とぼしく、婚娶の事はさて置き、このまゝに埋れ果つべく覺ゆ、時この亂世に當りて、權門貴族さへ功を計へて家を論ぜず、況や我身をやと、遂に志を決して老人の詞に隨ひ、吉日をえらみ、淨應が家に入家して、幸と夫婦と成りけり。世にすぐれたる美妻を設けたる上、衣足り食ゆたかにして、事々懷に稱はざる事なし。淨應器量ある聟取りたりと悅び、席をはらうて饗應を催し、近隣の往來する人家、又は求馬が日頃の朋友を招請して、交る〳〵六七日の亭主をぞなしける。一族の丐頭當小二郎、此由を聞いて大にねたみ憤り、彼と我とは一類にて、彼も元は丐頭なり、彼が家に聟を取らば、我も一盃の喜酒に預るべきに、婚儀なりてすでに一月、饗應又六七日、尙一寸の招狀を送らず、彼が聟、たとひ國の守の執柄にもせよ、我一族にまぎれなし、淨應常に我を遠ざくる心有るがゆゑ、此失禮にいたる、さらばかれを一惱しなやませて、この怒を漏さんと、手下の前後しらぬ乞丐を五六十人引き連れ、一齊に淨應が家に來る。門前の喧しきは何事にやと、淨應門首に出で

勢語—伊勢物語
源語—源氏物語
孟津—孟津抄廿一卷、九條植通著
河海—河海抄廿卷、四辻善成著
小儀—身分の高下を論ずるが如き小節

愛する事掌中の珠のごとく、たちぬふことのいとま、和歌の道に心をよせさせ、其頃はいまだ下ざまにもてはやさゞる得がたき草紙ども讀み習ひ、勢語は諸家の說を窺ひ、其趣を極め、源語は孟津を問ひ河海に至り、其外諸家の集、勅撰の類、しかるべき歌書に渡らざるはなし。淨應女の才を自慢して、町人百姓の中にて然るべき壻をと心がけけれども、家風の事知らざるもの無ければ、誰入贅せんといふものなく、阿幸十八歳に至るまで緣の事とゝのはず。爰に隣家のもの言ひ次ぎて、老蘇の里に、馬場求馬とて一人の浪人、先祖故あるものにて、少の才學有れども、父母に早く後れて、家貧く、三十に近づけども定まる妻もなく、たとひ他家に入贅してなりとも、家傳の職を成就し、今の時節、家名を起さんと願ふ人あり。息女を妻すべき志はなきや、といふ。淨應家系あるものと聞き、何さま是を女に妻せて、彼が家を引き起さば、我家も倶に面目を雪ぐ事あらんと、心案決定して、彼隣家の翁を頼みて馬場に口入せしめ、淨應が家筋少しもつゝまず語り聞かせて、「足下器量ありて小儀にかゝはらず、彼家に據りて時を待つの志あらば、

氣隨言ふに如かず—氣まゝ言ふに過ぎずの意

隨身して—隨ふなり

名を小二郎と云ひ、多くの乞食より每月常例の役錢をとり納め、或は雨雪の頃、人の施なき時は、頭より粥を煮て養ひ、頭の門內に集り居て、草履草鞋を造りて例錢の便とす。如此の事數年、丐頭の家漸々貯積みて、家富むに隨ひ、猶業を改むる事を思はず、地を求め田を得るに及びても、此丐頭の名目をのがれねば、百姓町人に交る事あたはず、市に立ち途を行きても、己が手下の乞食より外は、少しの敬ひする人なし。只門をとぢ、家內に在りて、氣隨言ふに如かず。世上にいやしまるゝ娼家伎優の類にさへ、入れられず、別の目を以て見らるゝこそ口惜けれ。この時代に當る小二郎、名を元義といふ。生得少しの志氣ありて、丐頭の職を我甥大六に讓りて、是を小二郎と改名させ、其身は入道して法名淨應と呼び、貯へたる財寶田畠まで、皆別家に隨身して移り、少しも乞丐の事にあづからずといへども、世の人言ひ改めず、淨應を見れば、前の丐頭とぞ申しける。淨應年五十に餘り、妻は七年以前に逝きて、男子はなく、一人の女あり。阿名を幸とよぶ。顏かたちは家がらにも生れ增り、類ひなくうつくしかりければ、淨應寵

智は奢に用ひ云云—說苑に「智足ㇾ飾ㇾ非辯足ㇾ行ㇾ說此讒臣也」と有るに據る

丐頭—乞食の親分

今日此馬場殿は遊閑の地なるゆゑ、儞が罪を問ひ定めず。朝廷にありて此過言を出さば、罪を問ふべきこと免れがたし」と、詞嚴に宣ひて、其日の御遊は扨やみぬ。藤房卿第に退きて歎じて曰ふ。「治世の期吁やんぬるかな。今主上智は奢に用ひ、辯は非を覆ふに足る。下官不才の言動ずべきにあらず」と、遂に自ら官を辭して北山の下に去つてかへらず。帝驚き思召して、父の宣房の卿に詔して、是を求め還さしむれども、竟に其行く所を知らずなり給ひぬ。

二　馬場求馬妻を沈めて樋口が聟と成る話

天文の頃、江州觀音寺の城は佐々木家代々の要害にて、城下の民人も國主の勢ある餘光を蒙りて、隣國に手ざす諸侯もなければ、國中安靜にして、商賈家業に怠らず、市町賑敷く、四民枕を安んじて暮す。然れども貧富は人の命なれば、此城下といへども乞丐甚多く、又乞丐を管領して丐頭と稱するものあり。數代此頭をなし來りて、代々通り

樂府に製し―詩賦に作り
准后―恒良親王の母親、待賢門院藤原廉子
宋之問―唐西河の人、中宗の朝、修文館學士たり
漆園氏―莊子、嘗て漆園の吏たり、故にいふ
毛嬙麗姫―毛嬙は麗姫なりといふ事今二人の如く書きしは誤なり
捨別―差別の誤

たり。後世美談として樂府に製して是をもてはやす。武を重んずるものは馬を愛すべし。今の時馬を愛するは武をわすれざるの時に當れり」藤房常に主上の准后の美色に迷うて政に害あることを惡めば、帝の言に應じて云ふ、「主上よく愛妃を馬に換ふることを得るや。馬に追風千里の能あり、美女に沈魚落鴈の容あり、恐らくは君二つながら棄つることあたはざらんことを」帝藤房に心病を言ひ當てられ、心に深く恥ぢて、此時只博識を以て是を壓さんと欲し、「爾沈魚落鴈の四字の出づる所を知るや」藤房言す、「沈魚落鴈の字は、唐の宋之問が浣紗篇に云ふ、鳥驚きて松蘿に入り、魚畏れて荷花に沈むと詠ぜしより出でて、美人は魚鳥も是に感ずるを云へり」帝大に笑ひて宣ふ、「爾知らず、沈魚落鴈を美人の佳稱とするは、元是れ誤なる事を。此詞漆園氏の語に出でて、毛嬙麗姫は人の悅ぶ美人なれども、魚は人のけはひだにすれば深くかくれ、鳥も人だに近よれば高く飛んで去る。人は愛すれども魚鳥は其捨別なきことをいへる詞なり。後世轉じ誤りて美人の稱とす。爾故事を引きて朕を動さんとならば、今暫く窓の下に年を積むべし。

周家の本紀—史記の周家本紀
拾異記—秦の王嘉撰、拾遺記の誤

も無興にして、主上逆鱗の氣色まし〳〵て、「儞見淺くして天馬を不吉とす、儞かの穆王の八駿俱に皆同じ馬なるや、或はその能各異あるか、何の書に是を出すことを知るや」藤房一時此こと思ひ出でず、たゞ云ふ、「周家の本紀是をしるさんのみ」主上頭を搖らせ給ひ、「八駿各其能異なること拾異記に是を出せり。周穆の八駿第一を絶地と名く、馳するに蹄地を踐まず。第二を翻羽と名く、行くこと飛禽に越えたり。第三を奔宵と名く、夜萬里を行きて迷はず。第四を超影と名く、日の足を逐うて行く。第五を踰輝と名く、毛の色光明炳輝。第六を超光と名く、形一つにして十の影あり。第七を騰霧と名く、雲にのりてよく走る。第八を挾翼と名く、身に肉の翅あり。穆王此八疋の馬にたがひにのりて、天地の間に行かざる所なしと書き傳ふ。今此一馬、かの八駿の能を兼ねたりとも、朕いかんぞ是を遠遊の爲に用ひて朝政を誤らんや。名劒といへども、敵を斬り身を殺すの吉凶たがひあり。皆其の用ふる人の禍福善惡に依るものなり。儞の狹き量を以て天下を概みすることなかれ。むかし魏の任城王曹彰、駿馬を愛して愛妾と換へ

吉に行けば云々―吉は祭祀、凶は喪葬、五禮の內なり

明堂―王者の諸侯を朝せしむる所、卽朝廷なり

南山北嶺―南山は大和吉野、北嶺は比叡山延暦寺

類なれば、是聖明の德の顯るゝ所なり」とぞ賀せられけり。折しも藤房の卿參られけるに、主上天馬の吉凶を勅問ある時、藤房申されけるは、「天馬の本朝に來れる、其例なければ、善惡は勘へがたし。然れども、此馬吉事の用には立つまじきか。漢の文帝の時千里の馬を獻ず。文帝是を受けず、帝王、吉に行けば日に三十里、凶に行けば五十里、鸞輿前に在り、屬車後に在り、われ獨り千里の駿馬に乘ずとも、從ふ者なくして帝王何國にゆかんやと宣ひけるとなり。周穆八駿に駕して遠遊を好み、明堂の禮に怠りしは、周の世の衰ふるはじめなり。今大亂の後、民費え人苦みて、天下いまだ安からざるに、人主の誤を正すべき執政もなく、群臣言に阿つて國の危きことを申さず、大內裏を造り、馬場殿を建て、民に課役をかけ、宸襟を休め奉りし功臣を賞し給へども、恩賞其功にあたらず、忠功空しく怨を含むもの多し。他日天下に不慮の事あらん時、天子此龍馬に駕して南山北嶺に避け給ふとも、群臣は從ふことあたはず、只遠國に急を告ぐる時用ふる所あらんのみ」と、是をよき次として諫められければ、諸臣色を變じ、旨酒の高會

折檻の諫—前漢朱雲の故事、強く諫むるをいふ

拳毛—卷毛

天馬—大宛國より出づる駿馬

なり行くを、愚なるかたに引きもどす一助ともなるべし。儞今すこしく心を高うして見るべし」と、倫言の辨ずる所謂なきにあらねば、藤房却つて主上に說き得られ、閉口して朝を退きぬ。かく理に明なる君なれども、逸遊日々にさかんなれば、此朝廷治り果つべくも覺えず、折あらば、再三折檻の諫を奉らんものをと思ひくらされける。一年雲州鹽冶判官が許より、龍馬なりとて月毛の馬を進奏す。「其形頭は雞のごとく、背は龍に似て、四十二の拳毛脊筋に連り、兩の耳直に立ちて竹を剝ぐがごとく、雙の眼鈴を掛けたるかと怪しまる。今朝卯の刻雲州富田を發つて、酉の刻京著す。其道七十六里、鞍の上座せるがごとく、風をきつて走る故眼ひらきがたし」と奏す。則左馬寮に養はしめ、馬場殿に幸なりて、此馬を叡覽あり、本馬孫四郎重氏を召されて曲馬を乘らしむ。乘人の心に應ずること尋常ならず、誠に天馬ともいふべし。叡慮悅ぶこと類なく、「我朝に天馬の出づること朕が世是れ初なり。吉凶如何ん」と御尋ある時、左右皆云ふ、「是嘉瑞なり。周の穆王の世八疋の天馬來り、是に乘て天地の間に周遊すといへり。天馬は麒麟の

二度童にかへりたる―返暦すぎたるをいふ
空燒―女の衣裳に燒きしめし伽羅の香
放下―放下僧、又放下師ともいふ、田樂法師の類にて一種の舞踊を能とする者
管見―見る所の小なるをいふ、莊子の語

れば、二度童にかへりたる婆翁、理屈ばなしと同じ耳に聞けば、誰か聞きこんで發心するものもなく、說法者も聽衆に憚からず、書籍は膝前に披きながら、目はひたすら空燒のかたにむかふ。壇上に躍り狂つて法衣の腕をかゝげ、雇はれし寺の喜捨を募り、巧に自己が衣料を乞ひ、觀音の小像を賭にして福引するにいたる。此體の放下同然の佛說を聽くもの、一人として大義のわきまへあるものなければ、人をたぶらかす程の邪智もなし。僧が心の底は、天下の人を皆學者にもして、理に明らかならしめんと欲するならん。さある時は、恐らくは僧徒の外に不耕して喰ふもの多くなりて、其中には學問の理を假りて非をかざるもの、或は公の事につけて管見の議論をなし、人民の心を迷すやから出來り、彼にも此にも理屈行はれて、政道の害となれば、僧徒は物の數ならず。秦の始皇が儒者を埋殺せしも深き意あるべし。天下の上に立つものは、民百姓を怜悧發明にあらしめんと思ふ事はさら〳〵なし。偏に律義にして國法を奉じ、小善といへども爲すべき人柄にあらせ度く思ふばかりなり。今の俗僧の說く所は、民百姓の惡發明にのみ





僧に雅俗の別ー教學を主とする學匠と寺務法要を專とする者との別をいふ

むことは下倣ふならはせなれば、士民ともに僧を信用し、村落の小院までも、說法壇を設けて法を說く。後は心重からぬ僧徒多くなりて、男女の席亂がはしく、よからぬ風俗多かりければ、藤房諫を奉りて、異國本朝ともに佛教に淫して國危かりし故事を說き出し、詞をつくされしに、元より才學辯利なる帝、これを聽き入れ給はず、却て藤房にむかひ、「梁武帝の佛に淫して民膏を費し、國の衰へとなりしは、佛法にかぎらず、淫する時は皆害あり。佛法も、國の害になる程歸依せねば、障有るまじきことぞかし。また佛家の方便の國政に益なきこと汝が說をまたず。彼の僧徒、說法壇を開きても、或は天下の害となるべきことを演ぶるときは、いかに其まゝにさしおかんや。まだも往古の僧哲は、氣性强かりしかば、公政をも恐れず。今の僧徒は佞諛のもの多く、猶以て國法を害することなし。近世は僧に雅俗の別出で來りて、中にも德ある僧の、弟子を指教して宗儀の深意を釋し、佛語を表裏より推して悟らしめ、終に佛身を成就するあれど、今の俗僧の、俗男女に說き聞かしむる所は、理を淺く說くをもつぱらとして、滑稽笑話の類な

詠林—和歌の道

いふなる迯水のと、古歌に詠みおかれしよし承はりぬ」と、ねんごろにかたりて別れぬ。藤房こゝにおいて、主上の速水に賜はりし歌は古歌にて、迯水は古き歌名所なることをはじめて悟り、武藏野の草葉がくれに行く水のとある古歌にも思ひ合され、詠林のしげき、いまだ我が覺えざる名歌多かるべしと、自ら眼の狹きことを耻ぢて、歌まくら見よとの叡慮も、これをおもひ知らしめんためなるべしと、こゝより都にかへりのぼり、父宣房に此事をかたれば、宣房卿いふ、「儞これほどの麁忽あらんや。其歌は俊頼朝臣の歌にて、近比去る家に深く祕せらるゝ扶桑といへる集にも出でたり」と聞きて、藤房いよ／＼我が麁忽を知り、内に參りて其過を悔ゆるに、主上も、かれに思ひしらしめん爲なれば、今はとて発されにけり。藤房かへり登る時、大内裏すでに造營をはじむ。藤房これを諫め奉らんとすれども、事已にとゞむべきにあらず。これのみならず、帝此時太平に志怠り給ひ、馬場殿を建てゝ逸遊度なく、女謁盛に行はれ、朝野怨を含むもの甚多し。近比佛教を信じ給ひ、僧徒また禁宮に出入するものすくなからず。上の好

やおれ—呼びかくる語

きはめて—必ず

と思ふ内、からうじて一人の田夫に行逢ひたり。「やおれ、むかふに見ゆる流は何とよぶ川ぞ」と尋ね給へば、此田夫云ふ、「此あたり、西は秩父根東は海北、南の向が岡、都築が原より、北は河越にいたり、此あひだをむさし野といふ。縦横十郡に跨れり。其内にたゞ三つの川あり、玉川、久米川、入間川なり。年とらず川などいへるは、あるにかひなき細き流れにて、節分の夜は、きはめて水ながれざる故、かく名くるとなり。それゆゑ水にとぼしく、野に出づるもの、器に水を貯へ持ちて渇をうるほす。此あひだに川もながれも目にさへぎることなし」と答ふ。藤房、「むかふに見ゆる川よ」と指ざし給へば、田夫顧みて笑うて云ふ、「あれは川にてはさむらはず。あれこそ山峯に雲を出すがごとくにて、地氣のなす所、いつとても春夏の際遠所より見る所、水の流るゝやうに見ゆれども、水にあらず、其所に行けば見えず、行けども〳〵むかふへ行くやうなれば、むかしより迯水と名づけぬ」といふに、藤房心づきて、「迯水の名古き事にや」と問ひ給へば、此野夫云ふ「年老いたるものどものかたり傳へしは、是も名所の内にて、あづま路にありと

歌読―歌に詠む名手

調布さらす―玉川にさらす調布さら〳〵に昔の人の戀しきやなぞ」拾遺集

からにて、不便に思召され、一箇の莊を宛て行はれ、一首の古歌を賜ふ。

あづま路にありといふなる逃水のにげかくれても世を過すかな

藤房此歌を見て、博識の人なれども、いかゞしたりしや、此歌知り給はで、是古歌なるとは思ひもよらず、帝の新製の歌なりと思ひ、「逃水のことばふしんはれず。かれが姓を詠み入れられしとは見えたれども、逃水といふつゞきいかならん。其上速水の速の字に逃ぐるの意なし」と難じたりければ、帝大に御氣色損じ、次の日藤房を召して、「東の歌枕見てこよ」と追ひやり給ふ。藤房何の罪とはしらねども、叡慮にまかせ旅だちて、いつかへりいつあふさかのせきならん、しられずしらぬ旅の行衛の心ほそく、ゆき〳〵て武藏野のはてなき道にかゝより、見わたせば、其廣きこと雲をしのぎ、霧にへだてゝ、たゞめのおよぶ所にかぎれり。春の末草葉のしげりし間、はるかにむかふに流るゝ川あるは、かの調布さらす玉川にこそとおもへど、問ふべき人なく、川を目につけて行けども、曠野の内遠近も目當違ひて、ゆけども〳〵、川ははるかむかふにありて同じ程なるはいかに

黄門侍郎―中納言の唐名
尚書―十三經の一、古文尚書といふ政事の書
上卿―公事に與る公卿の上官

古今奇談英草紙

第一巻

一　後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話

萬里小路藤房卿は宣房卿の子なり。幼より好んで書を讀み、博學强記和漢の才に富みて、早く黄門侍郎となる。建武の帝命じて尚書を講ぜしめ給ふに、よく其旨を解き得たりしかば、帝深く其才を愛し、常に左右に侍せしめ給ふ。元弘の變に帝武家にとらはれさせ給ふ折からも、藤房是に從ひ奉る。御開運の後つひに上卿となる。此時速水下野守といふもの、もとは三河の國の住人にて、足助重範が一族なるが、官軍沒落してより東國に逃げ下り、こゝかしこにくゞまり、公家一統のときを待ち得て都に登り、萬里小路藤房卿について天氣を窺ひしに、速水が幸にやありけん、何事にや叡慮うるはしき折

黑川源太主山に入つて道を得たる話

第五篇

紀任重陰司に到つて滯獄を斷くる話

第六篇

三人の妓女趣を異にして各名を成す話

第七篇

楠彈正左衛門不戰して敵を制する話

第八篇

白水翁が賣卜直言奇を示す話

第九篇

高武藏守婢を出して媒をなす話

以上九篇

古今奇談英草紙總目錄

近路行者　著
千里浪子　正

第一篇
後醍醐帝三たび藤房の諫を折く話
第二篇
馬場求馬妻を沉めて樋口が聟と成る話
第三篇
豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話
第四篇

り、礎のひゞきに冬の近きを思ふためしあれば、鄙言却て俗の傚となり、これより義に本づき、義にすゝむ事ありて、半夜の鐘聲深更を告ぐるの助とならんこと、近路行者千里浪子の素心なる哉。こゝに足らざればかしこに餘りあり。此の二人生れて滑稽の道を辨へねば、閒を悦ばすべきなけれども、風雅の詞に疎きが故に、其文俗に遠からず。草深き人となれば、市街の通言を知らず、幸にして歌舞伎の草紙に似ず。賜覧の君子、詞の花なきを以て英の意を害する事なくして、兩生の幸ならんのみ。

寬延己巳の初夏十千閣の主人十千閣上に筆を操る

太　平　逸　民

隣家の方正先生余が文房に飲む。傍に英草紙の藁あるを把つて、纔に其目を見て是を置いて云ふ、足下倦れたれども尚青雲の志あり、此遊戯の書に目を厭ふべし。余酒氣を帯びて笑うて答ふ、先生の言是なり、余また此書の爲に說あり。彼の釋子の說ける所、莊子が言ふ處、皆怪誕にして終に敎となる。紫の物語は言葉を設けて志を見し、人情の有る處を盡す。兼好が草紙は惟假初に書けるが如くなれども、世を遁るゝ事の高さに趣を歸す。今の世大道を照すに人乏しく、光をつゝむ人はなほ更なれば、明敎につかんと欲する人も、其懐璧の圓ならぬを瑕瑕としてこれを顧みず。或はをしへを受くる者も、琢磨の意淺ければ眠を生じ易し。金玉の言耳悅ばしからぬ謂歟。近路千里の二人の主は、余が物覺えてより竹馬に鞭打し、夕影隣を遷されし朝も、行くに留るに形影の離れざるがごとく、素姓も亦余に齊しき一畝の民にして、耕いとまなきに、雨日の閑の時々、此草紙を記して同社中の茶話に代ふるの本意とす。原より名山に藏して後世を待つの物にあらずといへども、此書義氣の重き所を述ぶれば、昔より牛喘を問うて時の政を知り、馬洗の音を聞きて阿字をさとり、風の音に秋の深きを知

第十三條　忌部宿禰海道跡見武雄同じく武荒の兄弟に遇ひて清麻呂の妻子を救ふ并三人ともに清麻呂の捕はれたを救ふ……五一三
第十四條　海邊經劍術を教ふ并奈良麻呂を立てゝ大將とし徒を集へて白山に登る……五二四
巻之八
第十五條　二人の大將軍軍兵と徒を將て白山の窟に籠る并泰澄法師兵粮の事を謀る……五三四
第十六條　大伴家持泰澄に逢ふ并家持が放てる鷹を諸兄すゑもちて返し給ひ幟を白山に贈らしむ……五三六
巻之九
第十七條　守大伴宿禰家持幟を白山に贈る并和爾部眞太刀家持の館に來る……五四二
第十八條　清麻呂金麻呂手節の崎にて妻子に逢ひて共に將て伊吹山に登る……五四八
巻之十
第十九條　人置の眞鮪韓臼の大神金を分つ并弓屋の俊雄隱妻を迎ふ……五五六
第二十條　弓屋の俊雄人置の眞鮪訟す并高橋手力二王を救ふ……五六五
つくし船物語　五六五—六三四
手枕　六三五—六四八

目錄

卷之二

道鏡を愛で初めたまふ……四一五

第三條　藤原倉麿石村村主奏するによりて藤原の惠美押勝を討たしむべき勅あり……四二六

第四條　道祖王釣舟に召されて遁れ給ふ惠美押勝戰ひ負くる……四三九

卷之三

第五條　豐丸角丸が骸を燒く幷佐保の大道に首を梟くる……四四〇

第六條　惠美押勝祖王を將奉りて伊吹山に隱る白猪老翁祖王を預り奉る……四四六

卷之四

第七條　豐成が娘狹霧姫を道祖王に奉る押勝印を授けて七人の物部を國々に出し自ら東國に下る……四五七

第八條　和氣眞人淸麻呂勅を受けて宇佐八幡大神宮に詣づ詣で終りて歸るさに巨勢の金丸を訪ふ……四六八

卷之五

第九條　淸麻呂の敎を奏すによりて道鏡に罪せらる巨勢金石淸麻呂をたすく幷金麻呂親子淸麻呂も共に死す……四七七

第十條　金麻呂親子淸麻呂を將て紀伊の溫泉に忍ぶ鼻彥軍書を講く……四八四

卷之六

第十一條　守部が豐罪を宥されて淸麻呂金麻呂が跡を追ふ淸麻呂が妻子金石獵野に逢ひて紀伊の國に行く……四九五

第十二條　山賊淸麻呂が妻子を盜み去る明日香大太刀金石に逢ふ幷紀伊なる人々伊吹山に行く……五〇二

卷之七

第三卷
五　白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話・・二三五
白菊の下・・・・・・・・・・・・・二五二
第四卷
六　素卿官人二子を唐土に携ふる話・・二七〇
七　望月三郎兼舍龍窟を脱れて家を續ぎし話・・・・・・・・・・二八一
第五卷
八　江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話・・・・・・・・・・二九九
九　宇佐美宇津宮遊船を飾つて敵を討つ話・・・・・・・・・・三二〇

西山物語　三五一―四〇八

卷之上
こがねの卷・・・・・・・・・・・三五五
かへの卷・・・・・・・・・・・・三五九
太刀の卷・・・・・・・・・・・・三六四
卷之中
あやしの卷・・・・・・・・・・・三六九
琴の卷・・・・・・・・・・・・・三七五
文の卷・・・・・・・・・・・・・三七八
わかれの卷・・・・・・・・・・・三八二
卷之下
露の卷・・・・・・・・・・・・・三八八
よみの卷・・・・・・・・・・・・三九七
ほきの卷・・・・・・・・・・・・四〇六

本朝水滸傳　四〇九―六八四

卷之一
第一條　味稻の翁仙女と契りて百人の子をまうく・・・・・・・・・四一一
第二條　太宰府の阿曾丸勅をうけて弓削道鏡を召し參る井高野天皇

雅文小説集目錄

古今奇談英草紙　一―一七六

第一卷

一　後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話……五

二　馬場求馬妻を沈めて樋口が聟と成る話……一七

第二卷

三　豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話……三三

四　黒川源太主山に入つて道を得たる話……五七

第三卷

五　紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話……七七

第四卷

六　三人の妓女趣を異にして各名を成す話……一一一

七　楠彈正左衞門不戰して敵を制する話……一三六

第五卷

八　白水翁が賣卜直言奇を示す話……一四八

九　高武藏守婢を出して媒をなす話……一六三

古今奇談繁野話　一七七―三五〇

第一卷

一　雲魂雲情を語つて久しきを誓ふ話……一八一

二　守屋の臣殘生を草莽に引く話……一九一

第二卷

三　紀の關守が靈弓一旦白鳥に化する話……二〇六

四　中津川入道山伏塚を築かしむる話……二一九

與淸とはかりて刊行せるものにして、もと大井三位物語といひ、「つくし船」はその第一卷の名なりしに、第二卷以下遂に成らずして止みしより、此のたび物語の二字を加へて單行せしめしものなること、原本の凡例に見ゆるが如し。

手枕一冊、本居宣長が、源氏物語に六條御息所の事の始の見えざるを補はんとて、文章も紫女の筆つきに倣ひて物したりしを、尾張の人大館高門といへるが請ひ求めて梓に上せ、同好の人々に頒ちしなり。

今これら諸本を校訂するに當りては、何れも前に述べたる所の底本又は流布の原本によりて、振假名の假名遣を一定し、會話に鉤識を施し、鼇頭に略註を加へたる外、語格宛字等一に原本に準據し、私意を以て改竄せず。但つくし船物語は原本に旁註せる所の漢字を本文中に組込みて、原文の假名を之れが振假名とし、又手枕には間々新に漢字を配して、共に通讀上の便を圖る事となしたり。

大正四年一月　　校訂者　松山米太郎

號あり。俳諧を希因に學び又國學を好み、其妻をして眞淵に就て學ばしめ、己また其說を傳へたりといふ。後片歌（かたうた）を唱へ出し、自ら片歌道守と稱せり。安永三年五十三歳を以て歿す。

本朝水滸傳も亦綾足の作、一名を吉野物語といふ。惠美押勝、僧道鏡等の事迹を漢土の水滸傳に擬して作れり。曲亭馬琴嘗て本書を評して、其の文を行るに古言を用ゐながら、往々俗言俚語の錯出せるは頗る不調和たるを免れざれども、漢土の水滸を摸して、而も其の古轍を踏まざるはさすがにして、實に今の讀本（よみほん）の嚆矢と稱すべしと云ひ、なほ、その不幸にして時好に適せず、未完に終りしは痛惜すべしといへり。馬琴の八犬傳が源を此の水滸に求めたるは、右の細評あるによりても徵すべきなり。

本書初篇十卷は刊本にて行はれたれども、後篇十五卷は寫本にて稀に傳はり、第三篇は遂に成らずして終れり。本篇收むる所は、卽ち初篇十卷にして、底本は寛政十三年の補刻本によれり。

つくし船物語は、村田春海の作、上下二冊あり。文化十一年二月、むすめ村田たせ子が高田

によれば、通俗醫王耆婆傳の譯者巣古主人といへるも此の人なりといふ。

本篇の底本は、英草紙は寛延二年九月、繁野話は明和三年の印行に係り、各五冊に分る。

西山物語は、建部綾太里の作、明和五年刊行、上中下三冊あり。山城國西山の麓松尾の里なる大森七郎同八郎の二人、從兄弟の間なりしが、古刀の祟によりて相恨み、兩家の子女の間に結ばれし婚約の破綻となり、遂に一場の慘劇を生じ、後また互に和睦するに至りし筋を、當時の巷説に基づきて作りしもの、文章は純然たる擬古體にして、一字一句も古典に基き、一々其の出處を明にせり。之れ古文の法格を普及せしめんとの意にあらずんば、或は彼の英草紙の如き、極端なる漢譯小說に對する反動に出で、春滿の國學、眞淵の萬葉などと、精神に於て其の揆を一にせるものにあらずやと思はる。

本篇は專ら文化十二乙亥十一月九日寫初、翌年正月十八日寫終早崎嵓道とある寫本に據りて校訂せり。

作者綾太里は南部の人、字は孟喬、初め涼袋と號し、後涼岱と改む。吸露庵、寒葉齋等の

緒言

本書は文化文政時代に隆盛を極めたる、所謂讀本と稱するものの源流たり、若くは濯流たりし英草紙、繁野話、西山物語、本朝水滸傳、つくし船物語、手枕の六篇を收めたり。

英草紙、繁野話は、共に近路行者の作、前者は古今奇談前篇と題し、後者は同後篇と題せり。もと支那清朝の今古奇觀を粉本として作れるもの、其の古今奇談といへる冠稱は、即ち其の出所を標榜せるものか。文章頗る漢臭に富み、まゝ原文を蟬脫せざる所さへ見ゆれど、詞藻遒勁、情意兼備はり、論議の筆亦大に見るべきもの多し。江戸讀本の先驅をなし、後の稗史小說に及ぼせる影響尠からざるが中に、上田秋成の雨月物語は、其の最も顯著なるものの一なり。作者近路行者は、本名を都賀庭鐘といひ、通稱六藏、字は公聲、大江漁夫、辛夷館主人等の別號あり。大阪の人にして、儒醫を業とし、書畫を善くせり。本書の外、なほ莠句冊、狂詩選、大江漁唱、辛夷館隨筆、康熙字典考異等の著あり。太田南畝の一話一言には上田秋成の師にして、蒹葭堂の親友なりきと見え、又近頃博士藤井乙男氏の研究

雅文小說集

全

